

平成27年度
文部科学省委託調査

「大学教員の教育活動・教育能力の評価の 在り方に関する調査研究」

調査報告書

平成28年3月

株式会社 リベルタス・コンサルティング

目次

第 1 章 調査概要	1
1-1 調査目的	1
1-2 調査方法	2
1-3 事業成果の概要	3
第 2 章 学部調査	5
2-1 調査概要	5
2-2 学士課程の教育目標	6
2-3 教育活動	19
2-4 FD 活動	24
2-5 教員の教育活動に対する評価	30
2-6 教育における課題と取組	37
第 3 章 教員調査	41
3-1 調査概要	41
3-2 学部の教育	44
3-3 教育活動	65
3-4 FD 活動	80
3-5 業務状況	87
3-6 教育活動に関する評価	94
3-7 教育活動に関する課題	96
第 4 章 プレ FD に関する調査	101
4-1 調査概要	101
4-2 調査結果	102
第 5 章 ヒアリング事例調査	108
5-1 事例紹介	108
5-2 ヒアリング事例からみる FD 活動を活性化するポイント	129
第 6 章 分析・考察	132
6-1 大学教員として身につけるべき能力	132
6-2 学生の到達目標と教育活動・教育能力のとの関係	137

6-3	FDによる教育活動の充実・教育能力の向上等、FDの有用性と課題.....	140
6-4	大学教員の教育評価の活用と指標等の設定、具体的な評価方法.....	147
6-5	大学の学士教育の状況と課題	148
6-6	考察	151
第7章	(参考資料) 短期大学との比較	155
7-1	学部調査	156
7-2	教員調査	167

第1章 調査概要

本調査研究は、文部科学省高等教育局からの委託を受けて実施したものである。調査概要は、以下の通り。

1-1 調査目的

大学教育の質的転換を実践していくには、教員の教育能力の涵養が必要である。ファカルティ・ディベロップメント（以下、「FD」という。）は、平成19年度から大学院で、平成20年度から学士課程で義務化されているが、このように制度化されたFDをいかに実質化するかが必要である。FDを単なる授業改善のための研修と狭く解するのではなく、教員の職能開発として幅広く捉え、体系的なFDを実施することが重要であり、多くの大学において様々な取組が行われている。また、大学院においては、プレFD等、大学教員の教育上の能力を体系的に修得するシステムの構築が求められている。

しかしながら、教育面の業績評価は研究面に比して難しく不十分であり、教育力向上のためのインセンティブが働きにくい現状があり、FDの取組が教員の教育力向上という成果に十分つながっているとは言えない。第2期教育振興基本計画(平成25年6月14日閣議決定)においても、『体系的なFDの受講と大学設置基準第14条（教授の資格）に定める「大学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力」の関係の整理について検討を行う。』と言及されたが、FDを通じて目指すべき目標の設定や、教員に対する業績評価を適切に行うためには、大学教員として求められる教育能力の内容を明らかにすることが重要である。

以上を踏まえ、大学教育に携わる教員の教育能力の向上を図る上で、教育活動や教育能力の多面的な評価に資する評価の在り方とFDとの関係性の整理を行うため、国内外の事例を収集した上で、専門的な見地から調査研究を行うことを目的とする。

1-2 調査方法

1-2-1 有識者ヒアリング

本調査研究テーマに関し専門的な知見を有する者へのヒアリングや文献調査等を行い、アンケート調査票を作成した。

有識者ヒアリングの対象は、下記の通り。

- ・東北大学 高度教養教育・学生支援機構
羽田貴史氏、杉本和弘氏、今野文子氏
- ・帝京大学 帝京大学高等教育開発センター
土持ゲーリー法一氏
- ・国立教育政策研究所
立石慎治氏
- ・成蹊大学 高等教育開発・支援センター
甲斐宗徳氏、勝野喜以子氏

1-2-2 アンケート調査

国内の全ての大学および教員に対し、大学教員の教育活動・教育能力や教育活動等の評価に関して、質問紙等を用いてアンケート調査を行った。

また、大学教員を多数輩出する大学院に対し、大学教員としての教育能力を修得するための教育等の取組についてアンケート調査を行った。

1-2-3 ヒアリング調査

上記の結果を踏まえ、ヒアリング等により、特徴的な取組事例を収集した。

1-3 事業成果の概要

調査から以下のことが明らかになった。

1-3-1 学生の学力レベルのバラつきが課題

学士課程の教育上の課題として、「学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いにくい」があげられる。

このような学生の学力レベルのバラつきに対し、先進事例では、1年次の基礎教育（初年次教育）に力を入れ、学生の学力の底上げを図る取組を行っている。学生の学力を底上げするために、これまでバラバラであった基礎教育の教材（教育方法）や学生評価（教育の到達レベル）の統一化を行っている。また、教育方法や学生評価の統一化を行うために、あわせて教員の教育についての意識を高めていくことも重要な課題となる。

1-3-2 大学教員に必要な教育能力

全国の大学・教員が共通して認識している必要な教育能力として、「専門分野における知識・能力」「講義でわかりやすく知識を伝達する能力」「演習・実習で学生を指導する能力」「学士課程の学生の意欲を引き出す能力」「授業を設計する能力」等があげられる。

さらに、大学側は教員に対し「学士課程の学生の意欲を引き出す能力」「適切な教授法（教育方法）を活用する能力」「講義でわかりやすく知識を伝達する能力」のさらなるレベルアップを望んでいる。

ただし、教員に求められる能力は、全国で一律なわけではなく、教育目標や学生の状況によって異なる。例えば、「学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いにくい」という課題は、私立大学（特に小規模校）において特に顕在化している。そのため、私立大学（小規模校）では、「学士課程の学生の悩みを聞き出す能力」「勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力」「学士課程の学生の汎用的能力、態度等を育成する能力」といった、学生とコミュニケーションし学習を支援していくための能力が、他の大学より必要とされる。

1-3-3 FD研修の在り方

教員の教育活動への関心・意欲を高めることが、FD活動を推進する上で最初に取り組むべき課題といえる（同時に、最初の難関であり、非常に難しいことではあるが）。

教員の教育活動への関心・意欲を高めるための工夫点として、例えば「教員相互の授業参

観」「講演会、シンポジウム」「ワークショップまたは授業検討会」等の取組を行う際に、会等を開催するだけでなく、その後に教員同士の意見交換の場を設けることがあげられる。

また、FD 研修や意見交換会等は、年 1 回開催すればよいわけではなく、ある程度の数を行うことで効果が増す。特に、授業が行われている期間に FD 研修や意見交換会を行うことで、その内容を授業等にフィードバックすることができ、より効果的な取組になる。

さらに、大学経営層が FD 活動をバックアップし、大学運営の中に FD 活動を適切に位置付けていくことが、効果的な FD 活動を行う上では重要となる。

1-3-4 教育活動に関する評価

教育活動に関する評価については、「業務量」「指導する学生数」等の業務の量に関する項目は、大学・教員共に納得感の高い評価指標となっている。また、「指導学生の就職状況」等の教育の成果に関する項目は、教員にとって納得感のある評価指標となっている。

なお、FD の担当者と教育業績評価の担当者は、機能として切り離すことが望ましい。FD 担当者が業績評価を行ってしまうと、教員側が身構えてしまい、FD 活動がうまくいかないことが多い。

1-3-5 教員の業務時間のマネジメントの在り方

教員の業務時間の実態についてみると、教員の 1 週間の平均業務時間は、52.1 時間となっている（うち教育には 24.6 時間、研究には 12.2 時間）。一方で、教員の理想としては、「学士課程教育（授業時間、準備含む）」を約 2.9 時間、「大学の管理・運営業務」を約 2.1 時間減らし、「研究」時間に回したいと考えていた。

学士課程教育の授業を約 2.9 時間は、授業の準備時間も含めれば授業 1 コマ分程度だと考えられる。1 コマ分であれば、学部全体の授業科目のスリム化によって、減らすことが可能な範囲といえるのではないだろうか。教員が個々の授業科目の充実に注ぐ時間とエネルギーを増やすための授業科目の整理・統合の必要性については、中央教育審議会答申（平成 24 年）でも指摘されている。「大学の管理・運営業務」の減少も含め、教員の時間配分の問題は、大学全体のマネジメントによって改善できる可能性がある。

第2章 学部調査

2-1 調査概要

2-1-1 調査対象

全国の大学 775 校の全学部を対象とした。

2-1-2 調査方法

メール（電子媒体）による配布・回収を行った。文部科学省を通じて、全国の大学に依頼を行い、回収については、各大学から弊社に直接メールにて送っていただいた。

2-1-3 実施時期

2015年12月15日（火）～2016年1月8日（金）

2-1-4 回収数

592 大学 1829 学部 から回収を得た。

（大学ベースの回収率 76.4%）

2-1-5 回答者属性

回答者属性は、下記の通り。学校基本調査と比較して、設置者・分野に大きなずれはみられない。

図表 2-1 設置者・分野別構成比

今回調査

	人文科学	社会科学	理 学	工 学	農 学	保 健	商 船	家 政	教 育	芸 術	そ の 他
国立	1.7%	2.9%	1.6%	2.9%	2.2%	3.5%	0.1%	0.1%	2.7%	0.2%	2.4%
公立	0.7%	1.3%	0.1%	0.9%	0.3%	2.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.3%	1.0%
私立	12.9%	21.3%	1.7%	6.4%	1.0%	12.2%	0.0%	2.4%	3.7%	2.8%	8.4%

平成26年度学校基本調査

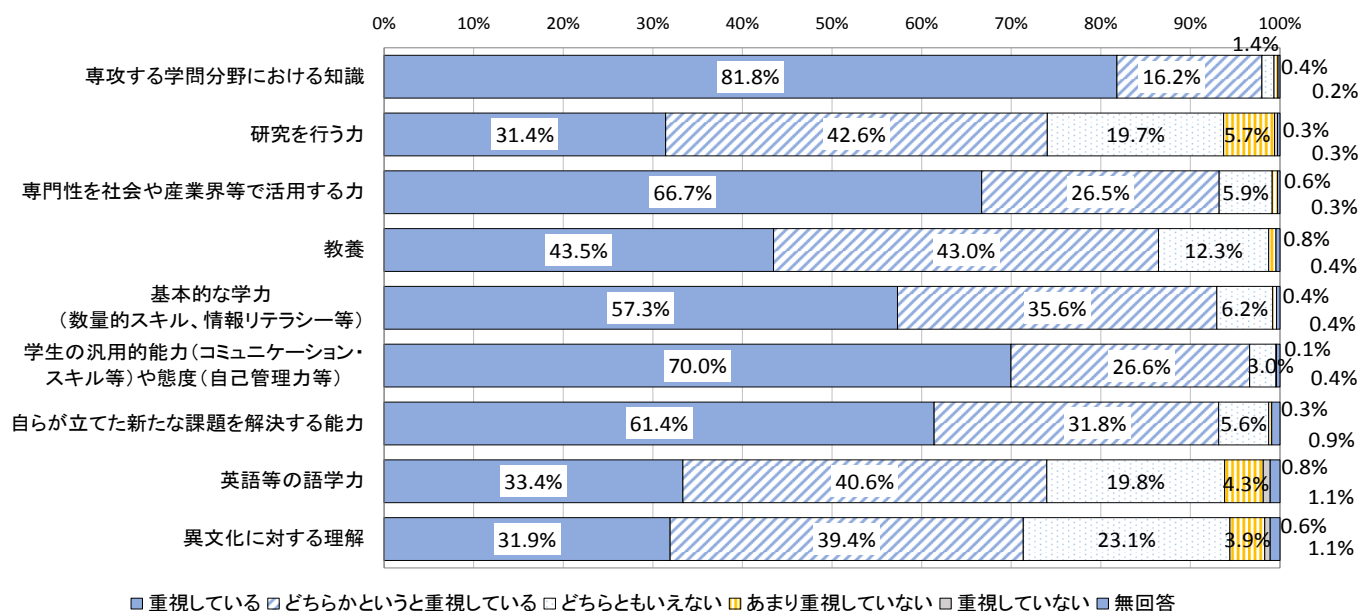
	人文科学	社会科学	理 学	工 学	農 学	保 健	商 船	家 政	教 育	芸 術	そ の 他
国立	1.6%	2.9%	1.1%	3.0%	1.7%	2.9%	0.1%	0.1%	2.0%	0.1%	1.4%
公立	1.3%	1.9%	0.2%	0.7%	0.4%	2.2%	0.0%	0.3%	0.0%	0.4%	0.9%
私立	14.9%	23.8%	1.2%	5.8%	0.9%	12.2%	0.0%	3.5%	3.9%	2.1%	6.7%

2-2 学士課程の教育目標

2-2-1 学士課程の教育の育成重視項目

学士課程の教育の育成重視項目についてみると、「専攻する学問分野における知識」を重視する割合が 81.8%と高い。次いで、「学生の汎用的能力や態度（70.0%）」「専門性を社会や産業界等で活用する力（66.7%）」を重視する割合が高い。

図表 2-2 貴学部における学士課程の教育は、以下の項目の育成を、どの程度、重視して行っていますか。（n=1,829）



設置者別にみると、国立では「研究を行う力（53.9%）」「英語等の語学力（47.2%）」を重視する割合が、他と比べて高い。

(重視している割合)

	全体	専攻する学問分野における知識	研究を行う力	専門性を社会や産業界等で活用する力	教養	基本的な学力(数量的スキル、情報リテラシー等)	学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)や態度(自己管理能力等)	自らが立てた新たな課題を解決する能力	英語等の語学力	異文化に対する理解
全体	1829 (100.0%)	1496 (81.8%)	575 (31.4%)	1220 (66.7%)	795 (43.5%)	1048 (57.3%)	1280 (70.0%)	1123 (61.4%)	610 (33.4%)	584 (31.9%)
国立	371 (100.0%)	326 (87.9%)	200 (53.9%)	239 (64.4%)	173 (46.6%)	239 (64.4%)	255 (68.7%)	250 (67.4%)	175 (47.2%)	133 (35.8%)
公立	124 (100.0%)	106 (85.5%)	55 (44.4%)	88 (71.0%)	54 (43.5%)	64 (51.6%)	79 (63.7%)	75 (60.5%)	43 (34.7%)	39 (31.5%)
私立	1334 (100.0%)	1064 (79.8%)	320 (24.0%)	893 (66.9%)	568 (42.6%)	745 (55.8%)	946 (70.9%)	798 (59.8%)	392 (29.4%)	412 (30.9%)

分野別にみると、理学（90.2%）、工学（81.1%）、農学（89.1%）、保健（96.2%）、家政（93.6%）、芸術（88.1%）において「専攻する学問分野における知識」を重視する割合が8割を超え特に高い。

（重視している割合）

	全体	専攻する学問分野における知識	研究を行う力	専門性を社会や産業界等で活用する力	教養	基本的な学力 (数量的スキル、情報リテラシー等)	学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等) や態度(自己管理能力等)	自らが立てた新たな課題を解決する能力	英語等の語学力	異文化に対する理解
全体	1829 (100.0%)	1496 (81.8%)	575 (31.4%)	1220 (66.7%)	795 (43.5%)	1048 (57.3%)	1280 (70.0%)	1123 (61.4%)	610 (33.4%)	584 (31.9%)
人文科学	277 (100.0%)	220 (79.4%)	77 (27.8%)	121 (43.7%)	180 (65.0%)	150 (54.2%)	203 (73.3%)	177 (63.9%)	148 (53.4%)	181 (65.3%)
社会科学	461 (100.0%)	338 (73.3%)	91 (19.7%)	301 (65.3%)	181 (39.3%)	264 (57.3%)	325 (70.5%)	292 (63.3%)	125 (27.1%)	141 (30.6%)
理学	61 (100.0%)	55 (90.2%)	38 (62.3%)	33 (54.1%)	23 (37.7%)	41 (67.2%)	32 (52.5%)	39 (63.9%)	27 (44.3%)	11 (18.0%)
工学	185 (100.0%)	150 (81.1%)	69 (37.3%)	138 (74.6%)	63 (34.1%)	144 (77.8%)	127 (68.6%)	104 (56.2%)	62 (33.5%)	37 (20.0%)
農学	64 (100.0%)	57 (89.1%)	26 (40.6%)	42 (65.6%)	23 (35.9%)	36 (56.3%)	36 (56.3%)	36 (56.3%)	30 (46.9%)	14 (21.9%)
保健	319 (100.0%)	307 (96.2%)	133 (41.7%)	259 (81.2%)	127 (39.8%)	174 (54.5%)	246 (77.1%)	202 (63.3%)	98 (30.7%)	72 (22.6%)
商船	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)
家政	47 (100.0%)	44 (93.6%)	7 (14.9%)	38 (80.9%)	15 (31.9%)	18 (38.3%)	28 (59.6%)	18 (38.3%)	3 (6.4%)	2 (4.3%)
教育	116 (100.0%)	85 (73.3%)	26 (22.4%)	87 (75.0%)	45 (38.8%)	60 (51.7%)	81 (69.8%)	62 (53.4%)	19 (16.4%)	25 (21.6%)
芸術	59 (100.0%)	52 (88.1%)	30 (50.8%)	43 (72.9%)	21 (35.6%)	23 (39.0%)	35 (59.3%)	35 (59.3%)	10 (16.9%)	17 (28.8%)
その他	217 (100.0%)	167 (77.0%)	69 (31.8%)	140 (64.5%)	103 (47.5%)	123 (56.7%)	150 (69.1%)	141 (65.0%)	78 (35.9%)	75 (34.6%)
無回答	22 (100.0%)	20 (90.9%)	8 (36.4%)	17 (77.3%)	13 (59.1%)	14 (63.6%)	16 (72.7%)	16 (72.7%)	9 (40.9%)	8 (36.4%)

大学種別にみると、旧帝大では「研究を行う力（77.3%）」「英語等の語学力（53.3%）」を重視する割合が、他と比べて高い。対して私立3000人未満・地方では「英語等の語学力（19.5%）」「異文化に対する理解（22.2%）」を重視する割合が、他と比べて低い。

(重視している割合)

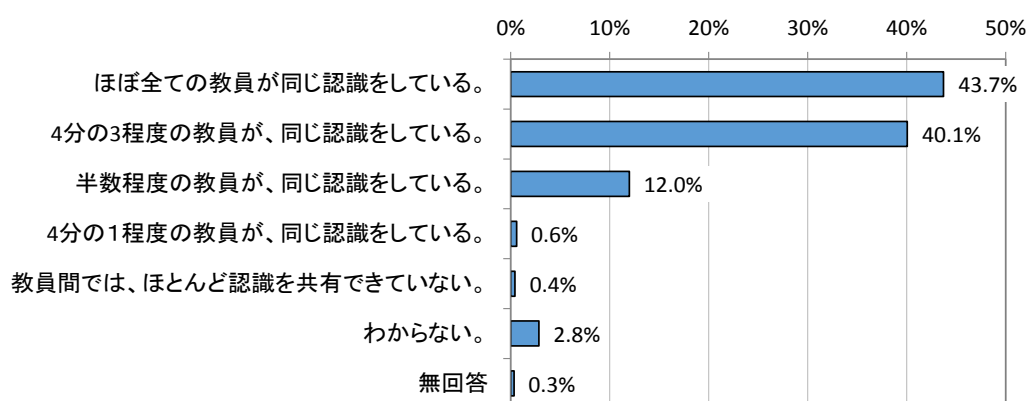
	全体	専攻する学問分野における知識	研究を行う力	専門性を社会や産業界等で活用する力	教養	基本的な学力(数量的スキル、情報リテラシー等)	学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)や態度(自己管理能力等)	自らが立てた新たな課題を解決する能力	英語等の語学力	異文化に対する理解
全体	1791 (100.0%)	1465 (81.8%)	566 (31.6%)	1191 (66.5%)	783 (43.7%)	1034 (57.7%)	1252 (69.9%)	1105 (61.7%)	607 (33.9%)	578 (32.3%)
旧帝大	75 (100.0%)	71 (94.7%)	58 (77.3%)	46 (61.3%)	43 (57.3%)	50 (66.7%)	48 (64.0%)	57 (76.0%)	40 (53.3%)	36 (48.0%)
旧六医大	50 (100.0%)	47 (94.0%)	31 (62.0%)	34 (68.0%)	23 (46.0%)	35 (70.0%)	39 (78.0%)	37 (74.0%)	23 (46.0%)	21 (42.0%)
その他国立大	246 (100.0%)	208 (84.6%)	111 (45.1%)	159 (64.6%)	107 (43.5%)	154 (62.6%)	168 (68.3%)	156 (63.4%)	112 (45.5%)	76 (30.9%)
公立 都市圏	31 (100.0%)	27 (87.1%)	19 (61.3%)	23 (74.2%)	16 (51.6%)	15 (48.4%)	19 (61.3%)	22 (71.0%)	10 (32.3%)	11 (35.5%)
公立 地方	94 (100.0%)	79 (84.0%)	36 (38.3%)	65 (69.1%)	38 (40.4%)	49 (52.1%)	60 (63.8%)	54 (57.4%)	33 (35.1%)	28 (29.8%)
私立10000人以上	307 (100.0%)	251 (81.8%)	102 (33.2%)	192 (62.5%)	143 (46.6%)	173 (56.4%)	200 (65.1%)	196 (63.8%)	140 (45.6%)	122 (39.7%)
私立3000人~10000人 都市圏	358 (100.0%)	272 (76.0%)	83 (23.2%)	234 (65.4%)	159 (44.4%)	217 (60.6%)	263 (73.5%)	229 (64.0%)	107 (29.9%)	119 (33.2%)
私立3000人~10000人 地方	138 (100.0%)	113 (81.9%)	23 (16.7%)	101 (73.2%)	52 (37.7%)	73 (52.9%)	93 (67.4%)	87 (63.0%)	40 (29.0%)	46 (33.3%)
私立3000人未満 都市部	231 (100.0%)	190 (82.3%)	52 (22.5%)	159 (68.8%)	91 (39.4%)	118 (51.1%)	161 (69.7%)	124 (53.7%)	51 (22.1%)	61 (26.4%)
私立3000人未満 地方	261 (100.0%)	207 (79.3%)	51 (19.5%)	178 (68.2%)	111 (42.5%)	150 (57.5%)	201 (77.0%)	143 (54.8%)	51 (19.5%)	58 (22.2%)

2-2-2 教育重視項目の認識共有状況

教育重視項目の認識共有状況についてみると、「ほぼ全ての教員が同じ認識をしている」割合は 43.7%、「4分の3程度の教員が、同じ認識をしている」割合は 40.1%と、8割以上の学部において4分の3以上の教員が認識を共有している。

図表 2-3 問1について、貴学部にも所属する教員は、どの程度、認識を共有していますか。

(n=1,829)



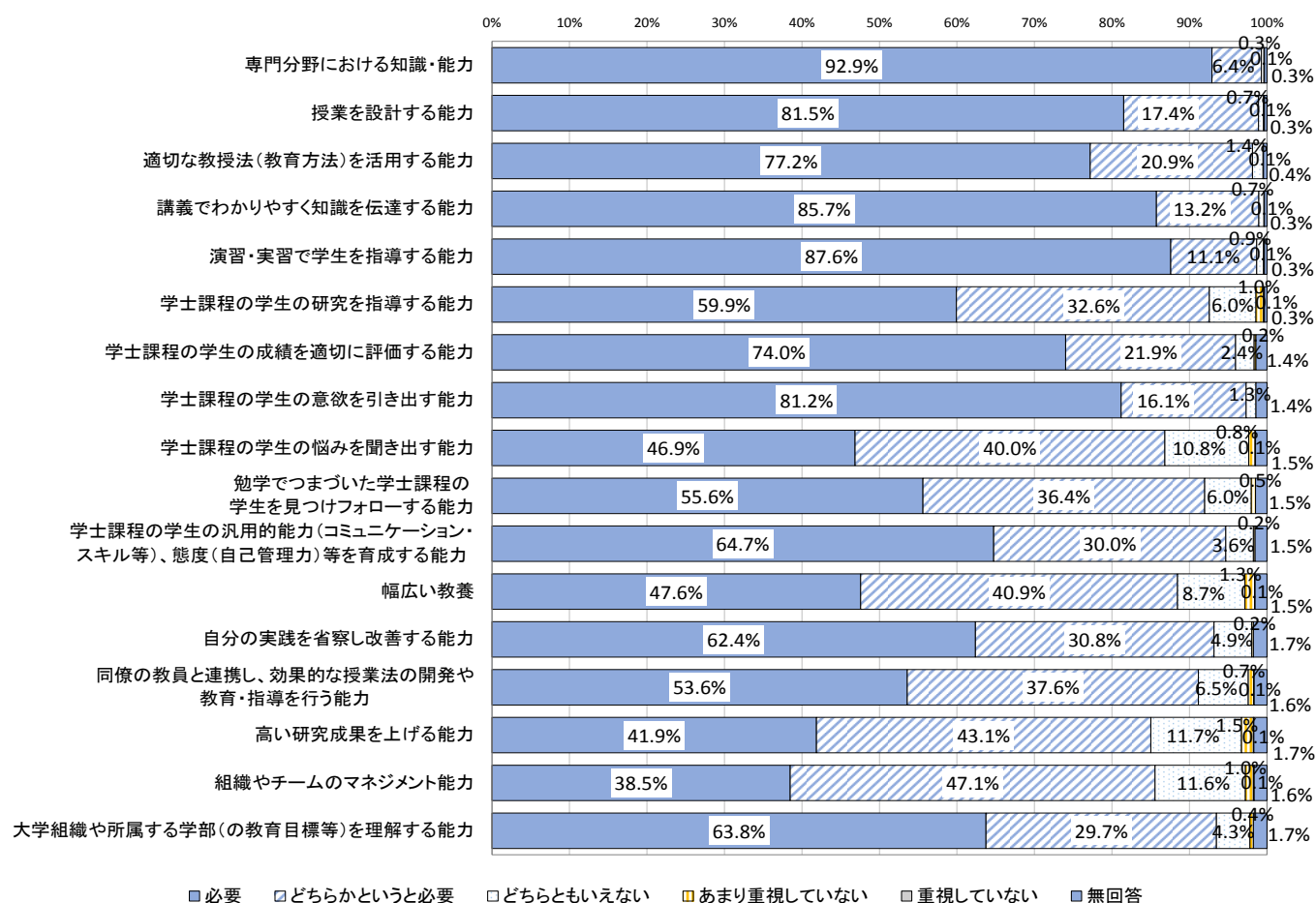
	全体	ほぼ全ての教員が同じ認識をしている。	4分の3程度の教員が、同じ認識をしている。	半数程度の教員が、同じ認識をしている。	4分の1程度の教員が、同じ認識をしている。	教員間では、ほとんど認識を共有できていない。	わからない。	無回答
全体	1829 (100.0%)	800 (43.7%)	733 (40.1%)	219 (12.0%)	11 (0.6%)	8 (0.4%)	52 (2.8%)	6 (0.3%)
国立	371 (100.0%)	161 (43.4%)	157 (42.3%)	38 (10.2%)	3 (0.8%)	0 (0.0%)	12 (3.2%)	0 (0.0%)
公立	124 (100.0%)	54 (43.5%)	51 (41.1%)	14 (11.3%)	0 (0.0%)	1 (0.8%)	4 (3.2%)	0 (0.0%)
私立	1334 (100.0%)	585 (43.9%)	525 (39.4%)	167 (12.5%)	8 (0.6%)	7 (0.5%)	36 (2.7%)	6 (0.4%)

2-2-3 教育に求められる能力

(1) 求められる能力

教育に求められる能力についてみると、「専門分野における知識・能力」を必要とする割合が 92.9%と高い。次いで、「演習・実習で学生を指導する能力 (87.6%)」「講義でわかりやすく知識を伝達する能力 (85.7%)」を必要とする割合が高い。

図表 2-4 貴学部の教員として、教育をするために求められる能力は何ですか。(n=1,829)



設置者別にみると、国立では「自分の実践を省察し改善する能力（64.7%）」「高い研究成果を上げる能力（60.6%）」を必要とする割合が、公立では「組織やチームのマネジメント能力（41.9%）」を必要とする割合が、私立では「適切な教授法（教育方法）を活用する能力（78.9%）」「学士課程の学生の汎用的能力（コミュニケーション・スキル等）、態度（自己管理能力）等を育成する能力（66.6%）」を必要とする割合が、それぞれ他と比べて高い。

(必要の割合)

	全体	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力
全体	1829 (100.0%)	1699 (92.9%)	1491 (81.5%)	1412 (77.2%)	1568 (85.7%)	1602 (87.6%)	1096 (59.9%)	1354 (74.0%)	1485 (81.2%)	857 (46.9%)
国立	371 (100.0%)	361 (97.3%)	293 (79.0%)	274 (73.9%)	312 (84.1%)	316 (85.2%)	271 (73.0%)	280 (75.5%)	298 (80.3%)	153 (41.2%)
公立	124 (100.0%)	121 (97.6%)	97 (78.2%)	85 (68.5%)	96 (77.4%)	108 (87.1%)	90 (72.6%)	93 (75.0%)	99 (79.8%)	52 (41.9%)
私立	1334 (100.0%)	1217 (91.2%)	1101 (82.5%)	1053 (78.9%)	1160 (87.0%)	1178 (88.3%)	735 (55.1%)	981 (73.5%)	1088 (81.6%)	652 (48.9%)

	全体	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
全体	1829 (100.0%)	1017 (55.6%)	1184 (64.7%)	870 (47.6%)	1141 (62.4%)	980 (53.6%)	766 (41.9%)	704 (38.5%)	1166 (63.8%)
国立	371 (100.0%)	174 (46.9%)	221 (59.6%)	176 (47.4%)	240 (64.7%)	192 (51.8%)	225 (60.6%)	133 (35.8%)	221 (59.6%)
公立	124 (100.0%)	67 (54.0%)	75 (60.5%)	48 (38.7%)	72 (58.1%)	59 (47.6%)	70 (56.5%)	52 (41.9%)	77 (62.1%)
私立	1334 (100.0%)	776 (58.2%)	888 (66.6%)	646 (48.4%)	829 (62.1%)	729 (54.6%)	471 (35.3%)	519 (38.9%)	868 (65.1%)

分野別にみると、保健では「勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力（66.8%）」「学士課程の学生の汎用的能力（コミュニケーション・スキル等）、態度（自己管理能力）等を育成する能力（73.0%）」を必要とする割合が、他と比べて高い。人文科学では「幅広い教養」が63.5%と他と比べて割合が高い。

(必要の割合)

	全体	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力
全体	1829 (100.0%)	1699 (92.9%)	1491 (81.5%)	1412 (77.2%)	1568 (85.7%)	1602 (87.6%)	1096 (59.9%)	1354 (74.0%)	1485 (81.2%)	857 (46.9%)
人文科学	277 (100.0%)	252 (91.0%)	234 (84.5%)	217 (78.3%)	237 (85.6%)	241 (87.0%)	180 (65.0%)	218 (78.7%)	233 (84.1%)	136 (49.1%)
社会科学	461 (100.0%)	406 (88.1%)	382 (82.9%)	362 (78.5%)	394 (85.5%)	401 (87.0%)	228 (49.5%)	340 (73.8%)	380 (82.4%)	203 (44.0%)
理学	61 (100.0%)	61 (100.0%)	51 (83.6%)	41 (67.2%)	51 (83.6%)	55 (90.2%)	52 (85.2%)	48 (78.7%)	51 (83.6%)	20 (32.8%)
工学	185 (100.0%)	174 (94.1%)	144 (77.8%)	131 (70.8%)	157 (84.9%)	155 (83.8%)	139 (75.1%)	133 (71.9%)	140 (75.7%)	87 (47.0%)
農学	64 (100.0%)	62 (96.9%)	47 (73.4%)	49 (76.6%)	58 (90.6%)	57 (89.1%)	47 (73.4%)	46 (71.9%)	54 (84.4%)	26 (40.6%)
保健	319 (100.0%)	312 (97.8%)	265 (83.1%)	259 (81.2%)	281 (88.1%)	294 (92.2%)	189 (59.2%)	262 (82.1%)	264 (82.8%)	177 (55.5%)
商船	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)
家政	47 (100.0%)	46 (97.9%)	34 (72.3%)	33 (70.2%)	39 (83.0%)	43 (91.5%)	21 (44.7%)	31 (66.0%)	37 (78.7%)	16 (34.0%)
教育	116 (100.0%)	106 (91.4%)	92 (79.3%)	88 (75.9%)	96 (82.8%)	97 (83.6%)	62 (53.4%)	76 (65.5%)	90 (77.6%)	58 (50.0%)
芸術	59 (100.0%)	55 (93.2%)	45 (76.3%)	40 (67.8%)	46 (78.0%)	56 (94.9%)	36 (61.0%)	37 (62.7%)	43 (72.9%)	27 (45.8%)
その他	217 (100.0%)	202 (93.1%)	176 (81.1%)	172 (79.3%)	187 (86.2%)	181 (83.4%)	128 (59.0%)	145 (66.8%)	174 (80.2%)	94 (43.3%)
無回答	22 (100.0%)	22 (100.0%)	20 (90.9%)	19 (86.4%)	21 (95.5%)	21 (95.5%)	13 (59.1%)	17 (77.3%)	18 (81.8%)	13 (59.1%)

	全体	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけてフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
全体	1829 (100.0%)	1017 (55.6%)	1184 (64.7%)	870 (47.6%)	1141 (62.4%)	980 (53.6%)	766 (41.9%)	704 (38.5%)	1166 (63.8%)
人文科学	277 (100.0%)	160 (57.8%)	184 (66.4%)	181 (65.3%)	189 (68.2%)	161 (58.1%)	125 (45.1%)	112 (40.4%)	181 (65.3%)
社会科学	461 (100.0%)	233 (50.5%)	303 (65.7%)	226 (49.0%)	264 (57.3%)	230 (49.9%)	190 (41.2%)	171 (37.1%)	292 (63.3%)
理学	61 (100.0%)	31 (50.8%)	27 (44.3%)	16 (26.2%)	35 (57.4%)	29 (47.5%)	35 (57.4%)	13 (21.3%)	32 (52.5%)
工学	185 (100.0%)	103 (55.7%)	106 (57.3%)	67 (36.2%)	112 (60.5%)	97 (52.4%)	84 (45.4%)	54 (29.2%)	115 (62.2%)
農学	64 (100.0%)	29 (45.3%)	38 (59.4%)	26 (40.6%)	38 (59.4%)	29 (45.3%)	35 (54.7%)	16 (25.0%)	35 (54.7%)
保健	319 (100.0%)	213 (66.8%)	233 (73.0%)	149 (46.7%)	216 (67.7%)	200 (62.7%)	142 (44.5%)	167 (52.4%)	224 (70.2%)
商船	1 (100.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家政	47 (100.0%)	27 (57.4%)	26 (55.3%)	14 (29.8%)	23 (48.9%)	20 (42.6%)	10 (21.3%)	13 (27.7%)	31 (66.0%)
教育	116 (100.0%)	63 (54.3%)	75 (64.7%)	55 (47.4%)	75 (64.7%)	67 (57.8%)	33 (28.4%)	44 (37.9%)	73 (62.9%)
芸術	59 (100.0%)	32 (54.2%)	31 (52.5%)	22 (37.3%)	36 (61.0%)	28 (47.5%)	16 (27.1%)	21 (35.6%)	33 (55.9%)
その他	217 (100.0%)	112 (51.6%)	146 (67.3%)	104 (47.9%)	135 (62.2%)	106 (48.8%)	86 (39.6%)	84 (38.7%)	135 (62.2%)
無回答	22 (100.0%)	14 (63.6%)	14 (63.6%)	10 (45.5%)	17 (77.3%)	12 (54.5%)	10 (45.5%)	9 (40.9%)	15 (68.2%)

大学種別にみると、私立 3000 人未満・地方では「学士課程の学生の悩みを聞き出す能力 (56.3%)」「学士課程の学生の汎用的能力 (コミュニケーション・スキル等)、態度 (自己管理能力) 等を育成する能力 (74.3%)」「同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力 (59.8%)」を必要とする割合が他と比べて高く、「高い研究成果を上げる能力 (26.8%)」を必要とする割合が他と比べて低い。

(必要の割合)

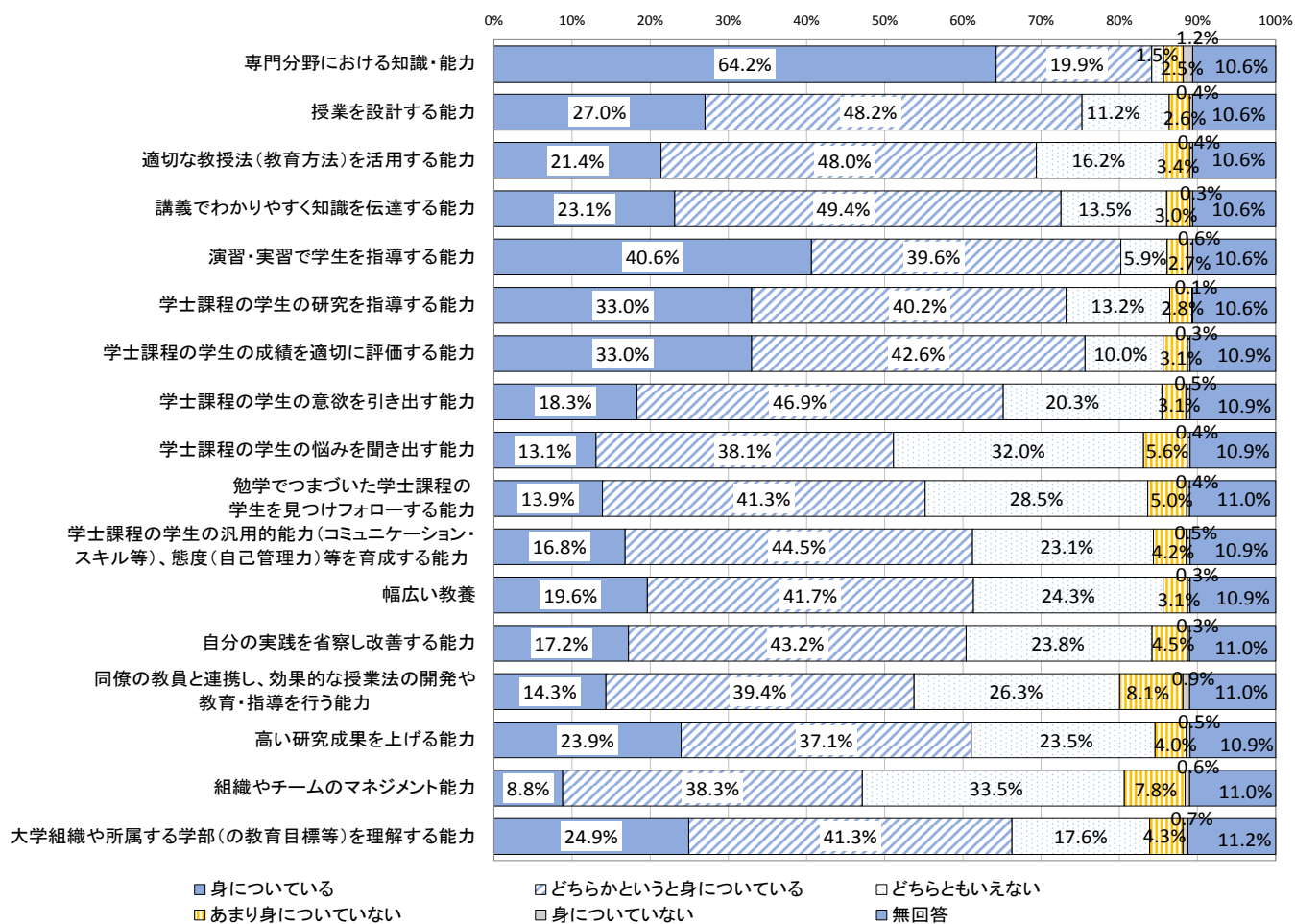
	全体	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力
全体	1791 (100.0%)	1665 (93.0%)	1457 (81.4%)	1378 (76.9%)	1532 (85.5%)	1571 (87.7%)	1079 (60.2%)	1328 (74.1%)	1454 (81.2%)	836 (46.7%)
旧帝大	75 (100.0%)	74 (98.7%)	59 (78.7%)	53 (70.7%)	59 (78.7%)	64 (85.3%)	61 (81.3%)	58 (77.3%)	57 (76.0%)	34 (45.3%)
旧六医大	50 (100.0%)	50 (100.0%)	42 (84.0%)	39 (78.0%)	47 (94.0%)	46 (92.0%)	40 (80.0%)	42 (84.0%)	40 (80.0%)	20 (40.0%)
その他国立大	246 (100.0%)	237 (96.3%)	192 (78.0%)	182 (74.0%)	206 (83.7%)	206 (83.7%)	170 (69.1%)	180 (73.2%)	201 (81.7%)	99 (40.2%)
公立 都市圏	31 (100.0%)	31 (100.0%)	24 (77.4%)	19 (61.3%)	25 (80.6%)	30 (96.8%)	27 (87.1%)	26 (83.9%)	24 (77.4%)	12 (38.7%)
公立 地方	94 (100.0%)	91 (96.8%)	73 (77.7%)	66 (70.2%)	71 (75.5%)	78 (83.0%)	63 (67.0%)	67 (71.3%)	75 (79.8%)	40 (42.6%)
私立10000人以上	307 (100.0%)	288 (93.8%)	246 (80.1%)	221 (72.0%)	257 (83.7%)	262 (85.3%)	199 (64.8%)	230 (74.9%)	242 (78.8%)	130 (42.3%)
私立3000人~10000人 都市圏	358 (100.0%)	323 (90.2%)	299 (83.5%)	287 (80.2%)	317 (88.5%)	321 (89.7%)	199 (55.6%)	272 (76.0%)	302 (84.4%)	170 (47.5%)
私立3000人~10000人 地方	138 (100.0%)	130 (94.2%)	114 (82.6%)	107 (77.5%)	116 (84.1%)	127 (92.0%)	75 (54.3%)	104 (75.4%)	102 (73.9%)	63 (45.7%)
私立3000人未満 都市部	231 (100.0%)	209 (90.5%)	189 (81.8%)	191 (82.7%)	201 (87.0%)	201 (87.0%)	107 (46.3%)	169 (73.2%)	192 (83.1%)	121 (52.4%)
私立3000人未満 地方	261 (100.0%)	232 (88.9%)	219 (83.9%)	213 (81.6%)	233 (89.3%)	236 (90.4%)	138 (52.9%)	180 (69.0%)	219 (83.9%)	147 (56.3%)

	全体	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけてフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
全体	1791 (100.0%)	991 (55.3%)	1158 (64.7%)	856 (47.8%)	1117 (62.4%)	957 (53.4%)	757 (42.3%)	689 (38.5%)	1142 (63.8%)
旧帝大	75 (100.0%)	34 (45.3%)	40 (53.3%)	42 (56.0%)	54 (72.0%)	36 (48.0%)	59 (78.7%)	34 (45.3%)	42 (56.0%)
旧六医大	50 (100.0%)	22 (44.0%)	35 (70.0%)	21 (42.0%)	36 (72.0%)	27 (54.0%)	39 (78.0%)	25 (50.0%)	36 (72.0%)
その他国立大	246 (100.0%)	118 (48.0%)	146 (59.3%)	113 (45.9%)	150 (61.0%)	129 (52.4%)	127 (51.6%)	74 (30.1%)	143 (58.1%)
公立 都市圏	31 (100.0%)	16 (51.6%)	17 (54.8%)	14 (45.2%)	21 (67.7%)	14 (45.2%)	25 (80.6%)	13 (41.9%)	17 (54.8%)
公立 地方	94 (100.0%)	51 (54.3%)	58 (61.7%)	34 (36.2%)	51 (54.3%)	45 (47.9%)	45 (47.9%)	39 (41.5%)	60 (63.8%)
私立10000人以上	307 (100.0%)	147 (47.9%)	179 (58.3%)	157 (51.1%)	183 (59.6%)	154 (50.2%)	163 (53.1%)	108 (35.2%)	187 (60.9%)
私立3000人~10000人 都市圏	358 (100.0%)	210 (58.7%)	249 (69.6%)	179 (50.0%)	225 (62.8%)	196 (54.7%)	120 (33.5%)	126 (35.2%)	247 (69.0%)
私立3000人~10000人 地方	138 (100.0%)	76 (55.1%)	88 (63.8%)	66 (47.8%)	79 (57.2%)	68 (49.3%)	44 (31.9%)	48 (34.8%)	89 (64.5%)
私立3000人未満 都市部	231 (100.0%)	151 (65.4%)	152 (65.8%)	101 (43.7%)	152 (65.8%)	132 (57.1%)	65 (28.1%)	102 (44.2%)	150 (64.9%)
私立3000人未満 地方	261 (100.0%)	166 (63.6%)	194 (74.3%)	129 (49.4%)	166 (63.6%)	156 (59.8%)	70 (26.8%)	120 (46.0%)	171 (65.5%)

(2)身につけた能力

身につけた能力についてみると、「専門分野における知識・能力」が身につけている割合が64.2%と高い。次いで、「演習・実習で学生を指導する能力（40.6%）」が身につけている割合が高い。

図表 2-5 貴学の教員の平均像としては、能力をどの程度身につけていますか。(n=1,829)



設置者別にみると、国立では「演習・実習で学生を指導する能力（46.9%）」「学士課程の学生の研究を指導する能力（50.7%）」「高い研究成果を上げる能力（45.0%）」が身につけている割合が、他と比べて高い。

(身につけている割合)

	全体	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力
全体	1829 (100.0%)	1175 (64.2%)	494 (27.0%)	391 (21.4%)	423 (23.1%)	743 (40.6%)	603 (33.0%)	603 (33.0%)	335 (18.3%)	239 (13.1%)
国立	371 (100.0%)	295 (79.5%)	118 (31.8%)	85 (22.9%)	92 (24.8%)	174 (46.9%)	188 (50.7%)	150 (40.4%)	79 (21.3%)	38 (10.2%)
公立	124 (100.0%)	88 (71.0%)	34 (27.4%)	28 (22.6%)	24 (19.4%)	46 (37.1%)	47 (37.9%)	37 (29.8%)	23 (18.5%)	17 (13.7%)
私立	1334 (100.0%)	792 (59.4%)	342 (25.6%)	278 (20.8%)	307 (23.0%)	523 (39.2%)	368 (27.6%)	416 (31.2%)	233 (17.5%)	184 (13.8%)

	全体	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
全体	1829 (100.0%)	254 (13.9%)	307 (16.8%)	359 (19.6%)	315 (17.2%)	262 (14.3%)	438 (23.9%)	161 (8.8%)	456 (24.9%)
国立	371 (100.0%)	43 (11.6%)	63 (17.0%)	83 (22.4%)	75 (20.2%)	57 (15.4%)	167 (45.0%)	45 (12.1%)	98 (26.4%)
公立	124 (100.0%)	16 (12.9%)	22 (17.7%)	21 (16.9%)	21 (16.9%)	14 (11.3%)	28 (22.6%)	11 (8.9%)	28 (22.6%)
私立	1334 (100.0%)	195 (14.6%)	222 (16.6%)	255 (19.1%)	219 (16.4%)	191 (14.3%)	243 (18.2%)	105 (7.9%)	330 (24.7%)

(身につけている割合)

	全体	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力
全体	1829 (100.0%)	1175 (64.2%)	494 (27.0%)	391 (21.4%)	423 (23.1%)	743 (40.6%)	603 (33.0%)	603 (33.0%)	335 (18.3%)	239 (13.1%)
人文科学	277 (100.0%)	172 (62.1%)	81 (29.2%)	59 (21.3%)	71 (25.6%)	106 (38.3%)	92 (33.2%)	91 (32.9%)	57 (20.6%)	41 (14.8%)
社会科学	461 (100.0%)	283 (61.4%)	136 (29.5%)	107 (23.2%)	116 (25.2%)	176 (38.2%)	140 (30.4%)	157 (34.1%)	81 (17.6%)	62 (13.4%)
理学	61 (100.0%)	49 (80.3%)	23 (37.7%)	13 (21.3%)	20 (32.8%)	33 (54.1%)	39 (63.9%)	30 (49.2%)	12 (19.7%)	5 (8.2%)
工学	185 (100.0%)	130 (70.3%)	42 (22.7%)	27 (14.6%)	31 (16.8%)	80 (43.2%)	84 (45.4%)	65 (35.1%)	20 (10.8%)	12 (6.5%)
農学	64 (100.0%)	50 (78.1%)	18 (28.1%)	15 (23.4%)	11 (17.2%)	32 (50.0%)	34 (53.1%)	20 (31.3%)	11 (17.2%)	5 (7.8%)
保健	319 (100.0%)	215 (67.4%)	74 (23.2%)	71 (22.3%)	75 (23.5%)	135 (42.3%)	76 (23.8%)	94 (29.5%)	63 (19.7%)	50 (15.7%)
商船	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家政	47 (100.0%)	24 (51.1%)	9 (19.1%)	7 (14.9%)	10 (21.3%)	19 (40.4%)	8 (17.0%)	10 (21.3%)	5 (10.6%)	3 (6.4%)
教育	116 (100.0%)	56 (48.3%)	28 (24.1%)	21 (18.1%)	22 (19.0%)	40 (34.5%)	29 (25.0%)	23 (19.8%)	21 (18.1%)	15 (12.9%)
芸術	59 (100.0%)	42 (71.2%)	18 (30.5%)	17 (28.8%)	19 (32.2%)	31 (52.5%)	20 (33.9%)	25 (42.4%)	21 (35.6%)	14 (23.7%)
その他	217 (100.0%)	141 (65.0%)	58 (26.7%)	48 (22.1%)	44 (20.3%)	81 (37.3%)	74 (34.1%)	77 (35.5%)	39 (18.0%)	27 (12.4%)
無回答	22 (100.0%)	12 (54.5%)	6 (27.3%)	5 (22.7%)	4 (18.2%)	9 (40.9%)	6 (27.3%)	10 (45.5%)	5 (22.7%)	5 (22.7%)

	全体	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけてフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
全体	1829 (100.0%)	254 (13.9%)	307 (16.8%)	359 (19.6%)	315 (17.2%)	262 (14.3%)	438 (23.9%)	161 (8.8%)	456 (24.9%)
人文科学	277 (100.0%)	40 (14.4%)	41 (14.8%)	87 (31.4%)	50 (18.1%)	33 (11.9%)	71 (25.6%)	18 (6.5%)	62 (22.6%)
社会科学	461 (100.0%)	61 (13.2%)	91 (19.7%)	110 (23.9%)	86 (18.7%)	67 (14.5%)	113 (24.5%)	38 (8.2%)	118 (25.6%)
理学	61 (100.0%)	6 (9.8%)	7 (11.5%)	11 (18.0%)	12 (19.7%)	8 (13.1%)	29 (47.5%)	2 (3.3%)	15 (24.6%)
工学	185 (100.0%)	19 (10.3%)	16 (8.6%)	27 (14.6%)	26 (14.1%)	28 (15.1%)	51 (27.6%)	13 (7.0%)	46 (24.9%)
農学	64 (100.0%)	6 (9.4%)	10 (15.6%)	11 (17.2%)	9 (14.1%)	6 (9.4%)	19 (29.7%)	9 (14.1%)	15 (23.4%)
保健	319 (100.0%)	56 (17.6%)	65 (20.4%)	42 (13.2%)	53 (16.6%)	48 (15.0%)	66 (20.7%)	40 (12.5%)	81 (25.4%)
商船	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)
家政	47 (100.0%)	7 (14.9%)	6 (12.8%)	4 (8.5%)	4 (8.5%)	5 (10.6%)	3 (6.4%)	1 (2.1%)	10 (21.3%)
教育	116 (100.0%)	13 (11.2%)	17 (14.7%)	13 (11.2%)	16 (13.8%)	13 (11.2%)	14 (12.1%)	6 (5.2%)	31 (26.7%)
芸術	59 (100.0%)	12 (20.3%)	14 (23.7%)	15 (25.4%)	17 (28.8%)	16 (27.1%)	16 (27.1%)	9 (15.3%)	17 (28.8%)
その他	217 (100.0%)	30 (13.8%)	36 (16.6%)	35 (16.1%)	38 (17.5%)	34 (15.7%)	52 (24.0%)	21 (9.7%)	57 (26.3%)
無回答	22 (100.0%)	4 (18.2%)	4 (18.2%)	4 (18.2%)	4 (18.2%)	4 (18.2%)	4 (18.2%)	4 (18.2%)	3 (13.6%)

大学種別にみると、旧帝大では「授業を設計する能力（40.0%）」「学士課程の学生の研究を指導する能力（69.3%）」「学士課程の学生の意欲を引き出す能力（32.0%）」「幅広い教養（37.3%）」「高い研究成果を上げる能力（74.7%）」が身につけている割合が、他と比べて高い。

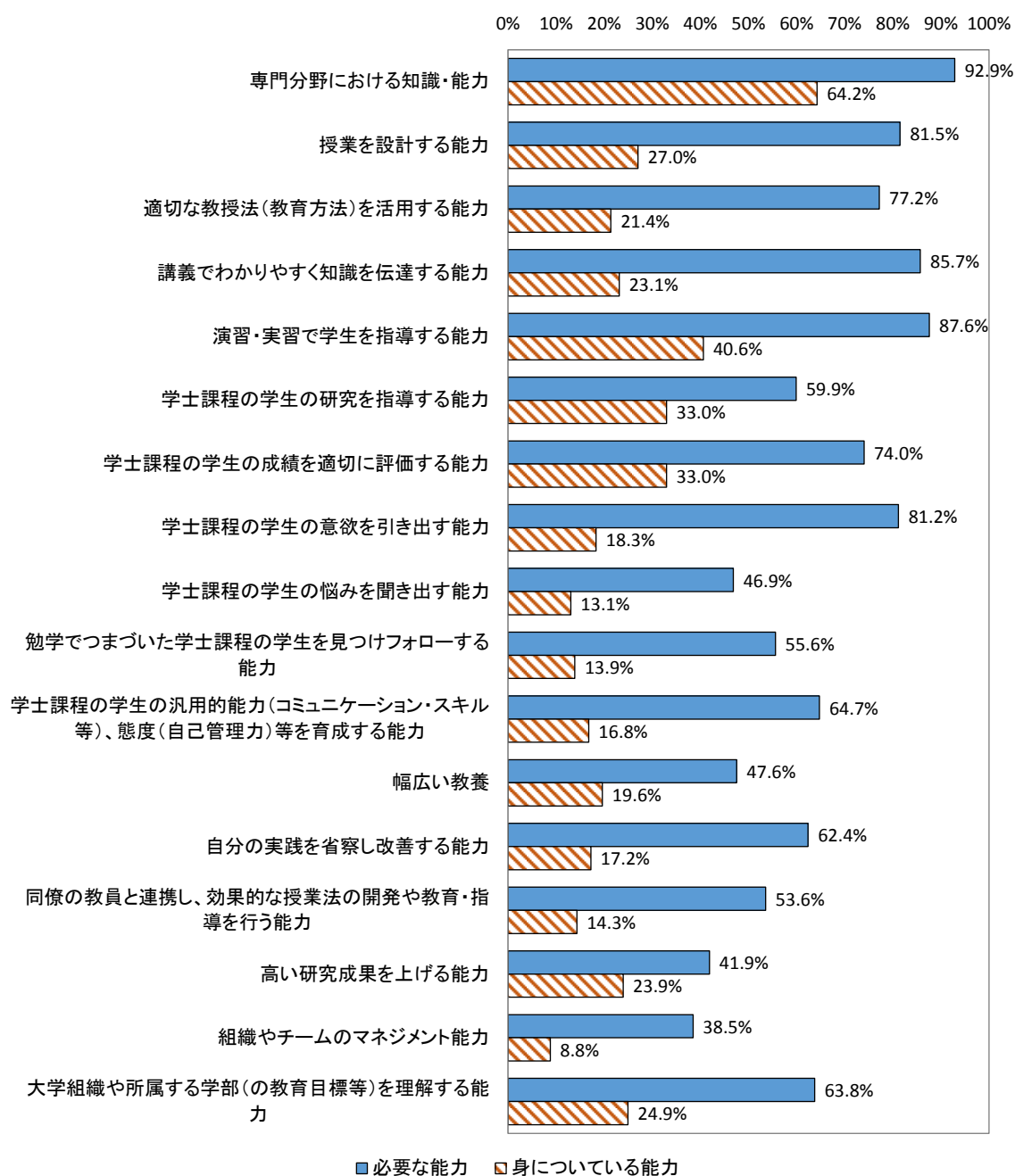
(身につけている割合)

	全体	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力
全体	1791 (100.0%)	1155 (64.5%)	489 (27.3%)	386 (21.6%)	415 (23.2%)	729 (40.7%)	597 (33.3%)	594 (33.2%)	331 (18.5%)	236 (13.2%)
旧帝大	75 (100.0%)	66 (88.0%)	30 (40.0%)	18 (24.0%)	23 (30.7%)	44 (58.7%)	52 (69.3%)	39 (52.0%)	24 (32.0%)	11 (14.7%)
旧六医大	50 (100.0%)	43 (86.0%)	16 (32.0%)	13 (26.0%)	16 (32.0%)	28 (56.0%)	28 (56.0%)	25 (50.0%)	12 (24.0%)	7 (14.0%)
その他国立大	246 (100.0%)	186 (75.6%)	72 (29.3%)	54 (22.0%)	53 (21.5%)	102 (41.5%)	108 (43.9%)	86 (35.0%)	43 (17.5%)	20 (8.1%)
公立 都市圏	31 (100.0%)	23 (74.2%)	10 (32.3%)	7 (22.6%)	6 (19.4%)	13 (41.9%)	16 (51.6%)	12 (38.7%)	7 (22.6%)	4 (12.9%)
公立 地方	94 (100.0%)	66 (70.2%)	24 (25.5%)	21 (22.3%)	18 (19.1%)	33 (35.1%)	31 (33.0%)	25 (26.6%)	16 (17.0%)	13 (13.8%)
私立10000人以上	307 (100.0%)	219 (71.3%)	100 (32.6%)	77 (25.1%)	87 (28.3%)	131 (42.7%)	121 (39.4%)	122 (39.7%)	66 (21.5%)	42 (13.7%)
私立3000人～10000人 都市圏	358 (100.0%)	237 (66.2%)	108 (30.2%)	88 (24.6%)	92 (25.7%)	167 (46.6%)	113 (31.6%)	128 (35.8%)	69 (19.3%)	48 (13.4%)
私立3000人～10000人 地方	138 (100.0%)	78 (56.5%)	36 (26.1%)	29 (21.0%)	29 (21.0%)	52 (37.7%)	39 (28.3%)	37 (26.8%)	19 (13.8%)	17 (12.3%)
私立3000人未満 都市部	231 (100.0%)	128 (55.4%)	51 (22.1%)	43 (18.6%)	44 (19.0%)	83 (35.9%)	47 (20.3%)	69 (29.9%)	47 (20.3%)	46 (19.9%)
私立3000人未満 地方	261 (100.0%)	109 (41.8%)	42 (16.1%)	36 (13.8%)	47 (18.0%)	76 (29.1%)	42 (16.1%)	51 (19.5%)	28 (10.7%)	28 (10.7%)

	全体	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
全体	1791 (100.0%)	250 (14.0%)	305 (17.0%)	354 (19.8%)	309 (17.3%)	259 (14.5%)	435 (24.3%)	159 (8.9%)	448 (25.0%)
旧帝大	75 (100.0%)	10 (13.3%)	14 (18.7%)	28 (37.3%)	18 (24.0%)	12 (16.0%)	56 (74.7%)	14 (18.7%)	26 (34.7%)
旧六医大	50 (100.0%)	10 (20.0%)	14 (28.0%)	10 (20.0%)	12 (24.0%)	9 (18.0%)	27 (54.0%)	9 (18.0%)	17 (34.0%)
その他国立大	246 (100.0%)	23 (9.3%)	35 (14.2%)	45 (18.3%)	45 (18.3%)	36 (14.6%)	84 (34.1%)	22 (8.9%)	55 (22.4%)
公立 都市圏	31 (100.0%)	5 (16.1%)	6 (19.4%)	9 (29.0%)	8 (25.8%)	4 (12.9%)	12 (38.7%)	3 (9.7%)	9 (29.0%)
公立 地方	94 (100.0%)	11 (11.7%)	16 (17.0%)	12 (12.8%)	13 (13.8%)	10 (10.6%)	16 (17.0%)	8 (8.5%)	20 (21.3%)
私立10000人以上	307 (100.0%)	43 (14.0%)	58 (18.9%)	73 (23.8%)	60 (19.5%)	50 (16.3%)	86 (28.0%)	32 (10.4%)	84 (27.4%)
私立3000人～10000人 都市圏	358 (100.0%)	53 (14.8%)	69 (19.3%)	89 (24.9%)	61 (17.0%)	62 (17.3%)	86 (24.0%)	26 (7.3%)	101 (28.2%)
私立3000人～10000人 地方	138 (100.0%)	21 (15.2%)	23 (16.7%)	26 (18.8%)	22 (15.9%)	19 (13.8%)	23 (16.7%)	17 (12.3%)	29 (21.0%)
私立3000人未満 都市部	231 (100.0%)	41 (17.7%)	41 (17.7%)	43 (18.6%)	46 (19.9%)	32 (13.9%)	33 (14.3%)	18 (7.8%)	63 (27.3%)
私立3000人未満 地方	261 (100.0%)	33 (12.6%)	29 (11.1%)	19 (7.3%)	24 (9.2%)	25 (9.6%)	12 (4.6%)	10 (3.8%)	44 (16.9%)

必要な能力と身につけている能力についてみると、必要な能力（92.9%）、身につけている能力（64.2%）共に「専門分野における知識・能力」の割合が最も高い。次いで、必要な能力（87.6%）、身につけている能力（40.6%）共に「演習・実習で学生を指導する能力」の割合が高い。

図表 2-6 必要な能力と身につけた能力の比較

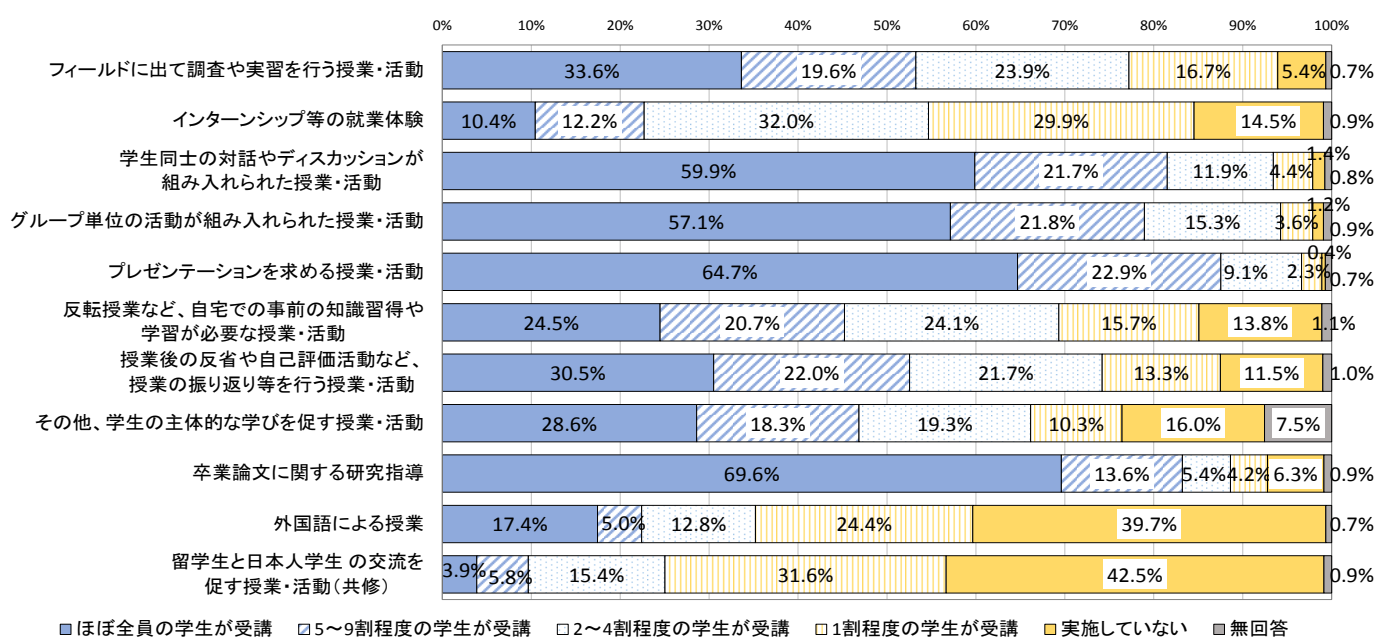


2-3 教育活動

2-3-1 学生の受講割合

学生の受講割合についてみると、「卒業論文等に関する研究指導」の教育でほぼ全員の学生が受講する割合が69.6%と高い。次いで、「プレゼンテーションを求める授業・活動(64.7%)」の教育でほぼ全員の学生が受講する割合が高い。

図表 2-7 貴学部では、現在、以下のような教育について実施していますか。(n=1,829)



※正規科、正科外のいずれも対象。全学ではやっているが、学部としてはやっていない取組は対象外

設置者別にみると、公立では「フィールドに出て調査や実習を行う授業・活動（50.8%）」
「グループ単位の活動が組み入れられた授業・活動（74.2%）」の教育でほぼ全員の学生が受講する割合が、他と比べて高い。

(学生ほぼ全員が受講の割合)

	全体	フィールドに出て調査や実習を行う授業・活動	インターンシップ等の就業体験	学生同士の対話やディスカッションが組み入れられた授業・活動	グループ単位の活動が組み入れられた授業・活動	プレゼンテーションを求める授業・活動	反転授業など、自宅での事前の知識習得や学修が必要な授業・活動	授業後の反省や自己評価活動など、授業の振り返り等を行う授業・活動	その他、学生の主体的な学びを促す授業・活動
全体	1829 (100.0%)	615 (33.6%)	191 (10.4%)	1095 (59.9%)	1045 (57.1%)	1183 (64.7%)	448 (24.5%)	558 (30.5%)	523 (28.6%)
国立	371 (100.0%)	127 (34.2%)	42 (11.3%)	227 (61.2%)	216 (58.2%)	260 (70.1%)	116 (31.3%)	127 (34.2%)	121 (32.6%)
公立	124 (100.0%)	63 (50.8%)	15 (12.1%)	96 (77.4%)	92 (74.2%)	100 (80.6%)	43 (34.7%)	52 (41.9%)	47 (37.9%)
私立	1334 (100.0%)	425 (31.9%)	134 (10.0%)	772 (57.9%)	737 (55.2%)	823 (61.7%)	289 (21.7%)	379 (28.4%)	355 (26.6%)

	全体	卒業論文等に関する研究指導	外国語による授業	留学生と日本人学生の交流を促す授業・活動(共修)
全体	1829 (100.0%)	1273 (69.6%)	319 (17.4%)	71 (3.9%)
国立	371 (100.0%)	297 (80.1%)	75 (20.2%)	13 (3.5%)
公立	124 (100.0%)	104 (83.9%)	35 (28.2%)	5 (4.0%)
私立	1334 (100.0%)	872 (65.4%)	209 (15.7%)	53 (4.0%)

分野別にみると、人文科学（72.2%）、理学（86.9%）、工学（94.6%）、農学（92.2%）、教育（87.9%）、芸術（67.8%）において「卒業論文等に関する研究指導」の教育でほぼ全員の学生が受講する割合が高い。

この他、社会科学では「学生同士の対話やディスカッションが組み入れられた授業・活動（54.7%）」、保健では「グループ単位の活動が組み入れられた授業・活動（87.1%）」、家政では「プレゼンテーションを求める授業・活動（63.8%）」の教育でほぼ全員の学生が受講する割合が最も高い。

(学生ほぼ全員が受講の割合)

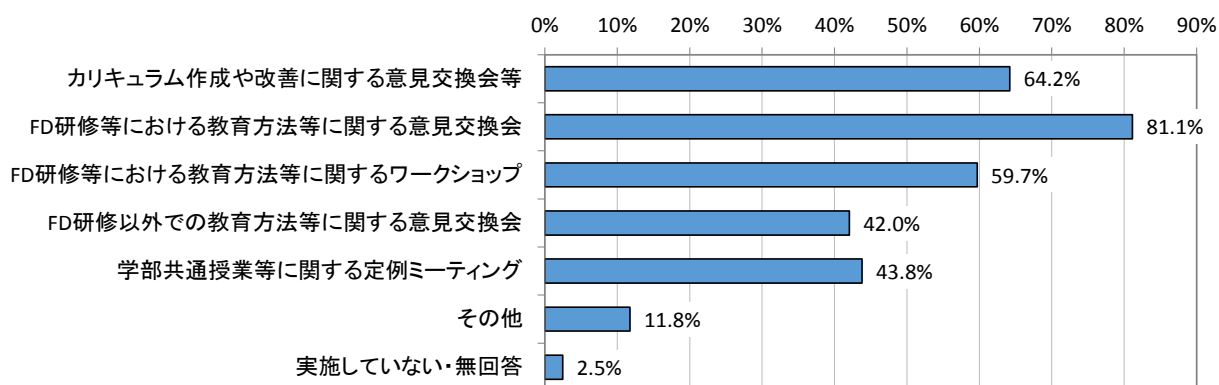
	全体	フィールドに出て調査や実習を行う授業・活動	インターンシップ等の就業体験	学生同士の対話やディスカッションが組み入れられた授業・活動	グループ単位の活動が組み入れられた授業・活動	プレゼンテーションを求める授業・活動	反転授業など、自宅での事前の知識習得や学修が必要な授業・活動	授業後の反省や自己評価活動など、授業の振り返り等を行う授業・活動	その他、学生の主体的な学びを促す授業・活動
全体	1829 (100.0%)	615 (33.6%)	191 (10.4%)	1095 (59.9%)	1045 (57.1%)	1183 (64.7%)	448 (24.5%)	558 (30.5%)	523 (28.6%)
人文科学	277 (100.0%)	38 (13.7%)	5 (1.8%)	161 (58.1%)	113 (40.8%)	170 (61.4%)	52 (18.8%)	53 (19.1%)	66 (23.8%)
社会科学	461 (100.0%)	74 (16.1%)	14 (3.0%)	252 (54.7%)	208 (45.1%)	242 (52.5%)	61 (13.2%)	90 (19.5%)	79 (17.1%)
理学	61 (100.0%)	6 (9.8%)	2 (3.3%)	25 (41.0%)	30 (49.2%)	32 (52.5%)	9 (14.8%)	8 (13.1%)	17 (27.9%)
工学	185 (100.0%)	22 (11.9%)	9 (4.9%)	95 (51.4%)	115 (62.2%)	135 (73.0%)	39 (21.1%)	52 (28.1%)	43 (23.2%)
農学	64 (100.0%)	37 (57.8%)	5 (7.8%)	30 (46.9%)	35 (54.7%)	43 (67.2%)	10 (15.6%)	15 (23.4%)	14 (21.9%)
保健	319 (100.0%)	253 (79.3%)	96 (30.1%)	267 (83.7%)	278 (87.1%)	261 (81.8%)	161 (50.5%)	189 (59.2%)	156 (48.9%)
商船	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家政	47 (100.0%)	19 (40.4%)	3 (6.4%)	19 (40.4%)	27 (57.4%)	30 (63.8%)	11 (23.4%)	17 (36.2%)	12 (25.5%)
教育	116 (100.0%)	64 (55.2%)	29 (25.0%)	61 (52.6%)	65 (56.0%)	62 (53.4%)	23 (19.8%)	37 (31.9%)	34 (29.3%)
芸術	59 (100.0%)	15 (25.4%)	2 (3.4%)	28 (47.5%)	25 (42.4%)	34 (57.6%)	22 (37.3%)	17 (28.8%)	29 (49.2%)
その他	217 (100.0%)	78 (35.9%)	25 (11.5%)	141 (65.0%)	133 (61.3%)	154 (71.0%)	51 (23.5%)	73 (33.6%)	65 (30.0%)
無回答	22 (100.0%)	9 (40.9%)	1 (4.5%)	15 (68.2%)	15 (68.2%)	19 (86.4%)	9 (40.9%)	7 (31.8%)	8 (36.4%)

	全体	卒業論文等に関する研究指導	外国語による授業	留学生と日本人学生の交流を促す授業・活動(共修)
全体	1829 (100.0%)	1273 (69.6%)	319 (17.4%)	71 (3.9%)
人文科学	277 (100.0%)	200 (72.2%)	70 (25.3%)	17 (6.1%)
社会科学	461 (100.0%)	227 (49.2%)	44 (9.5%)	16 (3.5%)
理学	61 (100.0%)	53 (86.9%)	4 (6.6%)	1 (1.6%)
工学	185 (100.0%)	175 (94.6%)	29 (15.7%)	3 (1.6%)
農学	64 (100.0%)	59 (92.2%)	5 (7.8%)	1 (1.6%)
保健	319 (100.0%)	223 (69.9%)	84 (26.3%)	13 (4.1%)
商船	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)
家政	47 (100.0%)	27 (57.4%)	2 (4.3%)	1 (2.1%)
教育	116 (100.0%)	102 (87.9%)	13 (11.2%)	2 (1.7%)
芸術	59 (100.0%)	40 (67.8%)	10 (16.9%)	6 (10.2%)
その他	217 (100.0%)	150 (69.1%)	53 (24.4%)	9 (4.1%)
無回答	22 (100.0%)	16 (72.7%)	4 (18.2%)	2 (9.1%)

2-3-2 教員間での情報交換の機会

教員間での情報交換の機会についてみると、「FD 研修等における教育方法等に関する意見交換会」を行う機会の割合が 81.1%、「カリキュラム作成や改善に関する意見交換会等」を行う機会の割合が 64.2%、「FD 研修等における教育方法等に関するワークショップ」を行う機会の割合が 59.7%となっている。

図表 2-8 貴学部では、学生への教育に関して、学部には所属する教員間で情報交換を行う機会がありますか。(n=1,829：複数回答)



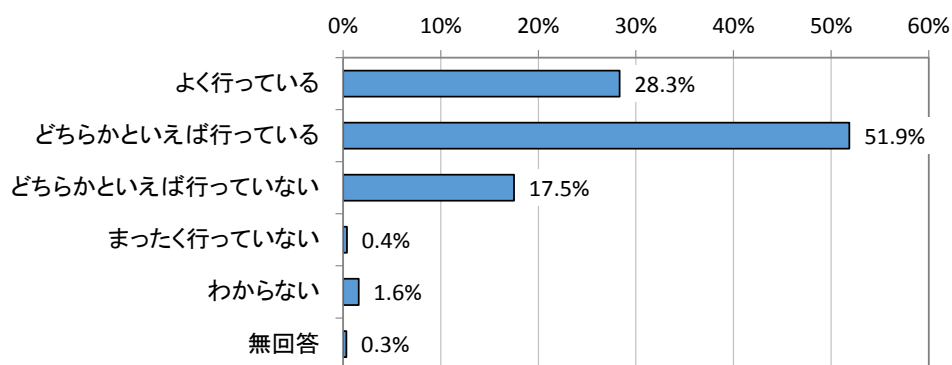
設置者別にみると、公立ではその他を除くいずれの項目も、他と比べて高い。

	全体	カリキュラム作成や改善に関する意見交換会等	FD研修等における教育方法等に関する意見交換会	FD研修等における教育方法等に関するワークショップ	FD研修以外での教育方法等に関する意見交換会	学部共通授業等に関する定例ミーティング	その他	実施していない・無回答
全体	1829 (3.05)	1174 (64.2%)	1484 (81.1%)	1092 (59.7%)	769 (42.0%)	801 (43.8%)	215 (11.8%)	45 (2.5%)
国立	371 (2.74)	204 (55.0%)	300 (80.9%)	213 (57.4%)	114 (30.7%)	139 (37.5%)	41 (11.1%)	4 (1.1%)
公立	124 (3.32)	87 (70.2%)	104 (83.9%)	90 (72.6%)	58 (46.8%)	60 (48.4%)	10 (8.1%)	3 (2.4%)
私立	1334 (3.11)	883 (66.2%)	1080 (81.0%)	789 (59.1%)	597 (44.8%)	602 (45.1%)	164 (12.3%)	38 (2.8%)

2-3-3 教員間の日常的な意見交換（同じ研究室内の教員との意見交換は除く）

教員間での日常的な意見交換についてみると、「よく行っている」が28.3%、「どちらかといえば行っている」が51.9%であった。

図表 2-9 貴学部では、学部所属する教員間で、学生への教育に関して日常的に意見交換を行っていますか（同じ研究室内の教員との意見交換は除く）（n=1,829）



	全体	よく行っている	どちらかとい えば行っている	どちらかとい えば行っていない	まったく行っ ていない	わからない	無回答
全体	1829 (100.0%)	518 (28.3%)	949 (51.9%)	320 (17.5%)	7 (0.4%)	29 (1.6%)	6 (0.3%)
国立	371 (100.0%)	75 (20.2%)	216 (58.2%)	70 (18.9%)	0 (0.0%)	10 (2.7%)	0 (0.0%)
公立	124 (100.0%)	32 (25.8%)	63 (50.8%)	27 (21.8%)	0 (0.0%)	2 (1.6%)	0 (0.0%)
私立	1334 (100.0%)	411 (30.8%)	670 (50.2%)	223 (16.7%)	7 (0.5%)	17 (1.3%)	6 (0.4%)

	全体	よく行っている	どちらかとい えば行っている	どちらかとい えば行っていない	まったく行っ ていない	わからない	無回答
全体	1791 (100.0%)	507 (28.3%)	931 (52.0%)	311 (17.4%)	7 (0.4%)	29 (1.6%)	6 (0.3%)
旧帝大	75 (100.0%)	16 (21.3%)	41 (54.7%)	14 (18.7%)	0 (0.0%)	4 (5.3%)	0 (0.0%)
旧六医大	50 (100.0%)	14 (28.0%)	24 (48.0%)	10 (20.0%)	0 (0.0%)	2 (4.0%)	0 (0.0%)
その他国立大	246 (100.0%)	45 (18.3%)	151 (61.4%)	46 (18.7%)	0 (0.0%)	4 (1.6%)	0 (0.0%)
公立 都市圏	31 (100.0%)	7 (22.6%)	17 (54.8%)	6 (19.4%)	0 (0.0%)	1 (3.2%)	0 (0.0%)
公立 地方	94 (100.0%)	25 (26.6%)	47 (50.0%)	21 (22.3%)	0 (0.0%)	1 (1.1%)	0 (0.0%)
私立10000人以上	307 (100.0%)	71 (23.1%)	163 (53.1%)	63 (20.5%)	3 (1.0%)	5 (1.6%)	2 (0.7%)
私立3000人～10000人 都市圏	358 (100.0%)	107 (29.9%)	184 (51.4%)	58 (16.2%)	2 (0.6%)	5 (1.4%)	2 (0.6%)
私立3000人～10000人 地方	138 (100.0%)	49 (35.5%)	71 (51.4%)	15 (10.9%)	1 (0.7%)	2 (1.4%)	0 (0.0%)
私立3000人未満 都市部	231 (100.0%)	93 (40.3%)	95 (41.1%)	41 (17.7%)	0 (0.0%)	1 (0.4%)	1 (0.4%)
私立3000人未満 地方	261 (100.0%)	80 (30.7%)	138 (52.9%)	37 (14.2%)	1 (0.4%)	4 (1.5%)	1 (0.4%)

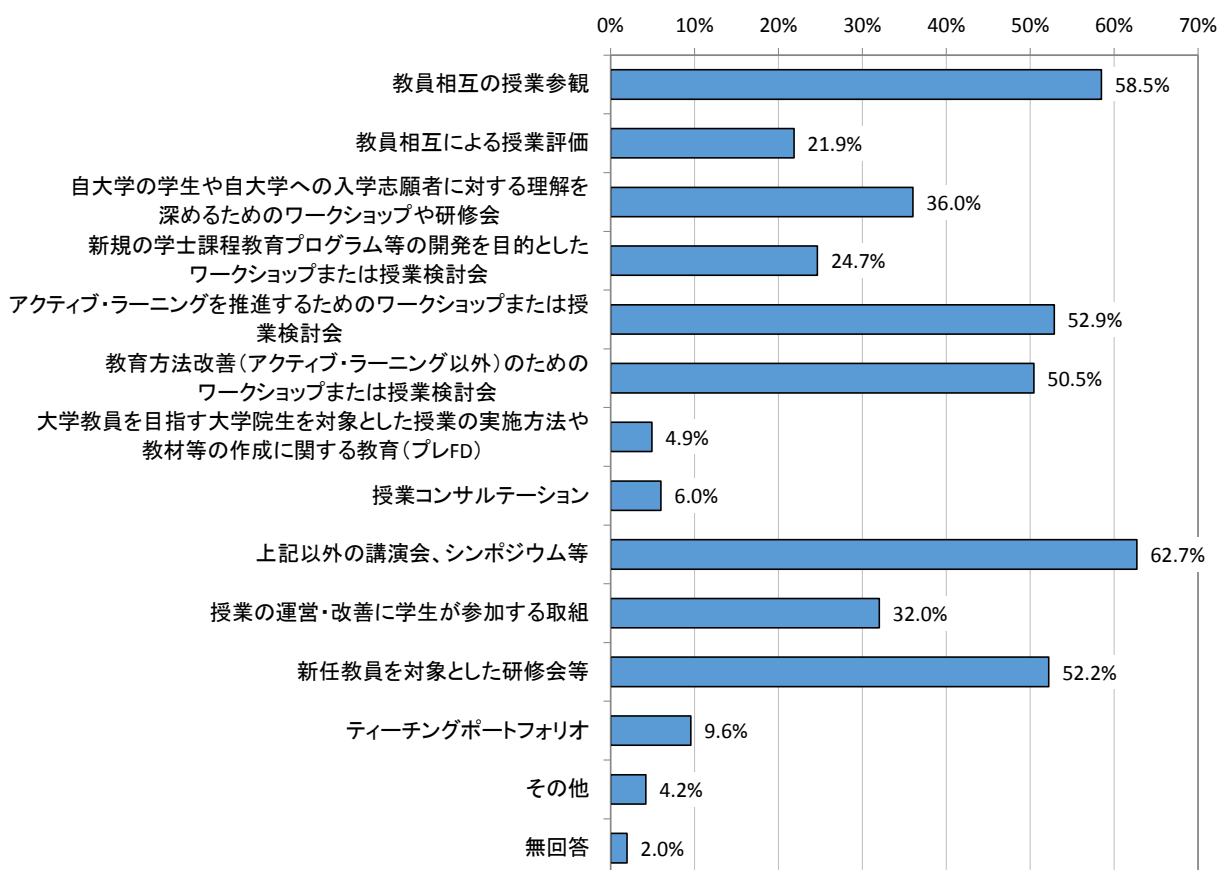
2-4 FD 活動

2-4-1 FD 活動の個々の取組

(1)実施状況

教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な活動（FD 活動）で実施しているものについてみると、「上記以外の講演会、シンポジウム等」を実施している割合が 62.7%、「教員相互の授業参観」を実施している割合が 58.5%と高い。

図表 2-10 教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な活動（FD 活動）のうち、貴学部において実施しているものを選んでください。（n=1,829：複数回答）



※大学全体で行っていて、学部で参加しているものも含める

設置者別にみると、国立では「大学教員を目指す大学院生を対象とした授業の実施方法や教材等の作成に関する教育（プレFD）（10.5%）」を実施している割合が、他と比べて高い。

	全体	教員相互の授業参観	教員相互による授業評価	自大学の学生や自大学への入学志願者に対する理解を深めるためのワークショップや研修会	新規の学士課程教育プログラム等の開発を目的としたワークショップまたは授業検討会	アクティブ・ラーニングを推進するためのワークショップまたは授業検討会	教育方法改善（アクティブ・ラーニング以外）のためのワークショップまたは授業検討会	大学教員を目指す大学院生を対象とした授業の実施方法や教材等の作成に関する教育（プレFD）	授業コンサルテーション
全体	1829 (4.18)	1070 (58.5%)	400 (21.9%)	659 (36.0%)	451 (24.7%)	967 (52.9%)	923 (50.5%)	90 (4.9%)	110 (6.0%)
国立	371 (4.43)	203 (54.7%)	78 (21.0%)	124 (33.4%)	97 (26.1%)	192 (51.8%)	193 (52.0%)	39 (10.5%)	21 (5.7%)
公立	124 (4.17)	74 (59.7%)	17 (13.7%)	47 (37.9%)	35 (28.2%)	53 (42.7%)	66 (53.2%)	4 (3.2%)	10 (8.1%)
私立	1334 (4.11)	793 (59.4%)	305 (22.9%)	488 (36.6%)	319 (23.9%)	722 (54.1%)	664 (49.8%)	47 (3.5%)	79 (5.9%)

	全体	上記以外の講演会、シンポジウム等	授業の運営・改善に学生が参加する取組	新任教員を対象とした研修会等	ティーチングポートフォリオ	その他	無回答
全体	1829 (4.18)	1147 (62.7%)	586 (32.0%)	955 (52.2%)	175 (9.6%)	77 (4.2%)	36 (2.0%)
国立	371 (4.43)	256 (69.0%)	137 (36.9%)	230 (62.0%)	53 (14.3%)	18 (4.9%)	1 (0.3%)
公立	124 (4.17)	86 (69.4%)	41 (33.1%)	63 (50.8%)	16 (12.9%)	4 (3.2%)	1 (0.8%)
私立	1334 (4.11)	805 (60.3%)	408 (30.6%)	662 (49.6%)	106 (7.9%)	55 (4.1%)	34 (2.5%)

大学種別にみると、旧帝大では「大学教員を目指す大学院生を対象とした授業の実施方法や教材等の作成に関する教育（プレFD）（32.0%）」を実施している割合が他と比べて高い。

私立3000人～10000人・地方（30.4%）、私立3000人未満・地方（30.3%）では「教員相互による授業評価」を実施している割合が、他と比べて高い。

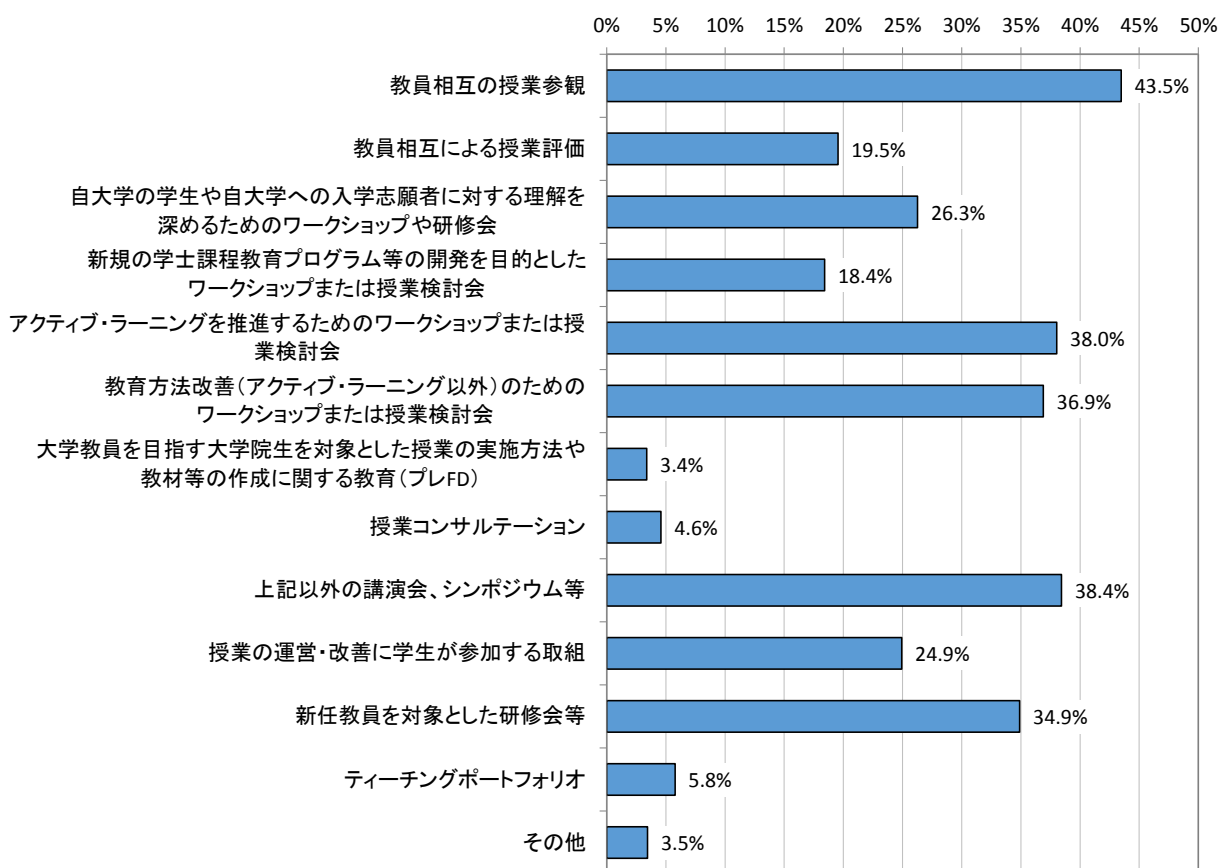
	全体	教員相互の授業参観	教員相互による授業評価	自大学の学生や自大学への入学志願者に対する理解を深めるためのワークショップや研修会	新規の学士課程教育プログラム等の開発を目的としたワークショップまたは授業検討会	アクティブ・ラーニングを推進するためのワークショップまたは授業検討会	教育方法改善（アクティブラーニング以外）のためのワークショップまたは授業検討会	大学教員を目指す大学院生を対象とした授業の実施方法や教材等の作成に関する教育（プレFD）	授業コンサルテーション
全体	1791 (4.18)	1042 (58.2%)	382 (21.3%)	639 (35.7%)	447 (25.0%)	951 (53.1%)	907 (50.6%)	88 (4.9%)	105 (5.9%)
旧帝大	75 (3.31)	11 (14.7%)	5 (6.7%)	25 (33.3%)	12 (16.0%)	23 (30.7%)	31 (41.3%)	24 (32.0%)	0 (0.0%)
旧六医大	50 (4.64)	28 (56.0%)	11 (22.0%)	15 (30.0%)	15 (30.0%)	34 (68.0%)	27 (54.0%)	2 (4.0%)	2 (4.0%)
その他国立大	246 (4.72)	164 (66.7%)	62 (25.2%)	84 (34.1%)	70 (28.5%)	135 (54.9%)	135 (54.9%)	13 (5.3%)	19 (7.7%)
公立 都市圏	31 (3.52)	11 (35.5%)	3 (9.7%)	10 (32.3%)	10 (32.3%)	12 (38.7%)	12 (38.7%)	2 (6.5%)	0 (0.0%)
公立 地方	94 (4.40)	64 (68.1%)	14 (14.9%)	37 (39.4%)	26 (27.7%)	42 (44.7%)	55 (58.5%)	2 (2.1%)	10 (10.6%)
私立10000人以上	307 (3.76)	136 (44.3%)	32 (10.4%)	100 (32.6%)	62 (20.2%)	150 (48.9%)	149 (48.5%)	15 (4.9%)	12 (3.9%)
私立3000人～10000人 都市圏	358 (4.23)	201 (56.1%)	70 (19.6%)	139 (38.8%)	104 (29.1%)	198 (55.3%)	195 (54.5%)	10 (2.8%)	21 (5.9%)
私立3000人～10000人 地方	138 (4.44)	99 (71.7%)	42 (30.4%)	50 (36.2%)	37 (26.8%)	90 (65.2%)	68 (49.3%)	2 (1.4%)	13 (9.4%)
私立3000人未満 都市部	231 (4.07)	146 (63.2%)	64 (27.7%)	84 (36.4%)	59 (25.5%)	120 (51.9%)	112 (48.5%)	10 (4.3%)	15 (6.5%)
私立3000人未満 地方	261 (4.19)	182 (69.7%)	79 (30.3%)	95 (36.4%)	52 (19.9%)	147 (56.3%)	123 (47.1%)	8 (3.1%)	13 (5.0%)

	全体	上記以外の講演会、シンポジウム等	授業の運営・改善に学生が参加する取組	新任教員を対象とした研修会等	ティーチングポートフォリオ	その他	無回答
全体	1791 (4.18)	1124 (62.8%)	577 (32.2%)	936 (52.3%)	172 (9.6%)	74 (4.1%)	36 (2.0%)
旧帝大	75 (3.31)	48 (64.0%)	21 (28.0%)	39 (52.0%)	6 (8.0%)	2 (2.7%)	1 (1.3%)
旧六医大	50 (4.64)	39 (78.0%)	21 (42.0%)	32 (64.0%)	4 (8.0%)	2 (4.0%)	0 (0.0%)
その他国立大	246 (4.72)	169 (68.7%)	95 (38.6%)	159 (64.6%)	43 (17.5%)	14 (5.7%)	0 (0.0%)
公立 都市圏	31 (3.52)	17 (54.8%)	17 (54.8%)	9 (29.0%)	2 (6.5%)	3 (9.7%)	1 (3.2%)
公立 地方	94 (4.40)	70 (74.5%)	25 (26.6%)	54 (57.4%)	14 (14.9%)	1 (1.1%)	0 (0.0%)
私立10000人以上	307 (3.76)	180 (58.6%)	80 (26.1%)	186 (60.6%)	15 (4.9%)	23 (7.5%)	13 (4.2%)
私立3000人～10000人 都市圏	358 (4.23)	220 (61.5%)	115 (32.1%)	198 (55.3%)	24 (6.7%)	11 (3.1%)	8 (2.2%)
私立3000人～10000人 地方	138 (4.44)	87 (63.0%)	38 (27.5%)	65 (47.1%)	16 (11.6%)	5 (3.6%)	1 (0.7%)
私立3000人未満 都市部	231 (4.07)	123 (53.2%)	85 (36.8%)	87 (37.7%)	23 (10.0%)	6 (2.6%)	7 (3.0%)
私立3000人未満 地方	261 (4.19)	171 (65.5%)	80 (30.7%)	107 (41.0%)	25 (9.6%)	7 (2.7%)	5 (1.9%)

(2)FD 活動の取組の効果

FD 活動の取組の効果についてみると、「教員相互の授業参観」の効果の割合が 43.5%、「上記以外の講演会、シンポジウム等」の効果の割合が 38.4%、「アクティブ・ラーニングを推進するためのワークショップまたは授業検討会」の効果の割合が 38.0%、「教育方法改善（アクティブ・ラーニング以外）のためのワークショップまたは授業検討会」の効果の割合が 36.9%であった。

図表 2-11 前述の取組のうち、特に効果がでているものは何ですか（n=1,504：複数回答）



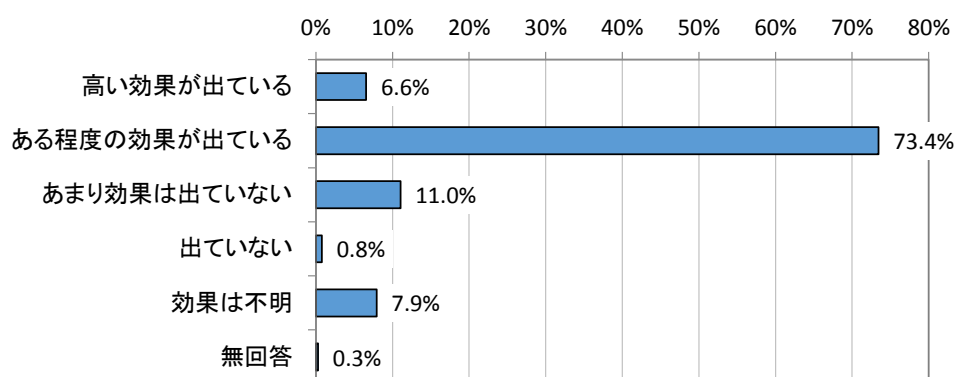
	全体	教員相互の 授業参観	教員相互に よる授業評価	自大学の学生 や自大学志願者 に対する理解を 深めるための ワークショップ や研修会	新規の学士課程 教育プログラム 等の開発を目的 としたワーク ショップまたは 授業検討会	アクティブ・ ラーニングを 推進するための ワークショップ または授業検討 会	教育方法改善 (アクティブ・ ラーニング以外) のためのワーク ショップまたは 授業検討会	大学教員を 目指す大学院生 を対象とした 授業の実施方法 や教材等の作成 に関する教育 (プレFD)	授業コンサル テーション
全体	1504 (2.98)	654 (43.5%)	294 (19.5%)	395 (26.3%)	277 (18.4%)	572 (38.0%)	555 (36.9%)	51 (3.4%)	69 (4.6%)
国立	313 (3.05)	131 (41.9%)	60 (19.2%)	73 (23.3%)	60 (19.2%)	111 (35.5%)	119 (38.0%)	18 (5.8%)	14 (4.5%)
公立	103 (2.86)	36 (35.0%)	10 (9.7%)	31 (30.1%)	21 (20.4%)	32 (31.1%)	40 (38.8%)	2 (1.9%)	4 (3.9%)
私立	1088 (2.97)	487 (44.8%)	224 (20.6%)	291 (26.7%)	196 (18.0%)	429 (39.4%)	396 (36.4%)	31 (2.8%)	51 (4.7%)

	全体	上記以外の 講演会、シン ポジウム等	授業の運営・ 改善に学生 が参加する 取組	新任教員を 対象とした研 修会等	ティーチング ポートフォリ オ	その他
全体	1504 (2.98)	578 (38.4%)	375 (24.9%)	525 (34.9%)	87 (5.8%)	52 (3.5%)
国立	313 (3.05)	121 (38.7%)	83 (26.5%)	131 (41.9%)	23 (7.3%)	11 (3.5%)
公立	103 (2.86)	42 (40.8%)	28 (27.2%)	34 (33.0%)	10 (9.7%)	5 (4.9%)
私立	1088 (2.97)	415 (38.1%)	264 (24.3%)	360 (33.1%)	54 (5.0%)	36 (3.3%)

2-4-2 FD 活動全体の効果

FD 活動全体の効果についてみると、「高い効果が出ている」が 6.6%、「ある程度の効果が出ている」が 73.4%であった。

図表 2-12 貴学部では、教員の教育活動に対して、評価を行っていますか。(n=1,829)



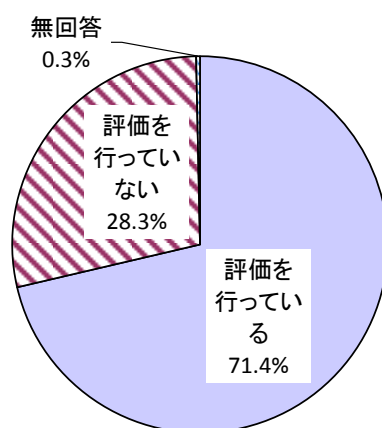
	全体	高い効果が 出ている	ある程度の 効果が出て いる	あまり効果は 出ていない	出ていない	効果は不明	無回答
全体	1829 (100.0%)	120 (6.6%)	1343 (73.4%)	202 (11.0%)	14 (0.8%)	145 (7.9%)	5 (0.3%)
国立	371 (100.0%)	25 (6.7%)	288 (77.6%)	36 (9.7%)	0 (0.0%)	22 (5.9%)	0 (0.0%)
公立	124 (100.0%)	5 (4.0%)	96 (77.4%)	10 (8.1%)	1 (0.8%)	11 (8.9%)	1 (0.8%)
私立	1334 (100.0%)	90 (6.7%)	959 (71.9%)	156 (11.7%)	13 (1.0%)	112 (8.4%)	4 (0.3%)

2-5 教員の教育活動に対する評価

2-5-1 教員の教育活動に対する評価の有無

教員の教育活動に対する評価の有無についてみると、「評価を行っている」という割合が71.4%、「評価を行っていない」という割合が28.3%であった。

図表 2-13 貴学部では、教員の教育活動に対して、評価を行っていますか。(n=1,829)



設置者別にみると、国立では「評価を行っている(93.5%)」が、他と比べて高い。

	全体	評価を行っている	評価を行っていない	無回答
全体	1829 (100.0%)	1305 (71.4%)	518 (28.3%)	6 (0.3%)
国立	371 (100.0%)	347 (93.5%)	24 (6.5%)	0 (0.0%)
公立	124 (100.0%)	104 (83.9%)	20 (16.1%)	0 (0.0%)
私立	1334 (100.0%)	854 (64.0%)	474 (35.5%)	6 (0.4%)

分野別にみると、理学（86.9%）、工学（81.6%）において「評価を行っている」割合が高い。

	全体	評価を行っている	評価を行っていない	無回答
全体	1829 (100.0%)	1305 (71.4%)	518 (28.3%)	6 (0.3%)
人文科学	277 (100.0%)	175 (63.2%)	100 (36.1%)	2 (0.7%)
社会科学	461 (100.0%)	293 (63.6%)	166 (36.0%)	2 (0.4%)
理学	61 (100.0%)	53 (86.9%)	8 (13.1%)	0 (0.0%)
工学	185 (100.0%)	151 (81.6%)	34 (18.4%)	0 (0.0%)
農学	64 (100.0%)	57 (89.1%)	7 (10.9%)	0 (0.0%)
保健	319 (100.0%)	255 (79.9%)	63 (19.7%)	1 (0.3%)
商船	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家政	47 (100.0%)	30 (63.8%)	17 (36.2%)	0 (0.0%)
教育	116 (100.0%)	92 (79.3%)	24 (20.7%)	0 (0.0%)
芸術	59 (100.0%)	34 (57.6%)	25 (42.4%)	0 (0.0%)
その他	217 (100.0%)	153 (70.5%)	63 (29.0%)	1 (0.5%)
無回答	22 (100.0%)	11 (50.0%)	11 (50.0%)	0 (0.0%)

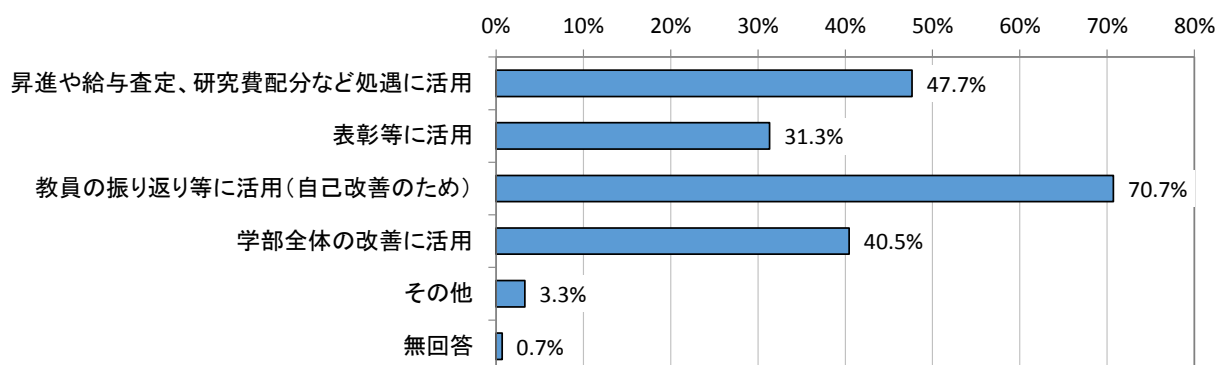
2-5-2 評価の活用方法

評価の活用方法についてみると、「教員の振り返り等に活用（自己改善のため）」の割合が70.7%、「昇進や給与査定、研究費配分など処遇に活用」の割合が47.7%、「学部全体の改善に活用」の割合が40.5%であった。

設置者別にみると、国立で「昇進や給与査定、研究費配分など処遇に活用」している割合が高い。

図表 2-14 評価を行っている場合は、評価結果の活用方法についてお答えください。

(n=1,305 : 複数回答)



	全体	昇進や給与査定、研究費配分など処遇に活用	表彰等に活用	教員の振り返り等に活用(自己改善のため)	学部全体の改善に活用	その他	無回答
全体	1305 (1.94)	622 (47.7%)	409 (31.3%)	923 (70.7%)	528 (40.5%)	43 (3.3%)	9 (0.7%)
国立	347 (2.07)	233 (67.1%)	122 (35.2%)	209 (60.2%)	135 (38.9%)	17 (4.9%)	1 (0.3%)
公立	104 (1.98)	52 (50.0%)	28 (26.9%)	81 (77.9%)	42 (40.4%)	2 (1.9%)	1 (1.0%)
私立	854 (1.89)	337 (39.5%)	259 (30.3%)	633 (74.1%)	351 (41.1%)	24 (2.8%)	7 (0.8%)

分野別にみると、工学では「表彰等に活用」の割合が5割近くと高い。

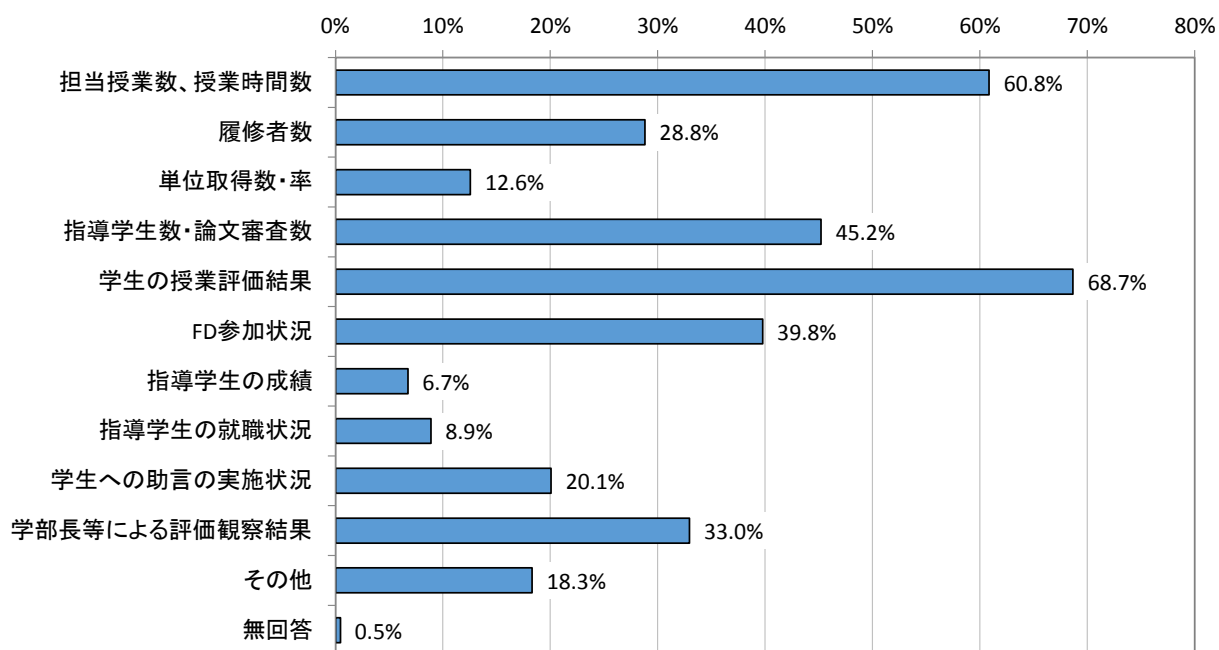
	全体	昇進や給与 査定、研究 費配分など 処遇に活用	表彰等に活 用	教員の振り 返り等に活 用(自己改善 のため)	学部全体の 改善に活用	その他	無回答
全体	1305 (1.94)	622 (47.7%)	409 (31.3%)	923 (70.7%)	528 (40.5%)	43 (3.3%)	9 (0.7%)
人文科学	175 (1.86)	78 (44.6%)	48 (27.4%)	126 (72.0%)	67 (38.3%)	6 (3.4%)	0 (0.0%)
社会科学	293 (1.74)	108 (36.9%)	73 (24.9%)	207 (70.6%)	113 (38.6%)	5 (1.7%)	3 (1.0%)
理学	53 (1.98)	26 (49.1%)	15 (28.3%)	37 (69.8%)	23 (43.4%)	4 (7.5%)	0 (0.0%)
工学	151 (2.11)	82 (54.3%)	74 (49.0%)	107 (70.9%)	51 (33.8%)	5 (3.3%)	0 (0.0%)
農学	57 (1.89)	34 (59.6%)	16 (28.1%)	36 (63.2%)	20 (35.1%)	2 (3.5%)	0 (0.0%)
保健	255 (2.06)	129 (50.6%)	87 (34.1%)	180 (70.6%)	121 (47.5%)	7 (2.7%)	2 (0.8%)
商船	1 (3.00)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家政	30 (2.07)	17 (56.7%)	10 (33.3%)	21 (70.0%)	12 (40.0%)	2 (6.7%)	0 (0.0%)
教育	92 (2.07)	50 (54.3%)	25 (27.2%)	72 (78.3%)	41 (44.6%)	2 (2.2%)	0 (0.0%)
芸術	34 (1.94)	15 (44.1%)	10 (29.4%)	25 (73.5%)	12 (35.3%)	3 (8.8%)	1 (2.9%)
その他	153 (1.96)	78 (51.0%)	45 (29.4%)	104 (68.0%)	64 (41.8%)	6 (3.9%)	3 (2.0%)
無回答	11 (1.91)	4 (36.4%)	5 (45.5%)	7 (63.6%)	4 (36.4%)	1 (9.1%)	0 (0.0%)

2-5-3 評価項目

評価の項目についてみると、「学生の授業評価結果」項目の割合が 68.7%、「担当授業数、授業時間数」項目の割合が 60.8%であった。

図表 2-15 評価を行っている場合は、評価項目として使っている項目をお答えください。

(n=1,305 : 複数回答)



設置者別にみると、公立では「履修者数(42.3%)」「学部長等による評価観察結果(42.3%)」項目の割合が、他と比べて高い。

	全体	担当授業数、授業時間数	履修者数	単位取得数・率	指導学生数・論文審査数	学生の授業評価結果	FD参加状況	指導学生の成績	指導学生の就職状況
全体	1305 (3.43)	794 (60.8%)	376 (28.8%)	164 (12.6%)	590 (45.2%)	896 (68.7%)	519 (39.8%)	88 (6.7%)	116 (8.9%)
国立	347 (3.62)	267 (76.9%)	119 (34.3%)	43 (12.4%)	242 (69.7%)	172 (49.6%)	144 (41.5%)	22 (6.3%)	20 (5.8%)
公立	104 (3.97)	83 (79.8%)	44 (42.3%)	16 (15.4%)	68 (65.4%)	65 (62.5%)	41 (39.4%)	4 (3.8%)	8 (7.7%)
私立	854 (3.29)	444 (52.0%)	213 (24.9%)	105 (12.3%)	280 (32.8%)	659 (77.2%)	334 (39.1%)	62 (7.3%)	88 (10.3%)

	全体	学生への助言の実施状況	学部長等による評価観察結果	その他	無回答
全体	1305 (3.43)	262 (20.1%)	430 (33.0%)	239 (18.3%)	6 (0.5%)
国立	347 (3.62)	58 (16.7%)	103 (29.7%)	67 (19.3%)	0 (0.0%)
公立	104 (3.97)	18 (17.3%)	44 (42.3%)	22 (21.2%)	0 (0.0%)
私立	854 (3.29)	186 (21.8%)	283 (33.1%)	150 (17.6%)	6 (0.7%)

分野別にみると、人文科学(69.7%)、社会科学(72.0%)、工学(73.5%)、保健(69.4%)、家政(73.3%)において「学生の授業評価結果」項目の割合が高いのに対し、農学(82.5%)、教育(71.7%)、芸術(73.5%)では「担当授業数、授業時間数」項目の割合が高い。理学においては、「担当授業数、授業時間数(67.9%)」「指導学生数・論文審査数(67.9%)」項目の割合が共に高い。

	全体	担当授業数、授業時間数	履修者数	単位取得数・率	指導学生数・論文審査数	学生の授業評価結果	FD参加状況	指導学生の成績	指導学生の就職状況
全体	1305 (3.43)	794 (60.8%)	376 (28.8%)	164 (12.6%)	590 (45.2%)	896 (68.7%)	519 (39.8%)	88 (6.7%)	116 (8.9%)
人文科学	175 (3.02)	85 (48.6%)	40 (22.9%)	13 (7.4%)	55 (31.4%)	122 (69.7%)	63 (36.0%)	9 (5.1%)	12 (6.9%)
社会科学	293 (3.14)	146 (49.8%)	87 (29.7%)	43 (14.7%)	96 (32.8%)	211 (72.0%)	103 (35.2%)	20 (6.8%)	27 (9.2%)
理学	53 (3.47)	36 (67.9%)	15 (28.3%)	7 (13.2%)	36 (67.9%)	30 (56.6%)	20 (37.7%)	1 (1.9%)	1 (1.9%)
工学	151 (3.75)	103 (68.2%)	45 (29.8%)	23 (15.2%)	91 (60.3%)	111 (73.5%)	62 (41.1%)	9 (6.0%)	24 (15.9%)
農学	57 (3.58)	47 (82.5%)	19 (33.3%)	5 (8.8%)	35 (61.4%)	35 (61.4%)	24 (42.1%)	4 (7.0%)	4 (7.0%)
保健	255 (3.56)	171 (67.1%)	57 (22.4%)	31 (12.2%)	117 (45.9%)	177 (69.4%)	120 (47.1%)	21 (8.2%)	12 (4.7%)
商船	1 (6.00)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家政	30 (3.17)	17 (56.7%)	6 (20.0%)	4 (13.3%)	9 (30.0%)	22 (73.3%)	9 (30.0%)	1 (3.3%)	2 (6.7%)
教育	92 (4.00)	66 (71.7%)	38 (41.3%)	14 (15.2%)	54 (58.7%)	56 (60.9%)	42 (45.7%)	6 (6.5%)	16 (17.4%)
芸術	34 (4.03)	25 (73.5%)	15 (44.1%)	6 (17.6%)	15 (44.1%)	22 (64.7%)	10 (29.4%)	6 (17.6%)	4 (11.8%)
その他	153 (3.49)	94 (61.4%)	50 (32.7%)	18 (11.8%)	77 (50.3%)	101 (66.0%)	62 (40.5%)	10 (6.5%)	13 (8.5%)
無回答	11 (2.73)	3 (27.3%)	3 (27.3%)	0 (0.0%)	4 (36.4%)	8 (72.7%)	3 (27.3%)	1 (9.1%)	1 (9.1%)

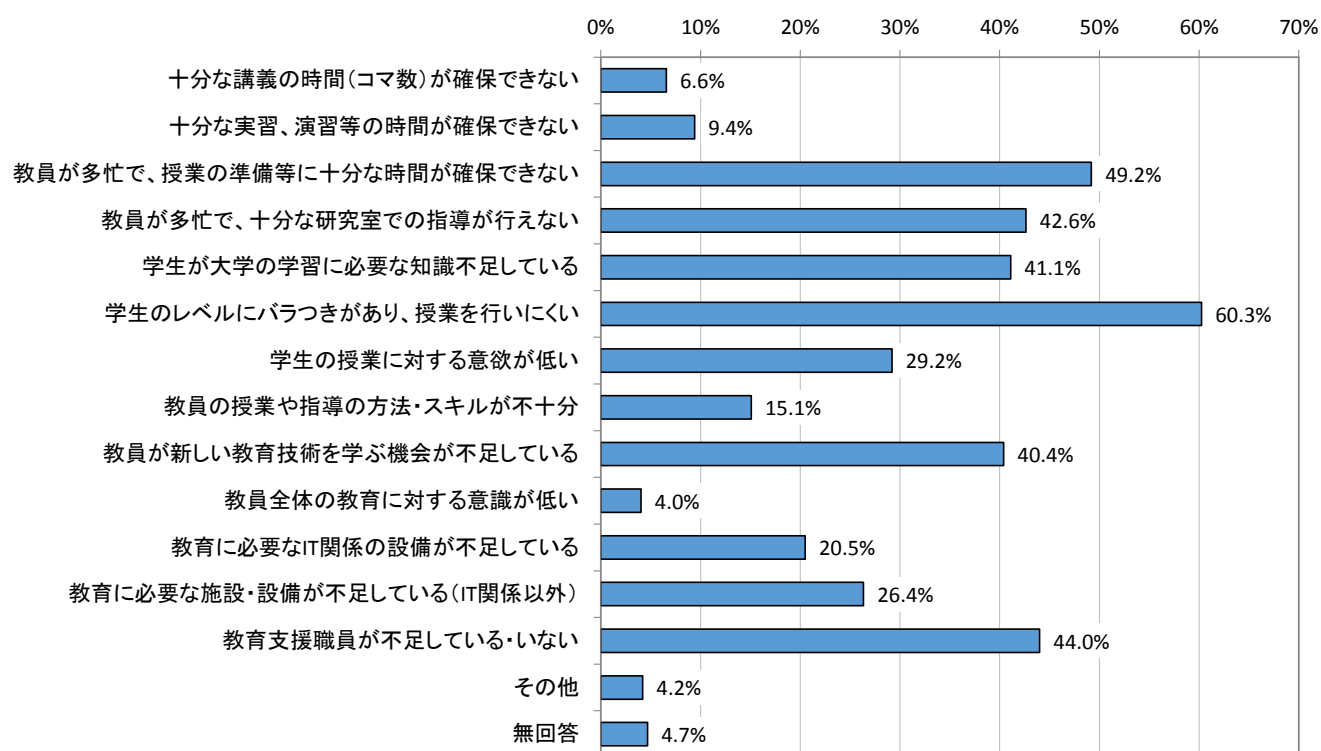
	全体	学生への助言の実施状況	学部長等による評価観察結果	その他	無回答
全体	1305 (3.43)	262 (20.1%)	430 (33.0%)	239 (18.3%)	6 (0.5%)
人文科学	175 (3.02)	43 (24.6%)	49 (28.0%)	36 (20.6%)	1 (0.6%)
社会科学	293 (3.14)	52 (17.7%)	90 (30.7%)	44 (15.0%)	2 (0.7%)
理学	53 (3.47)	9 (17.0%)	14 (26.4%)	14 (26.4%)	1 (1.9%)
工学	151 (3.75)	17 (11.3%)	46 (30.5%)	35 (23.2%)	0 (0.0%)
農学	57 (3.58)	6 (10.5%)	16 (28.1%)	8 (14.0%)	1 (1.8%)
保健	255 (3.56)	57 (22.4%)	104 (40.8%)	40 (15.7%)	0 (0.0%)
商船	1 (6.00)	0 (0.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家政	30 (3.17)	6 (20.0%)	10 (33.3%)	9 (30.0%)	0 (0.0%)
教育	92 (4.00)	22 (23.9%)	35 (38.0%)	18 (19.6%)	1 (1.1%)
芸術	34 (4.03)	11 (32.4%)	17 (50.0%)	6 (17.6%)	0 (0.0%)
その他	153 (3.49)	36 (23.5%)	47 (30.7%)	26 (17.0%)	0 (0.0%)
無回答	11 (2.73)	3 (27.3%)	1 (9.1%)	3 (27.3%)	0 (0.0%)

2-6 教育における課題と取組

2-6-1 課題

教育における課題についてみると、「学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いきにくい」が60.3%、「教員が多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない」が49.2%、「教育支援職員が不足している・いない」が44.0%と割合が高い。

図表 2-16 貴学部における学生への教育上の課題についてお答えください。(n=1,829：複数回答)



設置者別にみると、私立では「学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いきにくい(71.5%)」「学生が大学の学習に必要な知識が不足している(50.1%)」を課題とする割合が、他と比べて高い。

	全体	十分な講義の時間(コマ数)が確保できない	十分な実習、演習等の時間が確保できない	教員が多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない	教員が多忙で、十分な研究室での指導が行えない	学生が大学の学習に必要な知識不足している	学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いきにくい	学生の授業に対する意欲が低い	教員の授業や指導の方法・スキルが不十分
全体	1829 (3.98)	120 (6.6%)	172 (9.4%)	900 (49.2%)	780 (42.6%)	752 (41.1%)	1102 (60.3%)	534 (29.2%)	276 (15.1%)
国立	371 (3.61)	35 (9.4%)	44 (11.9%)	227 (61.2%)	196 (52.8%)	60 (16.2%)	105 (28.3%)	61 (16.4%)	40 (10.8%)
公立	124 (3.63)	13 (10.5%)	15 (12.1%)	63 (50.8%)	52 (41.9%)	23 (18.5%)	43 (34.7%)	15 (12.1%)	16 (12.9%)
私立	1334 (4.11)	72 (5.4%)	113 (8.5%)	610 (45.7%)	532 (39.9%)	669 (50.1%)	954 (71.5%)	458 (34.3%)	220 (16.5%)

	全体	教員が新しい教育技術を学ぶ機会が不足している	教員全体の教育に対する意識が低い	教育に必要なIT関係の設備が不足している	教育に必要な施設・設備が不足している(IT関係以外)	教育支援職員が不足している・いない	その他	無回答
全体	1829 (3.98)	739 (40.4%)	74 (4.0%)	375 (20.5%)	482 (26.4%)	805 (44.0%)	77 (4.2%)	86 (4.7%)
国立	371 (3.61)	157 (42.3%)	15 (4.0%)	83 (22.4%)	125 (33.7%)	154 (41.5%)	24 (6.5%)	15 (4.0%)
公立	124 (3.63)	47 (37.9%)	7 (5.6%)	34 (27.4%)	42 (33.9%)	63 (50.8%)	7 (5.6%)	10 (8.1%)
私立	1334 (4.11)	535 (40.1%)	52 (3.9%)	258 (19.3%)	315 (23.6%)	588 (44.1%)	46 (3.4%)	61 (4.6%)

分野別にみると、人文科学(60.3%)、社会科学(65.1%)、工学(71.9%)、保健(56.1%)、家政(63.8%)、芸術(61.0%)において「学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いきにくい」を課題とする割合が最も高いのに対して、教育では「教員が多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない(50.0%)」、農学では「教員が多忙で、十分な研究室での指導が行えない(53.1%)」を課題とする割合が最も高い。理学においては、「教員が多忙で、十分な研究室での指導が行えない(57.4%)」「学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いきにくい(57.4%)」を課題とする割合が共に高い。

	全体	十分な講義の時間(コマ数)が確保できない	十分な実習、演習等の時間が確保できない	教員が多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない	教員が多忙で、十分な研究室での指導が行えない	学生が大学の学習に必要な知識不足している	学生のレベルにバラつきがあり、授業を行っていく	学生の授業に対する意欲が低い	教員の授業や指導の方法・スキルが不十分
全体	1829 (2.53)	120 (6.6%)	172 (9.4%)	900 (49.2%)	780 (42.6%)	752 (41.1%)	1102 (60.3%)	534 (29.2%)	276 (15.1%)
人文科学	277 (2.53)	15 (5.4%)	17 (6.1%)	147 (53.1%)	127 (45.8%)	120 (43.3%)	167 (60.3%)	74 (26.7%)	33 (11.9%)
社会科学	461 (2.54)	21 (4.6%)	28 (6.1%)	213 (46.2%)	158 (34.3%)	216 (46.9%)	300 (65.1%)	172 (37.3%)	64 (13.9%)
理学	61 (2.74)	5 (8.2%)	8 (13.1%)	37 (60.7%)	35 (57.4%)	22 (36.1%)	35 (57.4%)	19 (31.1%)	6 (9.8%)
工学	185 (3.01)	14 (7.6%)	29 (15.7%)	91 (49.2%)	89 (48.1%)	97 (52.4%)	133 (71.9%)	79 (42.7%)	24 (13.0%)
農学	64 (1.89)	4 (6.3%)	6 (9.4%)	32 (50.0%)	34 (53.1%)	10 (15.6%)	23 (35.9%)	6 (9.4%)	6 (9.4%)
保健	319 (2.67)	35 (11.0%)	43 (13.5%)	170 (53.3%)	156 (48.9%)	117 (36.7%)	179 (56.1%)	78 (24.5%)	75 (23.5%)
商船	1 (2.00)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家政	47 (2.40)	2 (4.3%)	5 (10.6%)	20 (42.6%)	23 (48.9%)	18 (38.3%)	30 (63.8%)	8 (17.0%)	7 (14.9%)
教育	116 (2.15)	8 (6.9%)	11 (9.5%)	58 (50.0%)	46 (39.7%)	36 (31.0%)	54 (46.6%)	21 (18.1%)	15 (12.9%)
芸術	59 (2.19)	3 (5.1%)	4 (6.8%)	25 (42.4%)	19 (32.2%)	25 (42.4%)	36 (61.0%)	11 (18.6%)	6 (10.2%)
その他	217 (2.41)	11 (5.1%)	19 (8.8%)	101 (46.5%)	81 (37.3%)	83 (38.2%)	133 (61.3%)	60 (27.6%)	36 (16.6%)
無回答	22 (2.27)	2 (9.1%)	2 (9.1%)	5 (22.7%)	11 (50.0%)	8 (36.4%)	12 (54.5%)	6 (27.3%)	4 (18.2%)

	全体	教員が新しい教育技術を学ぶ機会が不足している	教員全体の教育に対する意識が低い	教育に必要なIT関係の設備が不足している	教育に必要な施設・設備が不足している(IT関係以外)	教育支援職員が不足している・いない	その他	無回答
全体	1829 (1.44)	739 (40.4%)	74 (4.0%)	375 (20.5%)	482 (26.4%)	805 (44.0%)	77 (4.2%)	86 (4.7%)
人文科学	277 (1.34)	105 (37.9%)	7 (2.5%)	53 (19.1%)	66 (23.8%)	114 (41.2%)	11 (4.0%)	16 (5.8%)
社会科学	461 (1.40)	188 (40.8%)	17 (3.7%)	84 (18.2%)	106 (23.0%)	217 (47.1%)	17 (3.7%)	16 (3.5%)
理学	61 (1.20)	17 (27.9%)	2 (3.3%)	9 (14.8%)	17 (27.9%)	24 (39.3%)	0 (0.0%)	4 (6.6%)
工学	185 (1.39)	72 (38.9%)	10 (5.4%)	17 (9.2%)	49 (26.5%)	94 (50.8%)	10 (5.4%)	5 (2.7%)
農学	64 (1.39)	25 (39.1%)	3 (4.7%)	13 (20.3%)	14 (21.9%)	26 (40.6%)	6 (9.4%)	2 (3.1%)
保健	319 (1.63)	154 (48.3%)	20 (6.3%)	82 (25.7%)	92 (28.8%)	139 (43.6%)	11 (3.4%)	21 (6.6%)
商船	1 (2.00)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家政	47 (1.57)	27 (57.4%)	0 (0.0%)	10 (21.3%)	13 (27.7%)	19 (40.4%)	2 (4.3%)	3 (6.4%)
教育	116 (1.48)	35 (30.2%)	3 (2.6%)	36 (31.0%)	40 (34.5%)	42 (36.2%)	7 (6.0%)	9 (7.8%)
芸術	59 (1.31)	20 (33.9%)	2 (3.4%)	15 (25.4%)	15 (25.4%)	19 (32.2%)	3 (5.1%)	3 (5.1%)
その他	217 (1.46)	86 (39.6%)	7 (3.2%)	47 (21.7%)	61 (28.1%)	100 (46.1%)	9 (4.1%)	6 (2.8%)
無回答	22 (1.91)	9 (40.9%)	3 (13.6%)	9 (40.9%)	9 (40.9%)	10 (45.5%)	1 (4.5%)	1 (4.5%)

大学種別にみると、私立 3000 人未満・地方では「学生が大学の学習に必要な知識が不足している (63.2%)」「学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いにくい (82.0%)」「学生の授業に対する意欲が低い (44.1%)」「教員の授業や指導の方法・スキルが不十分 (23.8%)」を課題とする割合が、他と比べて高い。

	全体	十分な講義の時間(コマ数)が確保できない	十分な実習、演習等の時間が確保できない	教員が多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない	教員が多忙で、十分な研究室での指導が行えない	学生が大学の学習に必要な知識不足している	学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いにくい	学生の授業に対する意欲が低い	教員の授業や指導の方法・スキルが不十分
全体	1791 (3.97)	116 (6.5%)	170 (9.5%)	885 (49.4%)	767 (42.8%)	732 (40.9%)	1070 (59.7%)	522 (29.1%)	271 (15.1%)
旧帝大	75 (2.97)	6 (8.0%)	5 (6.7%)	42 (56.0%)	34 (45.3%)	4 (5.3%)	8 (10.7%)	11 (14.7%)	5 (6.7%)
旧六医大	50 (3.96)	5 (10.0%)	9 (18.0%)	39 (78.0%)	33 (66.0%)	8 (16.0%)	16 (32.0%)	11 (22.0%)	8 (16.0%)
その他国立大	246 (3.74)	24 (9.8%)	30 (12.2%)	146 (59.3%)	129 (52.4%)	48 (19.5%)	81 (32.9%)	39 (15.9%)	27 (11.0%)
公立 都市圏	31 (3.58)	0 (0.0%)	2 (6.5%)	17 (54.8%)	14 (45.2%)	5 (16.1%)	7 (22.6%)	5 (16.1%)	6 (19.4%)
公立 地方	94 (3.65)	13 (13.8%)	13 (13.8%)	47 (50.0%)	39 (41.5%)	18 (19.1%)	36 (38.3%)	10 (10.6%)	11 (11.7%)
私立10000人以上	307 (3.77)	21 (6.8%)	24 (7.8%)	160 (52.1%)	132 (43.0%)	107 (34.9%)	189 (61.6%)	83 (27.0%)	32 (10.4%)
私立3000人～10000人 都市圏	358 (3.87)	13 (3.6%)	30 (8.4%)	163 (45.5%)	128 (35.8%)	180 (50.3%)	234 (65.4%)	122 (34.1%)	55 (15.4%)
私立3000人～10000人 地方	138 (4.22)	9 (6.5%)	16 (11.6%)	53 (38.4%)	53 (38.4%)	73 (52.9%)	101 (73.2%)	42 (30.4%)	23 (16.7%)
私立3000人未満 都市部	231 (4.21)	10 (4.3%)	19 (8.2%)	94 (40.7%)	82 (35.5%)	124 (53.7%)	184 (79.7%)	84 (36.4%)	42 (18.2%)
私立3000人未満 地方	261 (4.66)	15 (5.7%)	22 (8.4%)	124 (47.5%)	123 (47.1%)	165 (63.2%)	214 (82.0%)	115 (44.1%)	62 (23.8%)

	全体	教員が新しい教育技術を学ぶ機会が不足している	教員全体の教育に対する意識が低い	教育に必要なIT関係の設備が不足している	教育に必要な施設・設備が不足している(IT関係以外)	教育支援職員が不足している・いない	その他	無回答
全体	1791 (3.97)	721 (40.3%)	71 (4.0%)	364 (20.3%)	471 (26.3%)	790 (44.1%)	74 (4.1%)	85 (4.7%)
旧帝大	75 (2.97)	27 (36.0%)	2 (2.7%)	14 (18.7%)	21 (28.0%)	31 (41.3%)	7 (9.3%)	6 (8.0%)
旧六医大	50 (3.96)	19 (38.0%)	1 (2.0%)	9 (18.0%)	19 (38.0%)	18 (36.0%)	2 (4.0%)	1 (2.0%)
その他国立大	246 (3.74)	111 (45.1%)	12 (4.9%)	60 (24.4%)	85 (34.6%)	105 (42.7%)	15 (6.1%)	8 (3.3%)
公立 都市圏	31 (3.58)	8 (25.8%)	2 (6.5%)	11 (35.5%)	11 (35.5%)	15 (48.4%)	5 (16.1%)	3 (9.7%)
公立 地方	94 (3.65)	40 (42.6%)	5 (5.3%)	23 (24.5%)	31 (33.0%)	48 (51.1%)	2 (2.1%)	7 (7.4%)
私立10000人以上	307 (3.77)	119 (38.8%)	12 (3.9%)	54 (17.6%)	69 (22.5%)	125 (40.7%)	14 (4.6%)	15 (4.9%)
私立3000人～10000人 都市圏	358 (3.87)	119 (33.2%)	10 (2.8%)	54 (15.1%)	80 (22.3%)	167 (46.6%)	17 (4.7%)	15 (4.2%)
私立3000人～10000人 地方	138 (4.22)	53 (38.4%)	10 (7.2%)	26 (18.8%)	34 (24.6%)	70 (50.7%)	4 (2.9%)	15 (10.9%)
私立3000人未満 都市部	231 (4.21)	106 (45.9%)	10 (4.3%)	60 (26.0%)	52 (22.5%)	90 (39.0%)	4 (1.7%)	11 (4.8%)
私立3000人未満 地方	261 (4.66)	119 (45.6%)	7 (2.7%)	53 (20.3%)	69 (26.4%)	121 (46.4%)	4 (1.5%)	4 (1.5%)

第3章 教員調査

3-1 調査概要

3-1-1 調査対象

全国の大学 775 校の全学部を対象とした。

3-1-2 調査方法

WEB アンケートで実施。文部科学省を通じて、全国の大学に、大学から学士課程教育に関わる教員全員にアンケートの案内を送ってもらうよう依頼を行った。

教員は、直接、WEB アンケートシステムを通じて回答を行った。

3-1-3 実施時期

2015 年 12 月 15 日（火）～2016 年 1 月 8 日（金）

3-1-4 回収数

616 大学 19,560 名の教員から回答を得た。

- － 大学ベースの回収率 79.5%
- － 平成 27 年度学校基本調査での大学教員数（本務者）は、182,723 名。この人数を母集団とした場合の回収率は、10.7%となる。

3-1-5 回答者属性

回答者属性は、下記の通り。

(1)設置者・分野

学校基本調査と比較して、設置者・分野に大きなずれはみられない。

図表 3-1 設置者・分野別構成比

今回調査

	人文科学	社会科学	理 学	工 学	農 学	保 健	商 船	家 政	教 育	芸 術	そ の 他
国立	3.0%	2.9%	6.4%	8.6%	3.3%	7.9%	0.0%	0.2%	2.4%	0.5%	0.2%
公立	0.7%	0.9%	0.7%	1.2%	0.5%	2.9%	0.0%	0.2%	0.2%	0.3%	0.0%
私立	8.5%	10.6%	3.8%	7.2%	2.0%	15.5%	0.0%	1.4%	5.0%	1.9%	0.8%

平成26年度学校基本調査

	人文科学	社会科学	理 学	工 学	農 学	保 健	商 船	家 政	教 育	芸 術	そ の 他
国立	3.0%	2.8%	4.9%	7.4%	2.4%	11.2%	0.0%	0.1%	2.3%	0.5%	0.7%
公立	0.7%	0.9%	0.6%	1.1%	0.3%	3.1%	0.0%	0.1%	0.2%	0.4%	0.1%
私立	9.2%	9.7%	3.0%	5.6%	1.1%	20.3%	0.0%	1.0%	3.8%	2.1%	1.2%

(2)職階

職階についても、学校基本調査と比較して、大きな違いはない。助教の回答割合がやや低いが、これは学士課程教育への教育の関わりが少ない助教が回答をしていない等の理由によると思われる。

図表 3-2 設置者・職階別構成比

今回調査

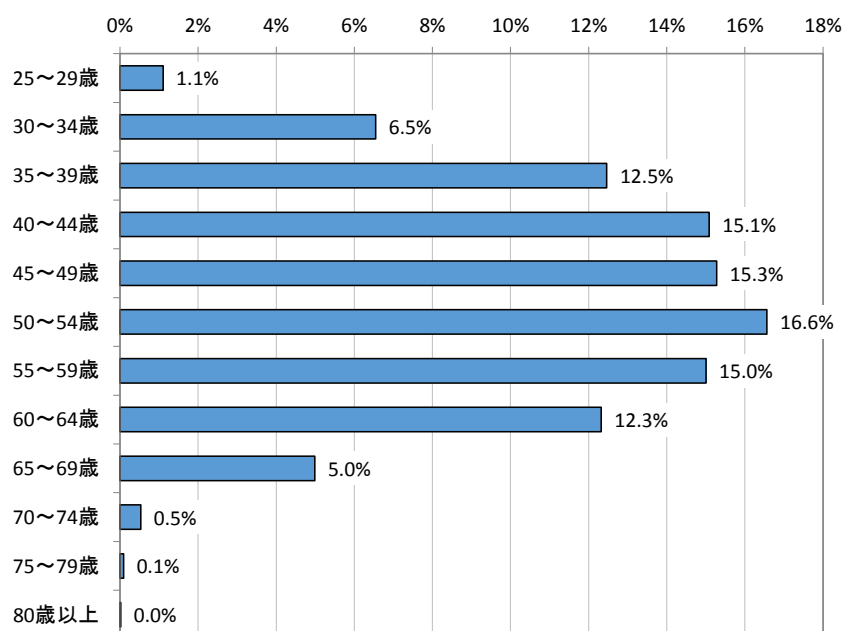
	教授	准教授	講師	助教
国立	13.7%	12.0%	2.6%	7.2%
公立	3.0%	2.2%	1.0%	1.4%
私立	27.3%	14.7%	8.6%	6.2%

平成26年度学校基本調査

	教授	准教授	講師	助教
国立	12.7%	10.4%	2.9%	10.4%
公立	2.6%	2.1%	1.0%	1.5%
私立	25.2%	12.0%	8.0%	11.2%

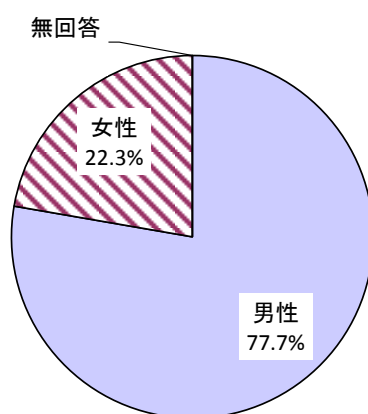
(3)年齢

図表 3-3 年齢 (n=19,560)



(4)性別

図表 3-4 性別 (n=19,560)

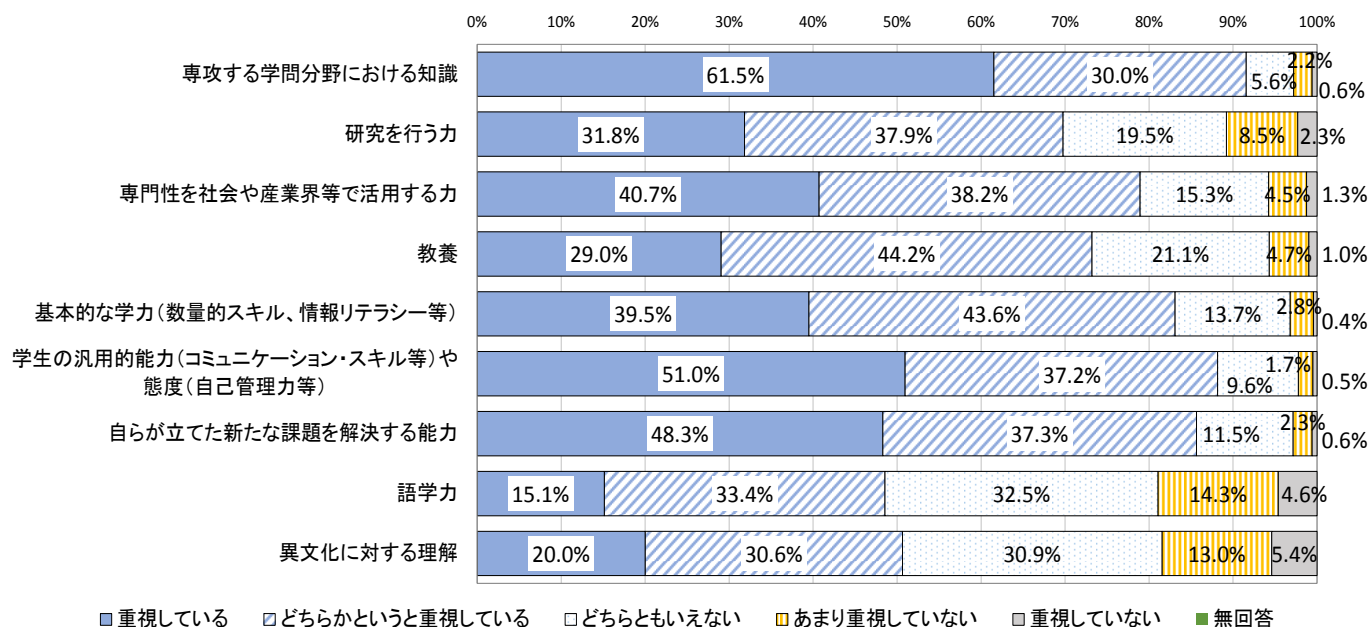


3-2 学部の教育

3-2-1 学士課程の教育の育成重視項目

学士課程の教育の育成重視項目についてみると、「専攻する学問分野における知識」を重視する割合が 61.5%と高い。次いで、「学生の汎用的能力（コミュニケーション・スキル等）や態度（自己管理能力等）（51.0%）」「自らが立てた新たな課題を解決する能力（48.3%）」を重視する割合が高い。

図表 3-5 学士課程の学生を教育・指導する際、以下の項目の育成を、どの程度、重視して行っていますか。（n=19,560）



(重視している割合)

	全体	専攻する学問分野における知識	研究を行う力	専門性を社会や産業界等で活用する力	教養	基本的な学力(数量的スキル、情報リテラシー等)	学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)や態度(自己管理能力等)	自らが立てた新たな課題を解決する能力	語学力	異文化に対する理解
全体	19560 (100.0%)	12034 (61.5%)	6227 (31.8%)	7963 (40.7%)	5681 (29.0%)	7729 (39.5%)	9966 (51.0%)	9449 (48.3%)	2962 (15.1%)	3917 (20.0%)
国立	6940 (100.0%)	4289 (61.8%)	3009 (43.4%)	2503 (36.1%)	1769 (25.5%)	2710 (39.0%)	3190 (46.0%)	3397 (48.9%)	1124 (16.2%)	1292 (18.6%)
公立	1500 (100.0%)	932 (62.1%)	467 (31.1%)	613 (40.9%)	412 (27.5%)	520 (34.7%)	741 (49.4%)	717 (47.8%)	213 (14.2%)	274 (18.3%)
私立	11120 (100.0%)	6813 (61.3%)	2751 (24.7%)	4847 (43.6%)	3500 (31.5%)	4499 (40.5%)	6035 (54.3%)	5335 (48.0%)	1625 (14.6%)	2351 (21.1%)

職階別にみると、「研究を行う力」以外は、職階が高い方が重視する割合が高まる傾向にある。

(重視している割合)

	全体	専攻する学問分野における知識	研究を行う力	専門性を社会や産業界等で活用する力	教養	基本的な学力(数量的スキル、情報リテラシー等)	学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)や態度(自己管理能力等)	自らが立てた新たな課題を解決する能力	語学力	異文化に対する理解
全体	19560 (100.0%)	12034 (61.5%)	6227 (31.8%)	7963 (40.7%)	5681 (29.0%)	7729 (39.5%)	9966 (51.0%)	9449 (48.3%)	2962 (15.1%)	3917 (20.0%)
教授	8536 (100.0%)	5379 (63.0%)	2691 (31.5%)	3577 (41.9%)	2681 (31.4%)	3606 (42.2%)	4451 (52.1%)	4327 (50.7%)	1428 (16.7%)	1969 (23.1%)
准教授	5614 (100.0%)	3392 (60.4%)	1889 (33.6%)	2246 (40.0%)	1601 (28.5%)	2300 (41.0%)	2874 (51.2%)	2779 (49.5%)	844 (15.0%)	1150 (20.5%)
講師	2371 (100.0%)	1498 (63.2%)	618 (26.1%)	1020 (43.0%)	678 (28.6%)	843 (35.6%)	1216 (51.3%)	1070 (45.1%)	323 (13.6%)	425 (17.9%)
助教	2894 (100.0%)	1686 (58.3%)	998 (34.5%)	1056 (36.5%)	675 (23.3%)	930 (32.1%)	1354 (46.8%)	1217 (42.1%)	337 (11.6%)	339 (11.7%)
その他	145 (100.0%)	79 (54.5%)	31 (21.4%)	64 (44.1%)	46 (31.7%)	50 (34.5%)	71 (49.0%)	56 (38.6%)	30 (20.7%)	34 (23.4%)

分野別にみると、理学(57.5%)、工学(58.0%)、農学(59.3%)、保健(72.3%)、家政(82.7%)、教育(63.0%)、芸術(71.2%)において「専攻する学問分野における知識」を重視する割合が最も高いのに対して、人文科学(54.8%)、社会科学(54.1%)では「自らが立てた新たな課題を解決する能力」を重視する割合が(僅差ではあるが)最も高い。

(重視している割合)

	全体	専攻する学問分野における知識	研究を行う力	専門性を社会や産業界等で活用する力	教養	基本的な学力(数量的スキル、情報リテラシー等)	学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)や態度(自己管理能力等)	自らが立てた新たな課題を解決する能力	語学力	異文化に対する理解
全体	19560 (100.0%)	12034 (61.5%)	6227 (31.8%)	7963 (40.7%)	5681 (29.0%)	7729 (39.5%)	9966 (51.0%)	9449 (48.3%)	2962 (15.1%)	3917 (20.0%)
人文科学	2400 (100.0%)	1246 (51.9%)	746 (31.1%)	685 (28.5%)	1191 (49.6%)	1113 (46.4%)	1298 (54.1%)	1314 (54.8%)	894 (37.3%)	1286 (53.6%)
社会科学	2832 (100.0%)	1522 (53.7%)	624 (22.0%)	1157 (40.9%)	991 (35.0%)	1172 (41.4%)	1523 (53.8%)	1532 (54.1%)	319 (11.3%)	710 (25.1%)
理学	2145 (100.0%)	1233 (57.5%)	882 (41.1%)	529 (24.7%)	527 (24.6%)	1025 (47.8%)	885 (41.3%)	889 (41.4%)	284 (13.2%)	223 (10.4%)
工学	3323 (100.0%)	1928 (58.0%)	1427 (42.9%)	1429 (43.0%)	679 (20.4%)	1480 (44.5%)	1611 (48.5%)	1554 (46.8%)	419 (12.6%)	367 (11.0%)
農学	1139 (100.0%)	675 (59.3%)	469 (41.2%)	450 (39.5%)	268 (23.5%)	393 (34.5%)	573 (50.3%)	551 (48.4%)	160 (14.0%)	151 (13.3%)
保健	5157 (100.0%)	3730 (72.3%)	1345 (26.1%)	2395 (46.4%)	1180 (22.9%)	1602 (31.1%)	2607 (50.6%)	2190 (42.5%)	551 (10.7%)	545 (10.6%)
商船	8 (100.0%)	6 (75.0%)	4 (50.0%)	5 (62.5%)	0 (0.0%)	1 (12.5%)	4 (50.0%)	4 (50.0%)	1 (12.5%)	1 (12.5%)
家政	346 (100.0%)	286 (82.7%)	72 (20.8%)	202 (58.4%)	93 (26.9%)	145 (41.9%)	186 (53.8%)	179 (51.7%)	38 (11.0%)	45 (13.0%)
教育	1494 (100.0%)	941 (63.0%)	354 (23.7%)	767 (51.3%)	519 (34.7%)	559 (37.4%)	890 (59.6%)	802 (53.7%)	203 (13.6%)	355 (23.8%)
芸術	532 (100.0%)	379 (71.2%)	260 (48.9%)	266 (50.0%)	169 (31.8%)	170 (32.0%)	279 (52.4%)	341 (64.1%)	68 (12.8%)	192 (36.1%)
その他	184 (100.0%)	88 (47.8%)	44 (23.9%)	78 (42.4%)	64 (34.8%)	69 (37.5%)	110 (59.8%)	93 (50.5%)	25 (13.6%)	42 (22.8%)

大学種別にみると、旧帝大では「研究を行う力（53.1%）」を重視する割合が、他と比べて高い。私立3000人未満・地方では「専門性を社会や産業界等で活用する力（46.5%）」を重視する割合が、他と比べてやや高い。

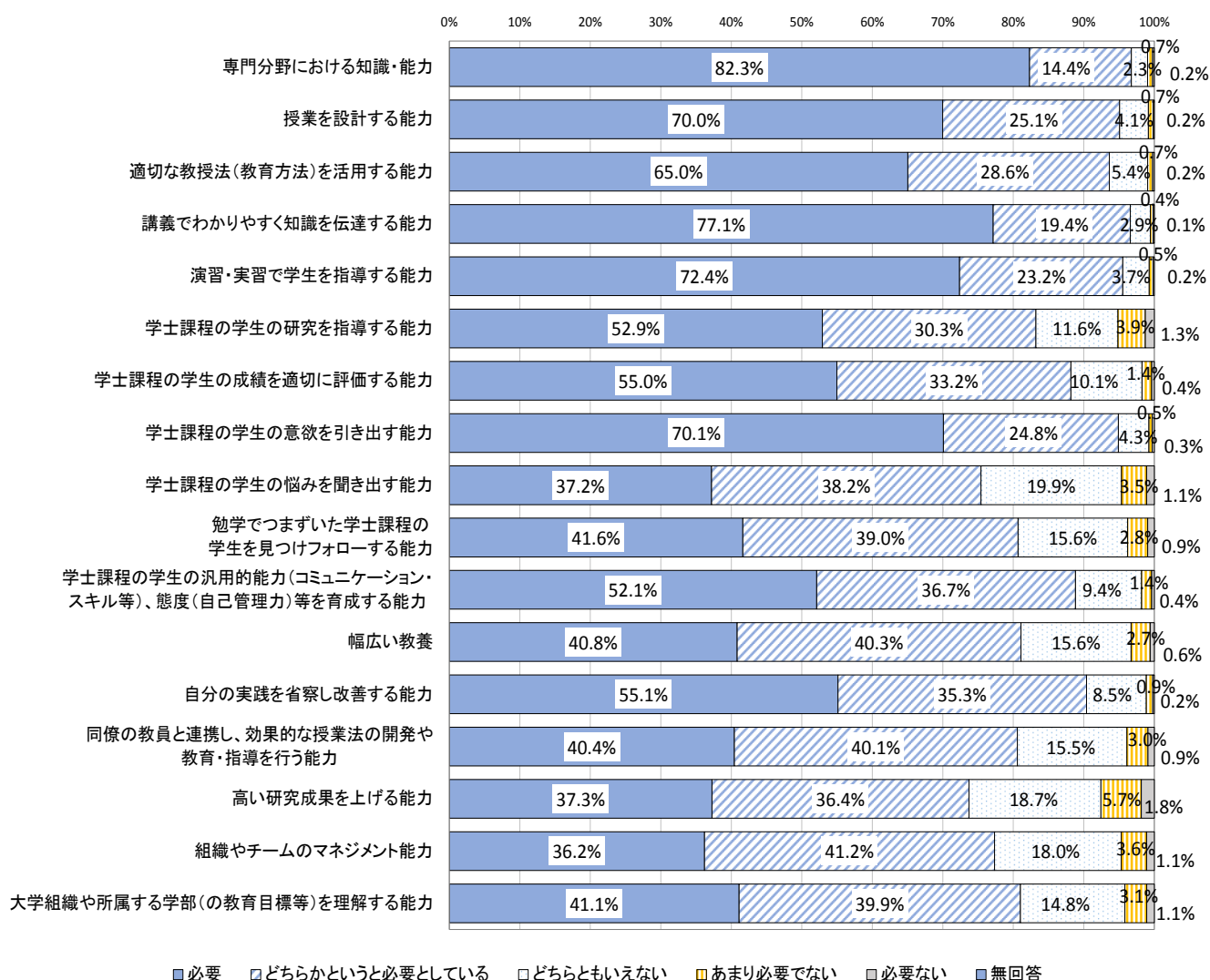
(重視している割合)

	全体	専攻する学問分野における知識	研究を行う力	専門性を社会や産業界等で活用する力	教養	基本的な学力(数量的スキル、情報リテラシー等)	学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)や態度(自己管理能力等)	自らが立てた新たな課題を解決する能力	英語等の語学力	異文化に対する理解
全体	18426 (100.0%)	11279 (61.2%)	6011 (32.6%)	7426 (40.3%)	5329 (28.9%)	7299 (39.6%)	9352 (50.8%)	8942 (48.5%)	2812 (15.3%)	3687 (20.0%)
旧帝大	1670 (100.0%)	1018 (61.0%)	887 (53.1%)	503 (30.1%)	417 (25.0%)	648 (38.8%)	718 (43.0%)	814 (48.7%)	308 (18.4%)	306 (18.3%)
旧六医大	797 (100.0%)	519 (65.1%)	316 (39.6%)	305 (38.3%)	185 (23.2%)	309 (38.8%)	359 (45.0%)	379 (47.6%)	121 (15.2%)	134 (16.8%)
その他国立大	4471 (100.0%)	2752 (61.6%)	1805 (40.4%)	1695 (37.9%)	1167 (26.1%)	1752 (39.2%)	2112 (47.2%)	2203 (49.3%)	695 (15.5%)	851 (19.0%)
公立 都市圏	531 (100.0%)	347 (65.3%)	198 (37.3%)	202 (38.0%)	153 (28.8%)	187 (35.2%)	241 (45.4%)	245 (46.1%)	86 (16.2%)	97 (18.3%)
公立 地方	970 (100.0%)	586 (60.4%)	270 (27.8%)	411 (42.4%)	259 (26.7%)	334 (34.4%)	500 (51.5%)	472 (48.7%)	128 (13.2%)	177 (18.2%)
私立10000人以上	2342 (100.0%)	1317 (56.2%)	704 (30.1%)	884 (37.7%)	767 (32.7%)	1014 (43.3%)	1230 (52.5%)	1159 (49.5%)	390 (16.7%)	559 (23.9%)
私立3000人～10000人 都市圏	2568 (100.0%)	1443 (56.2%)	648 (25.2%)	1092 (42.5%)	879 (34.2%)	1087 (42.3%)	1428 (55.6%)	1321 (51.4%)	434 (16.9%)	666 (25.9%)
私立3000人～10000人 地方	1134 (100.0%)	745 (65.7%)	252 (22.2%)	522 (46.0%)	344 (30.3%)	446 (39.3%)	609 (53.7%)	524 (46.2%)	141 (12.4%)	204 (18.0%)
私立3000人未満 都市部	1808 (100.0%)	1169 (64.7%)	424 (23.5%)	820 (45.4%)	517 (28.6%)	677 (37.4%)	986 (54.5%)	817 (45.2%)	235 (13.0%)	335 (18.5%)
私立3000人未満 地方	2135 (100.0%)	1383 (64.8%)	507 (23.7%)	992 (46.5%)	641 (30.0%)	845 (39.6%)	1169 (54.8%)	1008 (47.2%)	274 (12.8%)	358 (16.8%)

3-2-2 学士課程教育に必要な能力

学士課程の教育に必要な能力についてみると、「専門分野における知識・能力」を必要とする割合が 82.3%と高い。次いで、「講義でわかりやすく知識を伝達する能力 (77.1%)」「演習・実習で学生を指導する能力 (72.4%)」を必要とする割合が高い。

図表 3-6 貴学部の教員として、学士課程の学生を教育するために、どのような能力が必要ですか。(n=19,560)



設置者別にみると、私立では「講義でわかりやすく知識を伝達する能力」「勉学でつまずいた学士課程の学生を見つけフォローする能力」「学士課程の学生の汎用的能力（コミュニケーション・スキル等）、態度（自己管理能力）等を育成する能力」を必要とする割合が、他と比べて高い。

(必要の割合)

	全体	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力
全体	19560 (100.0%)	16100 (82.3%)	13691 (70.0%)	12721 (65.0%)	15090 (77.1%)	14158 (72.4%)	10352 (52.9%)	10752 (55.0%)	13710 (70.1%)	7277 (37.2%)
国立	6940 (100.0%)	5903 (85.1%)	4594 (66.2%)	4137 (59.6%)	4963 (71.5%)	4713 (67.9%)	4236 (61.0%)	3564 (51.4%)	4490 (64.7%)	2144 (30.9%)
公立	1500 (100.0%)	1274 (84.9%)	1003 (66.9%)	946 (63.1%)	1113 (74.2%)	1107 (73.8%)	832 (55.5%)	822 (54.8%)	1009 (67.3%)	514 (34.3%)
私立	11120 (100.0%)	8923 (80.2%)	8094 (72.8%)	7638 (68.7%)	9014 (81.1%)	8338 (75.0%)	5284 (47.5%)	6366 (57.2%)	8211 (73.8%)	4619 (41.5%)

	全体	勉学でつまずいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
全体	19560 (100.0%)	8145 (41.8%)	10192 (52.1%)	7987 (40.8%)	10783 (55.1%)	7911 (40.4%)	7289 (37.3%)	7080 (36.2%)	8041 (41.1%)
国立	6940 (100.0%)	2306 (33.2%)	3065 (44.2%)	2596 (37.4%)	3585 (51.7%)	2450 (35.3%)	3098 (44.6%)	2383 (34.3%)	2372 (34.2%)
公立	1500 (100.0%)	566 (37.7%)	774 (51.6%)	636 (42.4%)	845 (56.3%)	649 (43.3%)	589 (39.3%)	573 (38.2%)	619 (41.3%)
私立	11120 (100.0%)	5273 (47.4%)	6353 (57.1%)	4755 (42.8%)	6353 (57.1%)	4812 (43.3%)	3602 (32.4%)	4124 (37.1%)	5050 (45.4%)

職階別にみると、講師は「学士課程の学生の研究を指導する能力（45.0%）」、助教は「適切な教授法（教育方法）を活用する能力（57.8%）」を必要とする割合が、他と比べて低い。

（必要の割合）

	全体	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法（教育方法）を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力
全体	19560 (100.0%)	16100 (82.3%)	13691 (70.0%)	12721 (65.0%)	15090 (77.1%)	14158 (72.4%)	10352 (52.9%)	10752 (55.0%)	13710 (70.1%)	7277 (37.2%)
教授	8536 (100.0%)	7157 (83.8%)	6274 (73.5%)	5661 (66.3%)	6752 (79.1%)	6208 (72.7%)	4635 (54.3%)	4928 (57.7%)	6223 (72.9%)	3220 (37.7%)
准教授	5614 (100.0%)	4540 (80.9%)	4018 (71.6%)	3705 (66.0%)	4349 (77.5%)	4087 (72.8%)	3106 (55.3%)	3121 (55.6%)	3907 (69.6%)	2071 (36.9%)
講師	2371 (100.0%)	1919 (80.9%)	1628 (68.7%)	1588 (67.0%)	1859 (78.4%)	1757 (74.1%)	1067 (45.0%)	1269 (53.5%)	1668 (70.4%)	928 (39.1%)
助教	2894 (100.0%)	2368 (81.8%)	1680 (58.1%)	1672 (57.8%)	2022 (69.9%)	2003 (69.2%)	1482 (51.2%)	1366 (47.2%)	1815 (62.7%)	998 (34.5%)
その他	145 (100.0%)	116 (80.0%)	91 (62.8%)	95 (65.5%)	108 (74.5%)	103 (71.0%)	62 (42.8%)	68 (46.9%)	97 (66.9%)	60 (41.4%)

	全体	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけてフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力（コミュニケーション・スキル等）、態度（自己管理能力）等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部（の教育目標等）を理解する能力
全体	19560 (100.0%)	8145 (41.6%)	10192 (52.1%)	7987 (40.8%)	10783 (55.1%)	7911 (40.4%)	7289 (37.3%)	7080 (36.2%)	8041 (41.1%)
教授	8536 (100.0%)	3578 (41.9%)	4563 (53.5%)	3708 (43.4%)	4736 (55.5%)	3372 (39.5%)	3140 (36.8%)	3058 (35.8%)	3717 (43.5%)
准教授	5614 (100.0%)	2306 (41.1%)	2886 (51.4%)	2264 (40.3%)	3099 (55.2%)	2207 (39.3%)	2122 (37.8%)	1977 (35.2%)	2199 (39.2%)
講師	2371 (100.0%)	1068 (45.0%)	1274 (53.7%)	954 (40.2%)	1349 (56.9%)	1041 (43.9%)	788 (33.2%)	856 (36.1%)	1015 (42.8%)
助教	2894 (100.0%)	1127 (38.9%)	1383 (47.8%)	998 (34.5%)	1516 (52.4%)	1232 (42.6%)	1194 (41.3%)	1143 (39.5%)	1055 (36.5%)
その他	145 (100.0%)	66 (45.5%)	86 (59.3%)	63 (43.4%)	83 (57.2%)	59 (40.7%)	45 (31.0%)	46 (31.7%)	55 (37.9%)

分野別にみると、理学（81.8%）、工学（80.6%）、農学（84.2%）、保健（88.0%）、家政（94.8%）、教育（83.0%）、芸術（88.9%）において「専門分野における知識・能力」を必要とする割合が最も高いのに対して、人文科学（82.1%）、社会科学（80.5%）では「講義でわかりやすく知識を伝達する能力」を必要とする割合が最も高い。

(必要の割合)

	全体	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力
全体	19560 (100.0%)	16100 (82.3%)	13691 (70.0%)	12721 (65.0%)	15090 (77.1%)	14158 (72.4%)	10352 (52.9%)	10752 (55.0%)	13710 (70.1%)	7277 (37.2%)
人文科学	2400 (100.0%)	1801 (75.0%)	1815 (75.6%)	1665 (69.4%)	1970 (82.1%)	1776 (74.0%)	1244 (51.8%)	1503 (62.6%)	1797 (74.9%)	946 (39.4%)
社会科学	2832 (100.0%)	2175 (76.8%)	2081 (73.5%)	1916 (67.7%)	2280 (80.5%)	2054 (72.5%)	1287 (45.4%)	1547 (54.6%)	2022 (71.4%)	1077 (38.0%)
理学	2145 (100.0%)	1755 (81.8%)	1440 (67.1%)	1257 (58.6%)	1573 (73.3%)	1466 (68.3%)	1248 (58.2%)	1092 (50.9%)	1361 (63.4%)	632 (29.5%)
工学	3323 (100.0%)	2678 (80.6%)	2264 (68.1%)	1992 (59.9%)	2481 (74.7%)	2202 (66.3%)	2152 (64.8%)	1716 (51.6%)	2265 (68.2%)	1089 (32.8%)
農学	1139 (100.0%)	959 (84.2%)	776 (68.1%)	692 (60.8%)	847 (74.4%)	830 (72.9%)	750 (65.8%)	609 (53.5%)	789 (69.3%)	442 (38.8%)
保健	5157 (100.0%)	4539 (88.0%)	3312 (64.2%)	3245 (62.9%)	3855 (74.8%)	3739 (72.5%)	2279 (44.2%)	2744 (53.2%)	3432 (66.6%)	1889 (36.6%)
商船	8 (100.0%)	7 (87.5%)	4 (50.0%)	5 (62.5%)	8 (100.0%)	7 (87.5%)	6 (75.0%)	6 (75.0%)	8 (100.0%)	4 (50.0%)
家政	346 (100.0%)	328 (94.8%)	282 (81.5%)	282 (81.5%)	312 (90.2%)	305 (88.2%)	214 (61.8%)	241 (69.7%)	286 (82.7%)	166 (48.0%)
教育	1494 (100.0%)	1240 (83.0%)	1195 (80.0%)	1156 (77.4%)	1205 (80.7%)	1183 (79.2%)	734 (49.1%)	862 (57.7%)	1188 (79.5%)	697 (46.7%)
芸術	532 (100.0%)	473 (88.9%)	397 (74.6%)	389 (73.1%)	411 (77.3%)	461 (86.7%)	351 (66.0%)	334 (62.8%)	427 (80.3%)	259 (48.7%)
その他	184 (100.0%)	145 (78.8%)	125 (67.9%)	122 (66.3%)	148 (80.4%)	135 (73.4%)	87 (47.3%)	98 (53.3%)	135 (73.4%)	76 (41.3%)

	全体	勉学でつまずいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
全体	19560 (100.0%)	8145 (41.6%)	10192 (52.1%)	7987 (40.8%)	10783 (55.1%)	7911 (40.4%)	7289 (37.3%)	7080 (36.2%)	8041 (41.1%)
人文科学	2400 (100.0%)	1112 (46.3%)	1301 (54.2%)	1335 (55.6%)	1459 (60.8%)	999 (41.6%)	878 (36.6%)	763 (31.8%)	1042 (43.4%)
社会科学	2832 (100.0%)	1151 (40.6%)	1570 (55.4%)	1326 (46.8%)	1581 (55.8%)	1001 (35.3%)	1029 (36.3%)	940 (33.2%)	1108 (39.1%)
理学	2145 (100.0%)	739 (34.5%)	840 (39.2%)	719 (33.5%)	1002 (46.7%)	694 (32.4%)	912 (42.5%)	626 (29.2%)	689 (32.1%)
工学	3323 (100.0%)	1226 (36.9%)	1531 (46.1%)	1034 (31.1%)	1600 (48.1%)	1115 (33.6%)	1309 (39.4%)	1124 (33.8%)	1170 (35.2%)
農学	1139 (100.0%)	446 (39.2%)	552 (48.5%)	442 (38.8%)	606 (53.2%)	409 (35.9%)	456 (40.0%)	417 (36.6%)	432 (37.9%)
保健	5157 (100.0%)	2173 (42.1%)	2771 (53.7%)	1870 (36.3%)	2809 (54.5%)	2431 (47.1%)	1841 (35.7%)	2175 (42.2%)	2330 (45.2%)
商船	8 (100.0%)	3 (37.5%)	6 (75.0%)	2 (25.0%)	4 (50.0%)	4 (50.0%)	2 (25.0%)	6 (75.0%)	3 (37.5%)
家政	346 (100.0%)	197 (56.9%)	234 (67.6%)	163 (47.1%)	215 (62.1%)	177 (51.2%)	109 (31.5%)	143 (41.3%)	195 (56.4%)
教育	1494 (100.0%)	725 (48.5%)	972 (65.1%)	770 (51.5%)	1049 (70.2%)	730 (48.9%)	471 (31.5%)	600 (40.2%)	707 (47.3%)
芸術	532 (100.0%)	287 (53.9%)	299 (56.2%)	248 (46.6%)	350 (65.8%)	267 (50.2%)	224 (42.1%)	212 (39.8%)	266 (50.0%)
その他	184 (100.0%)	86 (46.7%)	116 (63.0%)	78 (42.4%)	108 (58.7%)	84 (45.7%)	58 (31.5%)	74 (40.2%)	99 (53.8%)

大学種別にみると、旧帝大では「高い研究成果を上げる能力（52.3%）」を必要とする割合が他と比べて高い。私立3000人未満・地方では、「学士課程の学生の汎用的能力（コミュニケーション・スキル等）、態度（自己管理能力）等を育成する能力（60.9%）」を必要とする割合が、他と比べて高い。

(必要の割合)

	全体	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力
全体	18426 (100.0%)	15214 (82.6%)	12892 (70.0%)	11937 (64.8%)	14176 (76.9%)	13315 (72.3%)	9907 (53.8%)	10131 (55.0%)	12860 (69.8%)	6766 (36.7%)
旧帝大	1670 (100.0%)	1429 (85.6%)	1049 (62.8%)	938 (56.2%)	1166 (69.8%)	1109 (66.4%)	1040 (62.3%)	813 (48.7%)	1074 (64.3%)	483 (28.9%)
旧六医大	797 (100.0%)	677 (84.9%)	529 (66.4%)	463 (58.1%)	557 (69.9%)	532 (66.8%)	441 (55.3%)	395 (49.6%)	497 (62.4%)	220 (27.6%)
その他国立大	4471 (100.0%)	3796 (84.9%)	3016 (67.5%)	2736 (61.2%)	3239 (72.4%)	3071 (68.7%)	2755 (61.6%)	2356 (52.7%)	2917 (65.2%)	1440 (32.2%)
公立 都市圏	531 (100.0%)	471 (88.7%)	340 (64.0%)	325 (61.2%)	389 (73.3%)	385 (72.5%)	298 (56.1%)	277 (52.2%)	343 (64.6%)	167 (31.5%)
公立 地方	970 (100.0%)	804 (82.9%)	663 (68.4%)	621 (64.0%)	725 (74.7%)	723 (74.5%)	535 (55.2%)	545 (56.2%)	667 (68.8%)	347 (35.8%)
私立10000人以上	2342 (100.0%)	1883 (80.4%)	1702 (72.7%)	1563 (66.7%)	1837 (78.4%)	1701 (72.6%)	1260 (53.8%)	1348 (57.6%)	1681 (71.8%)	859 (36.7%)
私立3000人~10000人 都市圏	2568 (100.0%)	2023 (78.8%)	1930 (75.2%)	1785 (69.5%)	2098 (81.7%)	1952 (76.0%)	1240 (48.3%)	1491 (58.1%)	1913 (74.5%)	1048 (40.8%)
私立3000人~10000人 地方	1134 (100.0%)	929 (81.9%)	818 (72.1%)	767 (67.6%)	935 (82.5%)	844 (74.4%)	542 (47.8%)	659 (58.1%)	825 (72.8%)	469 (41.4%)
私立3000人未満 都市部	1808 (100.0%)	1477 (81.7%)	1326 (73.3%)	1279 (70.7%)	1512 (83.6%)	1393 (77.0%)	837 (46.3%)	1072 (59.3%)	1381 (76.4%)	807 (44.6%)
私立3000人未満 地方	2135 (100.0%)	1725 (80.8%)	1519 (71.1%)	1460 (68.4%)	1718 (80.5%)	1605 (75.2%)	959 (44.9%)	1175 (55.0%)	1562 (73.2%)	926 (43.4%)

	全体	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
全体	18426 (100.0%)	7550 (41.0%)	9505 (51.6%)	7515 (40.8%)	10147 (55.1%)	7405 (40.2%)	6969 (37.8%)	6664 (36.2%)	7498 (40.7%)
旧帝大	1670 (100.0%)	535 (32.0%)	665 (39.8%)	608 (36.4%)	841 (50.4%)	533 (31.9%)	874 (52.3%)	607 (36.3%)	510 (30.5%)
旧六医大	797 (100.0%)	239 (30.0%)	359 (45.0%)	300 (37.6%)	411 (51.6%)	286 (35.9%)	363 (45.5%)	288 (36.1%)	293 (36.8%)
その他国立大	4471 (100.0%)	1531 (34.2%)	2041 (45.6%)	1687 (37.7%)	2332 (52.2%)	1630 (36.5%)	1861 (41.6%)	1487 (33.3%)	1569 (35.1%)
公立 都市圏	531 (100.0%)	180 (33.9%)	243 (45.8%)	218 (41.1%)	291 (54.8%)	214 (40.3%)	225 (42.4%)	189 (35.6%)	202 (38.0%)
公立 地方	970 (100.0%)	386 (39.8%)	531 (54.7%)	418 (43.1%)	554 (57.1%)	436 (44.9%)	364 (37.5%)	384 (39.6%)	417 (43.0%)
私立10000人以上	2342 (100.0%)	963 (41.1%)	1213 (51.8%)	1038 (44.3%)	1282 (54.7%)	890 (38.0%)	903 (38.6%)	787 (33.6%)	934 (39.9%)
私立3000人~10000人 都市圏	2568 (100.0%)	1160 (45.2%)	1439 (56.0%)	1129 (44.0%)	1490 (58.0%)	1091 (42.5%)	848 (33.0%)	971 (37.8%)	1160 (45.2%)
私立3000人~10000人 地方	1134 (100.0%)	542 (47.8%)	642 (56.6%)	468 (41.3%)	618 (54.5%)	482 (42.5%)	357 (31.5%)	386 (34.0%)	501 (44.2%)
私立3000人未満 都市部	1808 (100.0%)	958 (53.0%)	1072 (59.3%)	729 (40.3%)	1055 (58.4%)	877 (48.5%)	519 (28.7%)	730 (40.4%)	918 (50.8%)
私立3000人未満 地方	2135 (100.0%)	1056 (49.5%)	1300 (60.9%)	920 (43.1%)	1273 (59.6%)	966 (45.2%)	655 (30.7%)	835 (39.1%)	994 (46.6%)

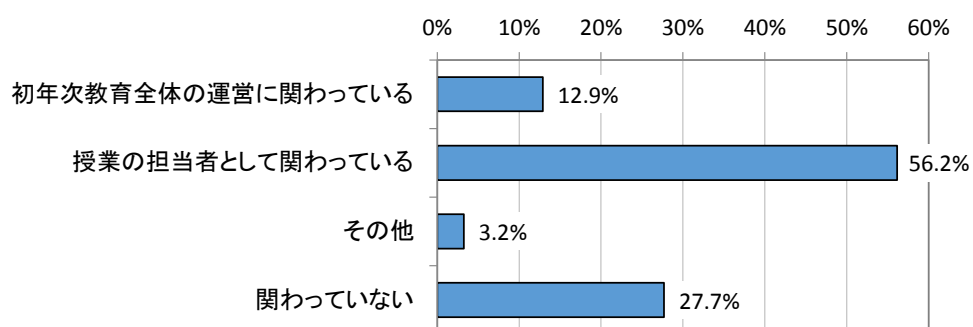
3-2-3 初年次教育

(1)初年次教育との関わり

初年次教育との関わりについてみると、「授業の担当者として関わっている」割合が 56.2%であった。

図表 3-7 本年度、貴学部（もしくは大学全体）の初年次教育に、関わっていますか。

(n=19,560)

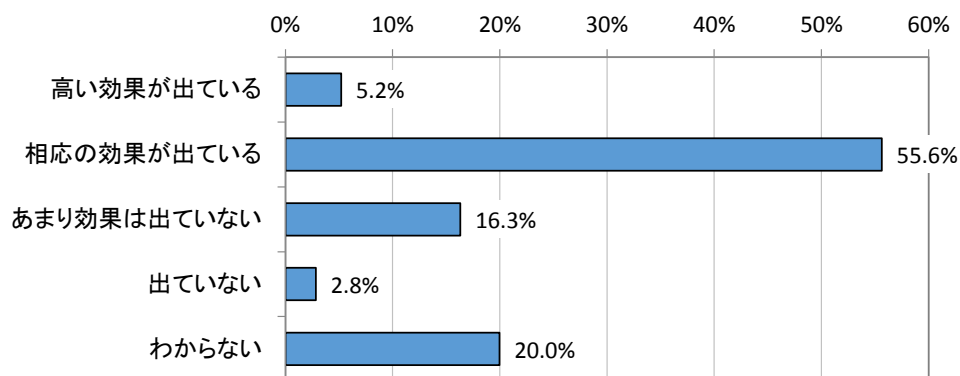


	全体	初年次教育 全体の運営 に関わってい る	授業の担当 者として関 わっている	その他	関わっていな い
全体	19560 (100.0%)	2523 (12.9%)	10988 (56.2%)	633 (3.2%)	5416 (27.7%)
国立	6940 (100.0%)	579 (8.3%)	3862 (55.6%)	182 (2.6%)	2317 (33.4%)
公立	1500 (100.0%)	141 (9.4%)	798 (53.2%)	54 (3.6%)	507 (33.8%)
私立	11120 (100.0%)	1803 (16.2%)	6328 (56.9%)	397 (3.6%)	2592 (23.3%)

(2)初年次教育の効果

初年次教育の効果についてみると、「高い効果が出ている」が 5.2%、「相応の効果が出ている」が 55.6%であった。

図表 3-8 貴学部（もしくは大学全体）の初年次教育は、効果は出ていると思いますか。
(n=19,560)

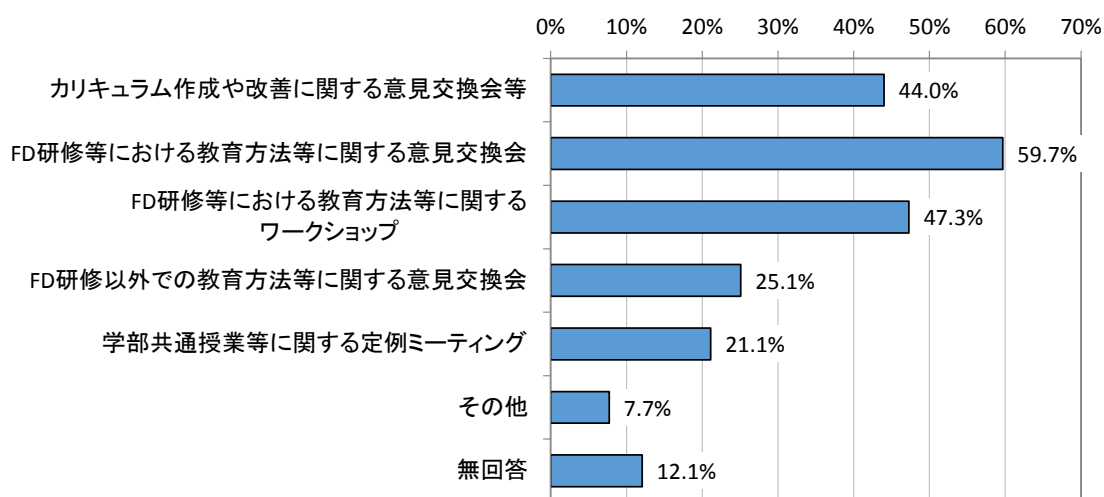


	全体	高い効果が 出ている	相応の効果 が出ている	あまり効果は 出していない	出していない	わからない
全体	19560 (100.0%)	1020 (5.2%)	10884 (55.6%)	3194 (16.3%)	557 (2.8%)	3905 (20.0%)
国立	6940 (100.0%)	389 (5.6%)	3642 (52.5%)	965 (13.9%)	206 (3.0%)	1738 (25.0%)
公立	1500 (100.0%)	68 (4.5%)	745 (49.7%)	247 (16.5%)	48 (3.2%)	392 (26.1%)
私立	11120 (100.0%)	563 (5.1%)	6497 (58.4%)	1982 (17.8%)	303 (2.7%)	1775 (16.0%)

3-2-4 教員間で情報交換を行う機会

教員間で情報交換を行う機会についてみると、「FD 研修等における教育方法等に関する意見交換会」の割合が 59.7%、「FD 研修等における教育方法等に関するワークショップ」の割合が 47.3%、「カリキュラム作成や改善に関する意見交換会等」の割合が 44.0%であった。

図表 3-9 貴学部では、学士課程の学生への教育に関して、学部には所属する教員間で情報交換を行う次のような機会がありますか。(n=19,560)



設置者別にみると、私立では「カリキュラム作成や改善に関する意見交換会等（48.3%）」の割合が、他と比べて高い。

	全体	カリキュラム作成や改善に関する意見交換会等	FD研修等における教育方法等に関する意見交換会	FD研修等における教育方法等に関するワークショップ	FD研修以外での教育方法等に関する意見交換会	学部共通授業等に関する定例ミーティング	その他	無回答
全体	19560 (2.17)	8610 (44.0%)	11673 (59.7%)	9251 (47.3%)	4907 (25.1%)	4133 (21.1%)	1511 (7.7%)	2361 (12.1%)
国立	6940 (1.94)	2663 (38.4%)	3709 (53.4%)	2916 (42.0%)	1437 (20.7%)	1099 (15.8%)	492 (7.1%)	1181 (17.0%)
公立	1500 (2.13)	579 (38.6%)	935 (62.3%)	775 (51.7%)	331 (22.1%)	290 (19.3%)	111 (7.4%)	170 (11.3%)
私立	11120 (2.32)	5368 (48.3%)	7029 (63.2%)	5560 (50.0%)	3139 (28.2%)	2744 (24.7%)	908 (8.2%)	1010 (9.1%)

職階別にみると、助教は「FD研修以外での教育方法等に関する意見交換会（17.3%）」の割合が、他と比べて低い。

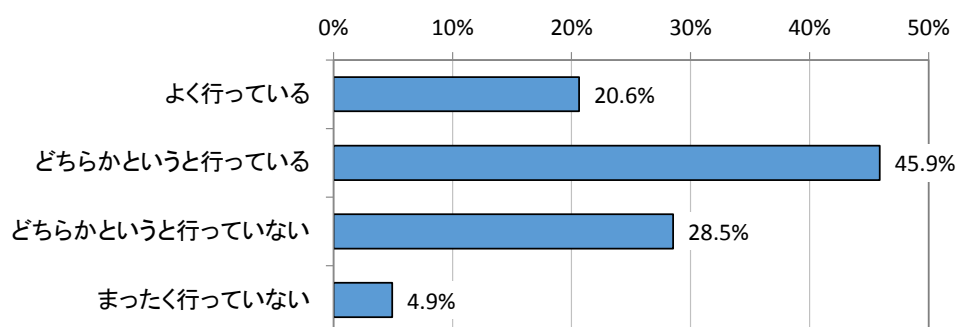
	全体	カリキュラム作成や改善に関する意見交換会等	FD研修等における教育方法等に関する意見交換会	FD研修等における教育方法等に関するワークショップ	FD研修以外での教育方法等に関する意見交換会	学部共通授業等に関する定例ミーティング	その他	無回答
全体	19560 (2.17)	8610 (44.0%)	11673 (59.7%)	9251 (47.3%)	4907 (25.1%)	4133 (21.1%)	1511 (7.7%)	2361 (12.1%)
教授	8536 (2.34)	4483 (52.5%)	5650 (66.2%)	4114 (48.2%)	2450 (28.7%)	1887 (22.1%)	685 (8.0%)	676 (7.9%)
准教授	5614 (2.17)	2344 (41.8%)	3397 (60.5%)	2761 (49.2%)	1397 (24.9%)	1188 (21.2%)	443 (7.9%)	655 (11.7%)
講師	2371 (2.05)	862 (36.4%)	1292 (54.5%)	1152 (48.6%)	534 (22.5%)	502 (21.2%)	179 (7.5%)	335 (14.1%)
助教	2894 (1.79)	878 (30.3%)	1260 (43.5%)	1171 (40.5%)	500 (17.3%)	518 (17.9%)	187 (6.5%)	663 (22.9%)
その他	145 (1.95)	43 (29.7%)	74 (51.0%)	53 (36.6%)	26 (17.9%)	38 (26.2%)	17 (11.7%)	32 (22.1%)

3-2-5 学士課程教育に関する教員間の日常的な意見交換

学士課程教育に関する教員間の日常的な意見交換についてみると、「よく行っている」が20.6%、「どちらかというに行っている」が45.9%であった。

図表 3-10 あなたは、学士課程の学生への教育に関して、学部にも所属する他の教員と、日常的にどの程度、意見交換を行っていますか。（同じ研究室内の教員との意見交換は除く）

(n=19,560)



設置者別にみると、私立では「よく行っている (24.6%)」という割合が、他と比べて高い。

	全体	よく行っている	どちらかというに行っている	どちらかというに行っていない	まったく行っていない
全体	19560 (100.0%)	4035 (20.6%)	8977 (45.9%)	5582 (28.5%)	966 (4.9%)
国立	6940 (100.0%)	1027 (14.8%)	2899 (41.8%)	2482 (35.8%)	532 (7.7%)
公立	1500 (100.0%)	274 (18.3%)	672 (44.8%)	469 (31.3%)	85 (5.7%)
私立	11120 (100.0%)	2734 (24.6%)	5406 (48.6%)	2631 (23.7%)	349 (3.1%)

職階別にみると、助教は「どちらかというところに行っていない (36.8%)」、「まったく行っていない (12.1%)」という割合が、他と比べて高い。

	全体	よく行っている	どちらかというところに行っている	どちらかというところに行っていない	まったく行っていない
全体	19560 (100.0%)	4035 (20.6%)	8977 (45.9%)	5582 (28.5%)	966 (4.9%)
教授	8536 (100.0%)	1916 (22.4%)	4161 (48.7%)	2237 (26.2%)	222 (2.6%)
准教授	5614 (100.0%)	1182 (21.1%)	2684 (47.8%)	1526 (27.2%)	222 (4.0%)
講師	2371 (100.0%)	505 (21.3%)	1006 (42.4%)	704 (29.7%)	156 (6.6%)
助教	2894 (100.0%)	409 (14.1%)	1071 (37.0%)	1064 (36.8%)	350 (12.1%)
その他	145 (100.0%)	23 (15.9%)	55 (37.9%)	51 (35.2%)	16 (11.0%)

分野別にみると、社会科学、家政、芸術において行っている割合が高い。

	全体	よく行っている	どちらかというところに行っている	どちらかというところに行っていない	まったく行っていない
全体	19560 (100.0%)	4035 (20.6%)	8977 (45.9%)	5582 (28.5%)	966 (4.9%)
人文科学	2400 (100.0%)	599 (25.0%)	1110 (46.3%)	614 (25.6%)	77 (3.2%)
社会科学	2832 (100.0%)	695 (24.5%)	1421 (50.2%)	631 (22.3%)	85 (3.0%)
理学	2145 (100.0%)	348 (16.2%)	968 (45.1%)	704 (32.8%)	125 (5.8%)
工学	3323 (100.0%)	605 (18.2%)	1597 (48.1%)	997 (30.0%)	124 (3.7%)
農学	1139 (100.0%)	180 (15.8%)	550 (48.3%)	365 (32.0%)	44 (3.9%)
保健	5157 (100.0%)	917 (17.8%)	2093 (40.6%)	1710 (33.2%)	437 (8.5%)
商船	8 (100.0%)	2 (25.0%)	6 (75.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家政	346 (100.0%)	93 (26.9%)	178 (51.4%)	70 (20.2%)	5 (1.4%)
教育	1494 (100.0%)	385 (25.8%)	724 (48.5%)	340 (22.8%)	45 (3.0%)
芸術	532 (100.0%)	164 (30.8%)	248 (46.6%)	107 (20.1%)	13 (2.4%)
その他	184 (100.0%)	47 (25.5%)	82 (44.6%)	44 (23.9%)	11 (6.0%)

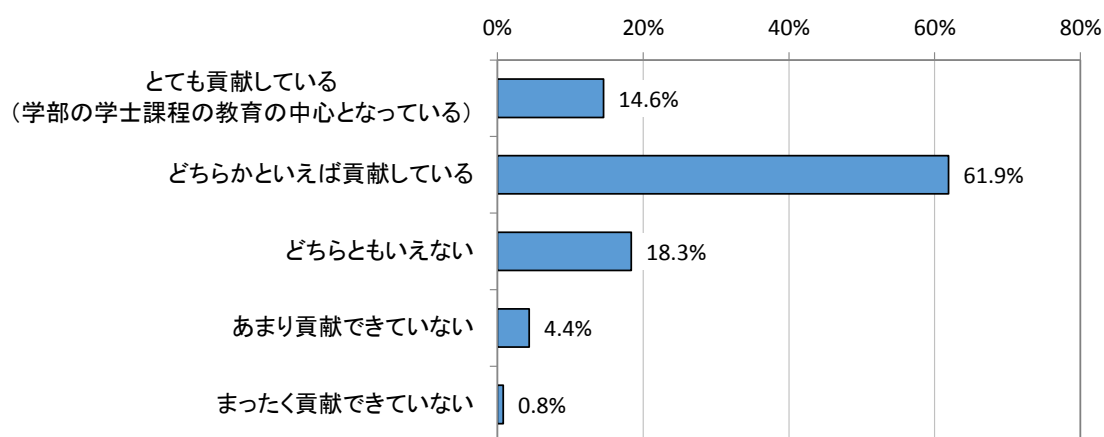
大学種別にみると、旧帝大で行っている割合が低く、10000人未満の私立で行っている割合が高い。

	全体	よく行っている	どちらかというに行っている	どちらかというに行っていない	まったく行っていない
全体	18426 (100.0%)	3730 (20.2%)	8418 (45.7%)	5337 (29.0%)	941 (5.1%)
旧帝大	1670 (100.0%)	169 (10.1%)	606 (36.3%)	716 (42.9%)	179 (10.7%)
旧六医大	797 (100.0%)	123 (15.4%)	320 (40.2%)	293 (36.8%)	61 (7.7%)
その他国立大	4471 (100.0%)	734 (16.4%)	1973 (44.1%)	1472 (32.9%)	292 (6.5%)
公立 都市圏	531 (100.0%)	73 (13.7%)	217 (40.9%)	193 (36.3%)	48 (9.0%)
公立 地方	970 (100.0%)	202 (20.8%)	455 (46.9%)	276 (28.5%)	37 (3.8%)
私立10000人以上	2342 (100.0%)	503 (21.5%)	1170 (50.0%)	591 (25.2%)	78 (3.3%)
私立3000人～10000人 都市圏	2568 (100.0%)	649 (25.3%)	1246 (48.5%)	588 (22.9%)	85 (3.3%)
私立3000人～10000人 地方	1134 (100.0%)	269 (23.7%)	562 (49.6%)	275 (24.3%)	28 (2.5%)
私立3000人未満 都市部	1808 (100.0%)	470 (26.0%)	870 (48.1%)	416 (23.0%)	52 (2.9%)
私立3000人未満 地方	2135 (100.0%)	538 (25.2%)	999 (46.8%)	517 (24.2%)	81 (3.8%)

3-2-6 学士課程教育目標達成への貢献度

学士課程教育目標達成への貢献度についてみると、「とても貢献している（学部の学士課程の教育の中心となっている）」割合が 14.6%、「どちらかといえば貢献している」割合が 61.9%、であった。

図表 3-11 あなたは、貴学部における学士課程の教育目標の達成に向けて、どの程度、寄与できていると思いますか。（n=19,560）



	全体	とても貢献している(学部の学士課程の教育の中心となっている)	どちらかといえば貢献している	どちらともいえない	あまり貢献できていない	まったく貢献できていない
全体	19560 (100.0%)	2851 (14.6%)	12105 (61.9%)	3589 (18.3%)	856 (4.4%)	159 (0.8%)
国立	6940 (100.0%)	855 (12.3%)	4239 (61.1%)	1400 (20.2%)	376 (5.4%)	70 (1.0%)
公立	1500 (100.0%)	210 (14.0%)	923 (61.5%)	273 (18.2%)	80 (5.3%)	14 (0.9%)
私立	11120 (100.0%)	1786 (16.1%)	6943 (62.4%)	1916 (17.2%)	400 (3.6%)	75 (0.7%)

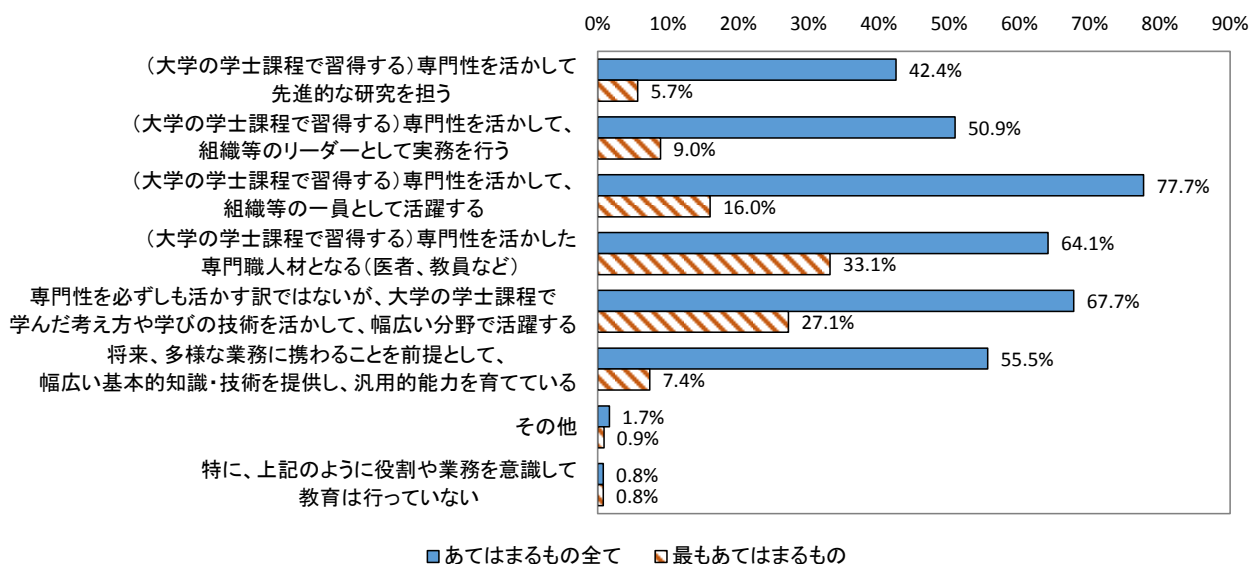
職階別にみると、助教は「とても貢献している（学部の学士課程の教育の中心となっている）（5.3%）」の割合が他と比べて低い。

	全体	とても貢献している(学部の学士課程の教育の中心となっている)	どちらかといえば貢献している	どちらともいえない	あまり貢献できていない	まったく貢献できていない
全体	19560 (100.0%)	2851 (14.6%)	12105 (61.9%)	3589 (18.3%)	856 (4.4%)	159 (0.8%)
教授	8536 (100.0%)	1706 (20.0%)	5559 (65.1%)	1067 (12.5%)	179 (2.1%)	25 (0.3%)
准教授	5614 (100.0%)	747 (13.3%)	3666 (65.3%)	1015 (18.1%)	162 (2.9%)	24 (0.4%)
講師	2371 (100.0%)	233 (9.8%)	1405 (59.3%)	554 (23.4%)	152 (6.4%)	27 (1.1%)
助教	2894 (100.0%)	153 (5.3%)	1403 (48.5%)	916 (31.7%)	346 (12.0%)	76 (2.6%)
その他	145 (100.0%)	12 (8.3%)	72 (49.7%)	37 (25.5%)	17 (11.7%)	7 (4.8%)

3-2-7 想定する学士課程卒業後の役割・業務

想定する学士課程卒業後の役割や業務についてみると、最もあてはまるものの回答では、「(大学の学士課程で習得する) 専門性を活かした専門職人材となる (医者、教員など)」割合が 33.1%、「専門性を必ずしも活かす訳ではないが、大学の学士課程で学んだ考え方や学びの技術を活かして、幅広い分野で活躍する」割合が 27.1%であった。

図表 3-12 あなたは、貴学部の学士課程の学生が学部卒業後に企業・団体や大学院等においてどのような役割や業務を担うことになるかと想定 (希望) して、学生を教育・指導していますか。(n=19,560)



設置者別にみると、国立では「(大学の学士課程で習得する) 専門性を活かして先進的な研究を担う (11.0%)」割合が、他と比べて高い。

(最もあてはまるものの割合)

	全体	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かして先進的な研究を担う	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かして、組織等のリーダーとして実務を行う	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かして、組織等の一員として活躍する	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かした専門職人材となる(医者、教員など)	専門性を必ずしも活かす訳ではないが、大学の学士課程で学んだ考え方や学びの技術を活かして、幅広い分野で活躍する	将来、多様な業務に携わること前提として、幅広い基本的知識・技術を提供し、汎用的能力を育てている	その他	特に、上記のように役割や業務を意識して教育は行っていない
全体	19560 (100.0%)	1117 (5.7%)	1751 (9.0%)	3127 (16.0%)	6471 (33.1%)	5308 (27.1%)	1452 (7.4%)	176 (0.9%)	158 (0.8%)
国立	6940 (100.0%)	763 (11.0%)	799 (11.5%)	920 (13.3%)	2089 (30.1%)	1842 (26.5%)	394 (5.7%)	75 (1.1%)	58 (0.8%)
公立	1500 (100.0%)	79 (5.3%)	148 (9.9%)	234 (15.6%)	538 (35.9%)	380 (25.3%)	99 (6.6%)	14 (0.9%)	8 (0.5%)
私立	11120 (100.0%)	275 (2.5%)	804 (7.2%)	1973 (17.7%)	3844 (34.6%)	3086 (27.8%)	959 (8.6%)	87 (0.8%)	92 (0.8%)

職階別にみると、講師は「(大学の学士課程で習得する) 専門性を活かした専門職人材となる (医者、教員など) (47.8%)」割合が、他と比べて高い。

(最もあてはまるものの割合)

	全体	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かして先進的な研究を担う	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かして、組織等のリーダーとして実務を行う	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かして、組織等の一員として活躍する	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かした専門職人材となる(医者、教員など)	専門性を必ずしも活かす訳ではないが、大学の学士課程で学んだ考え方や学びの技術を活かして、幅広い分野で活躍する	将来、多様な業務に携わること前提として、幅広い基本的知識・技術を提供し、汎用的能力を育てている	その他	特に、上記のように役割や業務を意識して教育は行っていない
全体	19560 (100.0%)	1117 (5.7%)	1751 (9.0%)	3127 (16.0%)	6471 (33.1%)	5308 (27.1%)	1452 (7.4%)	176 (0.9%)	158 (0.8%)
教授	8536 (100.0%)	438 (5.1%)	890 (10.4%)	1505 (17.6%)	2512 (29.4%)	2393 (28.0%)	675 (7.9%)	78 (0.9%)	45 (0.5%)
准教授	5614 (100.0%)	356 (6.3%)	498 (8.9%)	893 (15.9%)	1627 (29.0%)	1740 (31.0%)	414 (7.4%)	48 (0.9%)	38 (0.7%)
講師	2371 (100.0%)	84 (3.5%)	134 (5.7%)	308 (13.0%)	1134 (47.8%)	486 (20.5%)	175 (7.4%)	20 (0.8%)	30 (1.3%)
助教	2894 (100.0%)	234 (8.1%)	216 (7.5%)	409 (14.1%)	1141 (39.4%)	649 (22.4%)	175 (6.0%)	28 (1.0%)	42 (1.5%)
その他	145 (100.0%)	5 (3.4%)	13 (9.0%)	12 (8.3%)	57 (39.3%)	40 (27.6%)	13 (9.0%)	2 (1.4%)	3 (2.1%)

分野別にみると、人文科学（47.8%）、社会科学（41.5%）、理学（35.5%）、農学（39.1%）においては、「専門性を必ずしも活かす訳ではないが、大学の学士課程で学んだ考え方や学びの技術を活かして、幅広い分野で活躍する」割合が高い。

工学では「(大学の学士課程で習得する) 専門性を活かして、組織等の一員として活躍する(29.1%)」割合が高い。

保健（67.2%）、家政（49.4%）、教育（61.5%）、芸術（41.0%）では「(大学の学士課程で習得する) 専門性を活かした専門職人材となる（医者、教員など）」割合が高い。

(最もあてはまるものの割合)

	全体	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かして先進的な研究を担う	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かして、組織等のリーダーとして実務を行う	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かして、組織等の一員として活躍する	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かした専門職人材となる(医者、教員など)	専門性を必ずしも活かす訳ではないが、大学の学士課程で学んだ考え方や学びの技術を活かして、幅広い分野で活躍する	将来、多様な業務に携わること前提として、幅広い基本的知識・技術を提供し、汎用的能力を育てている	その他	特に、上記のように役割や業務を意識して教育は行っていない
全体	19560 (100.0%)	1117 (5.7%)	1751 (9.0%)	3127 (16.0%)	6471 (33.1%)	5308 (27.1%)	1452 (7.4%)	176 (0.9%)	158 (0.8%)
人文科学	2400 (100.0%)	81 (3.4%)	87 (3.6%)	275 (11.5%)	423 (17.6%)	1146 (47.8%)	320 (13.3%)	38 (1.6%)	30 (1.3%)
社会科学	2832 (100.0%)	61 (2.2%)	303 (10.7%)	475 (16.8%)	368 (13.0%)	1175 (41.5%)	390 (13.8%)	41 (1.4%)	19 (0.7%)
理学	2145 (100.0%)	286 (13.3%)	132 (6.2%)	311 (14.5%)	488 (22.8%)	762 (35.5%)	130 (6.1%)	19 (0.9%)	17 (0.8%)
工学	3323 (100.0%)	286 (8.6%)	539 (16.2%)	968 (29.1%)	215 (6.5%)	1039 (31.3%)	243 (7.3%)	20 (0.6%)	13 (0.4%)
農学	1139 (100.0%)	70 (6.1%)	144 (12.6%)	219 (19.2%)	165 (14.5%)	445 (39.1%)	77 (6.8%)	12 (1.1%)	7 (0.6%)
保健	5157 (100.0%)	260 (5.0%)	380 (7.4%)	547 (10.6%)	3464 (67.2%)	295 (5.7%)	125 (2.4%)	25 (0.5%)	61 (1.2%)
商船	8 (100.0%)	0 (0.0%)	2 (25.0%)	0 (0.0%)	3 (37.5%)	3 (37.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家政	346 (100.0%)	7 (2.0%)	33 (9.5%)	68 (19.7%)	171 (49.4%)	52 (15.0%)	15 (4.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
教育	1494 (100.0%)	23 (1.5%)	93 (6.2%)	150 (10.0%)	919 (61.5%)	192 (12.9%)	98 (6.6%)	11 (0.7%)	8 (0.5%)
芸術	532 (100.0%)	37 (7.0%)	23 (4.3%)	81 (15.2%)	218 (41.0%)	131 (24.6%)	34 (6.4%)	6 (1.1%)	2 (0.4%)
その他	184 (100.0%)	6 (3.3%)	15 (8.2%)	33 (17.9%)	37 (20.1%)	68 (37.0%)	20 (10.9%)	4 (2.2%)	1 (0.5%)

大学種別にみると、旧帝大では「(大学の学士課程で習得する) 専門性を活かして先進的な研究を担う (21.6%)」「(大学の学士課程で習得する) 専門性を活かして、組織等のリーダーとして実務を行う (16.0%)」割合が他と比べて高い。

(最もあてはまるものの割合)

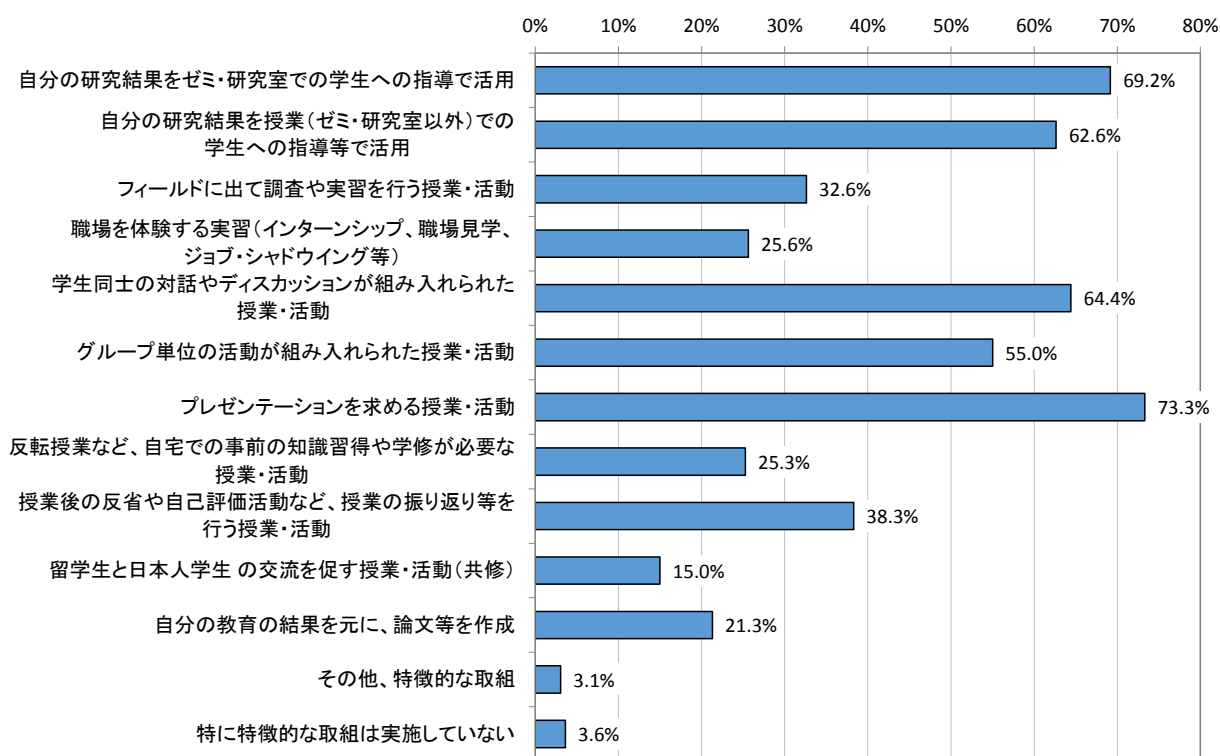
	全体	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かして先進的な研究を担う	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かして、組織等のリーダーとして実務を行う	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かして、組織等の一員として活躍する	(大学の学士課程で習得する)専門性を活かした専門職人材となる(医者、教員など)	専門性を必ずしも活かす訳ではないが、大学の学士課程で学んだ考え方や学びの技術を活かして、幅広い分野で活躍する	将来、多様な業務に携わることを前提として、幅広い基本的知識・技術を提供し、汎用的能力を育てている	その他	特に、上記のように役割や業務を意識して教育は行っていない
全体	18426 (100.0%)	1093 (5.9%)	1686 (9.2%)	2930 (15.9%)	5964 (32.4%)	5061 (27.5%)	1376 (7.5%)	168 (0.9%)	148 (0.8%)
旧帝大	1670 (100.0%)	361 (21.6%)	268 (16.0%)	136 (8.1%)	292 (17.5%)	489 (29.3%)	84 (5.0%)	23 (1.4%)	17 (1.0%)
旧六医大	797 (100.0%)	63 (7.9%)	84 (10.5%)	98 (12.3%)	310 (38.9%)	178 (22.3%)	54 (6.8%)	5 (0.6%)	5 (0.6%)
その他国立大	4471 (100.0%)	339 (7.6%)	447 (10.0%)	686 (15.3%)	1487 (33.3%)	1173 (26.2%)	256 (5.7%)	47 (1.1%)	36 (0.8%)
公立 都市圏	531 (100.0%)	42 (7.9%)	50 (9.4%)	71 (13.4%)	215 (40.5%)	117 (22.0%)	29 (5.5%)	4 (0.8%)	3 (0.6%)
公立 地方	970 (100.0%)	37 (3.8%)	98 (10.1%)	163 (16.8%)	324 (33.4%)	263 (27.1%)	70 (7.2%)	10 (1.0%)	5 (0.5%)
私立10000人以上	2342 (100.0%)	74 (3.2%)	203 (8.7%)	459 (19.6%)	410 (17.5%)	922 (39.4%)	230 (9.8%)	24 (1.0%)	20 (0.9%)
私立3000人～10000人 都市圏	2568 (100.0%)	66 (2.6%)	181 (7.0%)	469 (18.3%)	694 (27.0%)	841 (32.7%)	270 (10.5%)	21 (0.8%)	26 (1.0%)
私立3000人～10000人 地方	1134 (100.0%)	20 (1.8%)	103 (9.1%)	188 (16.6%)	421 (37.1%)	299 (26.4%)	86 (7.6%)	13 (1.1%)	4 (0.4%)
私立3000人未満 都市部	1808 (100.0%)	45 (2.5%)	115 (6.4%)	293 (16.2%)	853 (47.2%)	335 (18.5%)	142 (7.9%)	13 (0.7%)	12 (0.7%)
私立3000人未満 地方	2135 (100.0%)	46 (2.2%)	137 (6.4%)	367 (17.2%)	958 (44.9%)	444 (20.8%)	155 (7.3%)	8 (0.4%)	20 (0.9%)

3-3 教育活動

3-3-1 学士課程の学生に対する教育活動の実施

学士課程の学生に対する教育活動の実施についてみると、「プレゼンテーションを求める授業・活動」を実施する割合が 73.3%、「自分の研究結果をゼミ・研究室での学生への指導で活用」を実施する割合が 69.2%、「自分の研究結果をゼミ・研究室以外の学生への指導等で活用」を実施する割合が 62.6%、「学生同士の対話やディスカッションが組み入れられた授業・活動」を実施する割合が 64.4%であった。

図表 3-13 あなたは、現在、貴学部で学士課程の学生を教育・指導する際、学士課程の学生に対する教育活動において、下記の取組を実施していますか。(n=19,560)



設置者別にみると、国立では「自分の研究結果をゼミ・研究室での学生への指導で活用（75.8%）」「留学生と日本人学生の交流を促す授業・活動（共修）（19.3%）」を実施する割合が、他と比べて高い。

	全体	自分の研究結果をゼミ・研究室での学生への指導で活用	自分の研究結果を授業（ゼミ・研究室以外）での学生への指導等で活用	フィールドに出て調査や実習を行う授業・活動	職場を体験する実習（インターンシップ、職場見学、ジョブ・シャドウイング等）	学生同士の対話やディスカッションが組み入れられた授業・活動	グループ単位の活動が組み入れられた授業・活動	プレゼンテーションを求める授業・活動	反転授業など、自宅での事前の知識習得や学修が必要な授業・活動
全体	19560 (4.89)	13531 (69.2%)	12253 (62.6%)	6377 (32.6%)	5011 (25.6%)	12601 (64.4%)	10759 (55.0%)	14340 (73.3%)	4941 (25.3%)
国立	6940 (4.64)	5260 (75.8%)	4393 (63.3%)	1953 (28.1%)	1408 (20.3%)	4081 (58.8%)	3192 (46.0%)	4957 (71.4%)	1514 (21.8%)
公立	1500 (4.90)	1035 (69.0%)	959 (63.9%)	575 (38.3%)	386 (25.7%)	971 (64.7%)	854 (56.9%)	1070 (71.3%)	356 (23.7%)
私立	11120 (5.05)	7236 (65.1%)	6901 (62.1%)	3849 (34.6%)	3217 (28.9%)	7549 (67.9%)	6713 (60.4%)	8313 (74.8%)	3071 (27.6%)

	全体	授業後の反省や自己評価活動など、授業の振り返り等を行う授業・活動	留学生と日本人学生の交流を促す授業・活動（共修）	自分の教育の結果を元に、論文等を作成	その他、特徴的な取組	特に特徴的な取組は実施していない
全体	19560 (4.89)	7493 (38.3%)	2934 (15.0%)	4169 (21.3%)	598 (3.1%)	709 (3.6%)
国立	6940 (4.64)	2101 (30.3%)	1342 (19.3%)	1513 (21.8%)	184 (2.7%)	295 (4.3%)
公立	1500 (4.90)	566 (37.7%)	175 (11.7%)	290 (19.3%)	48 (3.2%)	59 (3.9%)
私立	11120 (5.05)	4826 (43.4%)	1417 (12.7%)	2366 (21.3%)	366 (3.3%)	355 (3.2%)

職階別にみると、職階が高くなるほど「自分の研究結果をゼミ・研究室での学生への指導で活用」「自分の研究結果を授業での学生への指導等で活用」の割合が高くなる。

	全体	自分の研究結果をゼミ・研究室での学生への指導で活用	自分の研究結果を授業（ゼミ・研究室以外）での学生への指導等で活用	フィールドに出て調査や実習を行う授業・活動	職場を体験する実習（インターンシップ、職場見学、ジョブ・シャドウイング等）	学生同士の対話やディスカッションが組み入れられた授業・活動	グループ単位の活動が組み入れられた授業・活動	プレゼンテーションを求める授業・活動	反転授業など、自宅での事前の知識習得や学修が必要な授業・活動
全体	19560 (4.89)	13531 (69.2%)	12253 (62.6%)	6377 (32.6%)	5011 (25.6%)	12601 (64.4%)	10759 (55.0%)	14340 (73.3%)	4941 (25.3%)
教授	8536 (5.08)	6391 (74.9%)	5790 (67.8%)	2827 (33.1%)	2260 (26.5%)	5622 (65.9%)	4594 (53.8%)	6542 (76.6%)	2171 (25.4%)
准教授	5614 (5.18)	4098 (73.0%)	3736 (66.5%)	2054 (36.6%)	1388 (24.7%)	3814 (67.9%)	3307 (58.9%)	4316 (76.9%)	1585 (28.2%)
講師	2371 (4.74)	1343 (56.6%)	1320 (55.7%)	738 (31.1%)	694 (29.3%)	1552 (65.5%)	1412 (59.6%)	1643 (69.3%)	620 (26.1%)
助教	2894 (3.94)	1636 (56.5%)	1334 (46.1%)	710 (24.5%)	632 (21.8%)	1534 (53.0%)	1378 (47.6%)	1756 (60.7%)	530 (18.3%)
その他	145 (4.17)	63 (43.4%)	73 (50.3%)	48 (33.1%)	37 (25.5%)	79 (54.5%)	68 (46.9%)	83 (57.2%)	35 (24.1%)

	全体	授業後の反省や自己評価活動など、授業の振り返り等を行う授業・活動	留学生と日本人学生の交流を促す授業・活動（共修）	自分の教育の結果を元に、論文等を作成	その他、特徴的な取組	特に特徴的な取組は実施していない
全体	19560 (4.89)	7493 (38.3%)	2934 (15.0%)	4169 (21.3%)	598 (3.1%)	709 (3.6%)
教授	8536 (5.08)	3239 (37.9%)	1505 (17.6%)	1984 (23.2%)	289 (3.4%)	167 (2.0%)
准教授	5614 (5.18)	2322 (41.4%)	859 (15.3%)	1261 (22.5%)	197 (3.5%)	157 (2.8%)
講師	2371 (4.74)	1025 (43.2%)	261 (11.0%)	444 (18.7%)	55 (2.3%)	121 (5.1%)
助教	2894 (3.94)	857 (29.6%)	294 (10.2%)	451 (15.6%)	48 (1.7%)	248 (8.6%)
その他	145 (4.17)	50 (34.5%)	15 (10.3%)	29 (20.0%)	9 (6.2%)	16 (11.0%)

分野別にみると、人文科学（77.5%）、社会科学（85.2%）、保健（60.8%）、家政（76.9%）、教育（79.3%）、芸術（78.9%）において「プレゼンテーションを求める授業・活動」を実施する割合が最も高い。

理学（72.1%）、工学（88.1%）、農学（88.1%）では「自分の研究結果をゼミ・研究室での学生への指導で活用」を実施する割合が最も高い。

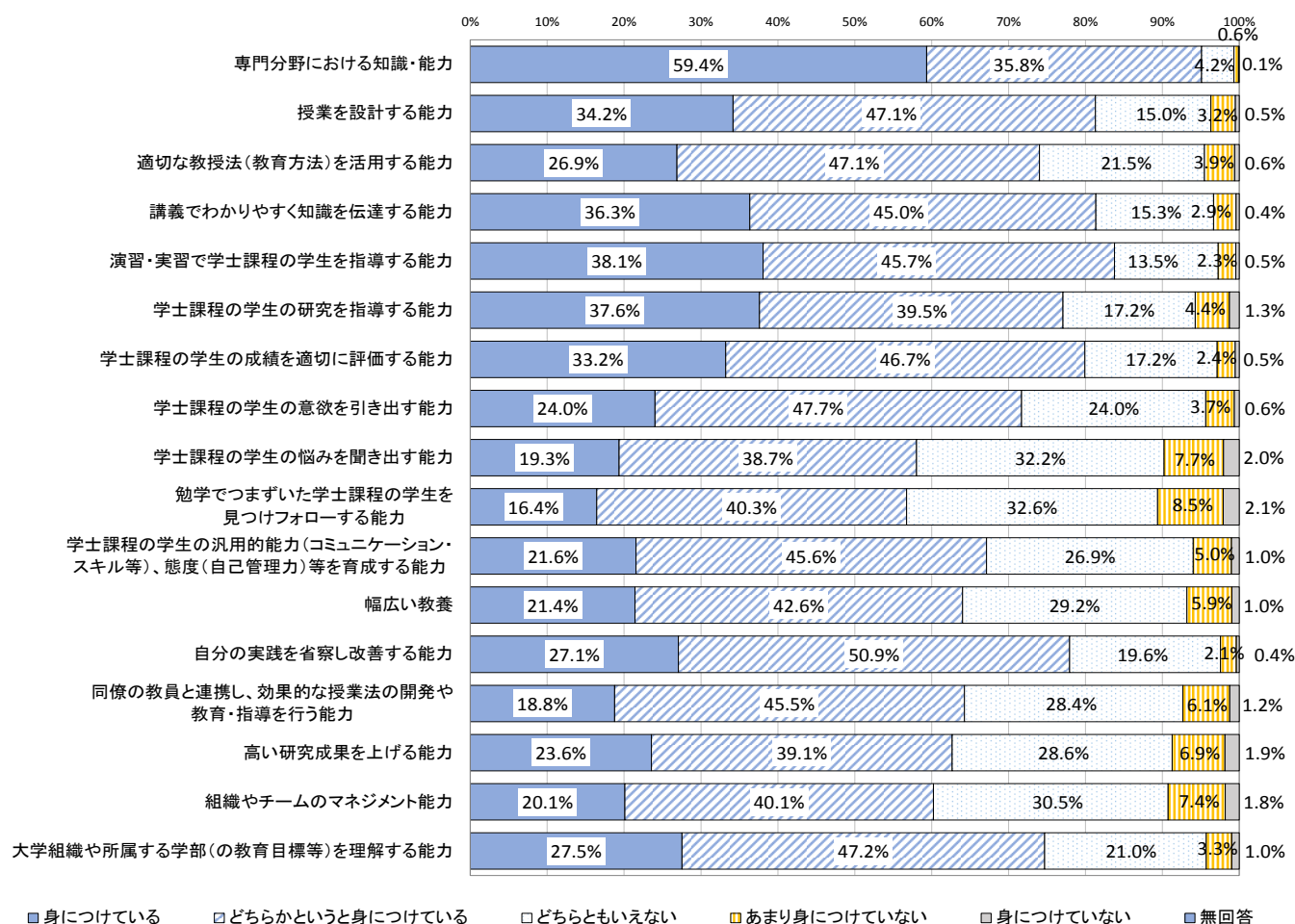
	全体	自分の研究結果をゼミ・研究室での学生への指導で活用	自分の研究結果を授業（ゼミ・研究室以外）での学生への指導等で活用	フィールドに出て調査や実習を行う授業・活動	職場を体験する実習（インターンシップ、職場見学、ジョブ・シャドウイング等）	学生同士の対話やディスカッションが組み入れられた授業・活動	グループ単位の活動が組み入れられた授業・活動	プレゼンテーションを求める授業・活動	反転授業など、自宅での事前の知識習得や学修が必要な授業・活動
全体	19560 (4.89)	13531 (69.2%)	12253 (62.6%)	6377 (32.6%)	5011 (25.6%)	12601 (64.4%)	10759 (55.0%)	14340 (73.3%)	4941 (25.3%)
人文学	2400 (5.21)	1560 (65.0%)	1677 (69.9%)	746 (31.1%)	298 (12.4%)	1822 (75.9%)	1310 (54.6%)	1860 (77.5%)	783 (32.6%)
社会科学	2832 (5.81)	1964 (69.4%)	2044 (72.2%)	1302 (46.0%)	811 (28.6%)	2349 (82.9%)	1960 (69.2%)	2413 (85.2%)	955 (33.7%)
理学	2145 (3.91)	1547 (72.1%)	1165 (54.3%)	374 (17.4%)	187 (8.7%)	1060 (49.4%)	774 (36.1%)	1471 (68.6%)	432 (20.1%)
工学	3323 (4.77)	2927 (88.1%)	2055 (61.8%)	751 (22.6%)	841 (25.3%)	1924 (57.9%)	1734 (52.2%)	2572 (77.4%)	669 (20.1%)
農学	1139 (5.15)	1004 (88.1%)	869 (76.3%)	563 (49.4%)	318 (27.9%)	630 (55.3%)	497 (43.6%)	879 (77.2%)	229 (20.1%)
保健	5157 (4.17)	2737 (53.1%)	2526 (49.0%)	1372 (26.6%)	1668 (32.3%)	2817 (54.6%)	2696 (52.3%)	3133 (60.8%)	1032 (20.0%)
商船	8 (4.88)	7 (87.5%)	6 (75.0%)	7 (87.5%)	2 (25.0%)	5 (62.5%)	1 (12.5%)	5 (62.5%)	1 (12.5%)
家政	346 (5.58)	265 (76.6%)	236 (68.2%)	153 (44.2%)	114 (32.9%)	222 (64.2%)	250 (72.3%)	266 (76.9%)	110 (31.8%)
教育	1494 (6.10)	989 (66.2%)	1111 (74.4%)	755 (50.5%)	553 (37.0%)	1264 (84.6%)	1102 (73.8%)	1185 (79.3%)	477 (31.9%)
芸術	532 (5.91)	414 (77.8%)	446 (83.8%)	272 (51.1%)	162 (30.5%)	382 (71.8%)	328 (61.7%)	420 (78.9%)	195 (36.7%)
その他	184 (5.29)	117 (63.6%)	118 (64.1%)	82 (44.6%)	57 (31.0%)	126 (68.5%)	107 (58.2%)	136 (73.9%)	58 (31.5%)

	全体	授業後の反省や自己評価活動など、授業の振り返り等を行う授業・活動	留学生と日本人学生の交流を促す授業・活動（共修）	自分の教育の結果を元に、論文等を作成	その他、特徴的な取組	特に特徴的な取組は実施していない
全体	19560 (4.89)	7493 (38.3%)	2934 (15.0%)	4169 (21.3%)	598 (3.1%)	709 (3.6%)
人文学	2400 (5.21)	1074 (44.8%)	616 (25.7%)	629 (26.2%)	82 (3.4%)	39 (1.6%)
社会科学	2832 (5.81)	1315 (46.4%)	530 (18.7%)	633 (22.4%)	140 (4.9%)	30 (1.1%)
理学	2145 (3.91)	554 (25.8%)	232 (10.8%)	400 (18.6%)	56 (2.6%)	131 (6.1%)
工学	3323 (4.77)	1005 (30.2%)	520 (15.6%)	685 (20.6%)	102 (3.1%)	51 (1.5%)
農学	1139 (5.15)	343 (30.1%)	220 (19.3%)	277 (24.3%)	19 (1.7%)	19 (1.7%)
保健	5157 (4.17)	1744 (33.8%)	450 (8.7%)	805 (15.6%)	96 (1.9%)	412 (8.0%)
商船	8 (4.88)	1 (12.5%)	2 (25.0%)	2 (25.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家政	346 (5.58)	185 (53.5%)	28 (8.1%)	84 (24.3%)	12 (3.5%)	4 (1.2%)
教育	1494 (6.10)	929 (62.2%)	184 (12.3%)	497 (33.3%)	54 (3.6%)	16 (1.1%)
芸術	532 (5.91)	258 (48.5%)	124 (23.3%)	112 (21.1%)	28 (5.3%)	2 (0.4%)
その他	184 (5.29)	85 (46.2%)	28 (15.2%)	45 (24.5%)	9 (4.9%)	5 (2.7%)

3-3-2 学士課程における教育能力

学士課程における教育能力についてみると、「専門分野における知識・能力」を身につけている割合が59.4%と高い。次いで、「演習・実習で学士課程の学生を指導する能力(38.1%)」「学士課程の学生の研究を指導する能力(37.6%)」を身につけている割合が高い。

図表 3-14 あなたは、以下の能力をどの程度身につけていると思いますか。(n=19,560)



設置者別にみると、国立では「高い研究成果を上げる能力（29.2%）」、私立では「大学組織や所属する学部（の教育目標等）を理解する能力（30.6%）」を身につけている割合が、他と比べて高い。

（身につけている割合）

	全体	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学士課程の学生を指導する能力	学士課程の学生を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力
全体	19560 (1.00)	11609 (59.4%)	6684 (34.2%)	5258 (26.9%)	7110 (36.3%)	7449 (38.1%)	7357 (37.6%)	6497 (33.2%)	4699 (24.0%)	3784 (19.3%)
国立	6940 (1.00)	4417 (63.6%)	2265 (32.6%)	1747 (25.2%)	2373 (34.2%)	2652 (38.2%)	3065 (44.2%)	2268 (32.7%)	1542 (22.2%)	1097 (15.8%)
公立	1500 (1.00)	861 (57.4%)	453 (30.2%)	356 (23.7%)	490 (32.7%)	536 (35.7%)	561 (37.4%)	455 (30.3%)	341 (22.7%)	270 (18.0%)
私立	11120 (1.00)	6331 (56.9%)	3966 (35.7%)	3155 (28.4%)	4247 (38.2%)	4261 (38.3%)	3731 (33.6%)	3774 (33.9%)	2816 (25.3%)	2417 (21.7%)

	全体	勉学でつまずいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
全体	19560 (1.00)	3215 (16.4%)	4216 (21.6%)	4190 (21.4%)	5292 (27.1%)	3670 (18.8%)	4608 (23.6%)	3934 (20.1%)	5387 (27.5%)
国立	6940 (1.00)	943 (13.6%)	1321 (19.0%)	1434 (20.7%)	1826 (26.3%)	1195 (17.2%)	2029 (29.2%)	1434 (20.7%)	1628 (23.5%)
公立	1500 (1.00)	232 (15.5%)	309 (20.6%)	283 (18.9%)	389 (25.9%)	262 (17.5%)	343 (22.9%)	298 (19.9%)	359 (23.9%)
私立	11120 (1.00)	2040 (18.3%)	2586 (23.3%)	2473 (22.2%)	3077 (27.7%)	2213 (19.9%)	2236 (20.1%)	2202 (19.8%)	3400 (30.6%)

大学種別にみると、旧帝大では「組織やチームのマネジメント能力 (22.0%)」を身につけている割合が他と比べて高いのに対して、「学士課程の学生の悩みを聞き出す能力 (13.4%)」「勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力 (11.3%)」「同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力 (15.1%)」を身につけている割合が、他と比べて低い。

私立 3000 人未満・地方では「学士課程の学生の研究を指導する能力 (27.4%)」「学士課程の学生の成績を適切に評価する能力 (27.9%)」を身につけている割合が、他と比べて低い。

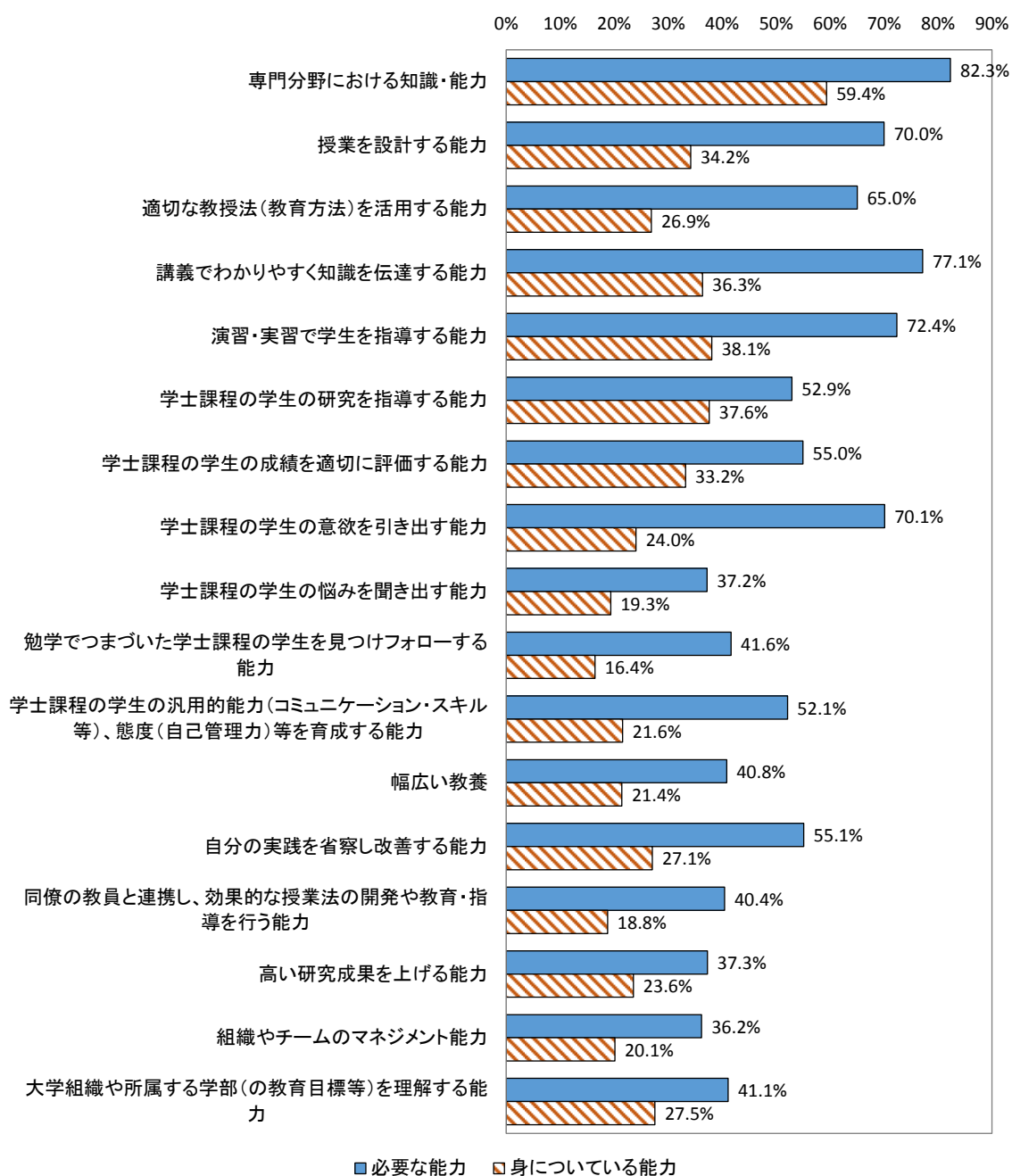
(身につけている割合)

	全体	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力
全体	18426 (100.0%)	10999 (59.7%)	6280 (34.1%)	4926 (26.7%)	6678 (36.2%)	7042 (38.2%)	7067 (38.4%)	6136 (33.3%)	4404 (23.9%)	3523 (19.1%)
旧帝大	1670 (100.0%)	1103 (66.0%)	506 (30.3%)	374 (22.4%)	552 (33.1%)	613 (36.7%)	743 (44.5%)	514 (30.8%)	347 (20.8%)	223 (13.4%)
旧六医大	797 (100.0%)	524 (65.7%)	265 (33.2%)	194 (24.3%)	272 (34.1%)	299 (37.5%)	346 (43.4%)	249 (31.2%)	163 (20.5%)	118 (14.8%)
その他国立大	4471 (100.0%)	2789 (62.4%)	1494 (33.4%)	1179 (26.4%)	1549 (34.6%)	1740 (38.9%)	1976 (44.2%)	1505 (33.7%)	1032 (23.1%)	755 (16.9%)
公立 都市圏	531 (100.0%)	333 (62.7%)	168 (31.6%)	132 (24.9%)	186 (35.0%)	208 (39.2%)	217 (40.9%)	166 (31.3%)	114 (21.5%)	79 (14.9%)
公立 地方	970 (100.0%)	529 (54.5%)	285 (29.4%)	224 (23.1%)	305 (31.4%)	329 (33.9%)	345 (35.6%)	289 (29.8%)	228 (23.5%)	191 (19.7%)
私立10000人以上	2342 (100.0%)	1497 (63.9%)	933 (39.8%)	730 (31.2%)	977 (41.7%)	929 (39.7%)	951 (40.6%)	913 (39.0%)	619 (26.4%)	461 (19.7%)
私立3000人~10000人 都市圏	2568 (100.0%)	1521 (59.2%)	1021 (39.8%)	792 (30.8%)	1067 (41.5%)	1067 (41.5%)	944 (36.8%)	939 (36.6%)	691 (26.9%)	604 (23.5%)
私立3000人~10000人 地方	1134 (100.0%)	626 (55.2%)	392 (34.6%)	300 (26.5%)	423 (37.3%)	428 (37.7%)	386 (34.0%)	385 (34.0%)	279 (24.6%)	237 (20.9%)
私立3000人未満 都市部	1808 (100.0%)	985 (54.5%)	590 (32.6%)	491 (27.2%)	653 (36.1%)	699 (38.7%)	574 (31.7%)	581 (32.1%)	445 (24.6%)	404 (22.3%)
私立3000人未満 地方	2135 (100.0%)	1092 (51.1%)	626 (29.3%)	510 (23.9%)	694 (32.5%)	730 (34.2%)	585 (27.4%)	595 (27.9%)	486 (22.8%)	451 (21.1%)

	全体	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
全体	18426 (100.0%)	2976 (16.2%)	3945 (21.4%)	3972 (21.6%)	4967 (27.0%)	3424 (18.6%)	4417 (24.0%)	3707 (20.1%)	5020 (27.2%)
旧帝大	1670 (100.0%)	189 (11.3%)	292 (17.5%)	352 (21.1%)	421 (25.2%)	253 (15.1%)	601 (36.0%)	367 (22.0%)	353 (21.1%)
旧六医大	797 (100.0%)	106 (13.3%)	145 (18.2%)	162 (20.3%)	202 (25.3%)	146 (18.3%)	227 (28.5%)	172 (21.6%)	203 (25.5%)
その他国立大	4471 (100.0%)	648 (14.5%)	884 (19.8%)	920 (20.6%)	1203 (26.9%)	796 (17.8%)	1201 (26.9%)	895 (20.0%)	1072 (24.0%)
公立 都市圏	531 (100.0%)	73 (13.7%)	96 (18.1%)	106 (20.0%)	139 (26.2%)	89 (16.8%)	138 (26.0%)	108 (20.3%)	120 (22.6%)
公立 地方	970 (100.0%)	159 (16.4%)	214 (22.1%)	178 (18.4%)	250 (25.8%)	174 (17.9%)	205 (21.1%)	190 (19.6%)	239 (24.6%)
私立10000人以上	2342 (100.0%)	398 (17.0%)	608 (26.0%)	619 (26.4%)	676 (28.9%)	459 (19.6%)	623 (26.6%)	503 (21.5%)	721 (30.8%)
私立3000人~10000人 都市圏	2568 (100.0%)	503 (19.6%)	650 (25.3%)	639 (24.9%)	762 (29.7%)	579 (22.5%)	537 (20.9%)	539 (21.0%)	835 (32.5%)
私立3000人~10000人 地方	1134 (100.0%)	194 (17.1%)	249 (22.0%)	244 (21.5%)	317 (28.0%)	208 (18.3%)	211 (18.6%)	211 (18.6%)	314 (27.7%)
私立3000人未満 都市部	1808 (100.0%)	336 (18.6%)	367 (20.3%)	343 (19.0%)	463 (25.6%)	344 (19.0%)	313 (17.3%)	338 (18.7%)	550 (30.4%)
私立3000人未満 地方	2135 (100.0%)	370 (17.3%)	440 (20.6%)	409 (19.2%)	534 (25.0%)	376 (17.6%)	361 (16.9%)	384 (18.0%)	613 (28.7%)

必要な能力と身につけている能力についてみると、必要な能力（82.3%）、身につけている能力（59.4%）共に「専門分野における知識・能力」の割合が最も高い。次いで、必要な能力では「講義でわかりやすく知識を伝達する能力（77.1%）」の割合が高く、身につけている能力では「演習・実習で学生を指導する能力（38.1%）」の割合が高い。

図表 3-15 必要な能力と身につけている能力の比較

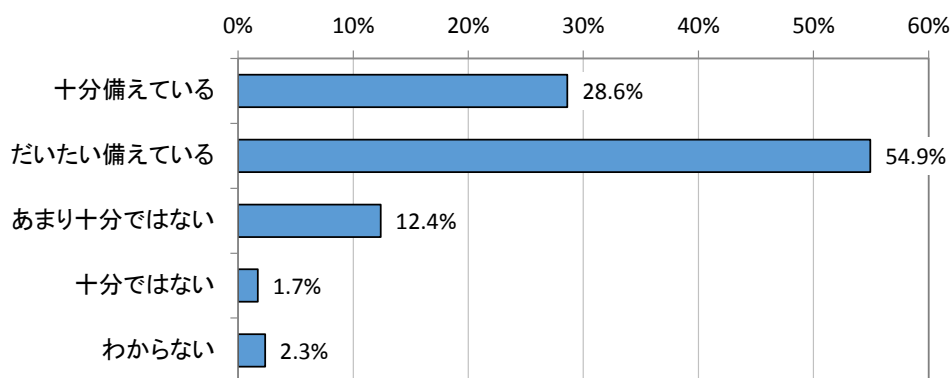


3-3-3 学士課程教育能力の評価

学士課程教育能力の評価についてみると、「十分備えている」割合が28.6%、「だいたい備えている」割合が54.9%であった。

職階別では、職階が上がるほど備えている割合が高くなる。

図表 3-16 あなたは、総合的にみて、あなた自身の大学教員としての学士課程における教育能力を、どのように評価していますか。(n=19,560)



	全体	十分備えている	だいたい備えている	あまり十分ではない	十分ではない	わからない
全体	19560 (100.0%)	5596 (28.6%)	10747 (54.9%)	2423 (12.4%)	336 (1.7%)	458 (2.3%)
国立	6940 (100.0%)	2140 (30.8%)	3755 (54.1%)	766 (11.0%)	112 (1.6%)	167 (2.4%)
公立	1500 (100.0%)	410 (27.3%)	800 (53.3%)	213 (14.2%)	35 (2.3%)	42 (2.8%)
私立	11120 (100.0%)	3046 (27.4%)	6192 (55.7%)	1444 (13.0%)	189 (1.7%)	249 (2.2%)

	全体	十分備えている	だいたい備えている	あまり十分ではない	十分ではない	わからない
全体	19560 (100.0%)	5596 (28.6%)	10747 (54.9%)	2423 (12.4%)	336 (1.7%)	458 (2.3%)
教授	8536 (100.0%)	3388 (39.7%)	4642 (54.4%)	407 (4.8%)	32 (0.4%)	67 (0.8%)
准教授	5614 (100.0%)	1501 (26.7%)	3365 (59.9%)	564 (10.0%)	58 (1.0%)	126 (2.2%)
講師	2371 (100.0%)	382 (16.1%)	1308 (55.2%)	521 (22.0%)	66 (2.8%)	94 (4.0%)
助教	2894 (100.0%)	295 (10.2%)	1359 (47.0%)	906 (31.3%)	168 (5.8%)	166 (5.7%)
その他	145 (100.0%)	30 (20.7%)	73 (50.3%)	25 (17.2%)	12 (8.3%)	5 (3.4%)

大学種別にみると、私立3000人未満・地方では「十分備えている（22.7%）」割合が他と比べて低く、「あまり十分ではない（18.1%）」、「十分ではない（2.7%）」割合が他と比べて高い。

	全体	十分備えている	だいたい備えている	あまり十分ではない	十分ではない	わからない
全体	18426 (100.0%)	5317 (28.9%)	10117 (54.9%)	2246 (12.2%)	315 (1.7%)	431 (2.3%)
旧帝大	1670 (100.0%)	503 (30.1%)	880 (52.7%)	218 (13.1%)	24 (1.4%)	45 (2.7%)
旧六医大	797 (100.0%)	239 (30.0%)	440 (55.2%)	87 (10.9%)	15 (1.9%)	16 (2.0%)
その他国立大	4471 (100.0%)	1397 (31.2%)	2435 (54.5%)	460 (10.3%)	73 (1.6%)	106 (2.4%)
公立 都市圏	531 (100.0%)	149 (28.1%)	281 (52.9%)	76 (14.3%)	10 (1.9%)	15 (2.8%)
公立 地方	970 (100.0%)	262 (27.0%)	519 (53.5%)	137 (14.1%)	25 (2.6%)	27 (2.8%)
私立10000人以上	2342 (100.0%)	762 (32.5%)	1296 (55.3%)	209 (8.9%)	28 (1.2%)	47 (2.0%)
私立3000人～10000人 都市圏	2568 (100.0%)	785 (30.6%)	1421 (55.3%)	275 (10.7%)	33 (1.3%)	54 (2.1%)
私立3000人～10000人 地方	1134 (100.0%)	318 (28.0%)	640 (56.4%)	141 (12.4%)	20 (1.8%)	15 (1.3%)
私立3000人未満 都市部	1808 (100.0%)	418 (23.1%)	1057 (58.5%)	257 (14.2%)	29 (1.6%)	47 (2.6%)
私立3000人未満 地方	2135 (100.0%)	484 (22.7%)	1148 (53.8%)	386 (18.1%)	58 (2.7%)	59 (2.8%)

3-3-4 能力獲得の時期

大学教員としての能力獲得の時期を分野別で見ると、「社会科学」では教員経験年数平均が5.49年、「芸術」では教員経験年数平均が5.90年、「人文科学」では教員経験年数平均が6.18年であった。

図表 3-17 あなたは、大学教員としての教育能力を、どのくらいの時期に獲得しましたか。

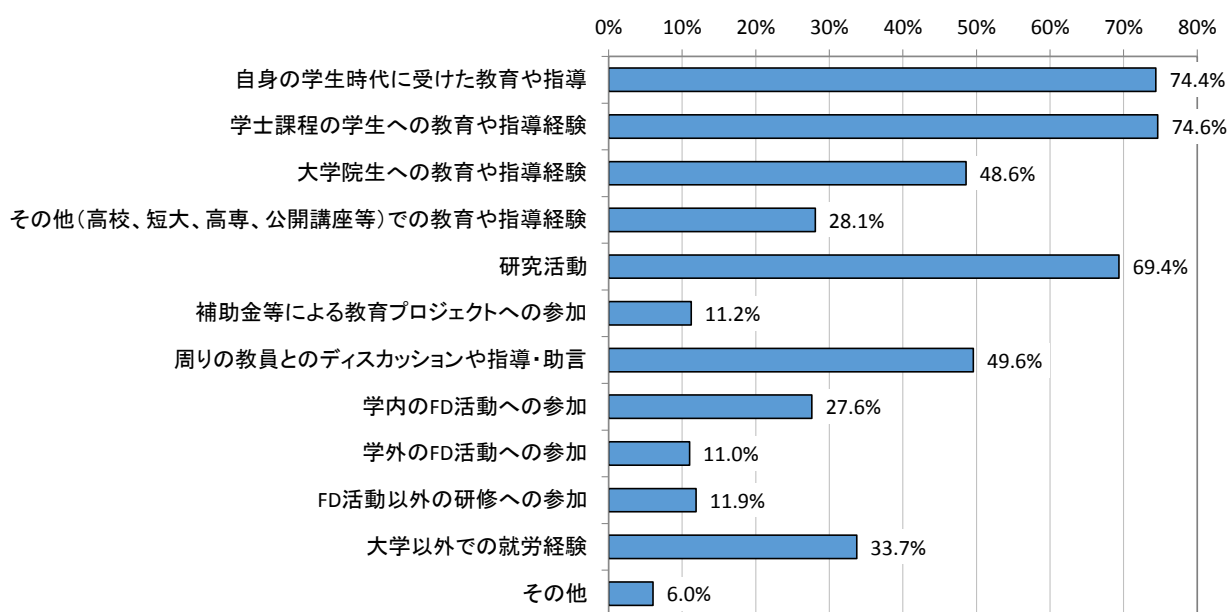
(教員経験・年目ごろ)

	回答件数	平均
全体	12806	6.51
人文科学	1679	6.18
社会科学	1934	5.49
理学	1461	6.27
工学	2203	6.75
農学	738	7.71
保健	3116	7.03
商船	6	3.67
家政	212	7.90
教育	965	6.34
芸術	365	5.90
その他	127	6.26

3-3-5 教育能力獲得における有効な経験

教育能力獲得における有効な経験についてみると、「学士課程の学生への教育や指導経験」を有効とする割合が74.6%、「自身の学生時代に受けた教育や指導」を有効とする割合が74.4%であった。

図表 3-18 あなたが大学教員としての教育能力を、獲得する上で有効だったと思う経験は何ですか。(n=19,560)



設置者別にみると、国立では「大学院生への教育や指導経験（64.5%）」を有効とする割合が、他と比べて高い。

	全体	自身の学生時代に受けた教育や指導	学士課程の学生への教育や指導経験	大学院生への教育や指導経験	その他(高校、短大、高専、公開講座等)での教育や指導経験	研究活動	補助金等による教育プロジェクトへの参加	周りの教員とのディスカッションや指導・助言	学内のFD活動への参加
全体	19560 (4.46)	14551 (74.4%)	14601 (74.6%)	9501 (48.6%)	5492 (28.1%)	13566 (69.4%)	2198 (11.2%)	9694 (49.6%)	5405 (27.6%)
国立	6940 (4.40)	5324 (76.7%)	5266 (75.9%)	4477 (64.5%)	1648 (23.7%)	4973 (71.7%)	797 (11.5%)	3194 (46.0%)	1736 (25.0%)
公立	1500 (4.46)	1103 (73.5%)	1121 (74.7%)	743 (49.5%)	404 (26.9%)	1029 (68.6%)	145 (9.7%)	760 (50.7%)	417 (27.8%)
私立	11120 (4.50)	8124 (73.1%)	8214 (73.9%)	4281 (38.5%)	3440 (30.9%)	7564 (68.0%)	1256 (11.3%)	5740 (51.6%)	3252 (29.2%)

	全体	学外のFD活動への参加	FD活動以外の研修への参加	大学以外での就労経験	その他
全体	19560 (4.46)	2153 (11.0%)	2323 (11.9%)	6600 (33.7%)	1183 (6.0%)
国立	6940 (4.40)	477 (6.9%)	542 (7.8%)	1700 (24.5%)	425 (6.1%)
公立	1500 (4.46)	149 (9.9%)	172 (11.5%)	550 (36.7%)	92 (6.1%)
私立	11120 (4.50)	1527 (13.7%)	1609 (14.5%)	4350 (39.1%)	666 (6.0%)

職階別にみると、「学士課程の学生への教育や指導経験」「研究活動」については、職階が高い方が、割合が高い。

	全体	自身の学生時代に受けた教育や指導	学士課程の学生への教育や指導経験	大学院生への教育や指導経験	その他(高校、短大、高専、公開講座等)での教育や指導経験	研究活動	補助金等による教育プロジェクトへの参加	周りの教員とのディスカッションや指導・助言	学内のFD活動への参加
全体	19560 (3.83)	14551 (74.4%)	14601 (74.6%)	9501 (48.6%)	5492 (28.1%)	13566 (69.4%)	2198 (11.2%)	9694 (49.6%)	5405 (27.6%)
教授	8536 (3.96)	6217 (72.8%)	6691 (78.4%)	4556 (53.4%)	2392 (28.0%)	6225 (72.9%)	1063 (12.5%)	4119 (48.3%)	2545 (29.8%)
准教授	5614 (3.92)	4264 (76.0%)	4314 (76.8%)	2765 (49.3%)	1690 (30.1%)	3852 (68.6%)	690 (12.3%)	2893 (51.5%)	1533 (27.3%)
講師	2371 (3.61)	1732 (73.0%)	1639 (69.1%)	843 (35.6%)	732 (30.9%)	1531 (64.6%)	208 (8.8%)	1236 (52.1%)	638 (26.9%)
助教	2894 (3.51)	2232 (77.1%)	1869 (64.6%)	1288 (44.5%)	625 (21.6%)	1877 (64.9%)	220 (7.6%)	1383 (47.8%)	654 (22.6%)
その他	145 (3.39)	106 (73.1%)	88 (60.7%)	49 (33.8%)	53 (36.6%)	81 (55.9%)	17 (11.7%)	63 (43.4%)	35 (24.1%)

	全体	学外のFD活動への参加	FD活動以外の研修への参加	大学以外での就労経験	その他
全体	19560 (0.63)	2153 (11.0%)	2323 (11.9%)	6600 (33.7%)	1183 (6.0%)
教授	8536 (0.64)	1081 (12.7%)	1087 (12.7%)	2808 (32.9%)	505 (5.9%)
准教授	5614 (0.63)	600 (10.7%)	662 (11.8%)	1882 (33.5%)	379 (6.8%)
講師	2371 (0.69)	248 (10.5%)	314 (13.2%)	933 (39.4%)	140 (5.9%)
助教	2894 (0.53)	211 (7.3%)	244 (8.4%)	920 (31.8%)	145 (5.0%)
その他	145 (0.69)	13 (9.0%)	16 (11.0%)	57 (39.3%)	14 (9.7%)

分野別にみると、人文科学(79.1%)、社会科学(76.1%)、家政(77.5%)、教育(70.6%)では「学士課程の学生への教育や指導経験」の割合が最も高い。理学(80.6%)、工学(80.5%)、農学(80.9%)、保健(67.8%)では「自身の学生時代に受けた教育や指導」の割合が最も高い。

	全体	自身の学生時代に受けた教育や指導	学士課程の学生への教育や指導経験	大学院生への教育や指導経験	その他(高校、短大、高専、公開講座等)での教育や指導経験	研究活動	補助金等による教育プロジェクトへの参加	周りの教員とのディスカッションや指導・助言	学内のFD活動への参加
全体	19560 (4.46)	14551 (74.4%)	14601 (74.6%)	9501 (48.6%)	5492 (28.1%)	13566 (69.4%)	2198 (11.2%)	9694 (49.6%)	5405 (27.6%)
人文学	2400 (4.49)	1855 (77.3%)	1899 (79.1%)	875 (36.5%)	892 (37.2%)	1677 (69.9%)	278 (11.6%)	1198 (49.9%)	624 (26.0%)
社会科学	2832 (4.36)	2091 (73.8%)	2156 (76.1%)	1031 (36.4%)	776 (27.4%)	1863 (65.8%)	327 (11.5%)	1412 (49.9%)	718 (25.4%)
理学	2145 (4.38)	1728 (80.6%)	1715 (80.0%)	1438 (67.0%)	524 (24.4%)	1607 (74.9%)	139 (6.5%)	1020 (47.6%)	494 (23.0%)
工学	3323 (4.61)	2676 (80.5%)	2647 (79.7%)	2241 (67.4%)	719 (21.6%)	2377 (71.5%)	386 (11.6%)	1624 (48.9%)	924 (27.8%)
農学	1139 (4.58)	921 (80.9%)	883 (77.5%)	743 (65.2%)	236 (20.7%)	873 (76.6%)	145 (12.7%)	548 (48.1%)	276 (24.2%)
保健	5157 (4.31)	3496 (67.8%)	3434 (66.6%)	2292 (44.4%)	1169 (22.7%)	3378 (65.5%)	496 (9.6%)	2523 (48.9%)	1748 (33.9%)
商船	8 (3.50)	6 (75.0%)	5 (62.5%)	3 (37.5%)	4 (50.0%)	4 (50.0%)	0 (0.0%)	3 (37.5%)	1 (12.5%)
家政	346 (4.82)	257 (74.3%)	268 (77.5%)	124 (35.8%)	122 (35.3%)	265 (76.6%)	67 (19.4%)	204 (59.0%)	99 (28.6%)
教育	1494 (4.61)	989 (66.2%)	1055 (70.6%)	499 (33.4%)	740 (49.5%)	996 (66.7%)	262 (17.5%)	802 (53.7%)	371 (24.8%)
芸術	532 (4.78)	406 (76.3%)	412 (77.4%)	187 (35.2%)	236 (44.4%)	417 (78.4%)	66 (12.4%)	261 (49.1%)	109 (20.5%)
その他	184 (4.53)	126 (68.5%)	127 (69.0%)	68 (37.0%)	74 (40.2%)	109 (59.2%)	32 (17.4%)	99 (53.8%)	41 (22.3%)

	全体	学外のFD活動への参加	FD活動以外の研修への参加	大学以外での就労経験	その他
全体	19560 (4.46)	2153 (11.0%)	2323 (11.9%)	6600 (33.7%)	1183 (6.0%)
人文学	2400 (4.49)	290 (12.1%)	308 (12.8%)	715 (29.8%)	159 (6.6%)
社会科学	2832 (4.36)	326 (11.5%)	317 (11.2%)	1129 (39.9%)	212 (7.5%)
理学	2145 (4.38)	107 (5.0%)	115 (5.4%)	396 (18.5%)	116 (5.4%)
工学	3323 (4.61)	275 (8.3%)	230 (6.9%)	1038 (31.2%)	195 (5.9%)
農学	1139 (4.58)	71 (6.2%)	76 (6.7%)	379 (33.3%)	66 (5.8%)
保健	5157 (4.31)	805 (15.6%)	812 (15.7%)	1820 (35.3%)	263 (5.1%)
商船	8 (3.50)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (25.0%)	0 (0.0%)
家政	346 (4.82)	32 (9.2%)	61 (17.6%)	147 (42.5%)	20 (5.8%)
教育	1494 (4.61)	188 (12.6%)	305 (20.4%)	585 (39.2%)	90 (6.0%)
芸術	532 (4.78)	35 (6.6%)	67 (12.6%)	312 (58.6%)	37 (7.0%)
その他	184 (4.53)	24 (13.0%)	32 (17.4%)	77 (41.8%)	25 (13.6%)

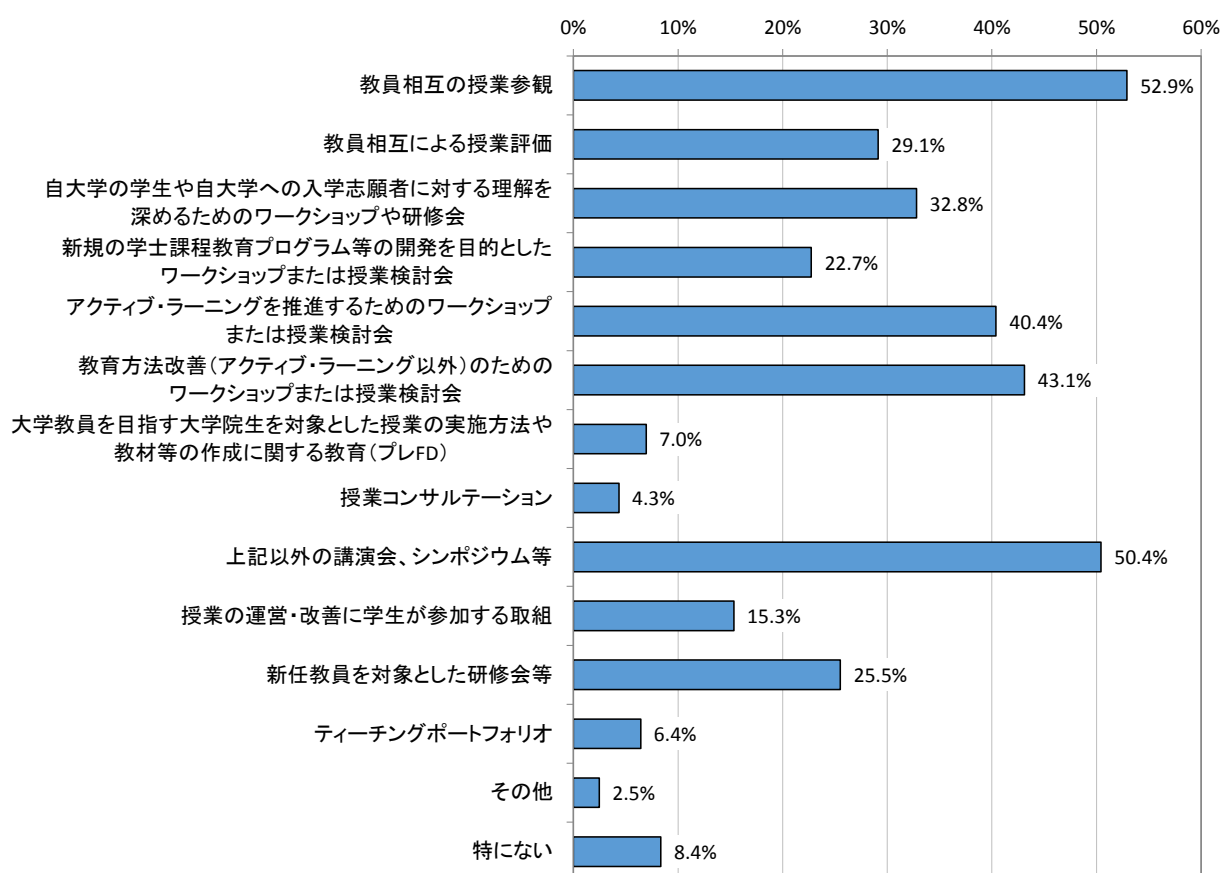
3-4 FD 活動

3-4-1 参加した FD 活動と効果

(1)参加した取組

参加した FD 活動についてみると、「教員相互の授業参観」に参加した割合が 52.9%、「上記以外の講演会、シンポジウム等」に参加した割合が 50.4%であった。

図表 3-19 教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な活動（FD 活動）のうち、あなたが参加したことがあるものを選んでください。（n=19,560：複数回答）



設置者別にみると、私立では「教員相互の授業参観（59.5%）」「上記以外の講演会、シンポジウム等（54.2%）」に参加した割合が、他と比べて高い。

	全体	教員相互の授業参観	教員相互による授業評価	自大学の学生や自大学への入学志願者に対する理解を深めるためのワークショップや研修会	新規の学士課程教育プログラム等の開発を目的としたワークショップまたは授業検討会	アクティブ・ラーニングを推進するためのワークショップまたは授業検討会	教育方法改善（アクティブ・ラーニング以外）のためのワークショップまたは授業検討会	大学教員を目指す大学院生を対象とした授業の実施方法や教材等の作成に関する教育（ブレFD）	授業コンサルテーション
全体	19560 (3.41)	10349 (52.9%)	5699 (29.1%)	6414 (32.8%)	4447 (22.7%)	7901 (40.4%)	8436 (43.1%)	1360 (7.0%)	850 (4.3%)
国立	6940 (3.05)	3005 (43.3%)	1550 (22.3%)	1877 (27.0%)	1381 (19.9%)	2251 (32.4%)	2605 (37.5%)	480 (6.9%)	293 (4.2%)
公立	1500 (3.21)	730 (48.7%)	400 (26.7%)	446 (29.7%)	324 (21.6%)	590 (39.3%)	666 (44.4%)	99 (6.6%)	47 (3.1%)
私立	11120 (3.66)	6614 (59.5%)	3749 (33.7%)	4091 (36.8%)	2742 (24.7%)	5060 (45.5%)	5165 (46.4%)	781 (7.0%)	510 (4.6%)

	全体	上記以外の講演会、シンポジウム等	授業の運営・改善に学生が参加する取組	新任教員を対象とした研修会等	ティーチングポートフォリオ	その他	特にない
全体	19560 (3.41)	9864 (50.4%)	2999 (15.3%)	4992 (25.5%)	1257 (6.4%)	481 (2.5%)	1635 (8.4%)
国立	6940 (3.05)	3111 (44.8%)	989 (14.3%)	2143 (30.9%)	426 (6.1%)	201 (2.9%)	833 (12.0%)
公立	1500 (3.21)	722 (48.1%)	210 (14.0%)	302 (20.1%)	101 (6.7%)	30 (2.0%)	142 (9.5%)
私立	11120 (3.66)	6031 (54.2%)	1800 (16.2%)	2547 (22.9%)	730 (6.6%)	250 (2.2%)	660 (5.9%)

大学種別にみると、旧帝大では「教員相互の授業参観（19.0%）」「教員相互による授業評価（9.1%）」「自大学の学生や自大学への入学志願者に対する理解を深めるためのワークショップや研修会（20.9%）」「新規の学士課程教育プログラム等の開発を目的としたワークショップまたは授業検討会（14.4%）」「アクティブ・ラーニングを推進するためのワークショップまたは授業検討会（23.3%）」「教育方法改善（アクティブ・ラーニング以外）のためのワークショップまたは授業検討会（29.7%）」「上記以外の講演会、シンポジウム等（37.7%）」「授業の運営・改善に学生が参加する取組（9.6%）」に参加した割合が、他と比べて低い。

私立 3000 人未満・地方では「教員相互による授業評価（36.8%）」に参加した割合が、他と比べてやや高い。

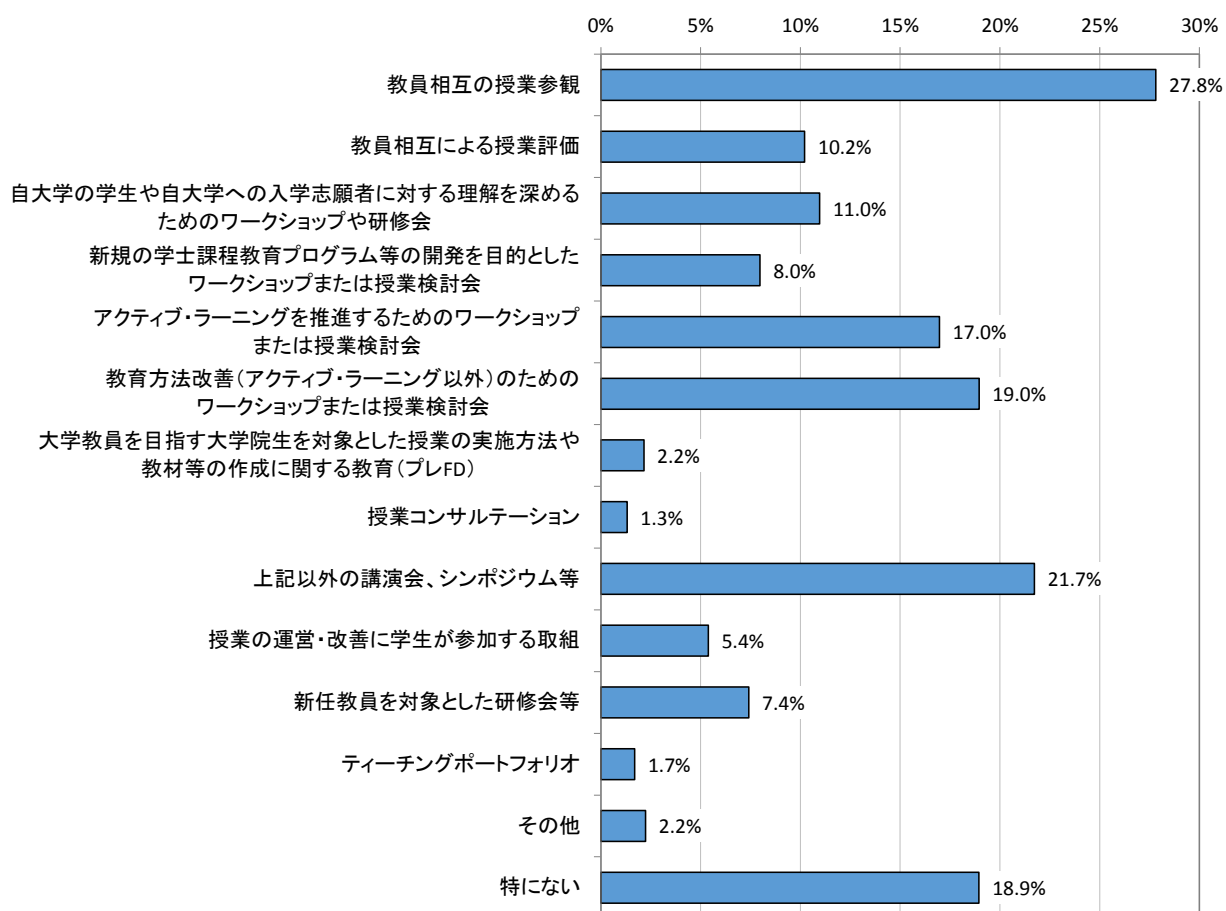
	全体	教員相互の 授業参観	教員相互に よる授業評価	自大学の学生や自大学 への入学志願者に対する 理解を深めるための ワークショップや研修会	新規の学士 課程教育プログラム等の 開発を目的としたワーク ショップまたは授業検討 会	アクティブ・ ラーニングを 推進するためのワーク ショップまたは授業検討 会	教育方法改善(アクティ ブ・ラーニング以外)のため のワークショップまたは 授業検討会	大学教員を 目指す大学院生を対象と した授業の実施方法や 教材等の作成に関する 教育(プレ FD)	授業コンサル テーション
全体	18426 (3.38)	9534 (51.7%)	5188 (28.2%)	5990 (32.5%)	4152 (22.5%)	7407 (40.2%)	7908 (42.9%)	1271 (6.9%)	793 (4.3%)
旧帝大	1670 (2.29)	318 (19.0%)	152 (9.1%)	349 (20.9%)	241 (14.4%)	389 (23.3%)	496 (29.7%)	95 (5.7%)	43 (2.6%)
旧六医大	797 (3.22)	375 (47.1%)	219 (27.5%)	209 (26.2%)	183 (23.0%)	320 (40.2%)	318 (39.9%)	50 (6.3%)	16 (2.0%)
その他国立大	4471 (3.30)	2312 (51.7%)	1179 (26.4%)	1317 (29.5%)	957 (21.4%)	1541 (34.5%)	1790 (40.0%)	335 (7.5%)	234 (5.2%)
公立 都市圏	531 (2.70)	206 (38.8%)	90 (16.9%)	139 (26.2%)	110 (20.7%)	163 (30.7%)	198 (37.3%)	28 (5.3%)	11 (2.1%)
公立 地方	970 (3.48)	525 (54.1%)	311 (32.1%)	307 (31.6%)	214 (22.1%)	427 (44.0%)	469 (48.4%)	71 (7.3%)	36 (3.7%)
私立10000人以上	2342 (3.44)	1171 (50.0%)	659 (28.1%)	831 (35.5%)	552 (23.6%)	891 (38.0%)	1000 (42.7%)	156 (6.7%)	83 (3.5%)
私立3000人～10000人 都市圏	2568 (3.76)	1416 (55.1%)	748 (29.1%)	1000 (38.9%)	719 (28.0%)	1277 (49.7%)	1279 (49.8%)	193 (7.5%)	130 (5.1%)
私立3000人～10000人 地方	1134 (3.81)	718 (63.3%)	381 (33.6%)	411 (36.2%)	276 (24.3%)	594 (52.4%)	575 (50.7%)	78 (6.9%)	54 (4.8%)
私立3000人未満 都市部	1808 (3.64)	1168 (64.6%)	663 (36.7%)	670 (37.1%)	444 (24.6%)	779 (43.1%)	769 (42.5%)	111 (6.1%)	93 (5.1%)
私立3000人未満 地方	2135 (3.64)	1325 (62.1%)	786 (36.8%)	757 (35.5%)	456 (21.4%)	1026 (48.1%)	1014 (47.5%)	154 (7.2%)	93 (4.4%)

	全体	上記以外の 講演会、シン ポジウム等	授業の運営・ 改善に学生 が参加する 取組	新任教員を 対象とした研 修会等	ティーチング ポートフォリ オ	その他	特にない
全体	18426 (3.38)	9241 (50.2%)	2825 (15.3%)	4789 (26.0%)	1185 (6.4%)	459 (2.5%)	1596 (8.7%)
旧帝大	1670 (2.29)	630 (37.7%)	160 (9.6%)	527 (31.6%)	50 (3.0%)	45 (2.7%)	325 (19.5%)
旧六医大	797 (3.22)	354 (44.4%)	99 (12.4%)	297 (37.3%)	37 (4.6%)	25 (3.1%)	68 (8.5%)
その他国立大	4471 (3.30)	2127 (47.6%)	730 (16.3%)	1318 (29.5%)	339 (7.6%)	131 (2.9%)	440 (9.8%)
公立 都市圏	531 (2.70)	230 (43.3%)	61 (11.5%)	90 (16.9%)	23 (4.3%)	12 (2.3%)	74 (13.9%)
公立 地方	970 (3.48)	492 (50.7%)	150 (15.5%)	212 (21.9%)	78 (8.0%)	18 (1.9%)	68 (7.0%)
私立10000人以上	2342 (3.44)	1197 (51.1%)	383 (16.4%)	732 (31.3%)	141 (6.0%)	53 (2.3%)	205 (8.8%)
私立3000人～10000人 都市圏	2568 (3.76)	1419 (55.3%)	450 (17.5%)	670 (26.1%)	139 (5.4%)	66 (2.6%)	140 (5.5%)
私立3000人～10000人 地方	1134 (3.81)	637 (56.2%)	190 (16.8%)	245 (21.6%)	84 (7.4%)	30 (2.6%)	53 (4.7%)
私立3000人未満 都市部	1808 (3.64)	997 (55.1%)	286 (15.8%)	321 (17.8%)	148 (8.2%)	43 (2.4%)	88 (4.9%)
私立3000人未満 地方	2135 (3.64)	1158 (54.2%)	316 (14.8%)	377 (17.7%)	146 (6.8%)	36 (1.7%)	135 (6.3%)

(2)効果のあった取組

参加したFD活動の効果についてみると、「教員相互の授業参観」で効果がみられた割合が27.8%、「上記以外の講演会、シンポジウム等」で効果がみられた割合が21.7%であった。

図表 3-20 参加された取組のうち、特に効果があった、役に立ったと思うものを選んでください。(n=19,560)



設置者別にみると、私立では「教員相互の授業参観（30.9%）」で効果がみられた割合が、他と比べて高い。

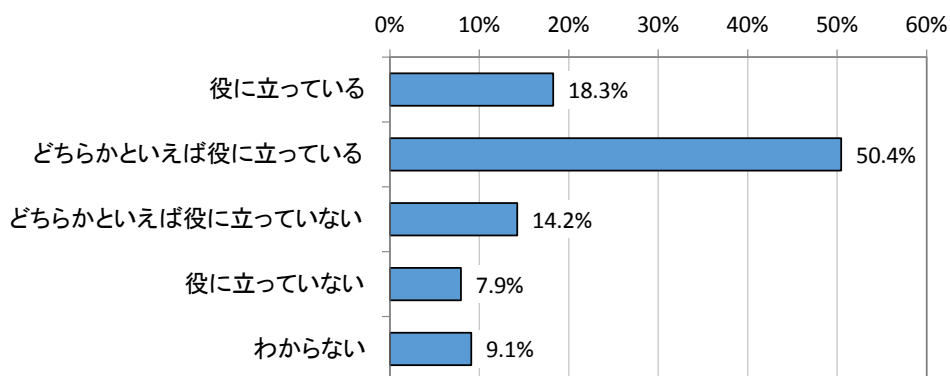
	全体	教員相互の 授業参観	教員相互に よる授業評価	自大学の学生 や自大学志 願者に対する 理解を深める ためのワーク ショップや研 修会	新規の学士 課程教育プ ログラム等 の開発を目的 としたワーク ショップまた は授業検討 会	アクティブ・ ラーニングを 推進するた めのワーク ショップまた は授業検討 会	教育方法改 善(アクティ ブ・ラーニン グ以外)のた めのワーク ショップまた は授業検討 会	大学教員を 目指す大学 院生を対象 とした授業 の実施方法 や教材等の 作成に関す る教育(ブレ FD)	授業コンサ ルテーション
全体	19560 (1.54)	5440 (27.8%)	1998 (10.2%)	2145 (11.0%)	1560 (8.0%)	3320 (17.0%)	3708 (19.0%)	423 (2.2%)	258 (1.3%)
国立	6940 (1.42)	1631 (23.5%)	534 (7.7%)	608 (8.8%)	482 (6.9%)	906 (13.1%)	1166 (16.8%)	150 (2.2%)	107 (1.5%)
公立	1500 (1.47)	376 (25.1%)	139 (9.3%)	136 (9.1%)	111 (7.4%)	267 (17.8%)	282 (18.8%)	31 (2.1%)	15 (1.0%)
私立	11120 (1.62)	3433 (30.9%)	1325 (11.9%)	1401 (12.6%)	967 (8.7%)	2147 (19.3%)	2260 (20.3%)	242 (2.2%)	136 (1.2%)

	全体	上記以外の 講演会、シ ンポジウム 等	授業の運営・ 改善に学生 が参加する 取組	新任教員を 対象とした研 修会等	ティーチング ポートフォリ オ	その他	特にな い
全体	19560 (1.54)	4250 (21.7%)	1054 (5.4%)	1451 (7.4%)	332 (1.7%)	438 (2.2%)	3706 (18.9%)
国立	6940 (1.42)	1285 (18.5%)	332 (4.8%)	645 (9.3%)	114 (1.6%)	190 (2.7%)	1694 (24.4%)
公立	1500 (1.47)	326 (21.7%)	80 (5.3%)	85 (5.7%)	30 (2.0%)	29 (1.9%)	305 (20.3%)
私立	11120 (1.62)	2639 (23.7%)	642 (5.8%)	721 (6.5%)	188 (1.7%)	219 (2.0%)	1707 (15.4%)

3-4-2 FD 活動参加による教育能力の向上

FD 活動参加による教育能力の向上についてみると、「役に立っている」割合が 18.3%、「どちらかといえば役に立っている」割合が 50.4%であった。

図表 3-21 FD 活動への参加は、あなた自身の大学教員としての教育能力の向上にたいして、どの程度役にたっていますか。(n=17,925)



	全体	役に立っている	どちらかとい えば役に 立っている	どちらかとい えば役に 立っていない	役に立って いない	わからない
全体	17925 (100.0%)	3274 (18.3%)	9042 (50.4%)	2554 (14.2%)	1425 (7.9%)	1630 (9.1%)
国立	6107 (100.0%)	917 (15.0%)	2998 (49.1%)	961 (15.7%)	587 (9.6%)	644 (10.5%)
公立	1358 (100.0%)	246 (18.1%)	683 (50.3%)	195 (14.4%)	113 (8.3%)	121 (8.9%)
私立	10460 (100.0%)	2111 (20.2%)	5361 (51.3%)	1398 (13.4%)	725 (6.9%)	865 (8.3%)

	全体	役に立っている	どちらかとい えば役に 立っている	どちらかとい えば役に 立っていない	役に立って いない	わからない
全体	17925 (100.0%)	3274 (18.3%)	9042 (50.4%)	2554 (14.2%)	1425 (7.9%)	1630 (9.1%)
教授	8120 (100.0%)	1610 (19.8%)	4284 (52.8%)	1099 (13.5%)	592 (7.3%)	535 (6.6%)
准教授	5174 (100.0%)	900 (17.4%)	2528 (48.9%)	818 (15.8%)	473 (9.1%)	455 (8.8%)
講師	2149 (100.0%)	395 (18.4%)	1061 (49.4%)	285 (13.3%)	162 (7.5%)	246 (11.4%)
助教	2358 (100.0%)	350 (14.8%)	1102 (46.7%)	340 (14.4%)	192 (8.1%)	374 (15.9%)
その他	124 (100.0%)	19 (15.3%)	67 (54.0%)	12 (9.7%)	6 (4.8%)	20 (16.1%)

分野別にみると、保健、家政、教育、芸術において「役に立っている」という割合が2割を超えている。

	全体	役に立っている	どちらかといえば役に立っている	どちらかといえば役に立っていない	役に立っていない	わからない
全体	17925 (100.0%)	3274 (18.3%)	9042 (50.4%)	2554 (14.2%)	1425 (7.9%)	1630 (9.1%)
人文科学	2270 (100.0%)	401 (17.7%)	1158 (51.0%)	329 (14.5%)	191 (8.4%)	191 (8.4%)
社会科学	2652 (100.0%)	473 (17.8%)	1266 (47.7%)	405 (15.3%)	289 (10.9%)	219 (8.3%)
理学	1842 (100.0%)	237 (12.9%)	836 (45.4%)	323 (17.5%)	230 (12.5%)	216 (11.7%)
工学	3025 (100.0%)	553 (18.3%)	1559 (51.5%)	426 (14.1%)	199 (6.6%)	288 (9.5%)
農学	1035 (100.0%)	168 (16.2%)	506 (48.9%)	168 (16.2%)	103 (10.0%)	90 (8.7%)
保健	4642 (100.0%)	950 (20.5%)	2424 (52.2%)	578 (12.5%)	269 (5.8%)	421 (9.1%)
商船	5 (100.0%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	2 (40.0%)
家政	332 (100.0%)	67 (20.2%)	175 (52.7%)	36 (10.8%)	16 (4.8%)	38 (11.4%)
教育	1444 (100.0%)	295 (20.4%)	781 (54.1%)	190 (13.2%)	81 (5.6%)	97 (6.7%)
芸術	506 (100.0%)	101 (20.0%)	252 (49.8%)	71 (14.0%)	34 (6.7%)	48 (9.5%)
その他	172 (100.0%)	28 (16.3%)	84 (48.8%)	28 (16.3%)	12 (7.0%)	20 (11.6%)

3-5 業務状況

3-5-1 業務時間

(1) 実際の業務時間

1週間の業務時間についてみると、業務の全体内容別では「学士課程教育（授業時間、準備含む）（12.6時間）」の業務時間が最も長く、次いで「研究（12.2時間）」の業務時間が長い。対して業務時間が最も短いのは「社会貢献（1.8時間）」であった。

設置者別にみると、私立では「学士課程教育（授業時間、準備含む）（15.3時間）」の業務時間が最も長く、国立では「研究（14.8時間）」の業務時間が長い。

職階別にみると、助教では「研究（16.2時間）」の業務時間が最も長く、講師では「学士課程教育（授業時間、準備含む）（14.7時間）」の業務時間が長い。

分野別では、家政では「学士課程教育（授業時間、準備含む）（19.5時間）」の業務時間が最も長く、理学では「研究（17.5時間）」、保健では「診療・臨床（10.7時間）」の業務時間が長い。

図表 3-22 あなたの現在の平均的な1週間(授業開講期間)の業務時間をご回答ください(大学の勤務時間外に行っている業務も含めてお答えください)。(単位:時間) (n=19,560)

											時間
	研究	学士課程教育(研究室での学生の指導時間等)	学士課程教育(授業時間、準備含む)	大学院教育(研究室での学生の指導時間等)	大学院教育(授業時間、準備含む)	診療・臨床	社会貢献	大学の管理・運営	学外業務	その他	合計
全体	12.2	6.2	12.6	3.5	2.3	3.1	1.8	5.9	2.6	1.9	52.1
国立	14.8	5.7	8.6	5.7	3.3	3.3	1.9	6.0	2.5	1.7	53.6
公立	13.1	6.3	11.2	3.7	2.5	3.7	2.2	5.9	2.6	1.9	53.0
私立	10.4	6.5	15.3	2.0	1.7	2.9	1.7	5.8	2.6	2.1	51.1
教授	11.2	6.0	12.4	3.7	3.0	1.7	2.2	7.6	2.7	1.7	52.3
准教授	12.2	6.7	13.5	3.6	2.5	2.0	1.8	5.3	2.6	2.0	52.1
講師	11.1	5.8	14.7	1.9	1.3	6.0	1.6	4.2	2.6	2.2	51.3
助教	16.2	6.3	9.9	3.7	0.9	7.1	1.1	3.5	2.2	2.1	52.9
人文科学	12.0	4.8	16.6	1.6	2.6	0.6	1.6	6.8	2.3	1.8	50.7
社会科学	12.6	5.3	15.3	1.6	2.5	0.4	2.2	6.6	2.7	1.8	50.9
理学	17.5	6.8	10.6	5.6	2.4	0.2	1.0	5.8	1.6	1.6	53.1
工学	12.7	8.1	10.9	6.1	2.8	0.1	1.9	6.3	2.6	1.8	53.4
農学	13.3	9.0	9.6	6.1	2.9	0.9	2.1	7.1	2.2	1.8	55.1
保健	10.7	5.2	10.4	3.0	1.7	10.7	1.7	4.7	2.9	2.1	53.1
商船	12.0	7.4	9.6	6.3	4.2	0.0	2.0	6.6	4.1	0.3	52.5
家政	8.4	7.5	19.5	1.8	1.4	0.5	1.7	5.0	2.0	2.2	50.0
教育	8.8	5.7	15.3	1.5	2.1	1.0	2.6	5.6	2.7	2.6	47.9
芸術	11.5	6.3	14.8	2.0	2.4	0.2	2.5	6.2	3.8	1.8	51.5
その他	9.7	6.8	14.8	2.1	1.7	0.5	2.6	6.8	3.6	2.8	51.3

											%
	研究	学士課程教育(研究室での学生の指導時間等)	学士課程教育(授業時間、準備含む)	大学院教育(研究室での学生の指導時間等)	大学院教育(授業時間、準備含む)	診療・臨床	社会貢献	大学の管理・運営	学外業務	その他	
全体	23.4	11.9	24.2	6.6	4.4	6.0	3.5	11.3	4.9	3.7	
国立	27.7	10.7	16.0	10.7	6.1	6.2	3.6	11.2	4.7	3.2	
公立	24.8	11.8	21.1	7.0	4.7	6.9	4.1	11.1	4.8	3.7	
私立	20.4	12.7	30.0	3.9	3.3	5.7	3.4	11.4	5.1	4.0	
教授	21.4	11.4	23.8	7.1	5.7	3.3	4.2	14.6	5.2	3.3	
准教授	23.4	12.9	26.0	6.9	4.8	3.7	3.4	10.1	4.9	3.9	
講師	21.6	11.2	28.6	3.8	2.5	11.7	3.1	8.1	5.1	4.2	
助教	30.6	11.8	18.7	7.0	1.7	13.4	2.0	6.6	4.2	4.0	
人文科学	23.7	9.4	32.8	3.2	5.1	1.1	3.2	13.5	4.6	3.5	
社会科学	24.7	10.4	30.1	3.2	4.9	0.7	4.3	12.9	5.3	3.5	
理学	33.0	12.8	19.9	10.5	4.6	0.4	1.8	10.9	3.1	3.0	
工学	23.9	15.1	20.4	11.5	5.3	0.1	3.6	11.9	4.9	3.4	
農学	24.1	16.4	17.4	11.1	5.3	1.6	3.7	12.9	4.0	3.2	
保健	20.1	9.9	19.5	5.6	3.2	20.2	3.2	8.8	5.5	4.0	
商船	22.9	14.0	18.3	12.0	8.0	0.0	3.8	12.6	7.9	0.5	
家政	16.9	14.9	39.1	3.5	2.7	0.9	3.4	10.1	4.1	4.5	
教育	18.4	12.0	31.8	3.2	4.4	2.1	5.4	11.7	5.7	5.4	
芸術	22.3	12.3	28.7	3.9	4.7	0.3	4.8	12.1	7.5	3.4	
その他	18.9	13.2	28.7	4.1	3.4	0.9	5.1	13.2	7.0	5.5	

(2)理想の業務時間の割合

理想の業務時間についてみると、業務の全体内容別では「研究 (32.4%)」の業務時間割合が最も高く、対して最も低いのが「学外業務 (3.8%)」であった。

図表 3-23 あなたが理想とする1週間(授業開講期間)の業務時間の割合をご回答ください。

(単位%。合計100%) (n=19,560)

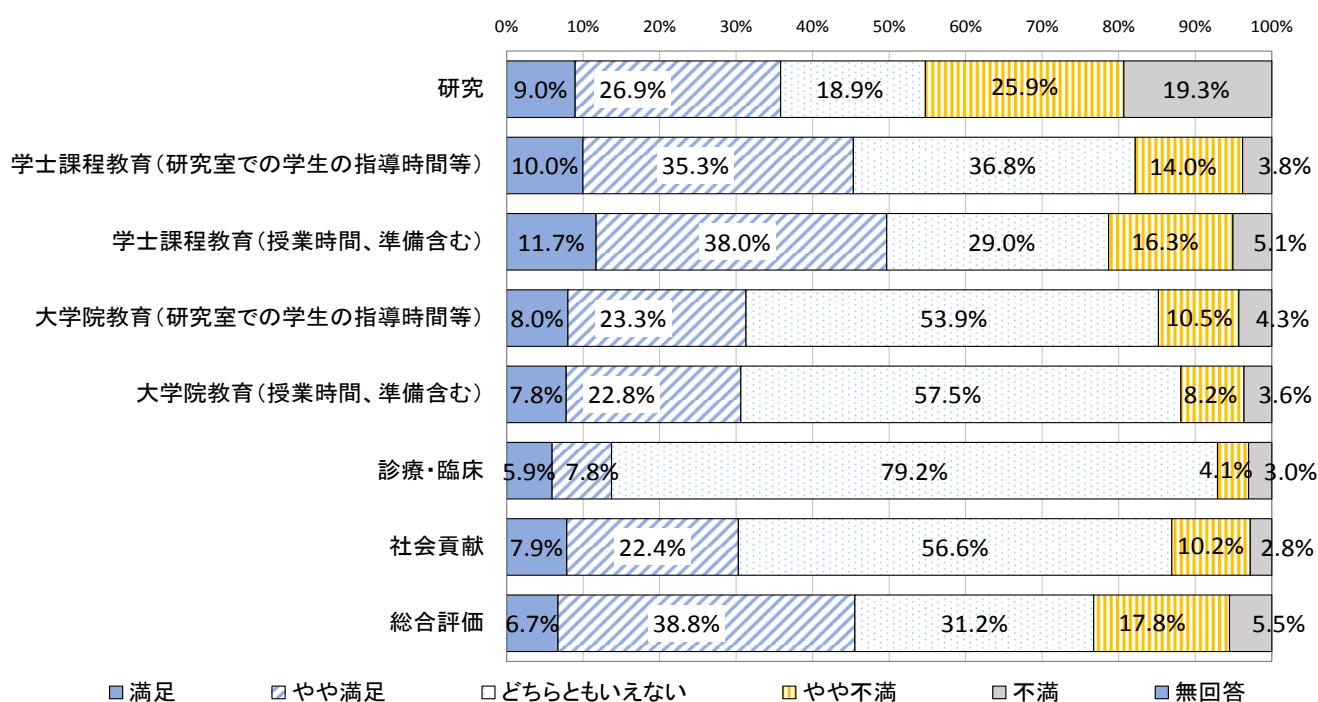
	研究	学士課程教育(研究室での学生の指導時間等)	学士課程教育(授業時間、準備含む)	大学院教育(研究室での学生の指導時間等)	大学院教育(授業時間、準備含む)	診療・臨床	社会貢献	大学の管理・運営	学外業務	その他	%
全体	32.4	12.5	18.7	8.2	5.7	4.8	4.9	7.1	3.8	1.9	
国立	36.6	10.8	12.5	11.9	7.3	4.9	4.5	6.6	3.4	1.6	
公立	32.8	11.9	16.3	8.8	6.0	5.6	5.5	7.4	3.7	1.9	
私立	29.7	13.7	23.0	5.9	4.6	4.6	5.0	7.3	4.1	2.1	
教授	30.2	12.3	18.8	9.0	6.9	2.9	5.4	8.6	4.1	1.8	
准教授	33.8	13.0	18.9	8.5	5.8	3.1	4.7	6.5	3.7	1.9	
講師	31.2	12.6	21.5	5.3	3.7	9.0	4.8	5.8	3.8	2.1	
助教	37.2	12.2	15.7	7.9	3.5	10.3	3.6	4.7	3.1	1.9	
人文科学	33.5	11.6	24.3	5.1	6.2	1.2	4.8	8.0	3.7	1.7	
社会科学	35.1	11.7	22.1	5.1	5.7	0.9	5.8	7.8	4.2	1.7	
理学	42.4	11.9	14.4	12.0	6.1	0.3	2.8	6.2	2.4	1.6	
工学	33.1	14.5	15.0	13.1	6.8	0.1	4.5	7.1	4.0	1.8	
農学	33.5	15.0	13.0	13.2	6.7	1.3	4.7	7.5	3.2	1.8	
保健	27.7	10.9	16.7	7.2	4.6	16.0	4.7	6.3	3.9	2.0	
商船	31.9	12.4	14.6	11.9	7.8	0.0	6.3	6.9	5.3	3.1	
家政	27.4	16.0	29.1	5.1	3.6	1.0	5.1	6.5	3.9	2.4	
教育	27.7	13.8	25.0	4.8	5.0	1.8	7.0	7.7	4.4	2.7	
芸術	30.2	14.3	23.3	5.4	6.0	0.4	5.9	7.5	5.4	1.7	
その他	27.0	14.1	23.3	6.9	4.9	1.1	6.0	7.9	5.2	3.7	

3-5-2 満足度

業務に対する満足度についてみると、「学士課程教育（授業時間、準備含む）」で満足している割合が11.7%と高い。次いで、「学士課程教育（研究室での学生の指導時間等）（10.0%）」「研究（9.0%）」で満足している割合が高い。

図表 3-24 あなたは、現在の各業務に対して、どの程度の満足感を感じていますか。

(n=19,560)



設置者別にみると、国立では「研究（43.1%）」で満足（満足＋やや満足）している割合が、他と比べて高い。

（満足＋やや満足の割合）

	全体	研究	学士課程教育(研究室での学生の指導時間等)	学士課程教育(授業時間、準備含む)	大学院教育(研究室での学生の指導時間等)	大学院教育(授業時間、準備含む)	診療・臨床	社会貢献	総合評価
全体	19560 (100.0%)	7008 (35.8%)	8866 (45.3%)	9716 (49.7%)	6122 (31.3%)	5989 (30.6%)	2685 (13.7%)	5928 (30.3%)	8907 (45.5%)
国立	6940 (100.0%)	2993 (43.1%)	3321 (47.9%)	3369 (48.5%)	3170 (45.7%)	2895 (41.7%)	949 (13.7%)	2152 (31.0%)	3363 (48.5%)
公立	1500 (100.0%)	576 (38.4%)	726 (48.4%)	788 (52.5%)	530 (35.3%)	518 (34.5%)	230 (15.3%)	541 (36.1%)	728 (48.5%)
私立	11120 (100.0%)	3439 (30.9%)	4819 (43.3%)	5559 (50.0%)	2422 (21.8%)	2576 (23.2%)	1506 (13.5%)	3235 (29.1%)	4816 (43.3%)

職階別にみると、教授はいずれの項目でも満足している割合が高い。

（満足＋やや満足の割合）

	全体	研究	学士課程教育(研究室での学生の指導時間等)	学士課程教育(授業時間、準備含む)	大学院教育(研究室での学生の指導時間等)	大学院教育(授業時間、準備含む)	診療・臨床	社会貢献	総合評価
全体	19560 (100.0%)	7008 (35.8%)	8866 (45.3%)	9716 (49.7%)	6122 (31.3%)	5989 (30.6%)	2685 (13.7%)	5928 (30.3%)	8907 (45.5%)
教授	8536 (100.0%)	3240 (38.0%)	4149 (48.6%)	4767 (55.8%)	3150 (36.9%)	3278 (38.4%)	1093 (12.8%)	3107 (36.4%)	4378 (51.3%)
准教授	5614 (100.0%)	1934 (34.4%)	2625 (46.8%)	2706 (48.2%)	1743 (31.0%)	1737 (30.9%)	607 (10.8%)	1590 (28.3%)	2450 (43.6%)
講師	2371 (100.0%)	655 (27.6%)	914 (38.5%)	1021 (43.1%)	406 (17.1%)	412 (17.4%)	398 (16.8%)	572 (24.1%)	877 (37.0%)
助教	2894 (100.0%)	1113 (38.5%)	1116 (38.6%)	1150 (39.7%)	798 (27.6%)	538 (18.6%)	559 (19.3%)	613 (21.2%)	1124 (38.8%)
その他	145 (100.0%)	66 (45.5%)	62 (42.8%)	72 (49.7%)	25 (17.2%)	24 (16.6%)	28 (19.3%)	46 (31.7%)	78 (53.8%)

分野別にみると、工学、教育、芸術では「学士課程教育（研究室での学生の指導時間等）」で満足している割合が5割を超え高い。

(満足+やや満足の割合)

	全体	研究	学士課程教育(研究室での学生の指導時間等)	学士課程教育(授業時間、準備含む)	大学院教育(研究室での学生の指導時間等)	大学院教育(授業時間、準備含む)	診療・臨床	社会貢献	総合評価
全体	19560 (100.0%)	7008 (35.8%)	8866 (45.3%)	9716 (49.7%)	6122 (31.3%)	5989 (30.6%)	2685 (13.7%)	5928 (30.3%)	8907 (45.5%)
人文科学	2400 (100.0%)	864 (36.0%)	1182 (49.3%)	1379 (57.5%)	685 (28.5%)	753 (31.4%)	221 (9.2%)	701 (29.2%)	1168 (48.7%)
社会科学	2832 (100.0%)	959 (33.9%)	1352 (47.7%)	1484 (52.4%)	741 (26.2%)	844 (29.8%)	219 (7.7%)	928 (32.8%)	1304 (46.0%)
理学	2145 (100.0%)	952 (44.4%)	970 (45.2%)	1058 (49.3%)	860 (40.1%)	780 (36.4%)	146 (6.8%)	453 (21.1%)	990 (46.2%)
工学	3323 (100.0%)	1401 (42.2%)	1714 (51.6%)	1676 (50.4%)	1482 (44.6%)	1357 (40.8%)	202 (6.1%)	959 (28.9%)	1610 (48.5%)
農学	1139 (100.0%)	399 (35.0%)	512 (45.0%)	505 (44.3%)	405 (35.6%)	395 (34.7%)	85 (7.5%)	363 (31.9%)	487 (42.8%)
保健	5157 (100.0%)	1619 (31.4%)	1832 (35.5%)	2186 (42.4%)	1301 (25.2%)	1183 (22.9%)	1571 (30.5%)	1502 (29.1%)	2131 (41.3%)
商船	8 (100.0%)	1 (12.5%)	4 (50.0%)	4 (50.0%)	3 (37.5%)	2 (25.0%)	0 (0.0%)	3 (37.5%)	4 (50.0%)
家政	346 (100.0%)	86 (24.9%)	152 (43.9%)	157 (45.4%)	66 (19.1%)	69 (19.9%)	26 (7.5%)	110 (31.8%)	133 (38.4%)
教育	1494 (100.0%)	475 (31.8%)	768 (51.4%)	855 (57.2%)	356 (23.8%)	375 (25.1%)	159 (10.6%)	651 (43.6%)	739 (49.5%)
芸術	532 (100.0%)	195 (36.7%)	296 (55.6%)	305 (57.3%)	176 (33.1%)	183 (34.4%)	42 (7.9%)	190 (35.7%)	251 (47.2%)
その他	184 (100.0%)	57 (31.0%)	84 (45.7%)	107 (58.2%)	47 (25.5%)	48 (26.1%)	14 (7.6%)	68 (37.0%)	90 (48.9%)

大学種別にみると、旧帝大では「研究（49.4%）」「大学院教育（研究室での学生の指導時間等）（53.2%）」「大学院教育（授業時間、準備含む）（44.0%）」で満足している割合が、他と比べて高い。

私立 3000 人未満・地方では「学士課程教育（研究室での学生の指導時間等）（41.7%）」で満足している割合が、他と比べて低い。

(満足+やや満足の割合)

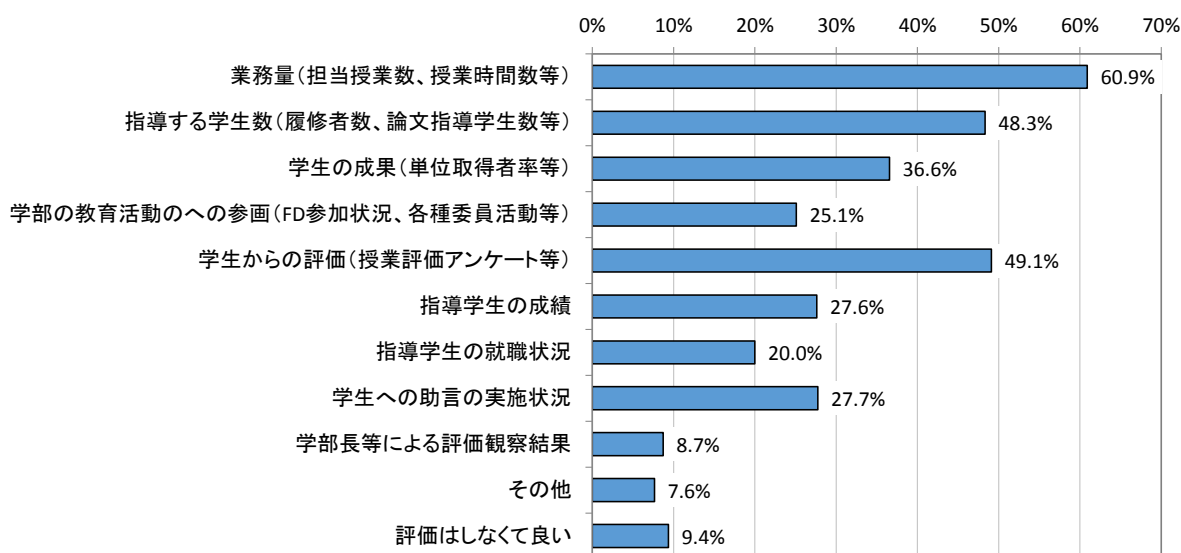
	全体	研究	学士課程教育(研究室での学生の指導時間等)	学士課程教育(授業時間、準備含む)	大学院教育(研究室での学生の指導時間等)	大学院教育(授業時間、準備含む)	診療・臨床	社会貢献	総合評価
全体	18426 (100.0%)	6694 (36.3%)	8419 (45.7%)	9165 (49.7%)	5941 (32.2%)	5797 (31.5%)	2491 (13.5%)	5590 (30.3%)	8414 (45.7%)
旧帝大	1670 (100.0%)	825 (49.4%)	787 (47.1%)	809 (48.4%)	889 (53.2%)	735 (44.0%)	210 (12.6%)	423 (25.3%)	841 (50.4%)
旧六医大	797 (100.0%)	343 (43.0%)	369 (46.3%)	343 (43.0%)	346 (43.4%)	316 (39.6%)	126 (15.8%)	244 (30.6%)	361 (45.3%)
その他国立大	4471 (100.0%)	1825 (40.8%)	2165 (48.4%)	2216 (49.6%)	1935 (43.3%)	1844 (41.2%)	613 (13.7%)	1484 (33.2%)	2161 (48.3%)
公立 都市圏	531 (100.0%)	216 (40.7%)	248 (46.7%)	281 (52.9%)	221 (41.6%)	200 (37.7%)	99 (18.6%)	175 (33.0%)	273 (51.4%)
公立 地方	970 (100.0%)	360 (37.1%)	478 (49.3%)	508 (52.4%)	310 (32.0%)	319 (32.9%)	131 (13.5%)	366 (37.7%)	456 (47.0%)
私立10000人以上	2342 (100.0%)	854 (36.5%)	1054 (45.0%)	1189 (50.8%)	738 (31.5%)	772 (33.0%)	231 (9.9%)	634 (27.1%)	1077 (46.0%)
私立3000人～10000人 都市圏	2568 (100.0%)	874 (34.0%)	1153 (44.9%)	1349 (52.5%)	616 (24.0%)	643 (25.0%)	302 (11.8%)	725 (28.2%)	1198 (46.7%)
私立3000人～10000人 地方	1134 (100.0%)	338 (29.8%)	497 (43.8%)	604 (53.3%)	233 (20.5%)	246 (21.7%)	145 (12.8%)	347 (30.6%)	502 (44.3%)
私立3000人未満 都市部	1808 (100.0%)	472 (26.1%)	778 (43.0%)	904 (50.0%)	304 (16.8%)	336 (18.6%)	278 (15.4%)	525 (29.0%)	720 (39.8%)
私立3000人未満 地方	2135 (100.0%)	587 (27.5%)	890 (41.7%)	962 (45.1%)	349 (16.3%)	386 (18.1%)	356 (16.7%)	667 (31.2%)	825 (38.6%)

3-6 教育活動に関する評価

3-6-1 評価を望む教育活動

評価されるのが望ましい教育活動についてみると、「業務量（担当授業数、授業時間数等）」が60.9%、「学生からの評価（授業評価アンケート等）」が49.1%、「指導する学生数（履修者数、論文指導学生数等）」が48.3%であった。

図表 3-25 あなたは、教育活動に対して、どのような項目で評価されることが望ましいですか。(n=19,560)



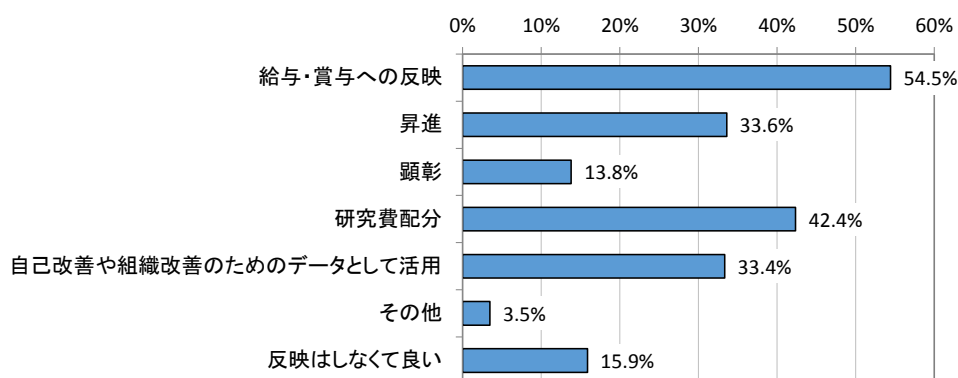
	全体	業務量 (担当授業数、授業時間数等)	指導する学生数 (履修者数、論文指導学生数等)	学生の成果 (単位取得者率等)	学部の教育活動への参画 (FD参加状況、各種委員活動等)	学生からの評価 (授業評価アンケート等)	指導学生の成績	指導学生の就職状況	学生への助言の実施状況
全体	19560 (3.21)	11915 (60.9%)	9455 (48.3%)	7150 (36.6%)	4910 (25.1%)	9605 (49.1%)	5404 (27.6%)	3909 (20.0%)	5427 (27.7%)
国立	6940 (2.99)	4286 (61.8%)	3571 (51.5%)	2233 (32.2%)	1379 (19.9%)	3065 (44.2%)	1709 (24.6%)	1158 (16.7%)	1551 (22.3%)
公立	1500 (3.13)	883 (58.9%)	728 (48.5%)	520 (34.7%)	373 (24.9%)	764 (50.9%)	376 (25.1%)	256 (17.1%)	392 (26.1%)
私立	11120 (3.36)	6746 (60.7%)	5156 (46.4%)	4397 (39.5%)	3158 (28.4%)	5776 (51.9%)	3319 (29.8%)	2495 (22.4%)	3484 (31.3%)

	全体	学部長等による評価観察結果	その他	評価はしなくて良い
全体	19560 (3.21)	1705 (8.7%)	1493 (7.6%)	1834 (9.4%)
国立	6940 (2.99)	498 (7.2%)	561 (8.1%)	737 (10.6%)
公立	1500 (3.13)	139 (9.3%)	111 (7.4%)	155 (10.3%)
私立	11120 (3.36)	1068 (9.6%)	821 (7.4%)	942 (8.5%)

3-6-2 教育活動の評価の反映方法

望ましい教育活動の評価の反映方法についてみると、「給与・賞与への反映」が54.5%、「研究費配分」が42.4%であった。

図表 3-26 あなたは、学士課程の教育活動の評価に対して、どのような形で反映されることが望ましいですか。(n=19,560)



	全体	給与・賞与への反映	昇進	顕彰	研究費配分	自己改善や組織改善のためのデータとして活用	その他	反映はしなくて良い
全体	19560 (1.97)	10651 (54.5%)	6573 (33.6%)	2703 (13.8%)	8287 (42.4%)	6524 (33.4%)	678 (3.5%)	3106 (15.9%)
国立	6940 (1.95)	3849 (55.5%)	2230 (32.1%)	990 (14.3%)	3130 (45.1%)	1945 (28.0%)	234 (3.4%)	1179 (17.0%)
公立	1500 (1.92)	741 (49.4%)	490 (32.7%)	204 (13.6%)	614 (40.9%)	537 (35.8%)	43 (2.9%)	252 (16.8%)
私立	11120 (1.99)	6061 (54.5%)	3853 (34.6%)	1509 (13.6%)	4543 (40.9%)	4042 (36.3%)	401 (3.6%)	1675 (15.1%)

	全体	給与・賞与への反映	昇進	顕彰	研究費配分	自己改善や組織改善のためのデータとして活用	その他	反映はしなくて良い
全体	19560 (1.97)	10651 (54.5%)	6573 (33.6%)	2703 (13.8%)	8287 (42.4%)	6524 (33.4%)	678 (3.5%)	3106 (15.9%)
教授	8536 (1.84)	4139 (48.5%)	1900 (22.3%)	1278 (15.0%)	3525 (41.3%)	3105 (36.4%)	268 (3.1%)	1519 (17.8%)
准教授	5614 (2.04)	3133 (55.8%)	2187 (39.0%)	780 (13.9%)	2422 (43.1%)	1800 (32.1%)	236 (4.2%)	871 (15.5%)
講師	2371 (2.11)	1445 (60.9%)	1106 (46.6%)	281 (11.9%)	999 (42.1%)	744 (31.4%)	80 (3.4%)	337 (14.2%)
助教	2894 (2.11)	1856 (64.1%)	1334 (46.1%)	348 (12.0%)	1288 (44.5%)	829 (28.6%)	87 (3.0%)	352 (12.2%)
その他	145 (1.88)	78 (53.8%)	46 (31.7%)	16 (11.0%)	53 (36.6%)	46 (31.7%)	7 (4.8%)	27 (18.6%)

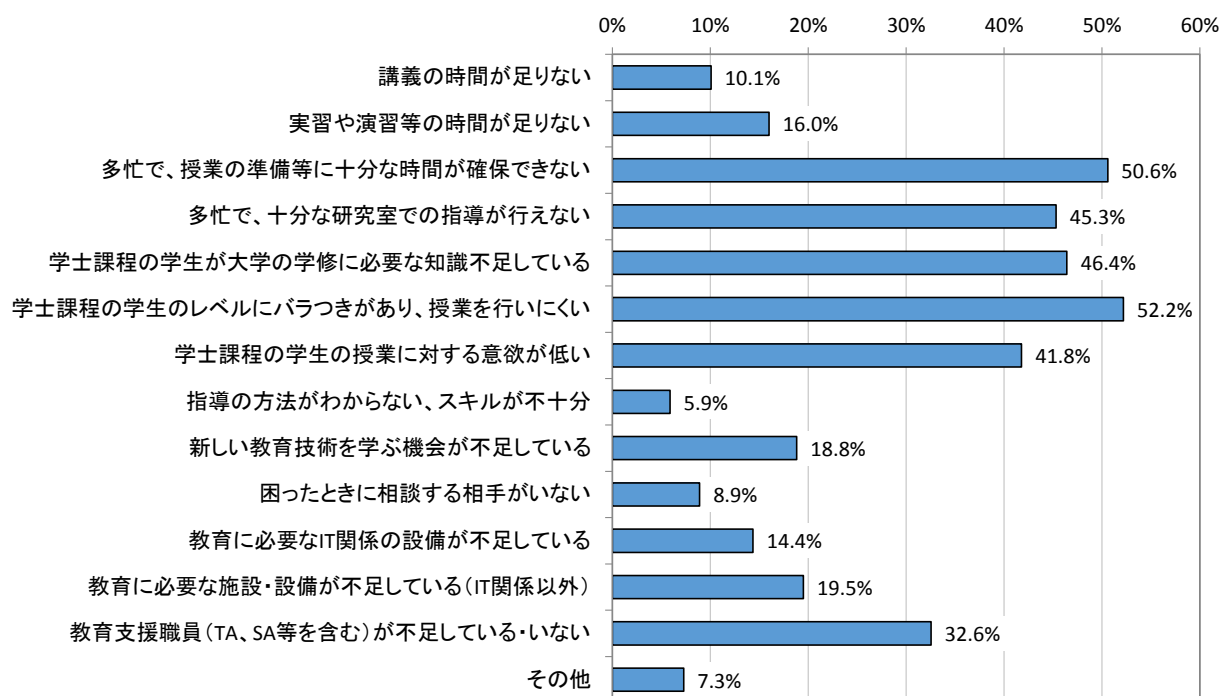
3-7 教育活動に関する課題

3-7-1 学士課程教育における課題

学士課程教育を行う上での課題についてみると、「学士課程の学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いにくい」という割合が 52.2%、「多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない」という割合が 50.6%であった。

図表 3-27 あなたが、大学で学士課程教育を行う上での課題についてお答えください。

(n=19,560)



設置者別にみると、私立では「学士課程の学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いに
 くい (63.5%)」「学士課程の学生が大学の学修に必要な知識不足している (56.0%)」を課題
 とする割合が、他と比べて高い。

	全体	講義の時間 が足りない	実習や演習 等の時間が 足りない	多忙で、授業 の準備等に 十分な時間 が確保でき ない	多忙で、十分 な研究室で の指導が行 えない	学士課程の 学生が大学 の学修に必 要な知識不 足している	学士課程の 学生のレベ ルにバラつき があり、授業 を行いにくい	学士課程の 学生の授業 に対する意 欲が低い	指導の方法 がわからない、スキルが 不十分
全体	19560 (3.70)	1973 (10.1%)	3131 (16.0%)	9895 (50.6%)	8862 (45.3%)	9079 (46.4%)	10208 (52.2%)	8174 (41.8%)	1154 (5.9%)
国立	6940 (3.27)	687 (9.9%)	1066 (15.4%)	3543 (51.1%)	3345 (48.2%)	2369 (34.1%)	2634 (38.0%)	2453 (35.3%)	389 (5.6%)
公立	1500 (3.40)	153 (10.2%)	242 (16.1%)	758 (50.5%)	644 (42.9%)	487 (32.5%)	516 (34.4%)	501 (33.4%)	126 (8.4%)
私立	11120 (4.00)	1133 (10.2%)	1823 (16.4%)	5594 (50.3%)	4873 (43.8%)	6223 (56.0%)	7058 (63.5%)	5220 (46.9%)	639 (5.7%)

	全体	新しい教育 技術を学ぶ 機会が不足 している	困ったときに 相談する相 手がいない	教育に必要な IT関係の 設備が不足 している	教育に必要な 施設・設備 が不足してい る(IT関係以 外)	教育支援職 員(TA、SA 等を含む)が 不足してい る・いない	その他
全体	19560 (3.70)	3682 (18.8%)	1743 (8.9%)	2809 (14.4%)	3817 (19.5%)	6367 (32.6%)	1424 (7.3%)
国立	6940 (3.27)	1112 (16.0%)	594 (8.6%)	749 (10.8%)	1161 (16.7%)	1980 (28.5%)	618 (8.9%)
公立	1500 (3.40)	333 (22.2%)	162 (10.8%)	243 (16.2%)	300 (20.0%)	515 (34.3%)	116 (7.7%)
私立	11120 (4.00)	2237 (20.1%)	987 (8.9%)	1817 (16.3%)	2356 (21.2%)	3872 (34.8%)	690 (6.2%)

職階別にみると、助教は「指導の方法がわからない、スキルが不十分（17.2%）」「教育支援職員（TA、SA 等を含む）が不足している・いない（24.8%）」を課題とする割合が、他と比べて高い。

	全体	講義の時間が足りない	実習や演習等の時間が足りない	多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない	多忙で、十分な研究室での指導が行えない	学士課程の学生が大学の学修に必要な知識不足している	学士課程の学生のレベルにバラつきがあり、授業を行っていく	学士課程の学生の授業に対する意欲が低い	指導の方法がわからない、スキルが不十分
全体	19560 (3.70)	1973 (10.1%)	3131 (16.0%)	9895 (50.6%)	8862 (45.3%)	9079 (46.4%)	10208 (52.2%)	8174 (41.8%)	1154 (5.9%)
教授	8536 (3.70)	754 (8.8%)	1232 (14.4%)	4346 (50.9%)	4146 (48.6%)	4346 (50.9%)	4851 (56.8%)	3741 (43.8%)	186 (2.2%)
准教授	5614 (3.77)	573 (10.2%)	936 (16.7%)	2935 (52.3%)	2612 (46.5%)	2560 (45.6%)	2947 (52.5%)	2299 (41.0%)	266 (4.7%)
講師	2371 (3.82)	306 (12.9%)	428 (18.1%)	1204 (50.8%)	947 (39.9%)	1068 (45.0%)	1188 (50.1%)	972 (41.0%)	194 (8.2%)
助教	2894 (3.48)	324 (11.2%)	507 (17.5%)	1366 (47.2%)	1124 (38.8%)	1050 (36.3%)	1161 (40.1%)	1107 (38.3%)	499 (17.2%)
その他	145 (3.12)	16 (11.0%)	28 (19.3%)	44 (30.3%)	33 (22.8%)	55 (37.9%)	61 (42.1%)	55 (37.9%)	9 (6.2%)

	全体	新しい教育技術を学ぶ機会が不足している	困ったときに相談する相手がいない	教育に必要なIT関係の設備が不足している	教育に必要な施設・設備が不足している(IT関係以外)	教育支援職員(TA、SA等を含む)が不足している・いない	その他
全体	19560 (3.70)	3682 (18.8%)	1743 (8.9%)	2809 (14.4%)	3817 (19.5%)	6367 (32.6%)	1424 (7.3%)
教授	8536 (3.70)	1260 (14.8%)	461 (5.4%)	1174 (13.8%)	1632 (19.1%)	2911 (34.1%)	541 (6.3%)
准教授	5614 (3.77)	1027 (18.3%)	539 (9.6%)	880 (15.7%)	1204 (21.4%)	1927 (34.3%)	470 (8.4%)
講師	2371 (3.82)	586 (24.7%)	309 (13.0%)	405 (17.1%)	499 (21.0%)	770 (32.5%)	171 (7.2%)
助教	2894 (3.48)	776 (26.8%)	417 (14.4%)	328 (11.3%)	460 (15.9%)	718 (24.8%)	225 (7.8%)
その他	145 (3.12)	33 (22.8%)	17 (11.7%)	22 (15.2%)	22 (15.2%)	41 (28.3%)	17 (11.7%)

分野別にみると、人文科学（55.9%）、社会科学（59.5%）、理学（53.5%）、工学（57.4%）、芸術（59.6%）において「学士課程の学生のレベルにバラつきがあり、授業を行っていく」を課題とする割合が最も高い。

農学では「多忙で、十分な研究室での指導が行えない（60.5%）」を課題とする割合が高く、保健（55.0%）、教育（54.6%）では「多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない」を課題とする割合が最も高い。家政においては、「多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない（56.9%）」「学士課程の学生のレベルにバラつきがあり、授業を行っていく（56.9%）」を課題とする割合が共に最も高い。

	全体	講義の時間が足りない	実習や演習等の時間が足りない	多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない	多忙で、十分な研究室での指導が行えない	学士課程の学生が大学の学修に必要な知識不足している	学士課程の学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いにくい	学士課程の学生の授業に対する意欲が低い	指導の方法がわからない、スキルが不十分
全体	19560 (3.70)	1973 (10.1%)	3131 (16.0%)	9895 (50.6%)	8862 (45.3%)	9079 (46.4%)	10208 (52.2%)	8174 (41.8%)	1154 (5.9%)
人文科学	2400 (3.58)	157 (6.5%)	228 (9.5%)	1313 (54.7%)	936 (39.0%)	1233 (51.4%)	1342 (55.9%)	977 (40.7%)	80 (3.3%)
社会科学	2832 (3.77)	200 (7.1%)	319 (11.3%)	1443 (51.0%)	1033 (36.5%)	1452 (51.3%)	1685 (59.5%)	1276 (45.1%)	110 (3.9%)
理学	2145 (3.51)	241 (11.2%)	359 (16.7%)	907 (42.3%)	993 (46.3%)	1034 (48.2%)	1147 (53.5%)	951 (44.3%)	123 (5.7%)
工学	3323 (3.79)	302 (9.1%)	622 (18.7%)	1461 (44.0%)	1772 (53.3%)	1704 (51.3%)	1906 (57.4%)	1688 (50.8%)	155 (4.7%)
農学	1139 (3.66)	93 (8.2%)	150 (13.2%)	548 (48.1%)	689 (60.5%)	499 (43.8%)	562 (49.3%)	448 (39.3%)	59 (5.2%)
保健	5157 (3.68)	772 (15.0%)	920 (17.8%)	2834 (55.0%)	2347 (45.5%)	1982 (38.4%)	2261 (43.8%)	1912 (37.1%)	522 (10.1%)
商船	8 (3.25)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	6 (75.0%)	5 (62.5%)	3 (37.5%)	1 (12.5%)	2 (25.0%)	0 (0.0%)
家政	346 (4.13)	31 (9.0%)	74 (21.4%)	197 (56.9%)	175 (50.6%)	162 (46.8%)	197 (56.9%)	139 (40.2%)	14 (4.0%)
教育	1494 (3.60)	117 (7.8%)	272 (18.2%)	816 (54.6%)	595 (39.8%)	635 (42.5%)	687 (46.0%)	485 (32.5%)	69 (4.6%)
芸術	532 (4.19)	42 (7.9%)	152 (28.6%)	282 (53.0%)	235 (44.2%)	285 (53.6%)	317 (59.6%)	203 (38.2%)	8 (1.5%)
その他	184 (3.99)	18 (9.8%)	35 (19.0%)	88 (47.8%)	82 (44.6%)	90 (48.9%)	103 (56.0%)	93 (50.5%)	14 (7.6%)

	全体	新しい教育技術を学ぶ機会が不足している	困ったときに相談する相手がいない	教育に必要なIT関係の設備が不足している	教育に必要な施設・設備が不足している(IT関係以外)	教育支援職員(TA, SA等を含む)が不足している・いない	その他
全体	19560 (3.70)	3682 (18.8%)	1743 (8.9%)	2809 (14.4%)	3817 (19.5%)	6367 (32.6%)	1424 (7.3%)
人文科学	2400 (3.58)	362 (15.1%)	175 (7.3%)	397 (16.5%)	462 (19.3%)	743 (31.0%)	182 (7.6%)
社会科学	2832 (3.77)	497 (17.5%)	234 (8.3%)	568 (20.1%)	574 (20.3%)	1029 (36.3%)	246 (8.7%)
理学	2145 (3.51)	294 (13.7%)	167 (7.8%)	177 (8.3%)	307 (14.3%)	669 (31.2%)	164 (7.6%)
工学	3323 (3.79)	528 (15.9%)	260 (7.8%)	339 (10.2%)	515 (15.5%)	1110 (33.4%)	239 (7.2%)
農学	1139 (3.66)	215 (18.9%)	112 (9.8%)	117 (10.3%)	231 (20.3%)	363 (31.9%)	84 (7.4%)
保健	5157 (3.68)	1232 (23.9%)	561 (10.9%)	719 (13.9%)	939 (18.2%)	1663 (32.2%)	294 (5.7%)
商船	8 (3.25)	3 (37.5%)	0 (0.0%)	1 (12.5%)	2 (25.0%)	2 (25.0%)	1 (12.5%)
家政	346 (4.13)	111 (32.1%)	36 (10.4%)	61 (17.6%)	98 (28.3%)	109 (31.5%)	25 (7.2%)
教育	1494 (3.60)	288 (19.3%)	125 (8.4%)	297 (19.9%)	437 (29.3%)	430 (28.8%)	132 (8.8%)
芸術	532 (4.19)	103 (19.4%)	52 (9.8%)	108 (20.3%)	212 (39.8%)	183 (34.4%)	46 (8.6%)
その他	184 (3.99)	49 (26.6%)	21 (11.4%)	25 (13.6%)	40 (21.7%)	66 (35.9%)	11 (6.0%)

大学種別にみると、私立では、「学士課程の学生のレベルにバラつきがあり、授業をに行にくい」の割合が高い。一方で、旧帝大、旧六医大、公立都市圏では、「学士課程の学生のレベルにバラつきがあり、授業をに行にくい」の割合が高い。

	全体	講義の時間が足りない	実習や演習等の時間が足りない	多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない	多忙で、十分な研究室での指導が行えない	学士課程の学生が大学の学修に必要な知識不足している	学士課程の学生のレベルにバラつきがあり、授業をに行にくい	学士課程の学生の授業に対する意欲が低い	指導の方法がわからない、スキルが不十分
全体	18426 (3.67)	1842 (10.0%)	2927 (15.9%)	9324 (50.6%)	8434 (45.8%)	8419 (45.7%)	9468 (51.4%)	7632 (41.4%)	1083 (5.9%)
旧帝大	1670 (2.92)	151 (9.0%)	204 (12.2%)	827 (49.5%)	791 (47.4%)	431 (25.8%)	538 (32.2%)	543 (32.5%)	98 (5.9%)
旧六医大	797 (3.35)	91 (11.4%)	136 (17.1%)	441 (55.3%)	431 (54.1%)	269 (33.8%)	277 (34.8%)	284 (35.6%)	48 (6.0%)
その他国立大	4471 (3.39)	445 (10.0%)	726 (16.2%)	2274 (50.9%)	2122 (47.5%)	1669 (37.3%)	1819 (40.7%)	1626 (36.4%)	243 (5.4%)
公立 都市圏	531 (3.19)	48 (9.0%)	84 (15.8%)	272 (51.2%)	226 (42.6%)	133 (25.0%)	155 (29.2%)	162 (30.5%)	48 (9.0%)
公立 地方	970 (3.51)	105 (10.8%)	159 (16.4%)	486 (50.1%)	418 (43.1%)	355 (36.6%)	361 (37.2%)	339 (34.9%)	78 (8.0%)
私立10000人以上	2342 (3.81)	197 (8.4%)	356 (15.2%)	1096 (46.8%)	1073 (45.8%)	1290 (55.1%)	1502 (64.1%)	1136 (48.5%)	93 (4.0%)
私立3000人～10000人 都市圏	2568 (3.86)	247 (9.6%)	427 (16.6%)	1286 (50.1%)	1073 (41.8%)	1404 (54.7%)	1574 (61.3%)	1184 (46.1%)	129 (5.0%)
私立3000人～10000人 地方	1134 (3.94)	114 (10.1%)	180 (15.9%)	569 (50.2%)	487 (42.9%)	615 (54.2%)	744 (65.6%)	527 (46.5%)	71 (6.3%)
私立3000人未満 都市部	1808 (4.18)	196 (10.8%)	297 (16.4%)	926 (51.2%)	842 (46.6%)	1055 (58.4%)	1158 (64.0%)	847 (46.8%)	108 (6.0%)
私立3000人未満 地方	2135 (4.22)	248 (11.6%)	358 (16.8%)	1147 (53.7%)	971 (45.5%)	1198 (56.1%)	1340 (62.8%)	984 (46.1%)	167 (7.8%)

	全体	新しい教育技術を学ぶ機会が不足している	困ったときに相談する相手がいない	教育に必要なIT関係の設備が不足している	教育に必要な施設・設備が不足している(IT関係以外)	教育支援職員(TA、SA等を含む)が不足している・いない	その他
全体	18426 (3.67)	3432 (18.6%)	1646 (8.9%)	2586 (14.0%)	3534 (19.2%)	5992 (32.5%)	1352 (7.3%)
旧帝大	1670 (2.92)	273 (16.3%)	162 (9.7%)	142 (8.5%)	158 (9.5%)	399 (23.9%)	160 (9.6%)
旧六医大	797 (3.35)	137 (17.2%)	66 (8.3%)	84 (10.5%)	134 (16.8%)	201 (25.2%)	70 (8.8%)
その他国立大	4471 (3.39)	702 (15.7%)	365 (8.2%)	522 (11.7%)	869 (19.4%)	1379 (30.8%)	388 (8.7%)
公立 都市圏	531 (3.19)	106 (20.0%)	51 (9.6%)	89 (16.8%)	105 (19.8%)	178 (33.5%)	36 (6.8%)
公立 地方	970 (3.51)	227 (23.4%)	111 (11.4%)	155 (16.0%)	196 (20.2%)	338 (34.8%)	80 (8.2%)
私立10000人以上	2342 (3.81)	380 (16.2%)	162 (6.9%)	282 (12.0%)	423 (18.1%)	775 (33.1%)	154 (6.6%)
私立3000人～10000人 都市圏	2568 (3.86)	469 (18.3%)	209 (8.1%)	372 (14.5%)	450 (17.5%)	914 (35.6%)	177 (6.9%)
私立3000人～10000人 地方	1134 (3.94)	196 (17.3%)	115 (10.1%)	176 (15.5%)	218 (19.2%)	385 (34.0%)	68 (6.0%)
私立3000人未満 都市部	1808 (4.18)	396 (21.9%)	196 (10.8%)	361 (20.0%)	454 (25.1%)	618 (34.2%)	107 (5.9%)
私立3000人未満 地方	2135 (4.22)	546 (25.6%)	209 (9.8%)	403 (18.9%)	527 (24.7%)	805 (37.7%)	112 (5.2%)

第4章 プレFDに関する調査

4-1 調査概要

大学（大学院）における、大学教員としての教育能力を修得するための教育等の取組について把握するため、プレFD（大学教員を目指す大学院生を対象とした授業の実施方法や教材等の作成に関する教育）を実施している大学に対し、アンケート調査を行った。

4-1-1 調査対象

学部調査において、「プレFD」を実施していると回答した学部を有する大学のうち、特に大学教員を多数輩出する大学12校を対象とした。

4-1-2 調査方法

メール（電子媒体）による配布・回収を行った。

4-1-3 回収数

11大学から回答を得た。

4-2 調査結果

各大学のプレFDの実施事例は、下記の通り。11大学のうち、公表の了解を得た9大学の取組を紹介する。

大学	学部	プレFDの名称	年間実施回数	年間参加人数	単位認定	プレFDの内容(特徴等)	プレFDの位置付け
北海道大学	高等教育推進機構	大学院生のための大学教員養成(PFF)講座	1	30	有	先進的な取組をしているカリフォルニア大学バークレー校のプログラムを、同校から講師を招いて移入。内容は、Teaching Assistant, Syllabi, Grading Rubrics, Academic Writing。	大学院共通授業科目ティーチング・フェロー(TF)としての採用に必要となる研修のひとつとしても認定
	文学研究科	専門研究員の非常勤講師採用に係るFD研修	1	4	無	<ul style="list-style-type: none"> ・「基礎人文科学」開講の意義、開講にあたっての心得等について ・シラバスの作成方法について ・講義時に気をつけたいこと ・ハラスメント防止について ・授業アンケートの実施方法について 	参加対象:文学部専門科目「基礎人文科学」を担当する専門研究員
東北大学	高度教養教育・学生支援機構	東北大学大学教員準備プログラム(Tohoku U. PFFP)	フルコース＝約50時間(9ヶ月プログラム) ショートコース＝約20時間(6ヶ月プログラム)	フルコース＝10名 ショートコース＝10名	無	<p>教育能力に限定することなく、大学教員に求められる能力や知識を実践的に学び、自身の教育観を構築し、効果的な省察力を身につけることを目的にしている。</p> <p>具体的には、以下のとおり。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「授業デザインとシラバス設計」「学習と教育の科学」「授業づくり:準備運営」「授業参観と検討会」より最低3つ、「マイクロティーチング(7分)とフィードバック」、「模擬授業(30分)とフィードバック」「コーチング技術を活用した院生指導」のセミナー・ワークショップを必修。 2. オリエンテーション等において「大学教員の役割」、「海外の高等教育を比較の視点で学ぶ」の講義を受講。 3. 経験豊かな先輩教員との面談(コンサルテーション) 4. これらをふまえてのリフレクティブ・ジャーナルの執筆。 5. また、オプションとして高等教育機関の多様性を理解するために、希望者には①国内大学調査で私立大学訪問と授業参観、フィールドワーク(2泊3日)、②海外大学調査と研修・授業参観(カリフォルニア大学バークレー校、5日間)も受講できる。 	教育関係共同利用拠点事業の一環として実施し、大学教員を目指す東北大学院生、ポスドク等を対象に提供している。

大学	学部	プレFDの名称	年間実施回数	年間参加人数	単位認定	プレFDの内容(特徴等)	プレFDの位置付け
						<p>6. このほか、東北大学高度教養教育・学生支援機構において全国の教職員対象に開講するプロフェッショナル・デベロップメント・プログラムのセミナー(「日本の高等教育政策」「盗用と言われない英語論文の執筆」「英語で授業をするためのClassroom English」「大学における教育マネジメントと質保証」など4ゾーン11カテゴリ)で開講しており、年間約30)を自由に聴講できる。</p> <p>7. 1～3は新任教員のためのプログラムと共通で実施し、初期キャリアに属する教員と院生がともに学び合う相乗効果を上げている。</p> <p>8. PFFPの在り方については、実施していた大学と共同で研究会を開催し、「日本の大学における大学教員準備プログラムについて(提言)」(2015年 4月20日)を公表している (http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/files/20150428060501.pdf)。</p>	
東京大学	全学部	東京大学フューチャーファカルティプログラム(東大FFP)	年間4クラス実施	定員各25名 合計100名	有	<p>本プログラムでは、アクティブ・ラーニングの実際の方法を体験的に学ぶことを目的として、グループワークやペアワークをはじめとする相互学習形式を多く取り入れている。また、実践を重視するため、実際に授業のデザインやルーブリック作成、シラバス作成、模擬授業の設計・実施などの課題への取組を通して学ぶ。</p> <p>本プログラムは全学を対象にしており、全15研究科から受講生が集まるため学際的な環境で学びあう。</p> <p>また、終了後も授業実践の機会提供となっているミニレクチャプログラムや特別研究員の申請書作成ワークショップ、アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップなどが開催され、修了生のネットワークが活発に活動している。</p> <p>なお、所定の活動を終了した受講生には、プログラムの履修証を交付している。2013年より開始され、2016年3月時点で289名が終了した。</p>	<p>本プログラムは、東京大学に在学する大学院学生(2017年度よりポストドクター、若手教職員を含む)を対象とし、授業力向上を目指すために実施される履修証明プログラムである。近年の大学教員の質向上の一環として、大学教員を送り出す東京大学の「責任」として位置づけられている全学プログラムである。</p> <p>本プログラムは、未来の大学教員として、責務としての「教育」の重要性を認識し、学生の立場にたった教育の設計と実行を可能にすることを目的と</p>

大学	学部	プレFDの名称	年間実施回数	年間参加人数	単位認定	プレFDの内容(特徴等)	プレFDの位置付け
							している。そのために、授業実施に向けた実践的な知識やスキルを多様な専門領域の受講生とともに学び合いながら獲得し、さらに、研究だけでなく教育についても探究し続ける姿勢を身につけることを目指している。
名古屋大学		大学教員準備プログラム	全15回	H27年度 3名	有	大学教員になるために必要な知識、スキル等の獲得をめざし、多面的に大学教員の職務を検討する。受講者の今後のキャリア設計、キャリア開発に資するよう、グループワーク等を適宜織り込んで、実践的に進める。	
京都大学	教育学部・教育学研究科	大学で教えるということ	15コマ (集中講義)	9	有	理系・文系を問わず、自らの研究領域を初学者であるところの学生に教えるためには、相応の知識とスキルが必要であるが、本授業で獲得を目指すのは単なるティーチングスキルにとどまらない。大学院生同士が、研究領域あるいは大学という枠を越えて、「大学授業」について議論を行うことで、各自が大学で教えるということに関する広い視野を持つことを目指す。	将来、大学教員を目指す大学院生にとって、研究者としての力量とともに、教育者としての力量を養うことは、近年とくに重要になってきている。本授業では、参加者同士の議論を中心に、大学で教えるということに関する知識とスキルを身につけることを目的とする。 研究科横断型教育プログラムとして、京都大学の全研究科の学生を対象としている。
	文学部	哲学基礎文 化学系ゼミ ナール I	1コマ	22	有	文学研究科プレFDプロジェクトは、事前研修会、公開授業とその検討会、そして年度末の研修会によって構成されます。全ての授業は原則公開とし、毎回の授業終了後に30～60分程度の授業検討会を行う。一人の講師は2回から5回の授業を行い、自分の授業が無い時には他の講師の授業を参観、検討会への参加という	文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会・高等教育研究推進センターが共同で主催し、文学研究科のオーバードクター(OD)がリレー講義形

大学	学部	プレFDの名称	年間実施回数	年間参加人数	単位認定	プレFDの内容(特徴等)	プレFDの位置付け
		哲学基礎文化学系ゼミナールⅡ	1コマ	17	有	形でゼミナールに参加する。全ての授業が修了した時点で研修会を行い、自分自身の教育活動を振り返る作業を行う。所定のプログラムを全て修了した参加者には、京都大学総長より修了証が授与される。	式のゼミナールです。2009年度より実施されている。講義の受講者は主に本学文学部の学部生。また、2015年度からは文学研究科内でのプレFDを修了したODによる、大学コンソーシアム京都でのリレー講義も実施している。この講義には京都のさまざまな大学からの受講生も参加。
		行動・環境文化学系ゼミナールⅠ	1コマ	37	有		
		行動・環境文化学系ゼミナールⅡ	1コマ	52	有		
		基礎現代文化学系ゼミナールⅠ	1コマ	16	有		
		基礎現代文化学系ゼミナールⅡ	1コマ	22	有		
		人文学入門(特殊講義)	1コマ	23 (他大学生15名)	有	2015年度より、コンソーシアム京都と連携して、コンソーシアム京都の単位互換科目として当科目を提供。プロジェクトの実施につきましては、各系ゼミナールと同様。	2015年度からは文学研究科内でのプレFDを修了したODによる、大学コンソーシアム京都でのリレー講義も実施。多様な教育環境の中で更なる教育経験を積むため、京都のさまざまな大学からの受講生も参加する当講義を開講。
広島大学	教育学研究科	教職課程担当教員養成プログラム	通年	約10名	有	博士課程後期「教育人間科学専攻」内において3年をかけて修了する任意参加のプログラムである。D1前期「教員養成学講究」、D1後期「大学教授学講究」、D2前期「プラクティカムⅠ」、後期「プラクティカムⅡ」、D3前期「プラクティカムⅢ」、D3後期「教職教育ポートフォリオ」が単位化されている。プラクティカムでは、TAとして教職課程授業に関わりながら、教育実習として学内外で1コマ分の教職課程授業を担当する。これらは授業研究の手法を用いて、教案の作成、事前検討会・事後検討会の開催により、授業力の向上と省察による成長が目指されている。最終学期に「教職教育ポートフォリオ」を提出し、修了証が学長名で与えられる。	本プログラムは、平成19年文部科学省大学院教育改革支援プログラムに採択された「Ed.D 型大学院プログラムの開発と実践—教職課程担当教員の組織的養成—」を引き継いだものである。教育人間科学専攻を修了した院生の多くが教職課程を担当する大学教員として就職する。教師教育者としても優れた教育ができるよう、体系

大学	学部	プレFDの名称	年間実施回数	年間参加人数	単位認定	プレFDの内容(特徴等)	プレFDの位置付け
							的に編成されたプログラムである。
九州大学	法学府	ティーチング演習	1	6	有	学部生対象の演習に参加し、演習の教育補助業務を行い、その活動内容の評価により単位を付与する。	博士後期課程研究者コースの必修科目としている。
	薬学府	有機化学系教育指導実習	1回 (7～10コマ程度)	12名	有	有機薬学系実習(学部3年生対象)において少人数グループを担当し、実験内容に関する理論的説明、具体的実習方法の説明、結果に対するディスカッション等を行う。	本実習は、薬学府創薬科学専攻修士課程の選択科目として開講しており、学部3年生を対象に行う薬学基礎実習に指導的立場で従事することにより、理論および実験に関する教授法を修得することを目的としている。
	薬学府	物理薬学系教育指導実習	1回 (7～10コマ程度)	10名	有	物理薬学系実習(学部3年生対象)における学部学生への教育指導実習を通じて、理論および実験に関する教授法を学ぶとともに、コミュニケーション力・ディベート力・指導力を養う。	
	薬学府	生物薬学系教育指導実習	1回 (7～10コマ程度)	7名	有	生物薬学系実習(学部3年生対象)における学部学生への教育指導実習を通じて、理論および実験に関する教授法を学ぶとともに、コミュニケーション力・ディベート力・指導力を養う。	
	薬学府	医療薬学系教育指導実習	1回 (7～10コマ程度)	15名	有	医療薬学系実習(学部3年生対象)において少人数グループを担当し、薬理学、薬剤学、薬物動態学、薬効評価学についての理論的説明を行い、実験指導法を身につける。	
	大学院人間環境学府	教科書の自主作成プロジェクト	1	10	有	①大学院の授業で教職科目のテキストづくりを行った(著書として刊行)、②学部の授業で大学院生(執筆担当者)が①のテキストを用いて授業を行った。	

大学	学部	プレFDの名称	年間実施回数	年間参加人数	単位認定	プレFDの内容(特徴等)	プレFDの位置付け
立命館大学	大学院キャリアパス推進室	大学教員準備セミナー “Preparing Future Faculty (PFF)”	1回	10名程度	無し (修了証交付有り)	<p>大学教員を目指す大学院生、ポスドクを対象として、大学で教えるために必要な基礎的スキルを養成する講座を実施している。VOD(ビデオオンデマンド)教材4講義と、1.5日のワークショップ中心の講義を実施している。ワークショップでは、シラバス作成、模擬授業等を実施している。</p> <p>参考URL http://www.ritsumei.ac.jp/ru_gr/g-career/program/list/finished.html/?nendo=2015&gcProgram=16</p>	立命館大学大学院では、院生のキャリアパス形成を支援する組織として、大学院キャリアパス支援室を設置している。大学院修了後のキャリアとして大学教員を目指す者が一定数いる一方で、大学教員を目指すうえで必要なスキル等を身につける機会が少ないという声がある。それらの声に答えるため、2011年度から課外のセミナーとして実施している。
関西大学	外国語学部	“特任外国語講師によるFDワークショップ”、 “E-LINC 招聘講演会”、 “英語授業研究と英語授業実践”等	4回程度	20名程度	無	ネイティブの講師や、英語教育学を専門とした教員によるワークショップ	教員および院生を参加対象とする
		小学校外国語活動の授業者に対する学校訪問支援	6月～8月のあいだに6回程度	院生8名参加	無	6～8月の間に6回ほど関西大学大学院修了生が大学院生を対象に事前研修を実施したうえで、吹田市の3校の小学校に、本学の大学院生を派遣講師として、小学校で外国語授業者を対象にワークショップ等を行う。	

第5章 ヒアリング事例調査

ヒアリングにより、特徴的な取組事例を収集した。全学的な FD 組織の取組として、帝京大学、成蹊大学の事例を対象とした。学部（あるいは全学）の特徴的な取組として、甲南大学、産業能率大学、福岡工業大学、法政大学、A 大学（大学名非公表）の事例を対象とした。

5-1 事例紹介

5-1-1 帝京大学 高等教育開発センター

(1)沿革と役割

帝京大学高等教育開発センターは、平成 23 年 4 月に、全学の FD（ファカルティ・ディベロップメント）を担う組織として設立された。

学部横断的な組織であり、センターがある八王子キャンパスを始めとして、全 4 キャンパスを FD ネットワークにつなげて活動を行っている。各学部・学科等には FD 委員がおり、部局ごとの FD 活動は行われているが、高等教育開発センターは、帝京大学の教員として共通して求められる教育力向上等の支援を行う。

現在、専任教員 4 名体制で活動を行っているが、平成 28 年度には 8 名体制となる予定となっている。

(2)教育力向上研修

教育力向上研修は、帝京大学就任 5 年未満の教員を対象とし、教育経験の浅い教員の教育力の向上を目指した研修となっている。受講者は、各学部・学科等からの推薦もしくは受講者の希望により決定する。少人数制でディスカッションを行える、またセンター教員が受講者を面談等できめ細やかにフォローするため、人数は毎年 15 名程度としている。

3 つの必修講座と選択講座（3 つの中から 2 つを選ぶ）からなる。各講座は、受講者である教員が「自分で気づき、考えてもらう」ことを重視し、ディスカッション中心の内容となっている。講義の前半 30 分程度の説明後、残りの 60 分程度をディスカッション中心の時間としている。知識を教え込むのではなく、教員が自立した教育活動を行えるようになる、他者と情報共有・情報交換をして活動できるようになる、ことに主眼が置かれている。

必修講座は、「帝京大学の FD 活動方針」「大学授業の成績評価のあり方（※学生視点での教育・評価の考え方）」「シラバスと授業の到達目標の書き方（※授業設計の方法まで踏み込

んだ内容)」になっており、これは毎年共通となっている。例えば、「シラバスと授業の到達目標の書き方」では受講者自身が作成したシラバスを持ち寄り、その内容を受講者同士でコメントし合う等、ディスカッションを通じて自身の授業を客観的に見直すための工夫がなされている。

選択講座は、例えば「反転学習」「ラーニングコモンズ」「ルーブリック」等、その年のトピックによって構成される。なお、講座の構成は、教員に負荷をかけすぎないことが意識されており、焦点を絞り、最低限年間5回ほどの対面研修への参加を求めている。

さらに、受講後の振り返りとして、「研修ポートフォリオ」の作成を行う。どのような到達目標を立てたか、研修で何を学んだか、研修の内容を授業でどう使ったか等、1年間の研修の振り返りを行う。

なお、教育力向上研修の受講は、後述するティーチング・ポートフォリオに反映できるようにする等、継続的な教員としてのキャリア形成とも連動させ、受講を促すような仕組みをとっている。

センター設立から研修を続け、受講経験のある教員も増えてきたこともあり、研修で伝えている「学生目線での教育」という考え方が、だんだんと学内に浸透してきているという。

(3)教育改革に関連した支援

帝京大学高等教育開発センターは、全学の教育改革の取組に対する支援も行っている。

その1つが、ディプロマ・ポリシー等の3つのポリシー作成に関する支援である。各学部・学科がポリシーを作成するにあたって、他の大学の事例紹介や全国的な動向等の情報提供を、セミナー等の講座や個別相談の形で行う。この際も、教育力向上研修と同じく、策定の主体はあくまで学部・学科にあり、各学部・学科が自立して行動することを支援するようにしている。

さらに、全学での動きとして「教養教育改革」が行われており、高等教育開発センターも担当部局と連携し、教養教育のミッション設定や改革の方向性についての支援等を行っている。

(4)ティーチング・ポートフォリオ

帝京大学では、ティーチング・ポートフォリオを組織的に活用している。例えば昇進・昇格の審査において、ティーチング・ポートフォリオの作成を義務づけており、教員は昇進・

昇格を控えた時期にティーチング・ポートフォリオを作成することが多い。

高等教育開発センターでは、ティーチング・ポートフォリオの作成・活用支援のため、教員に対して、ティーチング・ポートフォリオ研修（教育力開発研修）を行っている。研修は、前期に 4 回開催され、ティーチング・ポートフォリオの意義や書き方に関する講義・演習、ピア・メンタリング（作成途中のポートフォリオについてお互いに意見交換を行う）等が行われている。

研修で重視している点として、「様式にこだわらない」ことを伝えていることがあげられる。ティーチング・ポートフォリオは、既定の項目を型通りにまんべんなく埋めることが重要なのではなく、強調したい点を自分自身の言葉で読み手に伝えることが重要という考えからである。なお、この考え方は、ティーチング・ポートフォリオそのものにも反映されており、ティーチング・ポートフォリオを昇進・昇格の一資料として提出する時には、とくに強調したい部分が申告できようになっている。評価者側も、申告された項目を中心に評価するよう提言している。

また研修の最後には、センター教員による個人面談（メンタリング）が行われ、ポートフォリオ作成の最後のアドバイスが行われるとともに、研修の振り返りが行われる。この個人面談（メンタリング）を重視していることもあり、本研修も、定員は毎年 15 名程度の少数としている。教育力向上研修でも同様であるが、教員との個々の人間関係（信頼関係）を形成し、FD 活動を浸透・拡大させていくことを重視している。

上記の研修とは別に、ティーチング・ポートフォリオの評価者（昇進・昇格の評価者）に対しても、ティーチング・ポートフォリオの評価法の説明会も開催している。ポートフォリオの「評価ルーブリック」を作成し、これを評価者側、作成者（各教員）側の両方に開示している。なお、高等教育開発センターは、あくまで評価のツール作成を担うだけで、評価そのものには関与しないことに留意している。そのことで、利害抜きに、各教員に対して接することができ、メンタリングのような活動も行える。

ティーチング・ポートフォリオの作成は、もともとの作成動機は、昇進・昇格のためのことが多いが、作成後は「自身の振り返りのため、教育のために作成して良かった」といった意見が多いという。

(5)今後の展開

文部科学省認定による「教育関係共同利用拠点（拠点名：教職員の組織的な研修等の共同

利用拠点)」に選ばれており、帝京大学で行っている FD 活動の手法や考え方を、他大学にも展開していく予定である。

また、学内的な動きとしては、平成 28 年度より、高等教育開発センター内に教育方法研究支援室が設置されることになっている。教育方法研究支援室では、アクティブ・ラーニング教育に対して、メディアやツール面からの技術支援を主に行う。高等教育開発センターの教員研修等において授業設計等のコンテンツ面からの支援、教育方法研究支援室がツール面からの支援を行い、帝京大学のアクティブ・ラーニング教育をコンテンツとツールの両輪で支えていく予定となっている。

5-1-2 成蹊大学 高等教育開発・支援センター

(1) 高等教育開発・支援センターの沿革

成蹊大学 高等教育開発・支援センターは、2014 年 4 月に、大学情報センターから改組される形で誕生した。

大学の教育改善を進めるためには、教員組織だけでなく、教員の活動を支援するための組織が必要ということになり、ファカルティ・ディベロップメントに関わる組織づくりの計画が立てられた。その際、新たに組織を作るより、もともとある組織の機能を拡張した方が教員とのやり取りもスムーズにいくと考えた。さらに、ICT の活用は教育の改善のきっかけになることもあり、学生や教職員の情報環境整備や ICT 教育支援を行っていた情報センターに、教員の FD 活動や学生の能動的学習を支援する機能を加え、高等教育開発・支援センターを立ち上げた。

(2) 教員に「考えてもらう」ことを重視した FD 活動・ICT 支援

高等教育開発・支援センターは、ICT 活用教育・FD 活動支援を行う「高等教育支援チーム」と、システムの保守・メンテナンス等を行う「情報システム支援チーム」からなる。このうち、「高等教育支援チーム」がいわゆる教育改善の支援を担っているが、ICT 活用の支援と FD 活動の支援を一体的に行っているのが特徴といえる。

高等教育開発・支援センターの FD 活動の目標として、「教員が（教育課題に対して、答えやノウハウを求めるのではなく）常に自分で考えることができるようになる」ことがある。そのため、例えば、FD 講習会として「本当に知っている？『FD とは何か？』」「教育現場でいま求められていること」「Academic Citizen としての大学教員」等の講演会を行っている

が、単なるノウハウの紹介ではなく、「授業の改善とは何か?」「大学教員として働く・教える意味は?」といったことを教員が自ら考えたり、意見交換したりできるように質問の時間や話し合いの時間を組み込んだりしている。また、「フード&ドリンク」の時間を入れるようにし、参加した教員がリラックスして自分の意見を本音で言えるような機会も設けている。

「考えてもらう」ことを重視する姿勢は、FD に直接関わる講習会だけでなく、ICT に関する支援でも共通している。ICT 支援では、教員に対し単にノウハウややり方を教えるのではなく、ICT を活用することで「教育方法の改善の実例」を教員に体感してもらい(例: ICT を使うことで、時間を増やさずに、学生の理解をより深めることができる)、教育について「より深く考えてもらうため」のきっかけとなるようにしている。「どうすればよいのか?」と答えを聞きたがる教員も多いが、その答えは外から与えられるものではなく、常に考えることが重要だということに気が付いてもらうようにしている。

さらに、ICT 支援を行っているメリットとして、支援を通じてセンター担当者が、教員の教育改善に対するニーズを把握できることがあげられる。ICT 支援の中で、教員が「どんな授業をやりたいのか」「何が課題と思っているのか」を把握することができるため、FD 活動につなげることができる。加えて、ICT 支援を媒介に、大学の各先生とコンタクトする機会が増えるため、草の根的に教員の意識改革を行うことができる (FD 担当者だけを行うよりも、多くの教員と接する機会が必然的に増える)。

なお、高等教育開発・支援センターでは、センター設立の構想段階から、教員の評価はやらないことと決めている。評価と支援を同じところで行ってしまうと、教員側が委縮してしまい、上手く支援ができなくなってしまう。なお、授業評価アンケートは、他部署の事務職員が担当して行っている。

(3)学生への教育に関する改善活動

高等教育開発・支援センターでは、1 年生前期の登録必修科目である「情報基礎」についても担当している。学生は、この科目を通じて、学生はパソコンの初期設定から操作、レポートを書くためのワード、エクセルの使い方、大学のシステム等の ICT に関する基本知識を学び、他の専門授業等で ICT を活用することになっても対応できるようになる。

本授業は、受講する学生も多いため、非常勤講師を含め多くの若い教員が関わっている。授業の質をそろえるため、また新任教員の不安を軽減するため、打ち合わせ会議を開催するほか、専任の教員が、授業の録音を新しく参加する教員に全部提供する等の工夫を行っている。

る。

この他、高等教育開発・支援センターの取組として、グループワーク系の授業へのニーズに対応できるように、TA,SA のトレーニングを行っている。希望する学生に対し、後期の時期に 10 回のトレーニングを行い、修了した者に対しては資格を与えるようにしている。平成 27 年度は、6 名の修了者が誕生している。修了者については、来年度、実際の授業で TA,SA として活躍してもらおうことになっている。

(4)FD 協議会の立ち上げ

成蹊大学における FD 活動での最近の新たな動きとして、「FD 協議会」が、平成 27 年度の 9 月に立ち上がったことがあげられる。

これまで、全学的な FD 活動の方針は、大学のトップ層で構成される「全学 FD 委員会」が決定を行っていた。そのため、FD 活動はトップダウンで行われる形となっており、現場の教員からのニーズには必ずしも対応できているとは言い難かった。そこで、各学部・学科の代表教員（教務経験等があり、学部のカリキュラムの全体像が把握できている中堅層が中心）、全学教育（教養）実施委員長、国際教育センター代表者、教務課（事務職員）と高等教育開発・支援センターの所員からなる「FD 協議会」を設置することとなった。

これにより、FD 協議会で現場レベルの教員が、自分たちの教育活動に関することを話し合い、その意見を全学 FD 委員会に提言できるようになった。例えば、授業評価アンケートはこれまで大学のトップ層が決めていたものをそのまま活用していたが、これについて現場の教員の意見も反映できるようになった。また、例えば、ややもすると形骸化する恐れもあるディプロマ・ポリシー等も、FD 協議会等で教員が自分たちの問題だと感じて話し合うことにより、より実行力のあるものにできるのではないかという期待もある。

また、事務職員（教務）が、FD 協議会に参加している意味も大きい。教務は、教員のサポートをしつつ、一方で教員評価アンケートの集計等を通じて学生の反応等も知っている。教員、学生の両方の立場から教育活動をみている。両方の立場から意見できるメンバーが参加していることも改善には有効になっている。

なお、「FD 協議会」は月 1 回ペースで開催されており、これまで新人研修等のテーマについても話し合いが行われている。

5-1-3 甲南大学 経済学部

(1)基本的な考え方

大学として、また経済学部として、アドミッション・ポリシーやカリキュラム・ポリシーにおいて、「学生ひとりひとりを見守る」という考え方を持っている。比較的規模の小さい(学生約 350 名、教員約 25 名)本学部では、きめ細かく学生に接することができる環境にある。

経済学部では、不本意なまま入学する学生、本学での学修になかなか適応できないでいる学生をどうするのか、ということについて 20 年以上前から議論を重ねてきた。大学側が深くやらなくてもよいのではないか、という考え方もあるが、結局のところ、そういった学生を事実上放置することは、授業の運営の障害にもつながる。課題が見つかった場合に個別対応をし、万一問題対応が後手に回れば、かえって重大な事態を招きかねない。それならば、学部として体制をしっかりと組み、常日頃から学生にしっかりと向き合っていくほうが、より望ましい結果を期待できるのではないか。

しかし、学生に向き合うといっても、小学校・中学校・高等学校等の教員と違い、教科・教育に関する指導法についてトレーニングを積んでいない教員がほとんどである。そこで、学部に FD 委員会を設置していることはもとより、教授会等の場でも、授業運営について、よりよい取組をキャッチアップできるような仕組みを作ってきた。

教員が関わるべき仕事の仕方・スタンスについて、具体的には研究と教育のリソースの考え方について一意に定めているわけではないが、経済学部にも所属する教員として必要な協力をするということについてコンセンサスは醸成されている。実際に、新しい試みに挑戦したい、という教員がベテラン・若手を問わず、常に存在している。そういった意欲に対しては、方向性が妥当なものかどうかの判断は教授会等で行うが、妥当なものについては積極的に後押しする雰囲気がある。(但し、例えば休暇期間の集中講義の設定数等、物理的な制約については、必ずしも教員の意欲に応えきれない場合があるのが現状)

(2)ベストレクチャー制度

学生の授業への出席・参加を促すという点では、出席カード等を用いた出席状況の確認が行われているが、出席すること自体が学生の目的となってしまうと、授業に参加している学生の姿勢に問題が生じるケースがある。何より大切なのは、学生がしっかりと授業に取り組むモチベーションを持ち、能動的な学習(アクティブ・ラーニング)を確立することである。

このような視点をも考慮して、経済学部ではよりよい授業を行うための取組を行っている。

そのうちのひとつとして、学生による授業改善アンケートの結果をもとに、教員数名を選んで表彰する「ベストレクチャー表彰・シンポジウム」を2015年度より設けている。

「ベストレクチャー表彰・シンポジウム」は、学生による授業への評価項目（例えば、授業内容が理解できたか、授業の進行が円滑であるか、配布資料は適切であるか、私語がないように授業をコントロールしていたか、等）をもとに、全ての授業をレーティングするものである。ただし、傾向として小規模の授業ほど評価が高くなる傾向にあるため（きめ細かい授業ができる等の理由による）、授業の受講者規模に応じ、4階級を設定し、各階級においてレーティングが高い授業を選考・表彰している。

この制度の主たる目的は対象者の顕彰というよりも、好事例、好教授法の収集と共有にある。昨年度はこの表彰対象者が登壇するシンポジウムを開催し、学内外から約100名が来場した。ベストレクチャーに選ばれた授業担当教員には、それぞれの授業運営のノウハウについて発表してもらい、その内容を経済学部で蓄積・活用していくことにつなげることが、この制度を始めた最大のねらいである。

今回のシンポジウムは、開催が平日日中であったため、授業を担当している教員の参加が難しいという難点があったが、当日の資料は、後日教授会で配布し、好事例・好教授法については学部全体で着実に共有することができた。

なお、授業の評価という観点からは、従来は、FD委員会によるピアレビューを実施していた。しかし、全ての授業を対象に行うのは容易ではないということで、学生の声を取り入れ、全ての授業を評価対象とすることを実現した。

(3)1年次生に対する教育（アクティブ・ラーニングの積極導入、教員の積極関与等）

学生ひとりひとりを見守るという考え方から、特につまづきが発生しやすい1年次生の授業設定に注意をはらっている。具体的には、経済学の導入にあたる「入門マクロ経済学」「入門ミクロ経済学」について、講義クラス（中規模教室）と、演習クラス（小規模教室）をセットで実施し、前者でインプット、後者でアウトプットを行う形式をとり、理解を深めるとともに、脱落してしまうことがないようにフォローできるようにしている。この仕組みは、学生による授業改善アンケートの自由記述回答等でも比較的评价が高いアクティブ・ラーニングの手法を、経済学部の基盤的な性格を有する入門的な科目において適用した取組である。

また、甲南大学では学生に対する履修指導のための制度として指導教員を定めており、教員一人につき約80名（学年あたり20名程度）の学生が割り当てられている。経済学部では、

これまでその年度における授業履修について問題があると認めた学生とその保護者に対し、年度末に連絡をし、2者面談または3者面談を設定して、学生への履修指導を行ってきた。また、1年次生に対しては、前期末終了後にも、この取組を行っている。この取組は、入学後大学生活になじめずにドロップアウトに陥る学生を少しでも減らすために導入した。

よりきめの細かい学修サポートとして、上級生が下級生の指導補助を行うラーニング・アシスタント制度（下級生が受講する授業で、グループワークにおけるファシリテーション等を上級生が担当する。2015年度から全学で導入）、上級生が下級生のレポートを添削するライティングサポート制度（2014年度より経済学部で一部の授業に試験的に導入）等の取組を行っている。

他方において、精神的な理由や生活習慣上の理由等から大学になじめない、あるいはキャンパスから足が遠のく学生も出てきている。そこで、そういった面でのフォローが必要と考えられる学生については、指導教員が個別対応し、状況によってカウンセリングサービスを受けさせる等の対応をしている。

学生の状況については、授業の担当教員（特に1年次生では全員が参加する基礎ゼミⅠの担当教員）が早期に気づいて初動できるのが望ましいことから、授業担当教員と指導教員間での情報交換も頻繁に行われている。なお、甲南大学では、心理的な問題を抱える学生の対応の仕方について、学内で年一回ワークショップが開催されているほか、手引書が教員に配布されている。この点で、経済学部のみでは対応が困難なケースについて、大学としてバックアップする体制があることは大変に心強い。

(4)今後について

学生による授業改善アンケートのデータを調べた結果、受講者数20人未満の少人数授業では授業ごとの総合評価の平均が両極端な分布になっており、授業担当教員と受講学生の相性の問題が疑われる。他方において、受講者数100人以上の中規模授業等では、授業ごとの総合評価の平均は標準的な分布を示している。少人数授業では先進的なアクティブ・ラーニングの手法を取り入れやすいが、学生をアクティブにできるかどうかは実際に授業を担当する教員の授業運営スキルに強く依存している。一方、中規模以上の授業に適切なアクティブ・ラーニングの手法を取り入れることで、規模の比較的大きい専門科目授業の活性化を実現できるのではないかと。今後は、少人数ではない授業クラスでのアクティブ・ラーニング手法の導入を進めていきたい（既に、ベストレクチャー制度等を通じて、これに向けて取組を開始

している)。引き続き、教員個人、FD 委員会による授業法の開発をし、これを検討していく。

また、1 年生の科目については、複数科目を統合することで、少人数による授業機会を増やす方針である。科目の統合にあたっては、教育内容について取捨選択が必要になってくるが、メリハリのある授業を組み立て、学生にしっかり身に着けて欲しいと考えている。

なお、取組については、PDCA サイクルを意識したチェックを行っている。原則として 3 年おきに実施し、必要に応じて見直しを行っているが、これは硬直化したものではなく、必要なものは随時取り入れや試行を行っている。

5-1-4 産業能率大学

(1)概要

産業能率大学は、育成する人材像として「社会において活躍するビジネスパーソンを育成する（経営学部）」「マネジメント力を発揮して社会の様々な分野において活躍する人材を育成する（情報マネジメント学部）」と掲げているように、学生の実践力の育成に力を入れている。

上記の目的に向け、教員の教育力向上にも注力した取組を行っている。2002 年から設置された「FD 委員会」において、全ての科目において「学生による授業評価アンケート」の取りまとめを行っている。さらに、2008 年から設置された「教育開発研究所」において、年 8 回の FD 研修会が開催されている。また、教学委員会では、シラバスの取りまとめ等、全学的なカリキュラム編成を担っている。

(2)FD 研修

教員全員を対象とした FD 研修会を年 8 回行っている（夏休みを除いて月 1 回ペース）。もともとは「FD 委員会」主催で行われていたが、FD 活動が活発になってきたこともあり、2008 年からは「教育開発研究所」が主催している。

当初の FD 研修会は、教員による研究成果の発表であったが、ここ数年はテーマを決めた体系的な研修を行うようになった。近年、アクティブ・ラーニングが盛んに取り上げられるようになってきたが、産業能率大学では、従来から実践教育（＝アクティブ・ラーニング）に力を入れており、この成果を理論化しつつ、さらにアクティブ・ラーニングを深めていこう（アクティブ・ラーニングと知識教育の両立等）という機運が学内で高まっていた。そこで、現在の FD 研修会では、アクティブ・ラーニングを中心としたテーマでの研修が中心と

なっている。例えば、2015年の第1回研修会のテーマは、「社会人向けビジネスゲームを用いたアクティブ・ラーニングを基に大学授業について考える」であった。日々の教育活動に直結したテーマとし、明日の授業にすぐ役立つ内容にしている。

研修のコーディネートは、教育開発研究所のメンバーが行う。講師は教育開発研究所のメンバーが行うこともあれば、外部から講師を招く場合もある。FD研修会は、講師からの発表・報告を聞くだけでなく、参加教員間のディスカッションやワーク等を交えながら実施される。また、外部講師を招いた場合は、大学内部の教員とパネルディスカッションを行ったケースもある。

さらに、2016年2月12日には、「アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化」をテーマに、公開FD研修会を開催した。参加者数138名のうち、45名が学外参加者であった。

FD研修の成果については、毎年「教育開発研究所年報」という形で取りまとめられており、WEBでも公開されている。

なお、FD研修会は、教授会の終了後に行っている。教員のFD研修会への関心も高いため、出席率は毎回100%近い。

(3)同一科目で同じ内容の授業を実施

授業の中で、同じ科目名で複数の教員が行う科目についても、教育内容や評価が同一のものになるようにしている。具体的には、同一科目については、全て同じシラバスと教材を使用する。シラバスは、全ての科目について共通フォーマットで2ページで作成されている。授業の目標、使用教材、各週の授業で行うこと、各週の授業外での学習内容、評価内容等が細かく記載されている。このシラバスの内容に基づき、教員は授業を行うことになる。さらに、各科目には、主務教員が配置されており、主務教員は、毎週の授業のレクチャーノートと教材を作成し、各担当教員に配布する。

また、全科目で、その科目を担当する教員が集まるミーティングを行う。ミーティングは、授業第一回の前と成績評価段階の最低2回は開催され、必要に応じてこの他にもミーティングを行っている。

なお、産業能率大学は、アクティブ・ラーニングの授業が多いが、成績評価についても、統一性が保てるような工夫がなされている。評価項目は、出席、レポート、試験等への配分等がシラバスで細かく設定されている。さらに、授業態度や意欲等の定性的になりがちな評価も、例えばレポートの分量やグループワークへの関与度等、できる限り定量的な指標や具

体的項目に落とし込み、だれから見ても同じような評価ができるような仕組みとしている。

(4) 新人教員育成の体制

新任教員は、基礎ゼミ等の授業を担当することが多く、この授業で、アクティブ・ラーニング系の授業の経験を積むことになる。

また、アクティブ・ラーニングの授業には、SA（スチューデント・アシスタント）がサポートに入るので、新任教員にとっては授業進行の助けになることもある。産業能率大学は企業出身者の教員も多いが、前述の共通教材（ツール）、基礎ゼミでの経験、SAのサポート等、新任教員でも教育力が身につくような体制を構築している。

教員が授業を行っているかのチェックについては、授業参観での確認が行われている。特に、新任教員に対しては、必ず行うようにしている。授業参観はFD委員会が中心となっており、シラバス通りの教育が行われているか、学生をきちんとマネジメントできているか等を確認する。さらに、学生による授業評価アンケートは、全ての科目に対して行われ、結果は学内で公開されている。この授業評価アンケートで問題があった場合等も、授業参観等を行い、結果を教員にフィードバックする。

また、産業能率大学は学生の発表会も多い。この発表会が、学生の成果発表だけでなく、教員の教育力の成果を確認する機会にもなっている。

(5) 教員間のコミュニケーション促進の工夫

教育について、教員間でコミュニケーションを促進できるような工夫もなされている。まず、前述の年8回のFD研修会、同一科目での授業ミーティング等、公式な場でのコミュニケーションの機会を多くしている。

さらに、日常場面でもコミュニケーションが多くなるようにしている。教員の部屋は、ロの字型に配置し、真ん中にラウンジを設け、話しやすい環境を整えている。また、教員の部屋の天井は空いており、教員がいるかいないか等の気配がわかるような作りとなっている。また、教員の業務についても、週4日は授業を担当する設計となっており（残り1日は研究日）、必然的に教員同士が大学で顔を合わせる機会が多くなるようにしている。

教員の教育への意欲も高いこともあり、日常的な場でも、教員間で大学教育に関するコミュニケーションが行われている。

(6)学生の学力のバラつきに対する対応

学生の学力のバラつきについては、コンピテンシーよりリテラシー（語学、読解力、計算力等）の差が大きいと認識している。そこで、語学授業等については、レベル別の編成を行い、リテラシーの基礎科目は、1年生前期は補習クラスも設けられている。

また、学習能力（ラーニングアクティビティ）の差も、学生間で大きくなっていると認識している。どのような教え方が学習能力を高めるかの話し合い等も行われている。

5-1-5 福岡工業大学 情報工学部

(1)FD 活動の推進体制

福岡工業大学では、全学的な FD 推進組織として、平成 22 年度より、学長を機構長とする FD 推進機構を設置した（事務組織：FD 推進室）。FD 推進機構には、各学部の学部長と学部を構成する学科の代表である FD 委員からなる「部会」（工学部会、情報工学部会、社会環境学部会）、および共通教育部会、大学院部会、および教育技術開発ワーキンググループが設置されている。

FD 活動については、大学全体の方針等について、機構長や各部会長等で構成される FD 推進機構運営委員会で話し合われるとともに、各学部の活動については、部会の裁量に任されている部分も大きい。具体的な FD 活動の内容についても、全学共通の取組と、各部独自の取組との二層構造で行われている。なお、学部独自の FD 活動については、教員の参加率を高めるため、学部教授会の終了後に行われることが多い。

全学的な取組としては、その時々々の FD のテーマに基づいて、「FD カフェ」が年間 4～5 回程度開催されている。今年度は、教育技術開発ワーキンググループを中心に、アクティブ・ラーニングをテーマに、学内の実践事例の紹介や外部有識者による講演・先進事例紹介等を行っている。

この他、教員の特徴的な教育の取組は、毎年「FD Annual Report」という形で報告書に取りまとめられ、情報共有と記録が行われている。

(2)学生アンケート

全学的な取組として、前後期の各授業についての学生アンケートを中間と期末の 2 回行っている。本アンケートは、当初は、「授業評価アンケート」として行われていたが、途中で方

針を変え、「学生の授業達成度評価（自己評価）」と「授業の改善点」を調べるものとして位置付けられるようになった。学生は、お客様ではなく、学びの主体であるという考えに基づいてアンケートを行っている。

中間アンケートは、授業開始 4～6 週目の時期に、主に紙ベースで行われる。「授業の理解度」「授業への改善要求」を聴く内容となっている。授業の早い時期にアンケートを行うことで、それ以降の授業の改善につなげることを目的としている。中間アンケートでの指摘に対応した教員の授業は、期末アンケートでは評価が良くなっていることが多い。中間アンケートにきちんと対応することで、教員が学生の意見に耳を傾けていることが学生にも伝わり、学生もちゃんと意見を言おう、授業にコミットしようという意識が高まる。なお、中間アンケートは、即時性を重視しており、集められたアンケートは、各教員がその場、あるいは次週までに目を通し、すぐにフィードバックを行うようにしている。例えば、「難しすぎる」「進み方が速すぎる」といった意見が多ければ、それに対応した授業進行を行うようにする。同じ授業によっても、年度によって学生の習得度は違う。中間アンケートを行うことにより、年度による違いを試験終了後に気が付くのではなく、授業期間の途中の早い段階で修正できるようになった。

期末アンケートは、授業終了後に WEB で行う。結果は、授業個別に、学生の生の声（自由記述）も含めて、全教職員並びに学生に公開される。「シラバスの確認を行ったか」「意欲をもって授業に取り組んだか」「授業に関する授業外での学習時間」「ディプロマ・ポリシーで示された学習教育到達目標の A～I の能力の伸び（自己評価）」「意義ある授業だったか」「自由記述」から構成される。アンケートの結果は、教員からのフィードバックコメントも加えて、全て WEB で公開される。次年度のシラバスには、学生アンケート結果へのリンクが貼られるため、学生は授業選択の参考にすることもできる。

なお、学生アンケートでは、教員が学生にフィードバックすることを重視している。学生にフィードバックすることで、学生も授業に対するモチベーションが上がる。教員のアンケートフィードバック率もチェックするようにしている。

(3)教育業績表彰制度

学部独自の FD 活動として、情報工学部では、教育業績表彰制度を行っている。学生アンケートの結果（自由記述によるコメント等も含む）や教員相互のピアレビュー等を元に、各学科から、教育に特に貢献した教員を毎年 1 名選出し、表彰を行う（情報工学部業績賞）。

表彰された教員は、教育の内容を公開授業か報告会の形でフィードバックする義務がある。

例えば、文理融合を謳うシステムマネジメント学科から選出された教員の授業は、他学科を含めた教職員を幅広く招き、学生の行う調査やプレゼン発表に関わってもらった。この授業について報告会が行われ、授業時間外での教職員との連携例とその効果が紹介された。

このような公開授業／報告会を行うことにより、授業ノウハウ（例：学生の意見を集めるのにオンラインで行い効率的に行う等）の共有化を行うと共に、教育に関する教員間の意見交換を行う機会をつくっている。

(4)わからないことを「わからない」と言える学生を育てる

学生のレベルのバラつきへの対応も課題となっている。その対応として重要なのは、学生に「わからないこと」は質問させる習慣をつけさせることだといえる。そこで、実施している取組の1つに初年次学生向けの「学習相談コーナー」がある。一般的なオフィスアワーも設定しているが、教員の部屋に学生が訪問するのは、なかなか敷居が高い部分もある。そこで、決まった時間に教室等で教員やTAが学習相談コーナーを開催し、数学や物理等の専門科目の修得に重要な基本的な科目について、わからないところを自由に質問、学べるようにしている。

一方で、勉強ができる学生向けにも、意欲を高めるように「スマホアプリ開発講座（企業人を講師に招き、最新モバイル端末のアプリ開発からコンテスト参加も目指す）」や「ITを利用した学生による地域連携活動」等の取組も行っている。

理解が速い学生と理解が遅い学生の両方に対して取組を行うことで、アクティブ・ラーニングの授業等でも、学生同士が教え合うようになることが期待できる。座学形式の授業であっても、小グループを作り同じ問題を解かせ、わからない学生はわかる学生に聞くことで、学生同士で教え合う循環が構築される（教員は全体を見まわし、共通でつまづきそうなポイント等を見極め、全体に教える）。

5-1-6 法政大学グローバル教養学部

(1)学部の特徴と、教育面での課題

法政大学グローバル教養学部は、教養課程と専門課程の区別をせず、領域横断的なりべラールーツ教育を行っている。全ての授業を英語で行い、少人数によるディスカッション制の

授業が中心のカリキュラムとなっている。教育を通じて、学生の「知識への好奇心」「学ぶ力」「批判的思考力」を育てることを重視している。

学生数が増加したことにより、いわゆる 4 技能全てがネイティブレベルの学生もいれば、技能の偏りがみられる学生も散見されるようになり、それが教育上の課題にもなっていた。そのため、各教員は、英語力の偏りによって学生の理解度に差が生じてはならないという意識を強くもっており、普段から教育方法等に関する情報交換等は盛んであった。

(2)教授法についてのワークショップ

法政大学では、大学全体でも FD 講習会を行っている。グローバル教養学部では、特に新任教員は、必ず 1 回以上は、大学の FD 講習会に出るようにしている。一方で、全ての授業を英語で行う、少人数によるディスカッション制の授業が中心、といった学部ならではの特徴があるため、全学の研修内容が、必ずしも学部として求めている内容になるとは限らない。

また、前述のように学生の英語力(4 技能)に偏りがあり、リーディングが得意な学生、ディスカッションが得意な学生と様々な学生がいる中では、各教員の教育方法や評価方法も、様々な手法を取り入れていく必要があった。

そこで、グローバル教養学部では、2012 年度より、学部独自の「教授法についてのワークショップ」を開催することとした。

年 1 回、主に若手の教員によって、特定なテーマで教授法についてのプレゼンをしてもらい、その後、教員全員でディスカッションを行う。2012 年度は、「学生の関心をキープする方法」、2013 年度は「効果的なリーディングの授業の進め方」、2014 年度は「学生の集中力を保ち、積極的に授業に参加させる方法」、2015 年度は「グループワークの進め方」をテーマにディスカッションが進められた。

例えば、2014 年度のワークショップでは、学生を授業に積極的に参加させる方法として、「何のための授業かを明確にさせる」「教えた内容を、具体的な身近な事例で紹介する」「説明した理論を体験させる（例：YouTube で理論にあった事例を見せる）」「理論に関係する学生自身の体験談を話させる」等といった工夫点が紹介された。

プレゼン後のディスカッションも、毎年、活発に行われている。2012 年度の「学生の関心をキープする方法」では、心理学分野の教員の事例が紹介されたが、他の学問分野ではどのように応用するか等の議論がなされた。また、2015 年度は「グループワークの進め方」では、グループワークをフリーライドする学生をなくすための工夫が紹介され、ディスカッション

ではグループの作り方や、グループワークにおける学生の評価方法等も議論が行われた。

このワークショップでは、プレゼン内容に対してベテラン教員から若手教員にフィードバックをするだけでなく、ベテラン教員の方も新しい教授法を知ることにもつながり、ベテラン教員・若手教員相互に刺激を受けている。

なお、本ワークショップは、専任教員全員が参加している。全員が参加できるのは、このワークショップが、教授会の日に行っているからである。教授会の開始時間を少し遅らせて、その時間からワークショップを行うようにしている。教授会は、どの先生もスケジュールを空けているので無理なく参加することができる。

(3)英語スキル科目における改革

グローバル教養学部では、英語スキル科目の改革に着手している。具体的には 2016 年度より 4 技能の偏りをなくし、学生全員が一定水準のバランスのとれた英語力を身に付けることを目的として、1,2 年次に英語スキル科目（リーディング、ライティング、ディベート& ディスカッション）を必修科目とした。

英語スキル科目は、非常勤講師含め 10 名以上の多くの教員が関わる科目となっているが、同じ科目でも教員によって、授業の厳しさや修了後の学生の到達度合いの差異が見られた。そこで、これらの科目の共通シラバス（毎回の授業の進め方、20 分までに●●を終わらせる、といった進行シナリオまで提示）と、推奨テキストをカリキュラム委員会が提示した。これを受けて、授業担当教員が一堂に会してのミーティングを開催し、授業内容の進め方および使用テキストに関して合意が形成されたほか、学生の評価方法についても意見交換がなされた。

さらに、学生の受講の仕方についても変更を加えた。これまでは、全ての学生が同じ授業を受けることとなっていたが、学生の英語レベル（入学時に TOEFL(ITP)を受験し判定)にあわせて 3 段階のコースを設定した。スコアが低い学生は英語スキル科目を多く履修する必要があり、スコアが高い学生の英語スキル科目は少なくなり、その分早い段階でより専門分野の授業の履修が可能になる。なお、制度的には、学部の中で履修コースを 3 パターン用意し、英語力のレベルによってコース分けされることになる（卒業要件が異なる）。

(4)学生モニターの活用

英語スキル科目における改革には、法政大学が全学で実施している学生モニター制度での

意見もヒントになったという。学生モニター制度は、学部ごとに実施される。有志の学生に集まってもらい、教員と学生数名で3時間程度の座談会を行う。どのような学生を集めるかは、学部の裁量に任されており、グローバル教養学部では、1～2年、3～4年の2カテゴリーに分けて学生を集めて座談会を開催した（それぞれ3～5名程度）。

学生モニター制度の利点として、個別授業の評価だけでなく、学部全体の教育に対する学生の意見がわかることがあげられる。英語スキル科目において、担当教員によって授業方法や到達度の違いがあることも、学生モニターの意見から気が付いたことであった。

(5)教員採用段階における教育力の確認

上記のような教育を行うために、グローバル教養学部の教員には、専門知識や英語力だけでなく、少人数制による授業に対応できる等、一方向の講義だけでなく、対話型の教育ができることが望まれる。

そのため、教員の採用に当たっては、専任・非常勤のいずれの場合でも、面談で「これまで、どのような教育を行ってきたか」「グローバル教養学部で、どのような授業をしていく考えか」を細かく聞いている。具体的には、授業にディスカッションをどう組み入れていくか、リーディングを授業にどのように取り入れ、どの程度、宿題を出すか等を確認する。

さらに、専任教員については、30分程度の模擬授業をやってもらい、その後のディスカッションで理解を深めるようにしている。

また、採用された非常勤教員や専任教員について、学部の執行部による授業参観を行っている。執行部が学生に混ざって授業に参加することもある。参観後は当該教員にフィードバックされる。

5-1-7 A 大学

(1)教育の概要

1学部4学科1課程の理系大学である当大学では、1年生での基礎教育では、全学生が共通の科目を履修する。クラス編成についても学科を超えて行われ、1クラス60名程度で12クラスが編成される。このため、1年次では、どの学科に所属していても、全員が同じ科目を学ぶことになる。なお、基礎教育の科目として、専門科目（物理、化学、微分積分、線形代数、数学演習、解析学、基礎プログラミング等）、実践教育科目（基礎科学実験A（物理）、

基礎科学実験 B (化学)、コンピュータリテラシー等)、語学等がある。

2 年では、学科共通の専門基礎科目を、3 年では、コースごとに専門科目を学び、4 年生において研究室に所属することになる。なお、大学院修士課程への進学率も高い。

(2)1 年生の共通科目での工夫

1 年生の基礎教育については、全学の学生が学ぶため、共通教育部の教員だけでは人数が足りない。そこで、各学科に所属する教員が、基礎教育に協力している（共通教育部の教員は、講義と基礎教育の管理を担う）。

基礎教育については、教育内容や評価にばらつきが出ないように、同じ科目は統一の「シラバス」と「試験問題」を使用している。

シラバスでは、週ごとに教えるべき内容が記され、中間試験、期末試験までに最低限教えるべき項目が記されている。また、スケジュールは、ある程度余裕を持たせ、各教員の裁量にあわせて授業が展開できるようにしている（教員によって、進んだ内容のことも教えたり、クリッカーを導入した授業を行ったりしている）。

さらに、物理系の科目では、試験問題について、共通のものを使用するだけでなく、授業が開始される前（前期なら 3 月に）作成している。これにより、教員が最低限教えるべき内容が明確化され、さらに授業中においてテクニカルタームの統一化が図れる。

教員の配置についても、毎年同じ教員が担当するわけではなく、数年ごとに入れ替わるようにしている。

なお、試験成績の分布結果を見る限り、教員による顕著な差はでていないため、この取組は、ある程度うまくいっているといえる（学生の教員評価アンケートについては、他より結果がよい教員もいる）。

この取組には、各学科の教員に「今の大学 1 年生の学力、特性等を理解してもらおう」という狙いもある。理系の教員は、ややもすると研究指導のみに意識がいきがちになり、1、2 年生時の教育と、それ以降の研究指導段階でギャップが生じてしまうこともあった。そこで、学科所属の教員に「学生を理解する」機会として、1 年生の基礎教育に積極的に関わってもらおうようにした。

基礎教育については、各部会で数多くのミーティングを行っている。初回講義前、中間試験前、期末試験前、成績評価段階と少なくとも 4 回のミーティングを行っている（実験・演習等は最低 3 回）。中間試験前、期末試験前のミーティングでは、試験問題のチェックを行

い、設問の内容等の修正を加える。

上記でみた科目の統一化は、2年生以上の専門科目においても行われている。学科間やコース間にまたがって並列して実施される同一名称専門基礎科目については、シラバスと試験内容を統一し、受講した学生間の学力のばらつきが生じないようにしている。

(3)教育内容の評価とフィードバック

全ての授業で、学生による授業評価アンケートを実施している。アンケート結果は、これまで、担当教員に自分の結果だけがフィードバックされていたが、2年前から、これを改めた。まず、自身の結果と大学全体の平均の両方をフィードバックするようにした。また、偏差値を算出し、自分のアンケート結果が、全体のどの程度に位置するのかわかるようにした。

さらに、授業評価アンケート結果がよかった教員については、そのノウハウを学内で共有するため、「公開授業」を行っている。模擬授業ではなく、実際の授業に教員が見学できる形としており、20～30名の教員が授業の見学をしている。

一方で、授業評価アンケート結果がよくなかった教員についても、結果を伝え、どのような点がよくなかったか（内容が専門的で難しく、学生がついてこられない等）を、報告してもらうようにしている。

この他、成績評価分布のチェックも行っている。成績評価に偏り（成績が良い学生が多い、成績が悪い学生が多い）のある授業については、各部会および教員に結果をフィードバックし、試験問題の内容を含め成績の評価方法に問題がなかったかを確認・改善してもらう。

(4)新任教員研修

大学に赴任して3年以内に、新任教員研修を受けてもらっている。研究室運営と大学での事務処理をテーマに「大学の現状（学長から）」「研究室運営の仕方」「教務関連の事務処理」「財務対応」「倫理教育」等を半日かけて行っている。なお、教員からの要望を受け、開始当初から比べて研修の項目は増えている。

(5)FD研修

全学的なFD研修では、例えば、「統合失調症の学生への対応の仕方」等をテーマに行うこともある。学力は高いが、病気で授業を受けるのが困難な学生に対し、どう対応すべきか等、

様々な特質を持つ学生の理解を促す内容の研修も行っている。

この他、FD 研修では、アクティブ・ラーニング等をテーマとしたものも行っている。

5-2 ヒアリング事例からみる FD 活動を活性化するポイント

ヒアリング事例から明らかになった、大学教員の教育活動、大学での FD 活動を活性化するためのポイントを整理した。

(1)教員の教育 (FD 活動) への意識を向ける・強める

多くの大学の事例において、大学教員が教育活動に対して意識を持ってもらうことを重視していた (教育活動に対して意識の高い教員が多いケースも存在する)。教員が、主体的に教育について考えるようになることが、FD 活動の主要な目的の 1 つといえる。

そのための工夫として、学生の教育について考える機会を与えることが 1 つの方法といえる。今回ヒアリングを行った事例では、例えば「1 年生に対する共通教育に対して、専門分野の教員も担当として組み込むことで、学生の 1 年次での学力や特性を理解してもらう」「ICT の活用支援を通じて、教育方法の改善を考えるためのきっかけとしてもらう」等の工夫が行われていた。

さらに、教員同士が教育について話し合う機会を創出することも、教育活動に意識を向けるためのきっかけとなる。この機会の 1 つが、FD 研修である。今回ヒアリングした事例では、多くの教員が集まる教授会の前後に、あわせて FD 研修会を開催することで、教員の参加率を高めていた。この他、各部署の中堅・若手レベルの教員が参加する FD 組織を設置することで、教員の教育に対する意見を吸い上げられるようにしている事例もあった。

ただし、ヒアリング事例で多く語られたポイントとして、「教員への負担は大きくしない」ことがあげられる。教員に過大な負荷をかけずに、教育について意識を高めてもらうことが重要な点といえる。

(2)ベストプラクティスの共有

多くの大学の事例で実施されていたのが、教育活動に関するベストプラクティスの共有である。優れた授業や教育活動を行っている教員を、学生アンケートや推薦によって選出し表彰する表彰・顕彰制度を有する大学もある。

表彰・顕彰制度を設ける際、ただ教員を表彰するだけでなく、その教員の教育内容について、他の教員にも伝えることが重要である。優秀な教員に、公開授業や模擬講座、教育内容についての報告会を行ってもらうことで、そのノウハウや授業設計の考え方が、他の教員にも共有することができる。

さらに、公開授業や模擬講座、報告会については、聴講して終わるのではなく、この授業・報告会の後に、参加教員同士のディスカッションや意見交換の場を設けることが効果的といえる。

(3)問題を抽出し改善する仕組みを整える

ベストプラクティスを抽出する一方で、教育活動に問題が発生していないか確認をすることも、FD 活動において重要な要素といえる。今回、ヒアリングをした大学の事例では、問題点の確認のために、学生の授業アンケートを使用しているケースが多くみられた。

学生の授業アンケート結果は、各教員にフィードバックし、自身の教育内容を振り返るきっかけとしてもらう。単に結果を見せるだけでなく、全体値との比較等ができるようにして、自身の状況がよりわかるような形での資料としている大学もある。また、学生の授業アンケートは、学期末に行われることが多いが、これを授業期間の中盤で行い、その後の授業改善に利用できるような工夫を行っているケースもあった。

この他、学部の教育担当等が、教員の成績評価、学生の留年率の状況を確認し、教員の評価方法が妥当なものとなっているかを確認するケースもあった。

(4)基礎教育で教員の教育力をそろえる工夫

学部・教員アンケートの結果でも示されていたが、学生の学力レベルのバラつきが、現在の大学教育での大きな課題となっている。今回ヒアリングした多くの大学では、この課題に対応するため、1年次の基礎教育での教育内容や達成レベルをそろえるための工夫が行われていた。

具体的には、受講生の多い（＝多くの教員が関わる）基礎教育において、教える側の教育の質をそろえるため、シラバス（全体の授業スケジュールから1回1回の授業の組み立てまで記載）、教材、評価方法・テスト等について、統一したものを使用している。さらに、かかわる先生が多いため、各授業に関するミーティングやメールでのやり取りを数多く実施していた。これにより、1年生段階で学生に確実に学力をつけさせて、2年生以降での専門教育に臨めるような形としていた。

(5)FD 担当組織は教員とコミュニケーションを取る仕組みづくりを

ヒアリングでは、FD 担当者は、各教員と信頼関係を構築することの重要性について、多

く指摘された。信頼関係を構築するためには、FD 担当と教員がコミュニケーションをとる機会を、いかに多く作れるかが重要となる。

今回のヒアリングでは、FD 研修について、単なる講座にとどめるだけでなく、面談等を組み込むことによって、教員との関係づくりを促進させていた。また、FD 活動とともに、ICT 支援等の他の業務支援をミッションにすることで、FD 担当と教員とが接する機会を増やすといったケースもあった。

また、FD 担当部署では、教育の業績評価は行わない、といったことも工夫としてあげられていた。FD 担当が業績評価を行ってしまうと、教員側が FD 担当者に対して身構えてしまい、FD 活動がうまくいかないことが多い。そこで、FD 担当と業績評価は、機能として切り離すことが望ましいといえる。

(6)全学的なバックアップが有効

今回のヒアリングでは、教員の教育活動に対するモチベーションについては、評価や処遇への反映より、「学生の成長」や「学生が卒業後に学生時代を振り返って話をしてくれること」等の学生の成長や学生・卒業生からの反響の方がモチベーションへの影響が大きい、といった意見が多く語られた。さらには、大学が FD 活動を後押ししてくれることで、頑張っている先生がより頑張れるといった意見も多く語られた。

大学での FD 活動を活性化するためには、現場の FD 担当や個々の教員に任せるだけでなく、大学トップが FD 活動を牽引することが重要といえる。

第6章 分析・考察

これまでの調査結果を踏まえ、我が国の大学において、教育活動および教育評価を確立するための方策について分析・考察を行う。

6-1 大学教員として身につけるべき能力

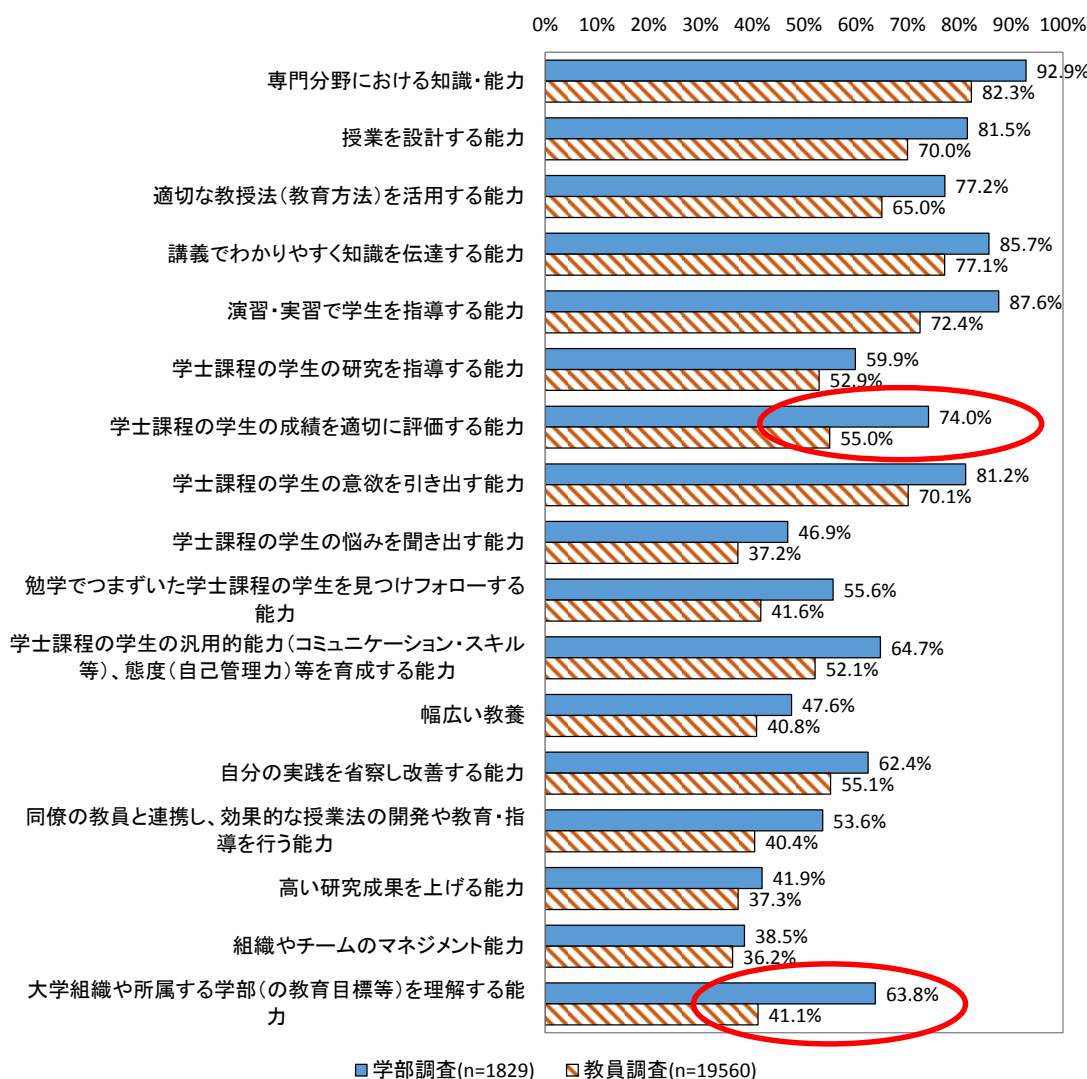
6-1-1 必要な能力

大学教員として身につけるべき能力を、学部調査と教員調査で比較したところ、全体的な傾向は学部と教員で傾向は似ている。いずれも、「専門分野における知識・能力」「講義でわかりやすく知識を伝達する能力」「演習・実習で学生を指導する能力」「学士課程の学生の意欲を引き出す能力」「授業を設計する能力」の割合が高い。

さらに、学部調査では、「学士課程の学生の成績を適切に評価する能力」「大学組織や所属する学部（の教育目標等）を理解する能力」を必要とする割合が、教員調査よりも高くなっている。これらの能力は、学部（組織）として体系的な教育を行うために、目標を理解し、その結果を確認・評価するために、必要な能力といえる。学部は、個々の教育の質の向上だけでなく、学部全体としての教育の質の向上についても、より重要視し教員に期待していることがわかる。

また、必要な能力のうち、「学士課程の学生の悩みを聞き出す能力」「勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力」「学士課程の学生の汎用的能力（コミュニケーション・スキル等）、態度（自己管理能力）等を育成する能力」と「大学組織や所属する学部（の教育目標等）を理解する能力」は私立大学でより必要とされる能力、「高い研究成果を上げる能力」は国立大学で必要とされる能力となっている。

図表 6-1 学士課程の学生を教育するために必要な能力 (必要)



必要	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
国立・学部	97.3%	79.0%	73.9%	84.1%	85.2%	73.0%	75.5%	80.3%	41.2%	46.9%	59.6%	47.4%	64.7%	51.8%	60.6%	35.8%	59.6%
国立・教員	85.1%	66.2%	59.6%	71.5%	67.9%	61.0%	51.4%	64.7%	30.9%	33.2%	44.2%	37.4%	51.7%	35.3%	44.6%	34.3%	34.2%
公立・学部	97.6%	78.2%	68.5%	77.4%	87.1%	72.6%	75.0%	79.8%	41.9%	54.0%	60.5%	38.7%	58.1%	47.6%	56.5%	41.9%	62.1%
公立・教員	84.9%	66.9%	63.1%	74.2%	73.8%	55.5%	54.8%	67.3%	34.3%	37.7%	51.6%	42.4%	56.3%	43.3%	39.3%	38.2%	41.3%
私立・学部	91.2%	82.5%	78.9%	87.0%	88.3%	55.1%	73.5%	81.6%	48.9%	58.2%	66.6%	48.4%	62.1%	54.6%	35.3%	38.9%	65.1%
私立・教員	80.2%	72.8%	68.7%	81.1%	75.0%	47.5%	57.2%	73.8%	41.5%	47.4%	57.1%	42.8%	57.1%	43.3%	32.4%	37.1%	45.4%

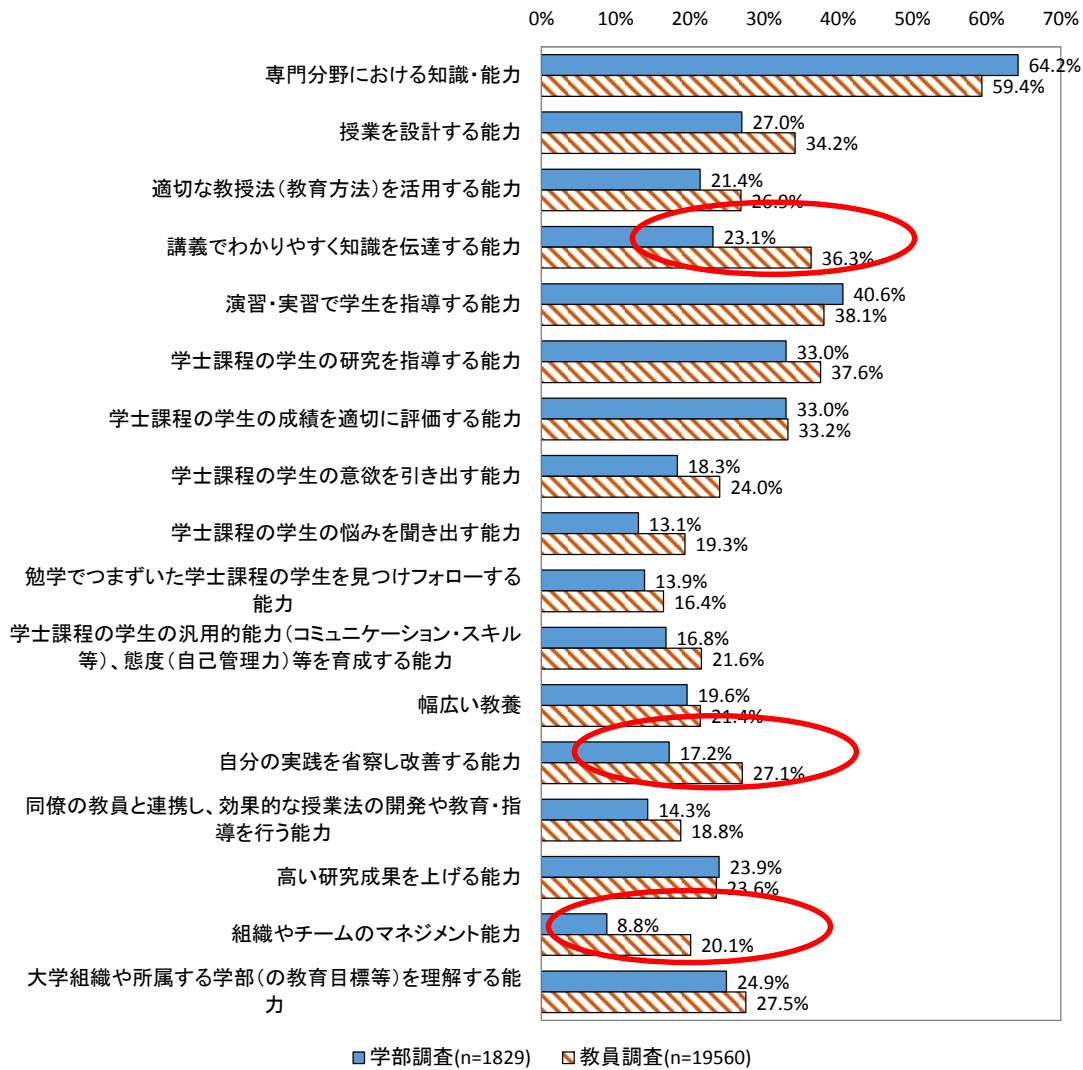
学部一教員	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
国立・差	12.2	12.8	14.2	12.6	17.3	12.0	24.1	15.6	10.3	13.7	15.4	10.0	13.0	16.4	16.0	1.5	25.4
公立・差	12.6	11.4	5.5	3.2	13.3	17.1	20.2	12.6	7.7	16.3	8.9	-3.7	1.7	4.3	17.2	3.7	20.8
私立・差	11.0	9.7	10.2	5.9	13.3	7.6	16.3	7.7	7.3	10.8	9.4	5.7	5.0	11.4	2.9	1.8	19.7

6-1-2 身につけている能力

大学教員として身につけている能力を、学部調査と教員調査で比較したところ、多くの能力で「身につけている」とする割合は、学部調査と教員調査で変わらない。

ただし、「講義でわかりやすく知識を伝達する能力」「自分の実践を省察し改善する能力」「組織やチームのマネジメント能力」については、教員が認識するほど、学部は身につけているとは認識していない。

図表 6-2 身につけている能力 (身につけている)



身につけている	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
国立・学部	79.5%	31.8%	22.9%	24.8%	46.9%	50.7%	40.4%	21.3%	10.2%	11.6%	17.0%	22.4%	20.2%	15.4%	45.0%	12.1%	26.4%
国立・教員	63.6%	32.6%	25.2%	34.2%	38.2%	44.2%	32.7%	22.2%	15.8%	13.6%	19.0%	20.7%	26.3%	17.2%	29.2%	20.7%	23.5%
公立・学部	71.0%	27.4%	22.6%	19.4%	37.1%	37.9%	29.8%	18.5%	13.7%	12.9%	17.7%	16.9%	16.9%	11.3%	22.6%	8.9%	22.6%
公立・教員	57.4%	30.2%	23.7%	32.7%	35.7%	37.4%	30.3%	22.7%	18.0%	15.5%	20.6%	18.9%	25.9%	17.5%	22.9%	19.9%	23.9%
私立・学部	59.4%	25.6%	20.8%	23.0%	39.2%	27.6%	31.2%	17.5%	13.8%	14.6%	16.6%	19.1%	16.4%	14.3%	18.2%	7.9%	24.7%
私立・教員	56.9%	35.7%	28.4%	38.2%	38.3%	33.6%	33.9%	25.3%	21.7%	18.3%	23.3%	22.2%	27.7%	19.9%	20.1%	19.8%	30.6%

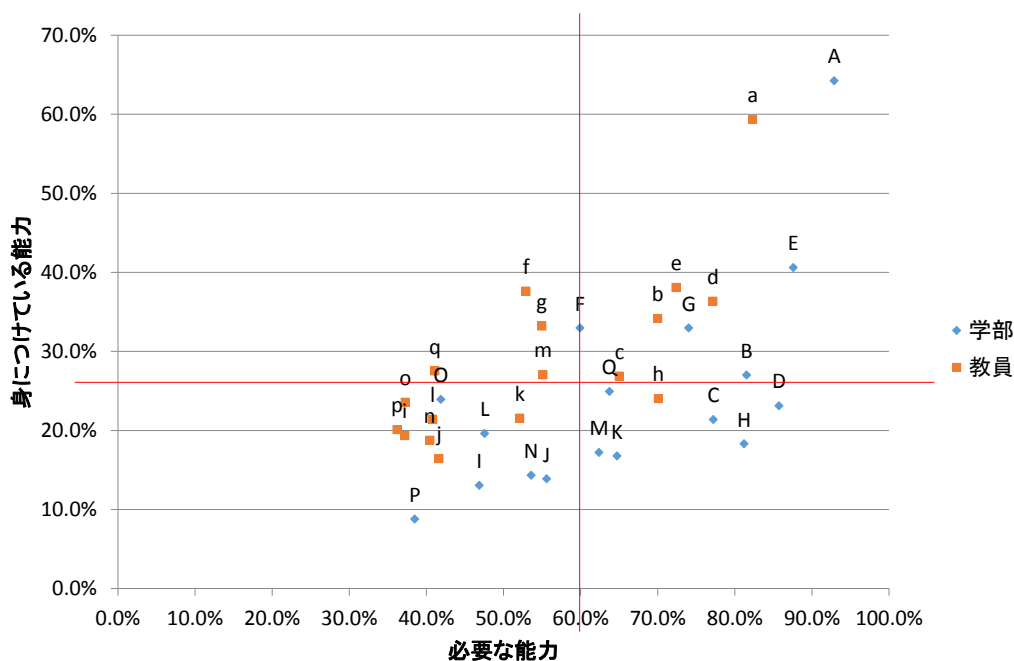
学部一教員	専門分野における知識・能力	授業を設計する能力	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	演習・実習で学生を指導する能力	学士課程の学生の研究を指導する能力	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理能力)等を育成する能力	幅広い教養	自分の実践を省察し改善する能力	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	高い研究成果を上げる能力	組織やチームのマネジメント能力	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
国立・差	15.9	-0.8	-2.3	-9.4	8.7	6.5	7.8	-0.9	-5.6	-2.0	-2.1	1.7	-6.1	-1.9	15.8	-8.5	3.0
公立・差	13.6	-2.8	-1.2	-13.3	1.4	0.5	-0.5	-4.2	-4.3	-2.6	-2.9	-1.9	-9.0	-6.2	-0.3	-11.0	-1.4
私立・差	2.4	-10.0	-7.5	-15.2	0.9	-6.0	-2.8	-7.9	-7.9	-3.7	-6.6	-3.1	-11.3	-5.6	-1.9	-11.9	-5.8

6-1-3 必要な能力と身につけている能力の比較

必要な能力と身につけている能力をマッピングした（アルファベット大文字が学部、小文字が教員）。右下の事象が「必要だが身につけていない能力」であり、「学士課程の学生の意欲を引き出す能力（H）」は、学部、教員いずれも、「必要だが身につけていない」と認識している。一方で、「適切な教授法（教育方法）を活用する能力（C）」「講義でわかりやすく知識を伝達する能力（D）」は、学部のみが「必要だが身につけていない能力」と認識している。

アンケート結果やヒアリング結果でも見たように、学生の学力のバラつきが教育上の大きな課題となっている。学部（大学に）は、この問題に対応するため、教員に対し「学士課程の学生の意欲を引き出す能力」に加え、「適切な教授法（教育方法）を活用する能力」や「講義でわかりやすく知識を伝達する能力」のさらなるレベルアップを望んでいることがわかる。

図表 6-3 必要な能力と身につけている能力の比較



A	専門分野における知識・能力	J	勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力
B	授業を設計する能力	K	学士課程の学生の汎用的能力(コミュニケーション・スキル等)、態度(自己管理力)等を育成する能力
C	適切な教授法(教育方法)を活用する能力	L	幅広い教養
D	講義でわかりやすく知識を伝達する能力	M	自分の実践を省察し改善する能力
E	演習・実習で学生を指導する能力	N	同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力
F	学士課程の学生の研究を指導する能力	O	高い研究成果を上げる能力
G	学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	P	組織やチームのマネジメント能力
H	学士課程の学生の意欲を引き出す能力	Q	大学組織や所属する学部(の教育目標等)を理解する能力
I	学士課程の学生の悩みを聞き出す能力		

6-2 学生の到達目標と教育活動・教育能力との関係

6-2-1 教員の教育能力の分類

教員調査を用いて、教員の教育能力の必要性、保有状況で、因子分析をそれぞれ実施した。その結果、重視する能力、身につけている能力のいずれも（構成要素に若干の違いはあるものの）「授業設計・実施因子」「研究指導因子」「学生コミュニケーション因子」の3つに分類された。

図表 6-4 必要な能力、身につけている能力の因子分析結果

	必要な能力			身につけている能力		
	授業設計・実施因子	研究指導因子	学生コミュニケーション因子	授業設計・実施因子	研究指導因子	学生コミュニケーション因子
授業を設計する能力	.715	.225	.216	.757	.361	.254
適切な教授法（教育方法）を活用する能力	.705	.168	.314	.758	.292	.330
講義でわかりやすく知識を伝達する能力	.686	.088	.264	.693	.279	.309
演習・実習で学生を指導する能力	.566	.236	.251	.482	.440	.312
学士課程の学生の成績を適切に評価する能力	.491	.331	.384	.478	.472	.336
学士課程の学生の意欲を引き出す能力	.418	.111	.534	.413	.303	.613
勉学でつまづいた学士課程の学生を見つけフォローする能力	.266	.069	.749	.230	.167	.787
学士課程の学生の悩みを聞き出す能力	.229	.111	.741	.214	.128	.807
学士課程の学生の汎用的能力（コミュニケーション・スキル等）、態度（自己管理能力）等を育成する能力	.274	.175	.606	.288	.340	.597
同僚の教員と連携し、効果的な授業法の開発や教育・指導を行う能力	.208	.367	.552	.215	.416	.494
高い研究成果を上げる能力	.061	.754	.172	.209	.716	.139
学士課程の学生の研究を指導する能力	.243	.536	.176	.341	.598	.186
組織やチームのマネジメント能力	.096	.517	.500	.164	.567	.419
専門分野における知識・能力	.333	.445	-.008	.338	.561	.059
自分の実践を省察し改善する能力	.294	.407	.489	.271	.519	.413
大学組織や所属する学部（の教育目標等）を理解する能力	.212	.404	.497	.216	.504	.415
幅広い教養	.188	.356	.409	.244	.498	.316

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法。7 回の反復で回転が収束。

学部別に上記の因子得点を比較すると、いわゆる文系と理系で、必要と考えている教育の能力が異なった。

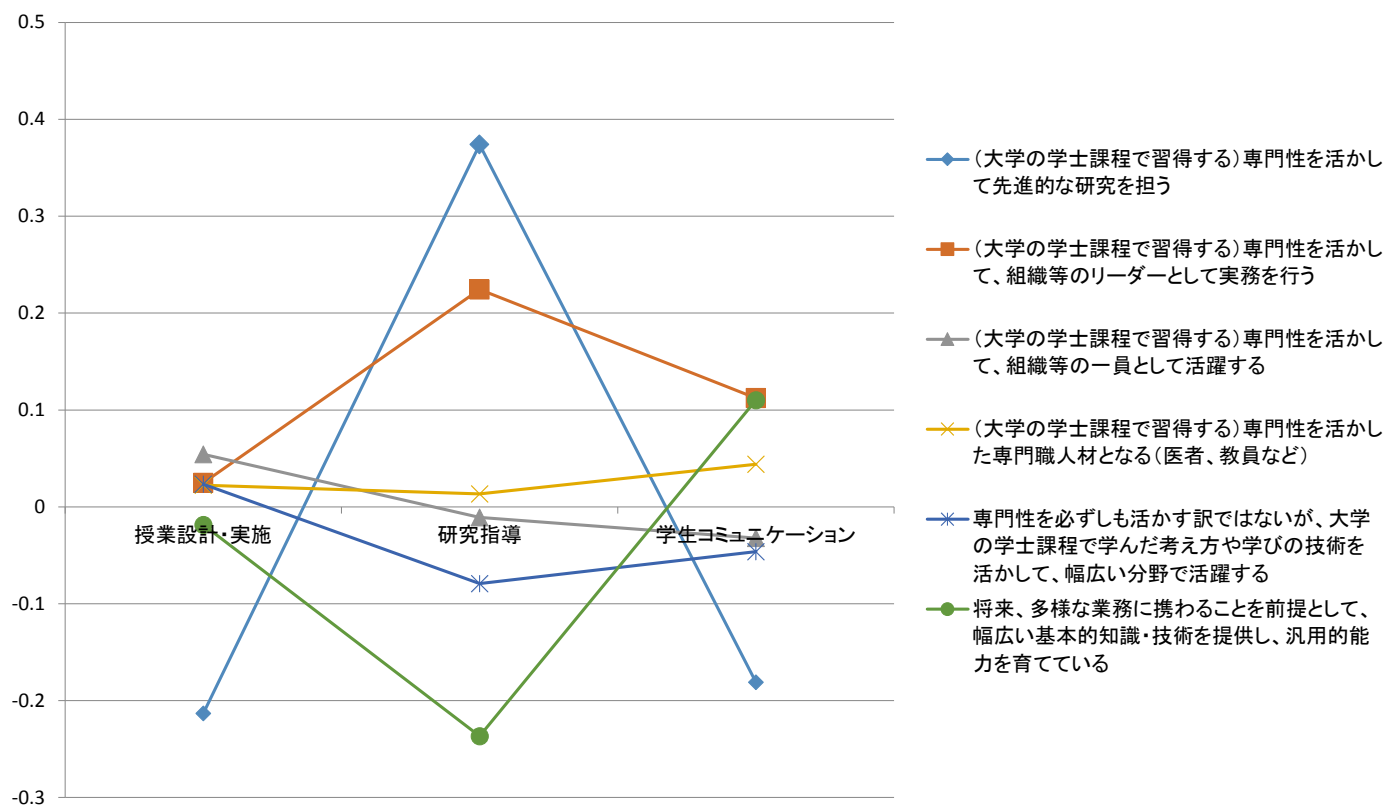
	n	重視能力			身につけている能力		
		授業設計・実施因子	研究指導因子	学生コミュニケーション因子	授業設計・実施因子	研究指導因子	学生コミュニケーション因子
人文科学	2400	0.09	-0.06	0.10	0.24	0.06	0.15
社会科学	2832	0.08	-0.13	-0.02	0.11	-0.04	0.09
理学	2145	-0.05	-0.00	-0.29	0.03	0.14	-0.32
工学	3323	-0.04	0.02	-0.12	-0.03	0.23	-0.13
農学	1139	-0.04	0.13	-0.04	-0.13	0.15	-0.06
保健	5157	-0.10	0.04	0.05	-0.22	-0.15	-0.03
商船	8	0.04	0.24	0.27	0.03	-0.02	0.15
家政	346	0.30	0.07	0.29	0.04	-0.23	0.16
教育	1494	0.14	0.01	0.25	0.20	-0.28	0.33
芸術	532	0.11	0.12	0.21	0.22	0.10	0.32
その他	184	0.02	-0.12	0.20	0.09	-0.22	0.16

6-2-2 卒業後の役割・業務と研究能力の関係

教員調査において、学生が学部卒業後に担うと想定する役割・業務別に、必要な能力を比較した。卒業後「専門性を活かして先進的な研究を担う」人材の育成を想定している教員は、研究指導力を必要としており、一方で「将来、多様な業務に携わることを前提」として育成している教員は、学生コミュニケーション能力を必要としている。「専門性を活かして、組織等のリーダーとして実務を行う」人材の育成を想定している教員は、研究指導力、学生コミュニケーション能力のいずれも必要としている。

授業設計・実施能力については、学生の学部卒業後に担うと想定する役割・業務によって必要性の違いは見られない。

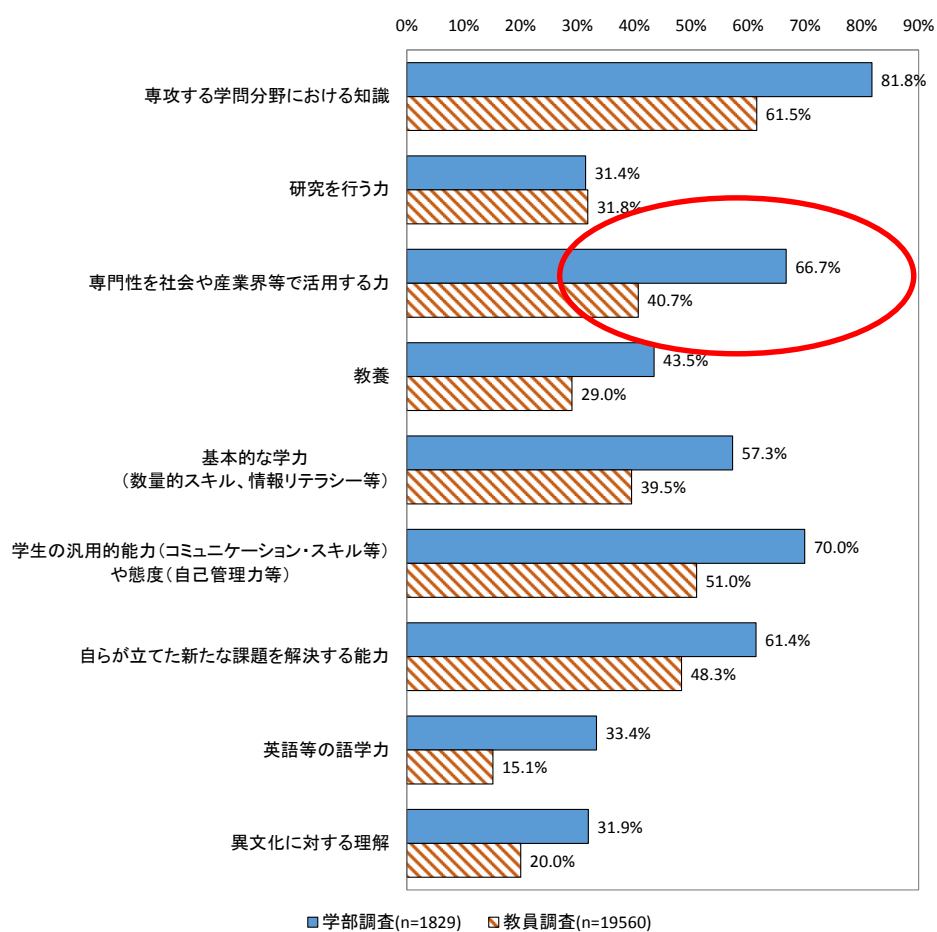
図表 6-5 学部学生が卒業後に担うと想定する役割・業務（最もあてはまるもの）別
必要な能力因子得点



6-2-3 教育の重視項目の比較

学生の教育における育成項目については、「専門性を社会や産業界等で活用する力」について、学部の方が教員より、より重視している。

図表 6-6 学士課程の教育において、以下の項目の育成を重視しているか（重視している）



6-3 FDによる教育活動の充実・教育能力の向上等、FDの有用性と課題

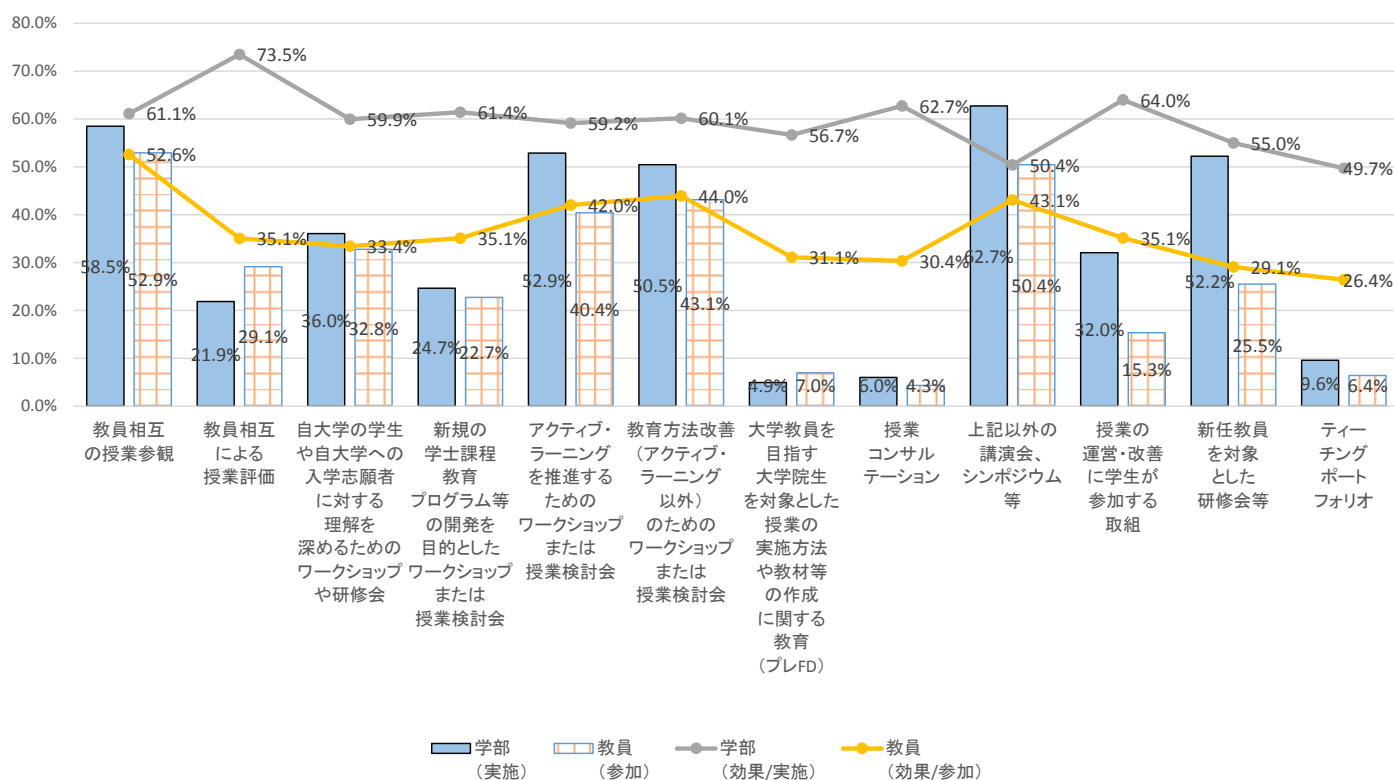
6-3-1 FD活動の効果

学部調査と教員調査で、FD活動で実施・参加した項目、効果のあった項目を比較した。その結果、「教員相互の授業参観」「上記以外の講演会、シンポジウム等」については、学部と教員で効果があったとする割合が近い。また、「アクティブ・ラーニングを推進するためのワークショップまたは授業検討会」「教育方法改善のためのワークショップまたは授業検討会」は、学部も参加した教員の評価は高めである。

一方で、実施率・参加率が低めの取組は、学部と教員で評価の乖離が大きい。特に、「教員相互による授業評価」「ティーチング・ポートフォリオ」等、教員評価にも関わるような取組は、学部は効果があったと考えているが教員は効果があったと回答する割合が低い。

ただし、今回あげられている実施率が低めの取組は、FD活動における先進的な取組である。また、評価に関わる（可能性のある）取組が、教員からの効果に関して割合が低いことから、取組の意義が正しく教員に伝わっていない可能性もある。実施率が低めの取組については、事例等も含め、今後も効果を見極めていく必要がある。

図表 6-7 FD活動で実施・参加した項目、効果のあった項目



国立	教員相互の 授業参観	教員相互に よる授業評価	自大学の学生や自大学 への入学志願者に対する 理解を深めるための ワークショップや研修会	新規の学士 課程教育プログラム等の 開発を目的としたワーク ショップまたは授業検討 会	アクティブ・ ラーニングを 推進するためのワーク ショップまたは授業検討 会	教育方法改善(アクティ ブ・ラーニング以外)のため のワークショップまたは 授業検討会	大学教員を 目指す大学院生を対象と した授業の実施方法や 教材等の作成に関する 教育(プレ FD)	授業コンサル テーション	上記以外の 講演会、シン ポジウム等	授業の運営・ 改善に学生 が参加する 取組	新任教員を 対象とした研 修会等	ティーチング ポートフォリオ
学部 (実施)	54.7%	21.0%	33.4%	26.1%	51.8%	52.0%	10.5%	5.7%	69.0%	36.9%	62.0%	14.3%
教員 (参加)	43.3%	22.3%	27.0%	19.9%	32.4%	37.5%	6.9%	4.2%	44.8%	14.3%	30.9%	6.1%
学部 (効果/実施)	64.5%	76.9%	58.9%	61.9%	57.8%	61.7%	46.2%	66.7%	47.3%	60.6%	57.0%	43.4%
教員 (効果/参加)	54.3%	34.5%	32.4%	34.9%	40.2%	44.8%	31.3%	36.5%	41.3%	33.6%	30.1%	26.8%
学部-教員 (実施・参加)	11.42	-1.31	6.38	6.25	19.32	14.49	3.60	1.44	24.18	22.68	31.12	8.15
学部-教員 (効果)	10.26	42.47	26.48	26.95	17.56	16.90	14.90	30.15	5.96	27.01	26.86	16.64

公立	教員相互の 授業参観	教員相互に よる授業評価	自大学の学生や自大学 への入学志願者に対する 理解を深めるための ワークショップや研修会	新規の学士 課程教育プログラム等の 開発を目的としたワーク ショップまたは授業検討 会	アクティブ・ ラーニングを 推進するためのワーク ショップまたは授業検討 会	教育方法改善(アクティ ブ・ラーニング以外)のため のワークショップまたは 授業検討会	大学教員を 目指す大学院生を対象と した授業の実施方法や 教材等の作成に関する 教育(プレ FD)	授業コンサル テーション	上記以外の 講演会、シン ポジウム等	授業の運営・ 改善に学生 が参加する 取組	新任教員を 対象とした研 修会等	ティーチング ポートフォリオ
学部 (実施)	59.7%	13.7%	37.9%	28.2%	42.7%	53.2%	3.2%	8.1%	69.4%	33.1%	50.8%	12.9%
教員 (参加)	48.7%	26.7%	29.7%	21.6%	39.3%	44.4%	6.6%	3.1%	48.1%	14.0%	20.1%	6.7%
学部 (効果/実施)	48.6%	58.8%	66.0%	60.0%	60.4%	60.6%	50.0%	40.0%	48.8%	68.3%	54.0%	62.5%
教員 (効果/参加)	51.5%	34.8%	30.5%	34.3%	45.3%	42.3%	31.3%	31.9%	45.2%	38.1%	28.1%	29.7%
学部-教員 (実施・参加)	11.01	-12.96	8.17	6.63	3.41	8.83	-3.37	4.93	21.22	19.06	30.67	6.17
学部-教員 (効果)	-2.86	24.07	35.46	25.74	15.12	18.26	18.69	8.09	3.68	30.20	25.82	32.80

私立	教員相互の 授業参観	教員相互に よる授業評価	自大学の学生や自大学 への入学志願者に対する 理解を深めるための ワークショップや研修会	新規の学士 課程教育プログラム等の 開発を目的としたワーク ショップまたは授業検討 会	アクティブ・ ラーニングを 推進するためのワーク ショップまたは授業検討 会	教育方法改善(アクティ ブ・ラーニング以外)のため のワークショップまたは 授業検討会	大学教員を 目指す大学院生を対象と した授業の実施方法や 教材等の作成に関する 教育(プレ FD)	授業コンサル テーション	上記以外の 講演会、シン ポジウム等	授業の運営・ 改善に学生 が参加する 取組	新任教員を 対象とした研 修会等	ティーチング ポートフォリオ
学部 (実施)	59.4%	22.9%	36.6%	23.9%	54.1%	49.8%	3.5%	5.9%	60.3%	30.6%	49.6%	7.9%
教員 (参加)	59.5%	33.7%	36.8%	24.7%	45.5%	46.4%	7.0%	4.6%	54.2%	16.2%	22.9%	6.6%
学部 (効果/実施)	61.4%	73.4%	59.6%	61.4%	59.4%	59.6%	66.0%	64.6%	51.6%	64.7%	54.4%	9.4%
教員 (効果/参加)	51.9%	35.3%	34.2%	35.3%	42.4%	43.8%	31.0%	26.7%	43.8%	35.7%	28.3%	25.8%
学部-教員 (実施・参加)	-0.03	-10.85	-0.21	-0.75	8.62	3.33	-3.50	1.34	6.11	14.40	26.72	1.38
学部-教員 (効果)	9.51	38.10	25.39	26.18	16.99	15.88	34.97	37.89	7.80	29.04	26.07	-16.32

6-3-2 教員に評価の高いFD活動等

学部調査と教員調査を紐付けて分析した。教員アンケートを5名以上回答している学部のみを調査対象とした。

(1)FDの実施回数と教員の評価

「FD研修等における教育方法等に関する意見交換会」や「FD研修等における教育方法等に関するワークショップ」について、年間実施回数が6回以上の場合、教員はFD活動が役立っていると感じる。また、意見交換会では、「実施していない」場合と「年間1回実施」の場合で教員の評価に差はない。

なお、年間実施回数が6回というのは、2学期制の場合、1学期につき3回（授業期間開始前、中間、授業期間終了後）実施と考えれば、少なくとも1回は授業期間中にFD研修を行っていることを意味すると考えられる。すなわち、単に6回という回数が重要と考えるのではなく、授業期間中にもFD研修（教員の教育に関する意見交換をする機会）が重要だと示しているといえる（このことは、ヒアリングでの結果ともあっている）。

図表 6-8 FD 研修等における教育方法等に関する意見交換会の年間実施回数別 教員による FD 活動の評価（役立ち度）（学部単位の分析）

	回答件数	FDは役立っているか (教員調査 4~1点)
全体	826	2.85
0回	154	2.83
1回	202	2.81
2回	231	2.85
3-5回	171	2.85
6回以上	68	2.97

図表 6-9 FD 研修等における教育方法等に関するワークショップの年間実施回数別 教員による FD 活動の評価（役立ち度）（学部単位の分析）

	回答件数	FDは役立っているか (教員調査 4~1点)
全体	826	2.85
0回	301	2.80
1回	235	2.86
2回	159	2.87
3-5回	104	2.88
6回以上	27	2.98

※いずれも分散分析の結果、5%水準で有意。

6-3-3 FD 活動が役立っている層の特徴

教員調査で、FD 活動が役に立っていると回答した教員の特徴をみる。その結果、「日常的に他の教員との意見交換を行っている」「学士課程の教育目標の達成に向けて貢献している」「大学教員としての教育能力を十分に備えている」「学士課程教育（授業時間、準備含む）に満足している」教員が、FD 活動が役に立っていると回答している。FD 活動は、教育活動に積極的にコミットしている人ほど、その意味をくみ取れているといえる。ヒアリング結果でも示されていたが、FD 研修の効果を高めるためには、同時に教員の教育への意識を高めていくことが重要だといえる。

図表 6-10 日常的に他の教員との意見交換の頻度別 FD 活動参画の役立ち度

	全体	役に立っている	どちらかといえば役に立っている	どちらかといえば役に立っていない	役に立っていない	わからない
全体	17925 (100.0%)	3274 (18.3%)	9042 (50.4%)	2554 (14.2%)	1425 (7.9%)	1630 (9.1%)
よく行っている	3887 (100.0%)	1148 (29.5%)	1763 (45.4%)	452 (11.6%)	273 (7.0%)	251 (6.5%)
どちらかというに行っている	8459 (100.0%)	1488 (17.6%)	4644 (54.9%)	1103 (13.0%)	538 (6.4%)	686 (8.1%)
どちらかというに行っていない	4909 (100.0%)	566 (11.5%)	2425 (49.4%)	901 (18.4%)	479 (9.8%)	538 (11.0%)
まったく行っていない	670 (100.0%)	72 (10.7%)	210 (31.3%)	98 (14.6%)	135 (20.1%)	155 (23.1%)

図表 6-11 学士課程の教育目標の達成に向けた寄与度別 FD 活動参画の役立ち度

	全体	役に立っている	どちらかといえば役に立っている	どちらかといえば役に立っていない	役に立っていない	わからない
全体	17925 (100.0%)	3274 (18.3%)	9042 (50.4%)	2554 (14.2%)	1425 (7.9%)	1630 (9.1%)
とても貢献している(学部の学士課程の教育の中心となってい	2731 (100.0%)	830 (30.4%)	1170 (42.8%)	316 (11.6%)	270 (9.9%)	145 (5.3%)
どちらかといえば貢献している	11297 (100.0%)	2037 (18.0%)	6044 (53.5%)	1566 (13.9%)	743 (6.6%)	907 (8.0%)
どちらともいえない	3125 (100.0%)	339 (10.8%)	1526 (48.8%)	522 (16.7%)	280 (9.0%)	458 (14.7%)
あまり貢献できていない	679 (100.0%)	57 (8.4%)	278 (40.9%)	142 (20.9%)	102 (15.0%)	100 (14.7%)
まったく貢献できていない	93 (100.0%)	11 (11.8%)	24 (25.8%)	8 (8.6%)	30 (32.3%)	20 (21.5%)

図表 6-12 自身の大学教員としての教育能力評価別 FD 活動参画の役立ち度

	全体	役に立っている	どちらかといえば役に立っている	どちらかといえば役に立っていない	役に立っていない	わからない
全体	17925 (100.0%)	3274 (18.3%)	9042 (50.4%)	2554 (14.2%)	1425 (7.9%)	1630 (9.1%)
十分備えている	5249 (100.0%)	1309 (24.9%)	2320 (44.2%)	734 (14.0%)	553 (10.5%)	333 (6.3%)
だいたい備えている	9932 (100.0%)	1585 (16.0%)	5385 (54.2%)	1419 (14.3%)	653 (6.6%)	890 (9.0%)
あまり十分ではない	2136 (100.0%)	312 (14.6%)	1081 (50.6%)	344 (16.1%)	143 (6.7%)	256 (12.0%)
十分ではない	253 (100.0%)	29 (11.5%)	116 (45.8%)	28 (11.1%)	44 (17.4%)	36 (14.2%)
わからない	355 (100.0%)	39 (11.0%)	140 (39.4%)	29 (8.2%)	32 (9.0%)	115 (32.4%)

図表 6-13 学士課程教育（授業時間、準備含む）の満足度別 FD 活動参画の役立ち度

	全体	役に立っている	どちらかといえば役に立っている	どちらかといえば役に立っていない	役に立っていない	わからない
全体	17925 (100.0%)	3274 (18.3%)	9042 (50.4%)	2554 (14.2%)	1425 (7.9%)	1630 (9.1%)
満足	2133 (100.0%)	665 (31.2%)	953 (44.7%)	213 (10.0%)	152 (7.1%)	150 (7.0%)
やや満足	6945 (100.0%)	1364 (19.6%)	3736 (53.8%)	882 (12.7%)	415 (6.0%)	548 (7.9%)
どちらともいえない	5041 (100.0%)	708 (14.0%)	2606 (51.7%)	768 (15.2%)	379 (7.5%)	580 (11.5%)
やや不満	2923 (100.0%)	431 (14.7%)	1414 (48.4%)	527 (18.0%)	291 (10.0%)	260 (8.9%)
不満	883 (100.0%)	106 (12.0%)	333 (37.7%)	164 (18.6%)	188 (21.3%)	92 (10.4%)

6-3-4 FD 活動と初年次教育の関係

ヒアリング等において初年次教育の重要性が指摘されたが、初年次教育への関わりと FD 活動との関係のみてみる。その結果、初年次教育へのかかわりが深いほど、FD 活動が役に立っていると回答している。初年次教育に関わっている教員は、入学したての学生と接することで、学生の特性や課題について感じる機会が多いと考えられる。そのような教員ほど、FD 活動が有効となっているといえる。

また、初年次教育へのかかわりが深いほど、学士課程の授業の満足度が高かった。

ヒアリング結果も含めて考えると、初年次教育と FD 活動を関係づけていくことも、FD 活動の活性化において重要な課題といえる。

図表 6-14 初年次教育への関わり別 FD 活動参画の役立ち度

	全体	役に立っている	どちらかといえば役に立っている	どちらかといえば役に立っていない	役に立っていない	わからない
全体	17925 (100.0%)	3274 (18.3%)	9042 (50.4%)	2554 (14.2%)	1425 (7.9%)	1630 (9.1%)
初年次教育全体の運営に関わっている	2404 (100.0%)	629 (26.2%)	1178 (49.0%)	275 (11.4%)	197 (8.2%)	125 (5.2%)
授業の担当者として関わっている	10256 (100.0%)	1793 (17.5%)	5225 (50.9%)	1549 (15.1%)	815 (7.9%)	874 (8.5%)
関わっていない	4663 (100.0%)	727 (15.6%)	2335 (50.1%)	656 (14.1%)	364 (7.8%)	581 (12.5%)
その他	602 (100.0%)	125 (20.8%)	304 (50.5%)	74 (12.3%)	49 (8.1%)	50 (8.3%)

図表 6-15 初年次教育への関わり別 学士課程教育（授業時間、準備含む）の満足度

	全体	満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満
全体	19560 (100.0%)	2288 (11.7%)	7428 (38.0%)	5675 (29.0%)	3179 (16.3%)	990 (5.1%)
初年次教育全体の運営に関わっている	2523 (100.0%)	324 (12.8%)	992 (39.3%)	621 (24.6%)	435 (17.2%)	151 (6.0%)
授業の担当者として関わっている	10988 (100.0%)	1372 (12.5%)	4326 (39.4%)	2864 (26.1%)	1849 (16.8%)	577 (5.3%)
関わっていない	5416 (100.0%)	536 (9.9%)	1872 (34.6%)	1994 (36.8%)	791 (14.6%)	223 (4.1%)
その他	633 (100.0%)	56 (8.8%)	238 (37.6%)	196 (31.0%)	104 (16.4%)	39 (6.2%)

6-4 大学教員の教育評価の活用と指標等の設定、具体的な評価方法

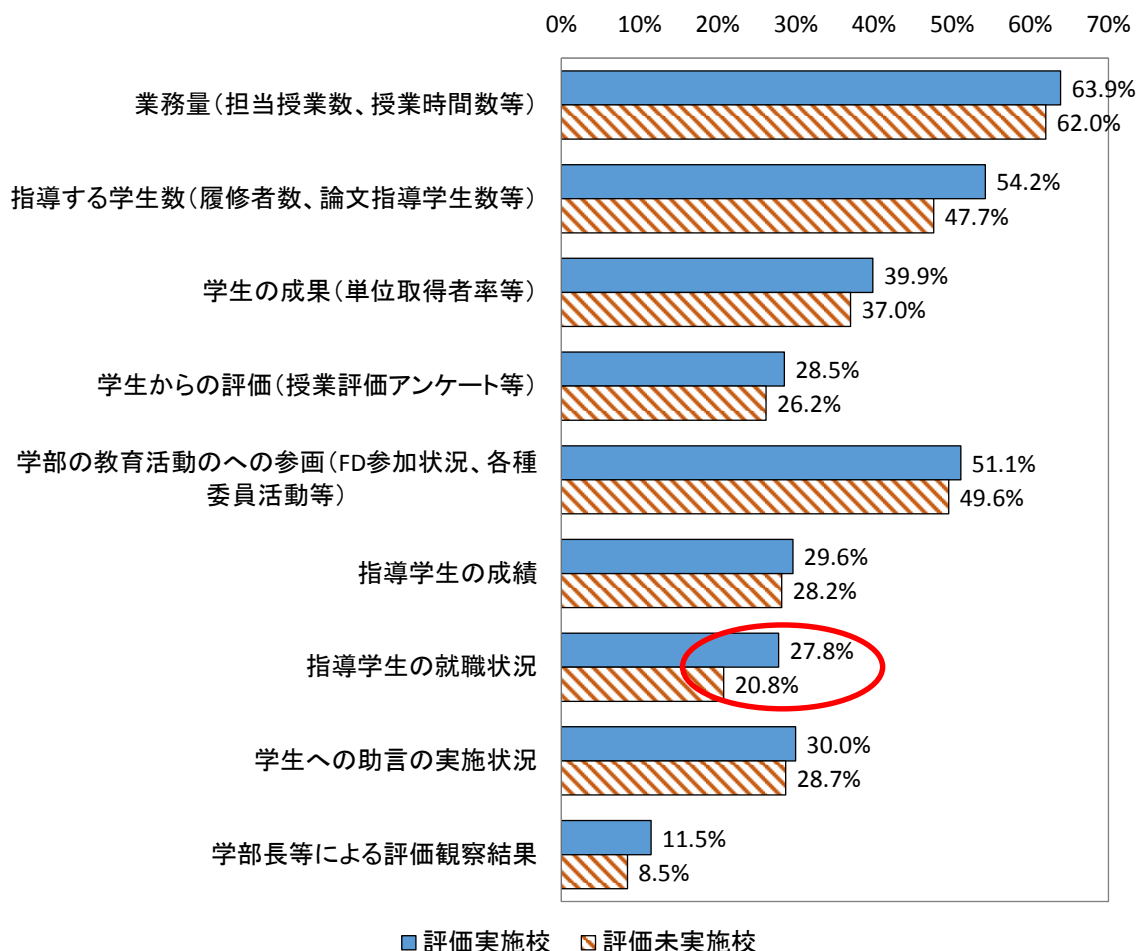
その学部で実際に評価の実施状況別に、教員が評価してほしい項目の割合を見た。

その結果、学部での現在の評価項目に関わらず、「業務量」「指導する学生数」「学部の教育活動への参画」で評価してほしい割合が高い。

また、「指導学生の就職状況」については、評価がなされている学部の教員の方が、評価として希望する割合が高い。

なお、「学生からの評価（授業評価アンケート等）」「学部長等による評価観察結果」は、学部アンケートの結果では実際に評価に使われているが、教員の希望はあまり高くはない。

図表 6-16 評価実施別 希望する教育活動評価の評価項目



6-5 大学の学士教育の状況と課題

6-5-1 1週間の業務時間理想と実態の比較

1週間の平均業務時間の割合を、理想と実態で比較した。その結果、「研究」時間を9%程度増やしたいと考えている。一方で、「学士課程教育（授業時間、準備含む）」を5.5%、「大学の管理・運營業務」を4.2%減らしたいと考えている。

なお、教員の1週間の平均業務時間は、52.1時間である。時間換算に直すと、学士課程教育の授業を約2.9時間減らしたいと思っているといえる。これは、授業の準備時間も含まれば授業1コマ分程度だと考えられる。1コマであれば、大学全体（学部全体）の開設授業科目の精選によって、減らすことが可能な範囲といえるかもしれない。

図表 6-17 1週間（授業開講期間）の業務時間の割合（理想 -（マイナス） 実態）
（%表記 n=19,560）

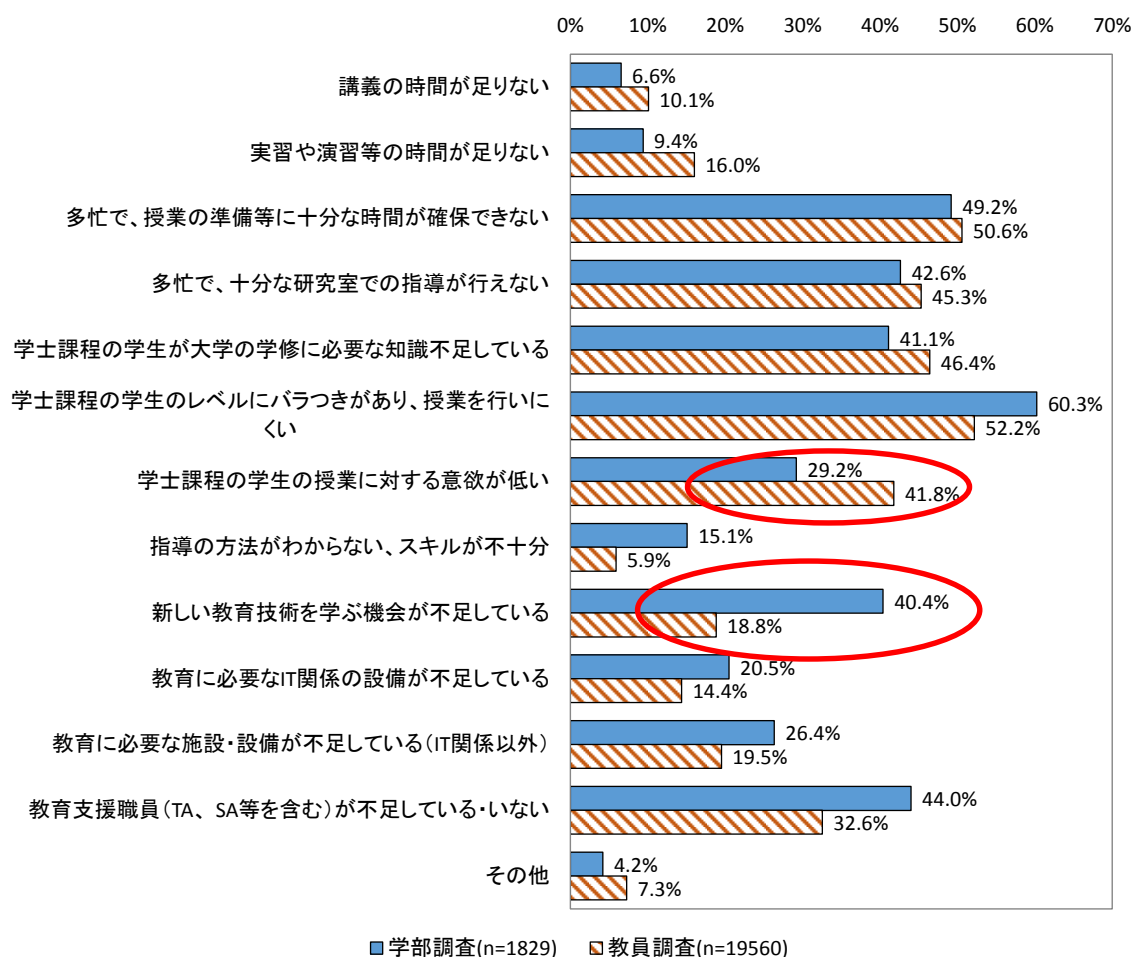
	研究	学士課程教育(研究室での学生指導時間等)	学士課程教育(授業時間、準備含む)	大学院教育(研究室での学生指導時間等)	大学院教育(授業時間、準備含む)	診療・臨床	社会貢献	大学の管理・運営	学外業務	その他
全体	9.0	0.7	-5.5	1.6	1.2	-1.2	1.3	-4.2	-1.1	-1.8
国立	8.9	0.1	-3.5	1.2	1.2	-1.3	0.9	-4.6	-1.4	-1.6
公立	8.0	0.1	-4.8	1.8	1.3	-1.3	1.4	-3.7	-1.1	-1.7
私立	9.3	1.0	-7.1	1.9	1.3	-1.1	1.6	-4.1	-1.0	-2.0
教授	8.8	0.9	-5.0	1.9	1.2	-0.4	1.2	-6.0	-1.1	-1.5
准教授	10.5	0.1	-7.1	1.6	1.0	-0.7	1.3	-3.6	-1.2	-2.0
講師	9.6	1.4	-7.0	1.6	1.2	-2.7	1.7	-2.3	-1.3	-2.1
助教	6.6	0.3	-2.9	0.8	1.8	-3.1	1.6	-2.0	-1.1	-2.1
人文科学	9.8	2.2	-8.6	1.9	1.1	0.1	1.6	-5.5	-0.9	-1.8
社会科学	10.4	1.4	-8.1	1.9	0.8	0.2	1.5	-5.1	-1.1	-1.8
理学	9.4	-1.0	-5.6	1.5	1.5	-0.1	1.0	-4.6	-0.7	-1.5
工学	9.2	-0.6	-5.5	1.6	1.5	0.0	1.0	-4.8	-1.0	-1.6
農学	9.4	-1.4	-4.4	2.1	1.4	-0.3	1.0	-5.5	-0.8	-1.4
保健	7.5	1.1	-2.8	1.5	1.4	-4.2	1.5	-2.5	-1.5	-2.0
商船	9.0	-1.6	-3.8	-0.1	-0.2	0.0	2.4	-5.7	-2.6	2.6
家政	10.5	1.1	-10.0	1.5	0.9	0.1	1.7	-3.6	-0.2	-2.1
教育	9.4	1.9	-6.8	1.6	0.6	-0.3	1.6	-3.9	-1.3	-2.7
芸術	7.9	2.0	-5.4	1.5	1.3	0.1	1.1	-4.7	-2.1	-1.8
その他	8.1	0.9	-5.5	2.8	1.5	0.2	1.0	-5.3	-1.8	-1.9

6-5-2 教育上の課題

教育上の課題としては、「学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いにくい」が、学部・教員共に最も割合が高い。これは、私立大学で顕著になっている（国立大学では「多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない」が最も割合が高い。ただし、ヒアリング等でも指摘されていたが、学生のレベルにバラつきは入試制度の多様化に起因する部分が多い。今後、国公立大学でも、この課題はより顕在化していく可能性もある）。

なお、学部と教員を比較すると、教員は「学生の授業に対する意欲が低い」ことを課題と思う一方で、学部は「教員が新しい教育技術を学ぶ機会が不足している」が課題と考えている。

図表 6-18 教育上の課題



	講義の時間が足りない	実習や演習等の時間が足りない	多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない	多忙で、十分な研究室での指導が行えない	学士課程の学生が大学の学修に必要な知識不足している	学士課程の学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いにくい	学士課程の学生の授業に対する意欲が低い	指導の方法がわからない、スキルが不十分	新しい教育技術を学ぶ機会が不足している	困ったときに相談する相手がいない	教育に必要なIT関係の設備が不足している	教育に必要な施設・設備が不足している(IT関係以外)	教育支援職員(TA、SA等を含む)が不足している・いない	その他
国立:学部	9.4%	11.9%	61.2%	52.8%	16.2%	28.3%	16.4%	10.8%	42.3%	4.0%	22.4%	33.7%	41.5%	6.5%
国立:教員	9.9%	15.4%	51.1%	48.2%	34.1%	38.0%	35.3%	5.6%	16.0%	8.6%	10.8%	16.7%	28.5%	8.9%
公立:学部	10.5%	12.1%	50.8%	41.9%	18.5%	34.7%	12.1%	12.9%	37.9%	5.6%	27.4%	33.9%	50.8%	5.6%
公立:教員	10.2%	16.1%	50.5%	42.9%	32.5%	34.4%	33.4%	8.4%	22.2%	10.8%	16.2%	20.0%	34.3%	7.7%
私立:学部	5.4%	8.5%	45.7%	39.9%	50.1%	71.5%	34.3%	16.5%	40.1%	3.9%	19.3%	23.6%	44.1%	3.4%
私立:教員	10.2%	16.4%	50.3%	43.8%	56.0%	63.5%	46.9%	5.7%	20.1%	8.9%	16.3%	21.2%	34.8%	6.2%

学部一教員	講義の時間が足りない	実習や演習等の時間が足りない	多忙で、授業の準備等に十分な時間が確保できない	多忙で、十分な研究室での指導が行えない	学士課程の学生が大学の学修に必要な知識不足している	学士課程の学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いにくい	学士課程の学生の授業に対する意欲が低い	指導の方法がわからない、スキルが不十分	新しい教育技術を学ぶ機会が不足している	困ったときに相談する相手がいない	教育に必要なIT関係の設備が不足している	教育に必要な施設・設備が不足している(IT関係以外)	教育支援職員(TA、SA等を含む)が不足している・いない	その他
国立:差	-0.5	-3.5	10.1	4.6	-18.0	-9.7	-18.9	5.2	26.3	-4.5	11.6	17.0	13.0	-2.4
公立:差	0.3	-4.0	0.3	-1.0	-13.9	0.3	-21.3	4.5	15.7	-5.2	11.2	13.9	16.5	-2.1
私立:差	-4.8	-7.9	-4.6	-3.9	-5.8	8.0	-12.6	10.7	20.0	-5.0	3.0	2.4	9.3	-2.8

6-6 考察

これまでの調査結果を踏まえて、大学教員の教育活動・教育能力および教育活動等の評価の在り方についての検討を行う。

6-6-1 学生の学力レベルのバラつきが課題

アンケートをみると、学士課程の教育上の課題は、「学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いにくい」が、学部・教員共に最も回答割合が高くなっている。学生の学力レベルのバラつきの発生は、ヒアリング等でも指摘されていたが、入試制度の多様化に起因する部分が大い。一般入試、推薦入試、AO入試等の学生の入り口の多様化に伴い、入学時点で学生の学力も多様化するようになっている。

このような学生の学力レベルのバラつきに対し、ヒアリングでみた事例では、1年次の基礎教育（初年次教育）に力を入れ、学生の学力の底上げを図る取組を行っていた。学生の学力を底上げするために、これまでバラバラであった基礎教育の教材（教育方法）や学生評価（教育の到達レベル）の統一化を行っている。教育方法や学生評価の統一化を行うためには、あわせて教員の教育についての意識を高めていくことも重要な課題となる。さらには、教員の初年次教育への参画とFD活動の充実をどう関係づけていくかも課題といえる。

6-6-2 大学教員に必要な教育能力

次に、大学教員に求められる教育力についてみる。全国の大学・教員が共通して認識している必要な教育能力として、「専門分野における知識・能力」「講義でわかりやすく知識を伝達する能力」「演習・実習で学生を指導する能力」「学士課程の学生の意欲を引き出す能力」「授業を設計する能力」等があげられる。

さらに、学生の学力のバラつきという大きな課題に対し、大学側は教員に対し「学士課程の学生の意欲を引き出す能力」「適切な教授法（教育方法）を活用する能力」「講義でわかりやすく知識を伝達する能力」のさらなるレベルアップを望んでいる。

加えて、学部（組織）として体系的な教育の実施に向け、「学士課程の学生の成績を適切に評価する能力」「大学組織や所属する学部（の教育目標等）を理解する能力」といった目標を理解し、その結果を確認・評価するための能力も必要性が高まっている。

6-6-3 大学による求められる教育能力の違い

ただし、教員に求められる能力は、全国で一律なわけではない。大学の掲げる教育目標や学生の状況によって異なる。

例えば、これまでみてきた「学生のレベルにバラつきがあり、授業を行いにくい」という課題は、私立大学（特に小規模校）において特に顕在化している。そのため、私立大学（特に小規模校）では、「学士課程の学生の悩みを聞き出す能力」「勉学でつまずいた学士課程の学生を見つけフォローする能力」「学士課程の学生の汎用的能力、態度等を育成する能力」といった、学生とコミュニケーションし学習を支援していくための能力が、他の大学より必要とされる。

このように大学の状況によって、教員に求められる能力が異なることを認識した上で、各大学にあった教育能力の形成を目指す必要がある。

6-6-4 FD 研修の在り方

次に、教員の教育能力を引き出す FD 活動、FD 研修の在り方について考察を行う。アンケートでは、FD 活動は、教育に関心の高い・積極的な層ほど役立っているとの結果となっていた。FD 活動は、教育活動に積極的にコミットしている人ほど、その内容をくみ取れることを意味している。ヒアリング結果とも合致するが、教員の教育活動への関心・意欲を高めることが、FD 活動を促進する上で最初に取り組むべき課題といえる（同時に、最初の難関であり、非常に難しいことではあるが）。

では、教員の教育活動への関心・意欲を高めるための工夫点についてみる。まず FD 研修についてみると、大学も教員も、ある程度の効果があると考えている取組は「教員相互の授業参観」「上記以外の講演会、シンポジウム等」「アクティブ・ラーニングを推進するためのワークショップまたは授業検討会」「教育方法改善のためのワークショップまたは授業検討会」等、大学での実施率の高いものがあげられている。まずは、これらの実施しやすい取組から開始するのは有効な手段であるといえる。さらに、これらの取組を行い、参加した教員の意欲を高めるためには、ヒアリングでは、授業参観や講演会等を実施するだけでなく、その後に教員同士の意見交換の場を設けることが、有効だということが示されていた。

ただし、FD 研修での意見交換会等は、年 1 回開催すればよいというものではない。年間である程度の数を行うことで、その効果は増す。特に、授業が行われている期間に FD 研修や意見交換会を行うことは、その内容をすぐに授業等にフィードバックすることができ、よ

り効果的な取組になる。

なお、FD 研修会について、ヒアリングでは教授会等の教員が集まる機会にあわせて行うことで教員の参加率を高めていた。大学経営層が FD 活動をバックアップし、大学運営の中に FD 活動を適切に位置付けていくことが、効果的な FD 活動を行う上では重要となる。

なお、「ティーチング・ポートフォリオ」等の先進的な取組については、まだまだ教員側からは効果があったとする回答は少ない。これらの取組については、実施の意義等も教員に伝えながら実施することが重要といえる。

6-6-5 教育活動に関する評価

教育活動に関する評価についてみると、「業務量」「指導する学生数」「学部の教育活動への参画」といった業務の量に関する項目については、大学で実際に実施されている割合も高く、教員の希望割合も高い。業務量については、大学・教員共に納得感の高い評価指標だといえる。

また、「指導学生の就職状況」等の教育の成果に関する項目については、評価項目として使用されている学部の教員の方が、評価として使用されていない学部の教員より、望ましい項目だとする割合が高い。教育の成果（学生の成長等）は、教員にとって納得感のある評価指標だと考えられる。

一方で、「学生からの評価（授業評価アンケート等）」「学部長等による評価観察結果」は、学部アンケートの結果では実際に評価に使われているが、教員の希望はあまり高くはない。評価に使用する際は、評価の意味等について教員の理解を得ながら実施することが必要だと考えられる。

なお、今回のヒアリングでは、「FD 担当部門は教育の業績評価は行わない」ことが工夫点としてあげられていた。FD 担当者が業績評価を行ってしまうと、教員側が身構えてしまい、FD 活動がうまくいかないことが多い。FD の担当者と教育業績評価の担当者は、機能として切り離すことが望ましい。

6-6-6 教員の業務時間のマネジメントの在り方

最後に、アンケート等で、学生の学力のバラつきとともに回答割合が高い課題である「教育等に十分な時間が確保できない」点についてみていく。

アンケート結果から教員の業務時間の実態についてみると、教員の 1 週間の平均業務時間

は、52.1 時間となっている（うち教育には 24.6 時間、研究には 12.2 時間）。一方で、教員の理想としては、「学士課程教育（授業時間、準備含む）」を約 2.9 時間、「大学の管理・運営業務」を約 2.1 時間減らし、「研究」時間に回したいと考えていた。

学士課程教育の授業を約 2.9 時間は、授業の準備時間も含めれば授業 1 コマ分程度だと考えられる。1 コマ分であれば、大学全体（学部全体）の授業科目のスリム化によって、減らすことが可能な範囲といえるのではないだろうか。教員が個々の授業科目の充実に注ぐ時間とエネルギーを増やすための授業科目の整理・統合の必要性については、中央教育審議会答申（平成 24 年）でも指摘されている。「大学の管理・運営業務」の減少も含め、教員の時間配分の問題は、大学全体のマネジメントによって改善できる部分がある可能性がある。

第7章 (参考資料) 短期大学との比較

学部調査アンケート、教員調査アンケートについては、一部の短期大学、短期大学教員にもご協力頂いている（学士課程教育を短期大学教育に読み替えて頂いている）。参考として、大学での調査結果と、短大での調査結果の比較表を掲載する。

7-1 学部調査

7-1-1 調査概要

(1)回答件数

65 学科から回答を頂いた。

(2)回答者属性

回答者属性は、下記の通り。学校基本調査と比較して、人文科学、その他が多めとなっていることに注意が必要である。

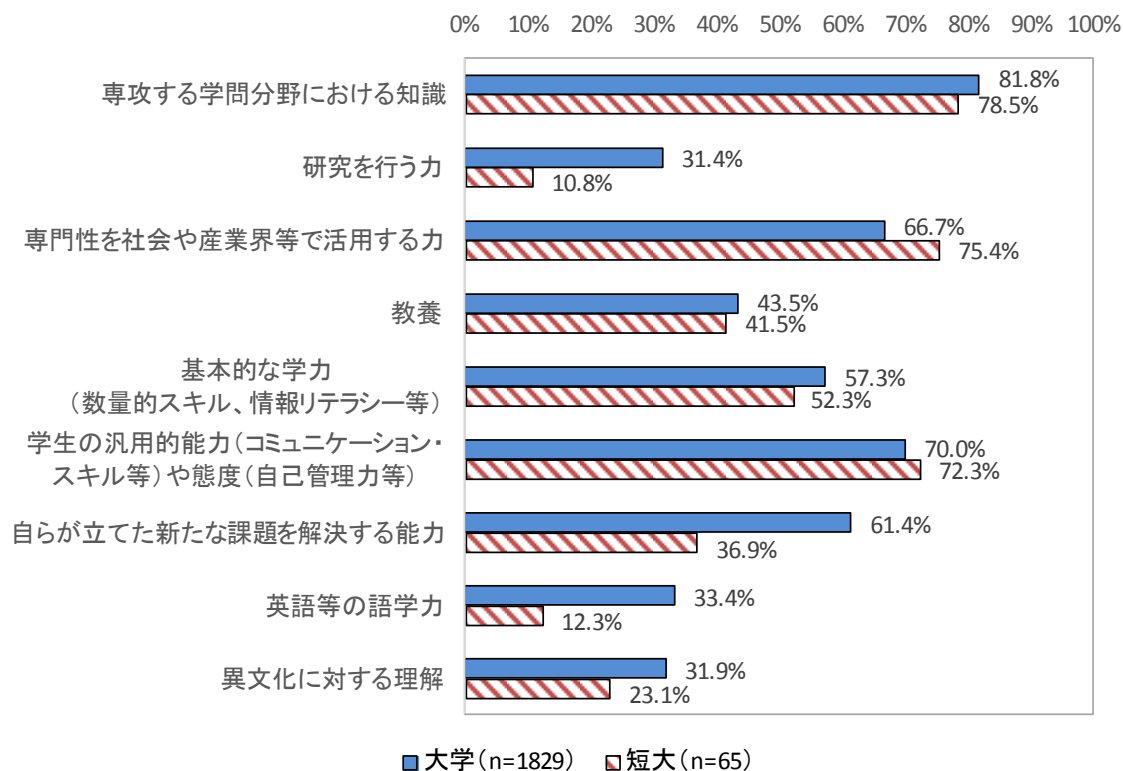
図表 7-1 分野別構成比

	人文科学	社会科学	教養	工 学	農 学	保 健	家 政	教 育	芸 術	そ の 他
今回調査	18.3%	8.3%			1.7%		23.3%	28.3%	5.0%	15.0%
平成26年度 学校基本調査	11.4%	12.2%	1.3%	3.6%	1.3%	8.5%	20.1%	29.9%	4.7%	7.1%

7-1-2 学士課程の教育目標

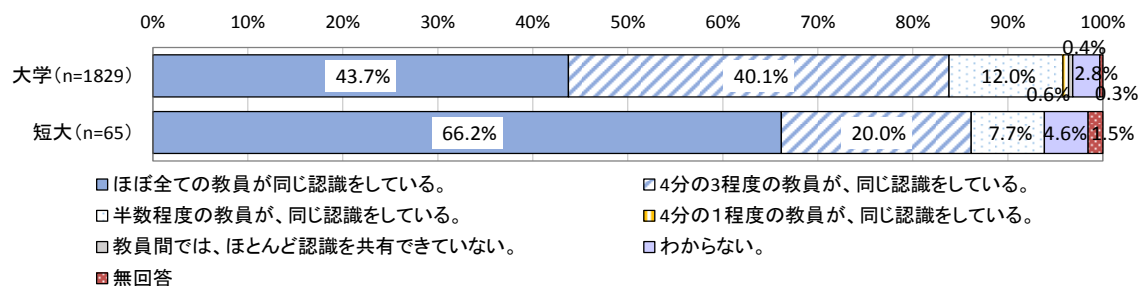
(1) 学士課程の教育の育成重視項目

図表 7-2 貴学部における学士課程の教育は、以下の項目の育成を、どの程度、重視して行っていますか。（大学 n=1,829、短大 n=65）「重視している」の比較



(2) 教育重視項目の認識共有状況

図表 7-3 前項の質問について、貴学部には所属する教員は、どの程度、認識を共有していますか。（大学 n=1,829、短大 n=65）

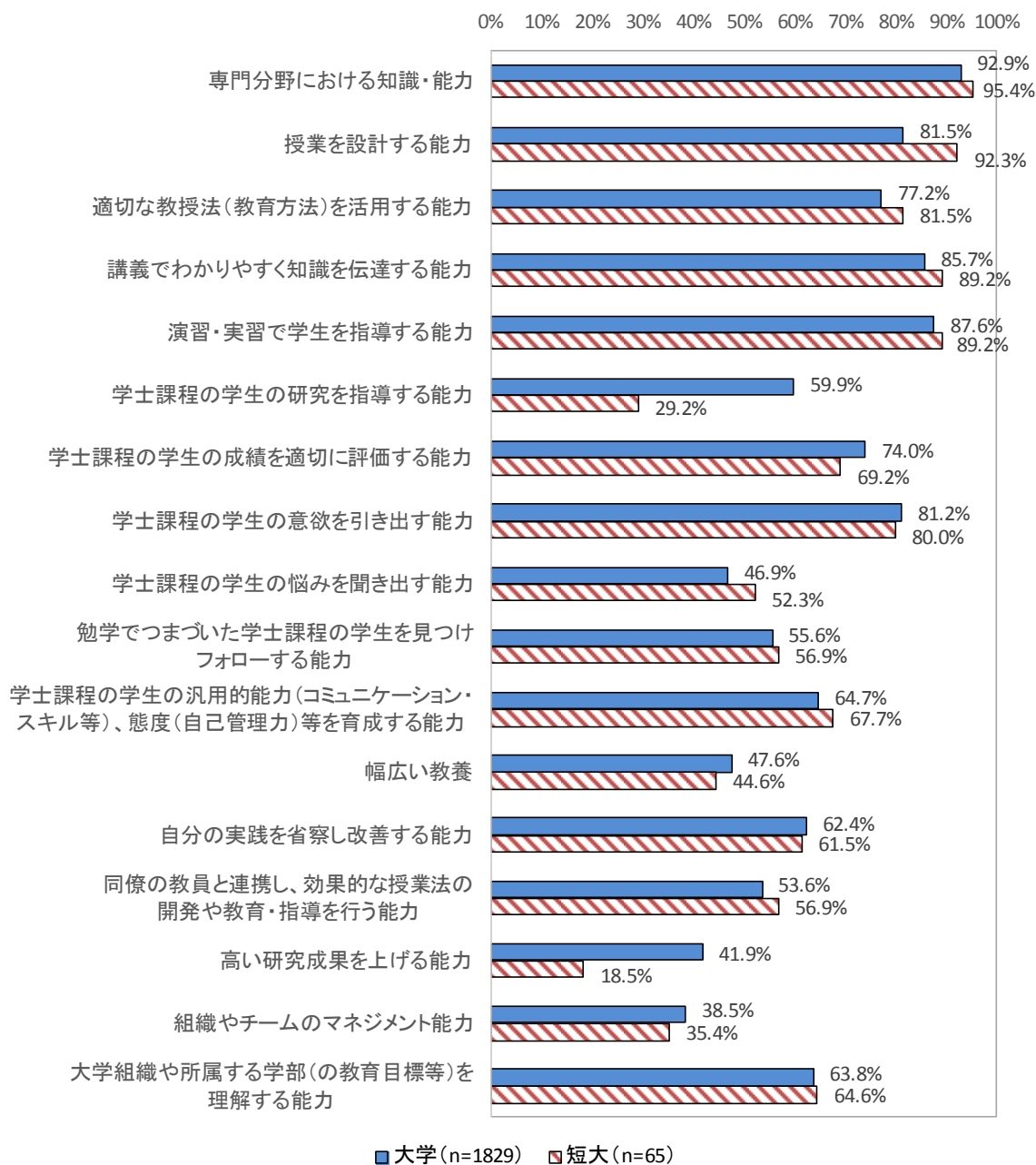


(3)教育に求められる能力

①求められる能力

図表 7-4 貴学部の教員として、問1のような教育するために求められる能力は何ですか。

(大学 n=1,829、短大 n=65) 「必要」の比較

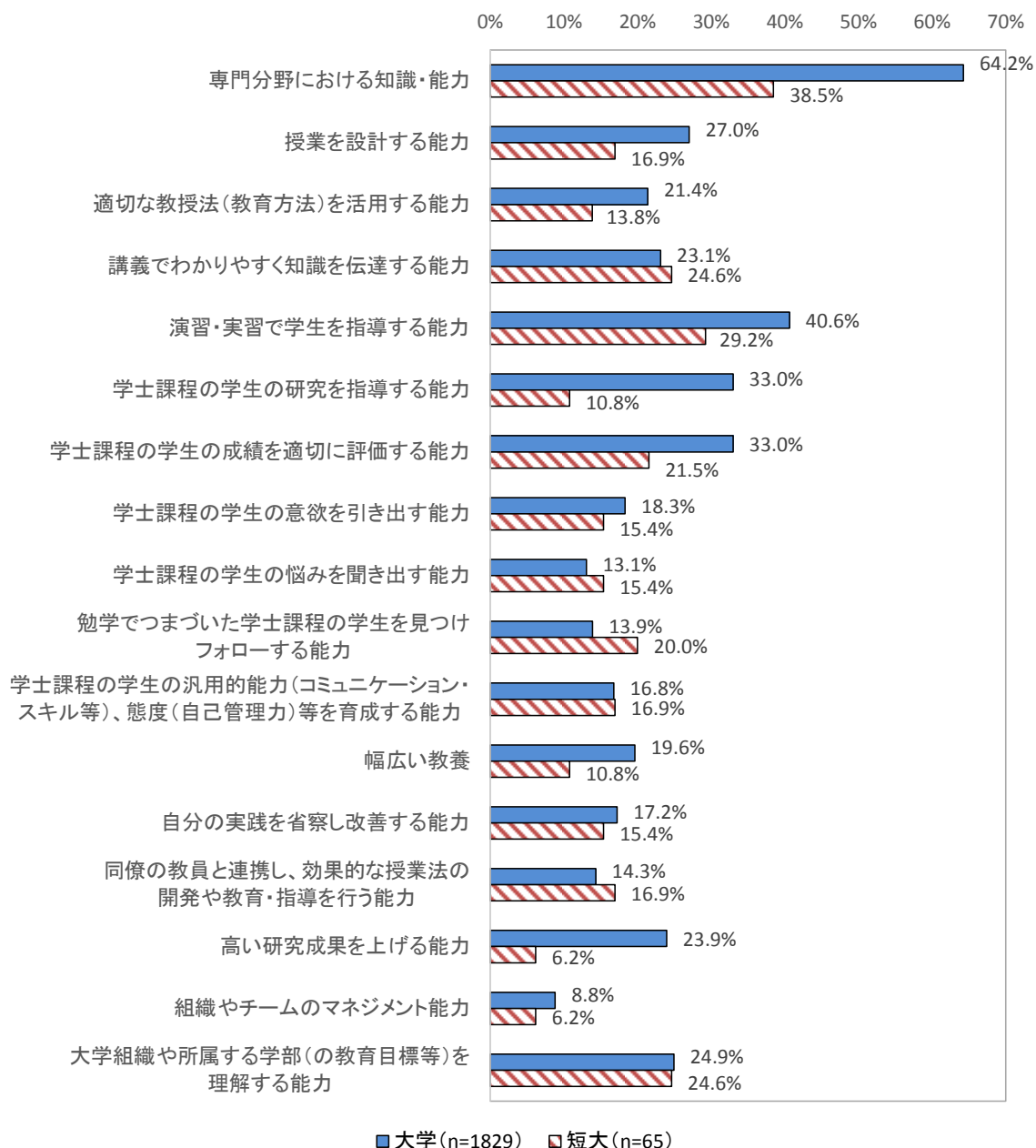


②身につけた能力

図表 7-5 貴学の教員の平均像としては、能力をどの程度身につけていますか。

(大学 n=1,829、短大 n=65) 「身につけている」の比較

(「身につけている」の比較)

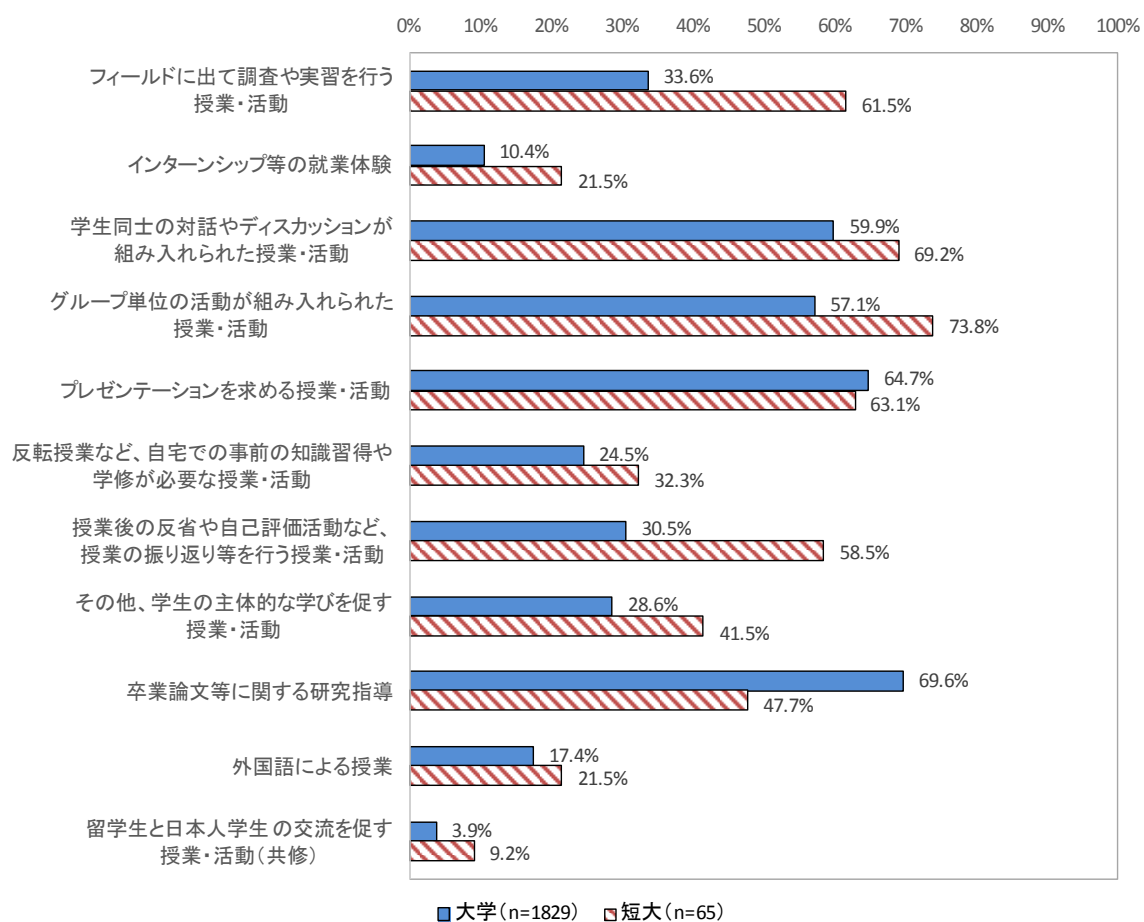


7-1-3 教育活動

(1) 学生の受講割合

図表 7-6 貴学部では、現在、以下のような教育について実施していますか。

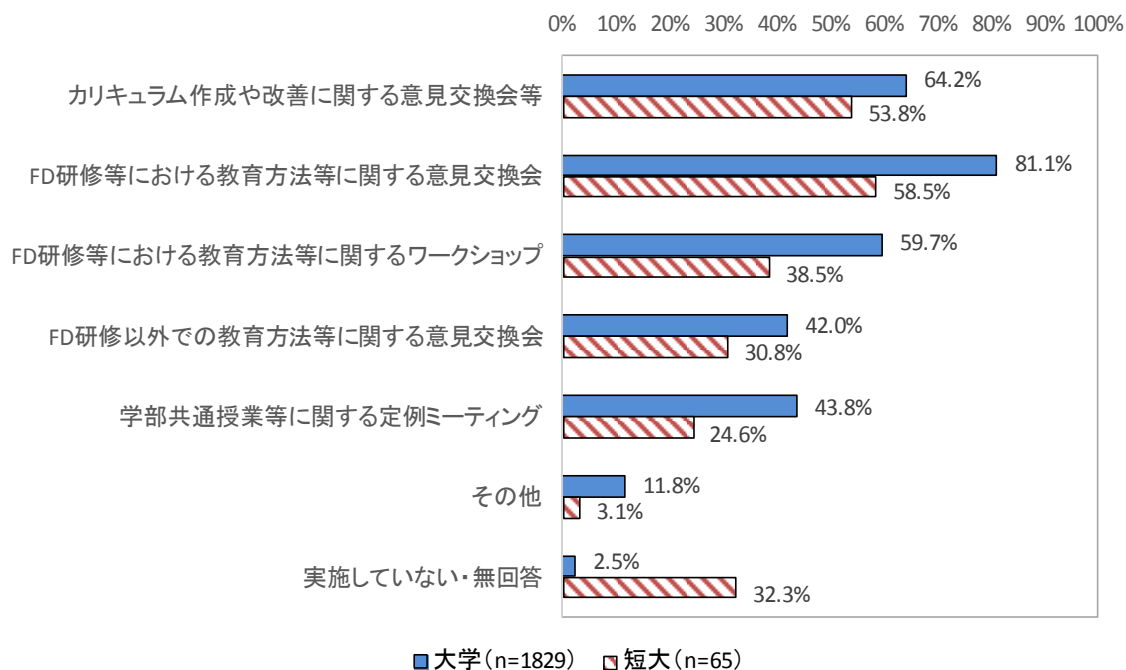
(大学 n=1,829、短大 n=65) 「ほぼ全員の学生が受講」の比較



※正規科、正科外のいずれも対象。全学ではやっているが、学部としてはやっていない取組は対象外

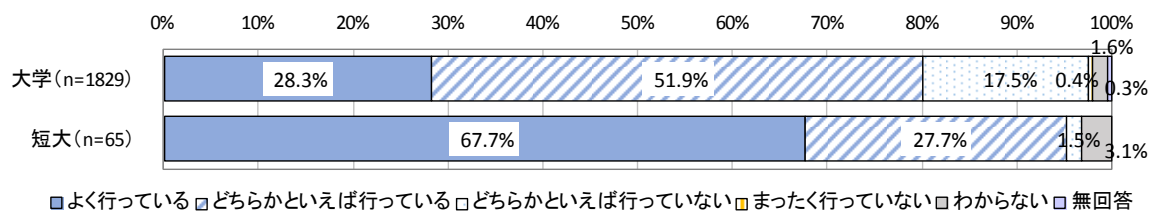
(2) 教員間での情報交換の機会

図表 7-7 貴学部では、学生への教育に関して、学部所属する教員間で情報交換を行う機会はありますか。(大学 n=1,829、短大 n=65 : 複数回答)



(3) 教員間の日常的な意見交換 (同じ研究室内の教員との意見交換は除く)

図表 7-8 貴学部では、学部所属する教員間で、学生への教育に関して日常的に意見交換を行っていますか。(同じ研究室内の教員との意見交換は除く) (大学 n=1,829、短大 n=65)



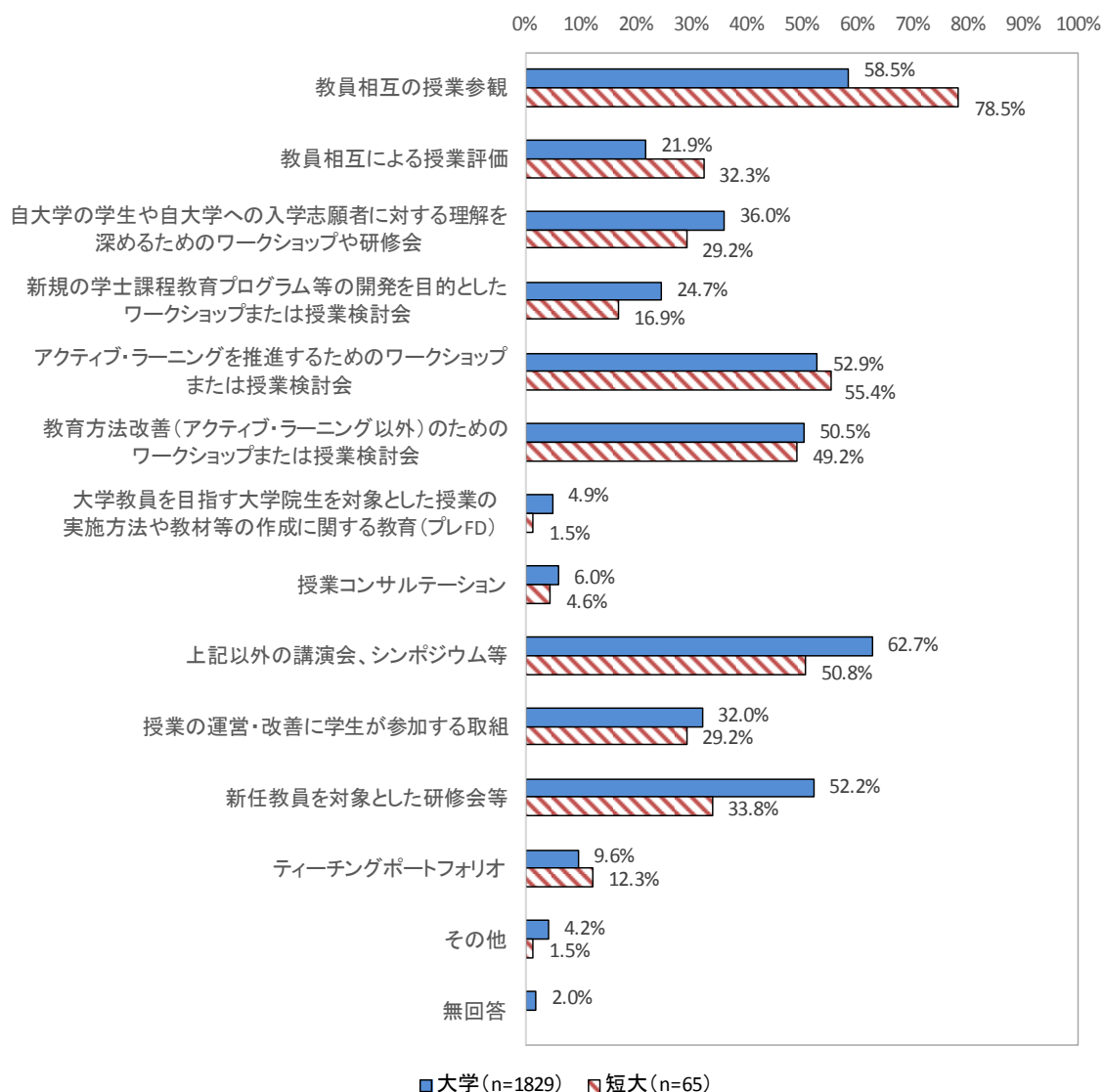
7-1-4 FD 活動

(1)FD 活動の個々の取組

①実施状況

図表 7-9 教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な活動（FD 活動）のうち、貴学部において実施しているものを選んでください。

（大学 n=1,829、短大 n=65：複数回答）

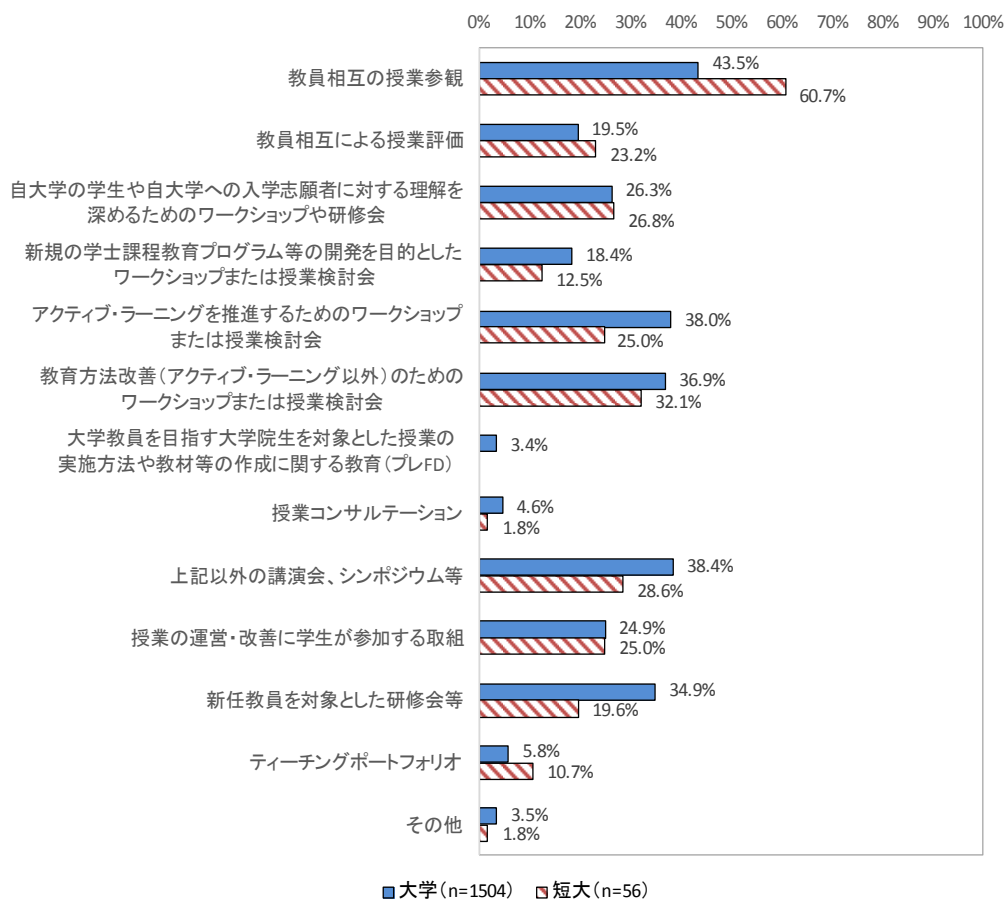


※大学全体で行っていて、学部で参加しているものも含める

②FD 活動の取組の効果

図表 7-10 前述の取組のうち、特に効果がでているものは何ですか。

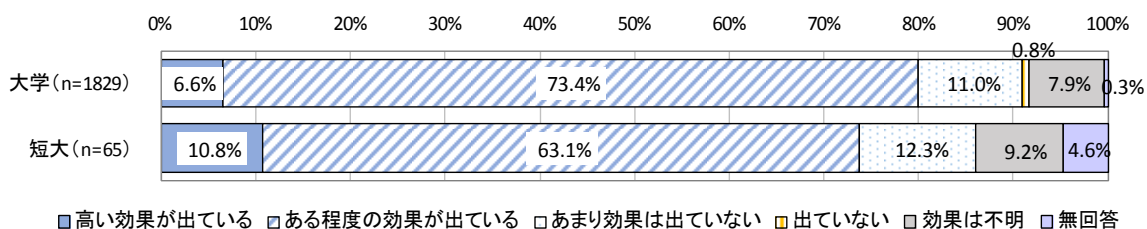
(大学 n=1,504、短大 n=56 : 複数回答)



(2) FD 活動全体の効果

図表 7-11 貴学部では、教員の教育活動に対して、評価を行っていますか。

(大学 n=1,829、短大 n=65)

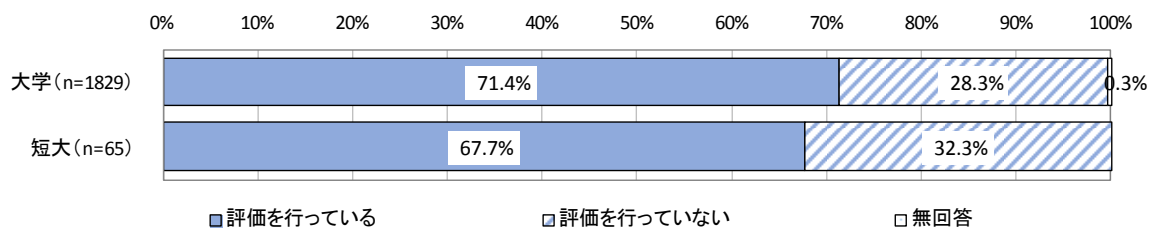


7-1-5 教員の教育活動に対する評価

(1) 教員の教育活動に対する評価の有無

図表 7-12 貴学部では、教員の教育活動に対して、評価を行っていますか。

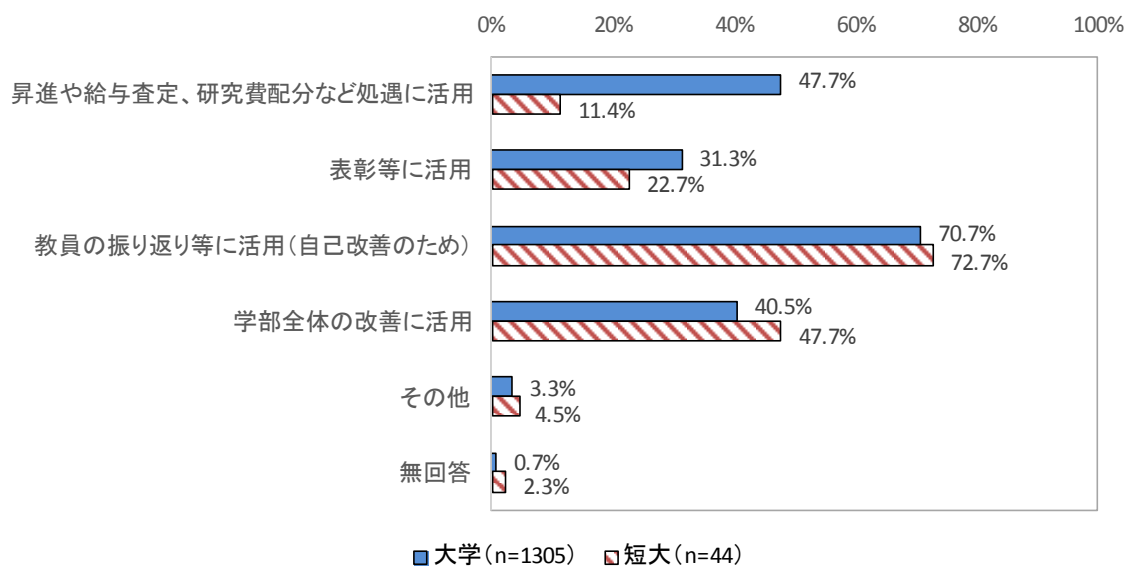
(大学 n=1,829、短大 n=65)



(2) 評価の活用方法

図表 7-13 評価を行っている場合は、評価結果の活用方法についてお答えください。

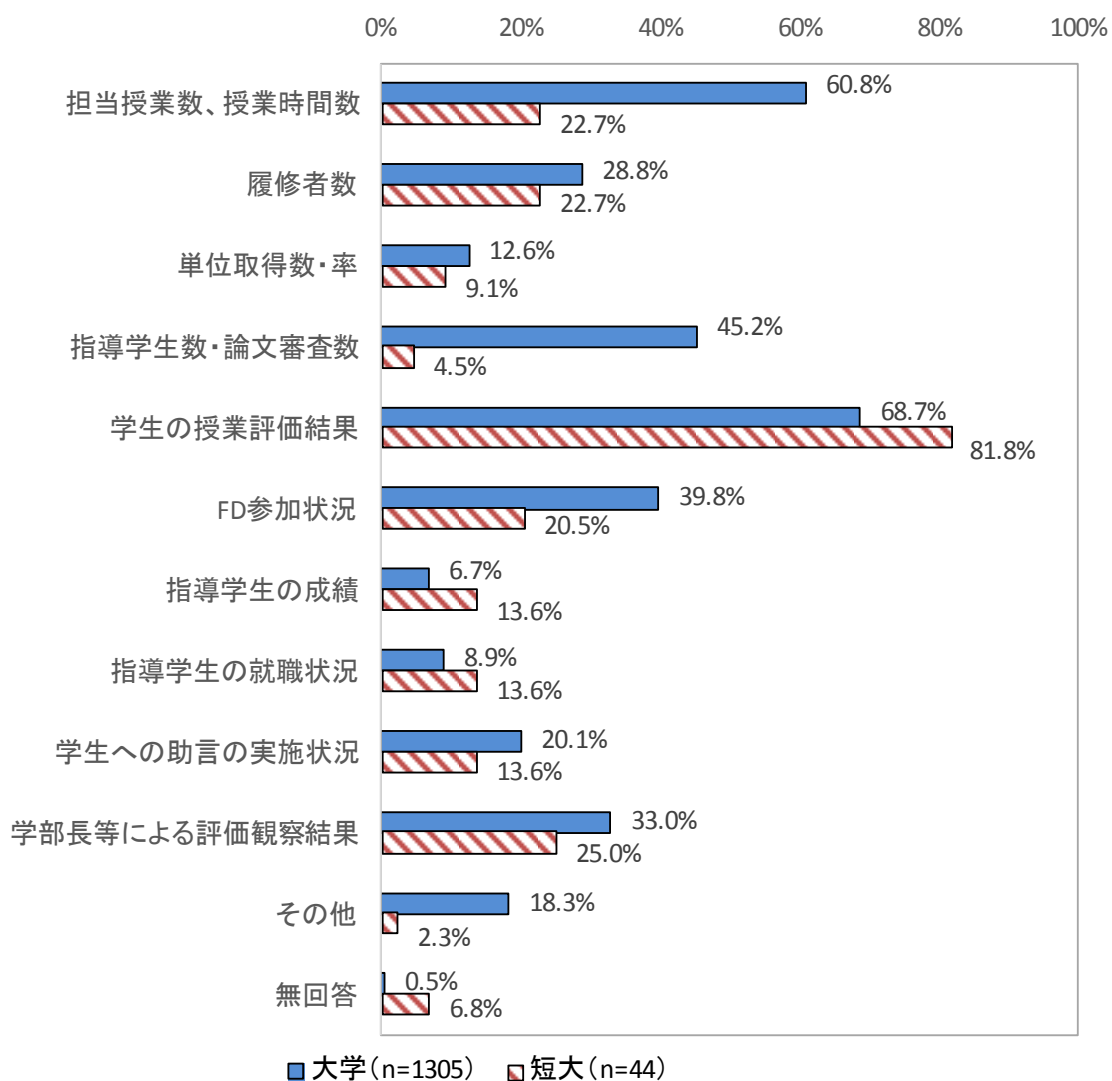
(大学 n=1,305、短大 n=44：複数回答)



(3)評価項目

図表 7-14 評価を行っている場合は、評価項目として使っている項目をお答えください。

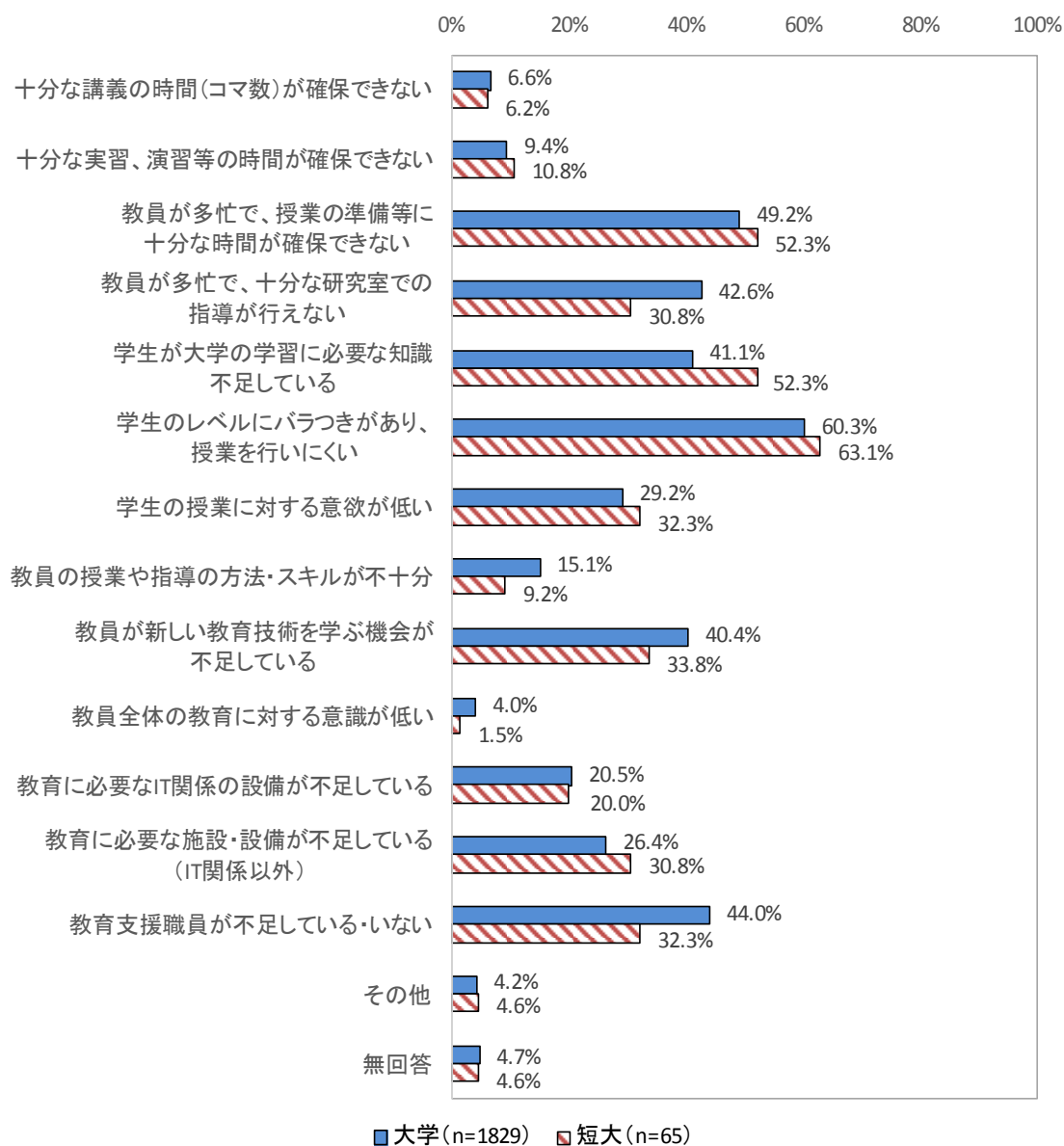
(大学 n=1,305、短大 n=44 : 複数回答)



7-1-6 教育における課題

図表 7-15 貴学部における学生への教育上の課題についてお答えください。

(大学 n=1,829、短大 n=65 : 複数回答)



7-2 教員調査

7-2-1 調査概要

(1)回答件数

316名の教員から回答を頂いた。

(2)回答者属性

回答者属性は、下記の通り。

①分野

学校基本調査と比較して、人文科学、社会科学の教員が多く、家政の教員が少なめになっている。

図表 7-16 分野別構成比

	人文科学	社会科学	教養	工学	農学	保健	家政	教育	芸術	その他
今回調査	15.8%	14.9%	0.0%	2.8%	1.3%	13.3%	11.1%	30.4%	7.0%	3.4%
平成26年度 学校基本調査	8.5%	9.0%	1.2%	3.2%	1.0%	11.7%	21.4%	31.5%	4.2%	8.3%

②職階

職階については、学校基本調査と比較して、大きな違いはない。

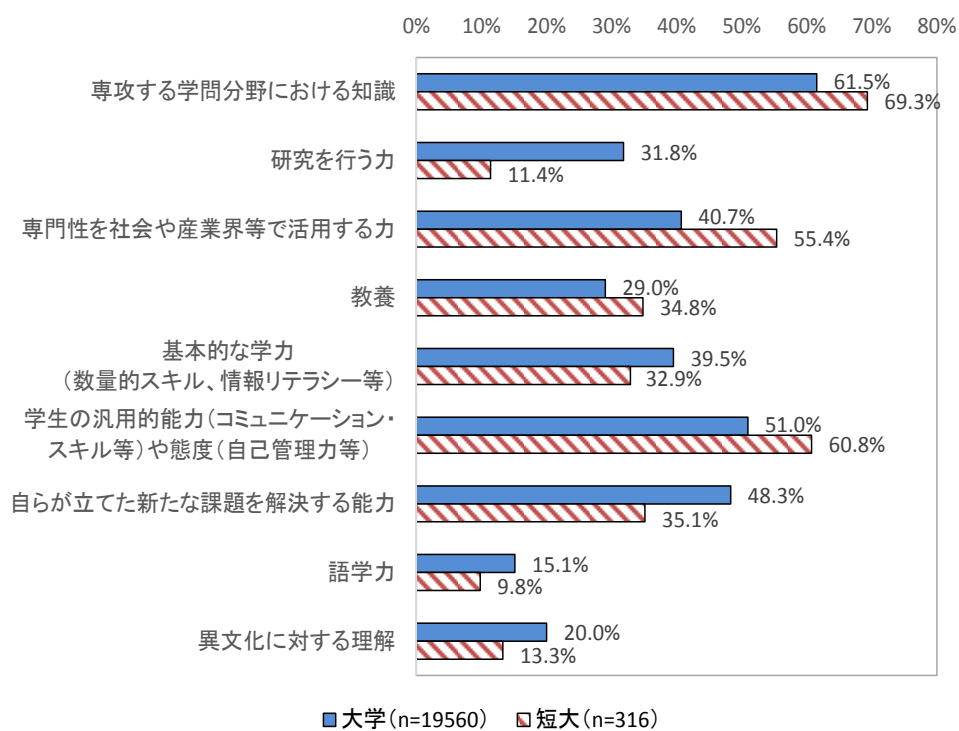
図表 7-17 職階別構成比

	教授	准教授	講師	助教
今回調査	44.1%	25.9%	24.0%	6.1%
平成26年度 学校基本調査	42.4%	26.2%	23.4%	8.1%

7-2-2 学部の教育

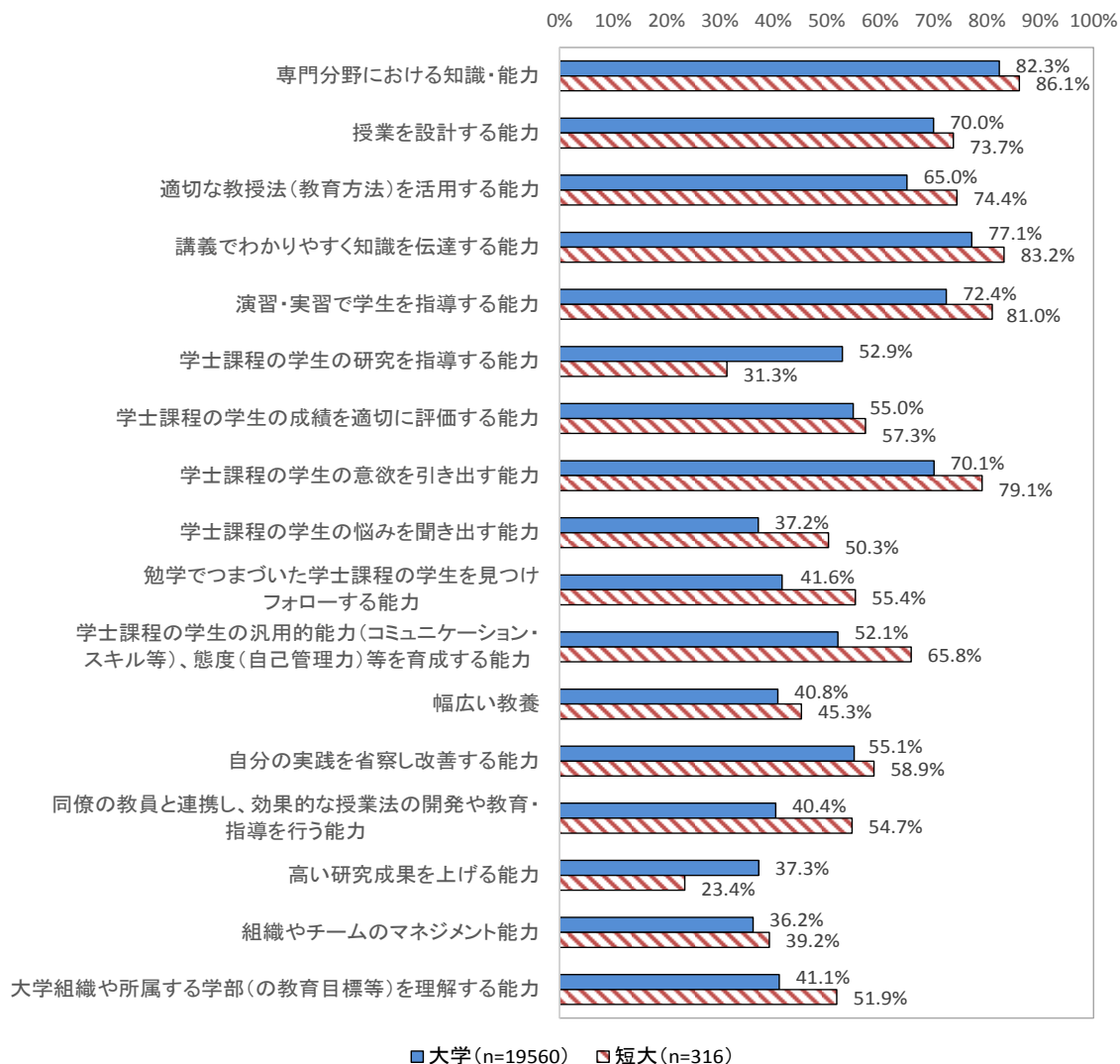
(1) 学士課程の教育の育成重視項目

図表 7-18 学士課程の学生を教育・指導する際、以下の項目の育成を、どの程度、重視して
行っていますか。(大学 n=19,560、短大 n=316)



(2) 学士課程教育に必要な能力

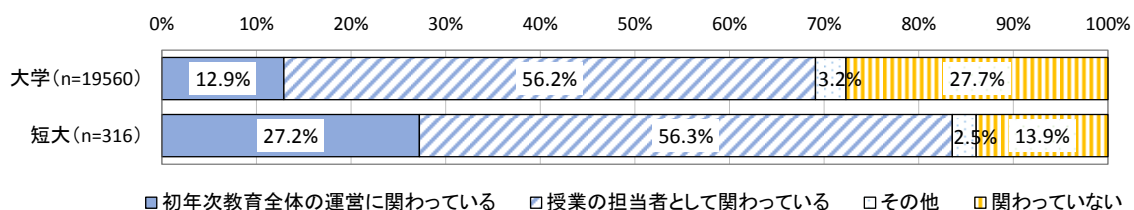
図表 7-19 貴学部の教員として、学士課程の学生を教育するために、どのような能力が必要ですか。(大学 n=19,560、短大 n=316)



(3)初年次教育

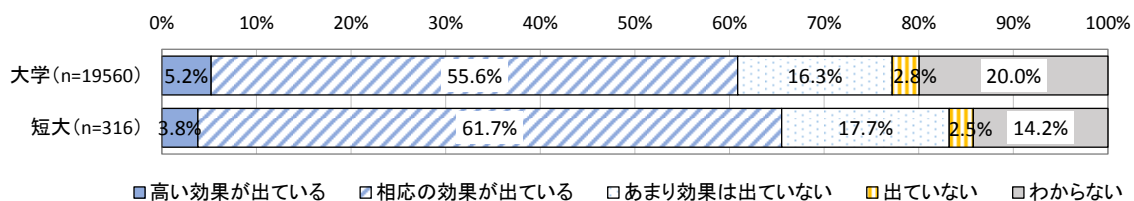
①初年次教育との関わり

図表 7-20 本年度、貴学部（もしくは大学全体）の初年次教育に、関わっていますか。（大学 n=19,560、短大 n=316）



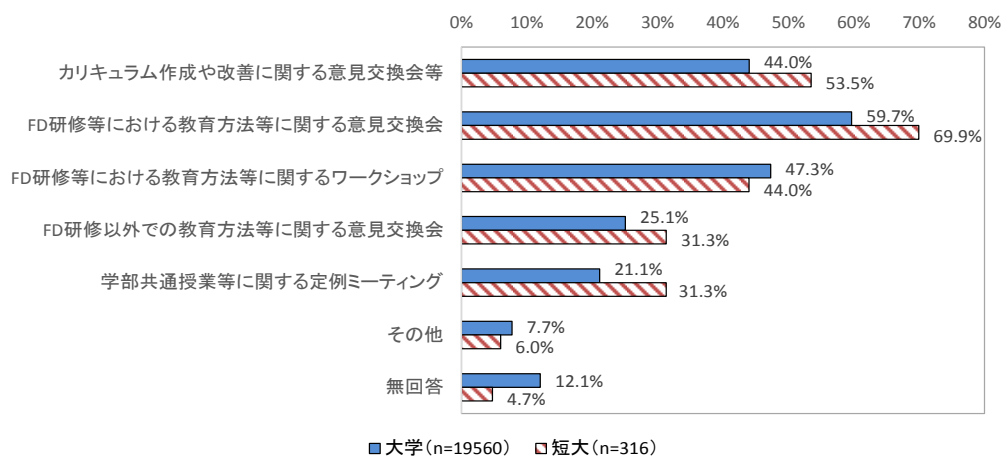
②初年次教育の効果

図表 7-21 貴学部（もしくは大学全体）の初年次教育は、効果は出ていると思いますか。（大学 n=19,560、短大 n=316）



(4)教員間で情報交換を行う機会

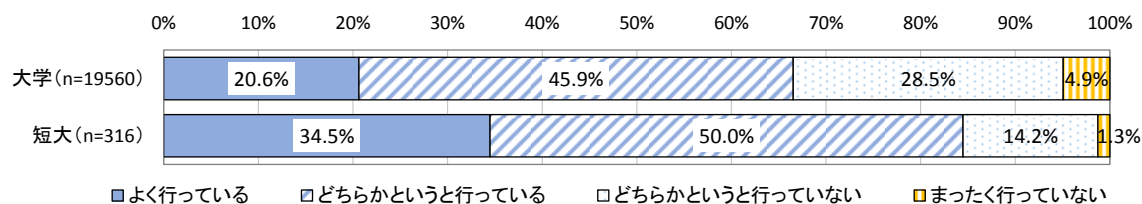
図表 7-22 貴学部では、学士課程の学生への教育に関して、学部には所属する教員間で情報交換を行う次のような機会がありますか。（大学 n=19,560、短大 n=316）



(5) 学士課程教育に関する教員間の日常的な意見交換

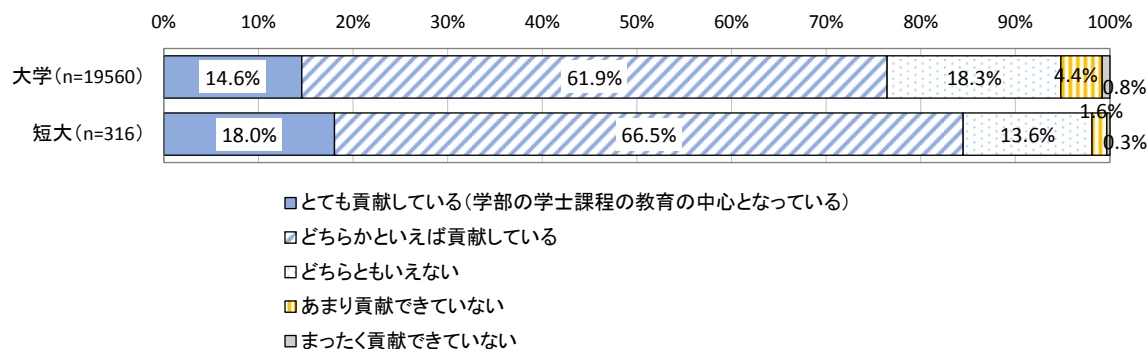
図表 7-23 あなたは、学士課程の学生への教育に関して、学部所属する他の教員と、日常的にどの程度、意見交換を行っていますか。（同じ研究室内の教員との意見交換は除く）

(大学 n=19,560、短大 n=316)



(6) 学士課程教育目標達成への貢献度

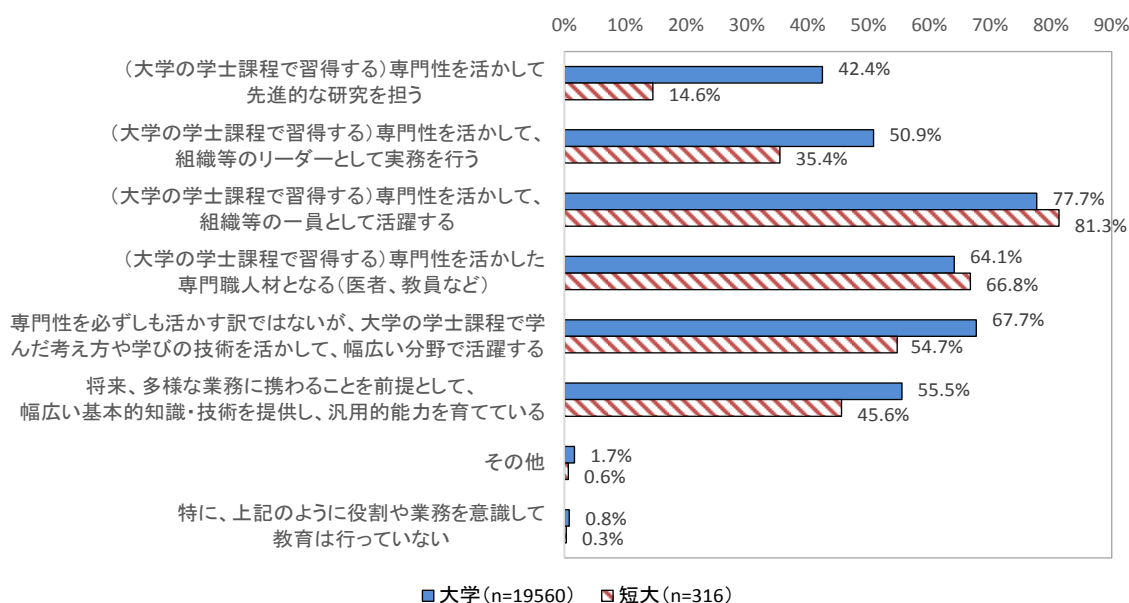
図表 7-24 あなたは、貴学部における学士課程の教育目標の達成に向けて、どの程度、寄与できていると思いますか。（大学 n=19,560、短大 n=316）



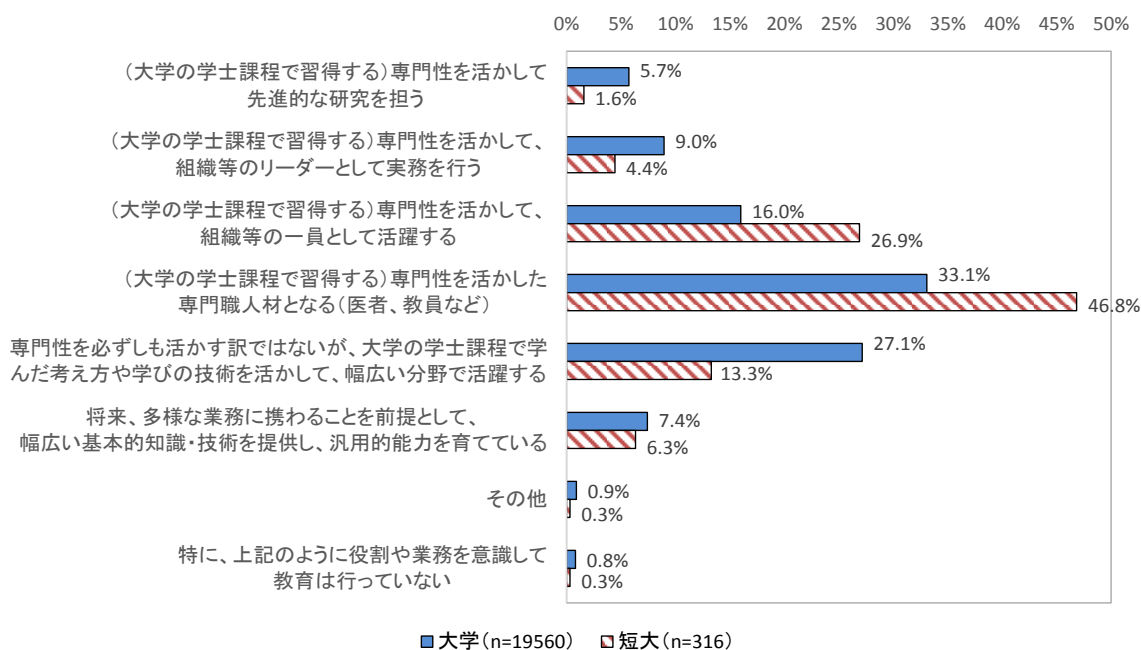
(7)想定する学士課程卒業後の役割・業務

図表 7-25 あなたは、貴学部の学士課程の学生が学部卒業後に企業・団体や大学院等においてどのような役割や業務を担うことになるかと想定（希望）して、学生を教育・指導していますか。（大学 n=19,560、短大 n=316）

(あてはまるものの割合)



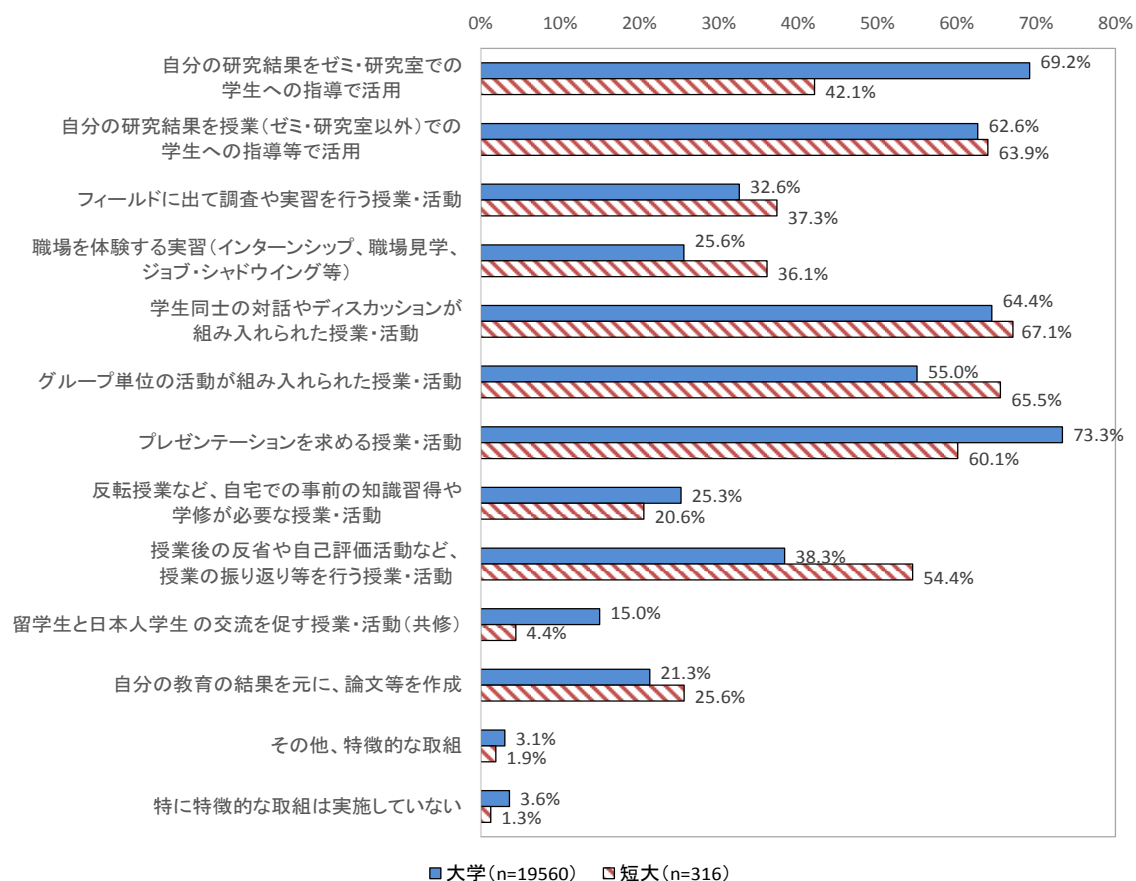
(最もあてはまるものの割合)



7-2-3 教育活動

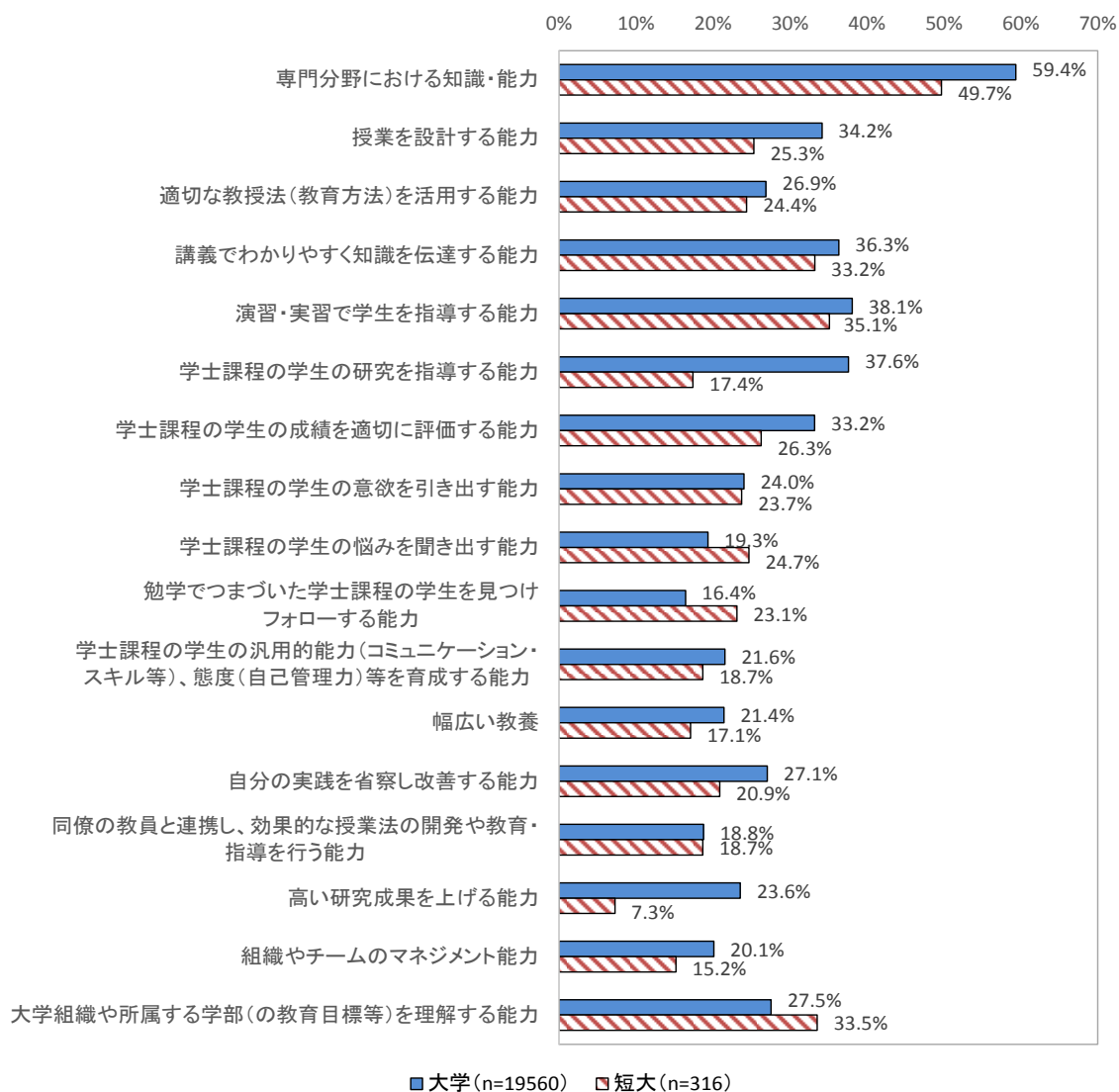
(1) 学士課程の学生に対する教育活動の実施

図表 7-26 あなたは、現在、貴学部で学士課程の学生を教育・指導する際、学士課程の学生に対する教育活動において、下記の取組を実施していますか。(大学 n=19,560、短大 n=316)



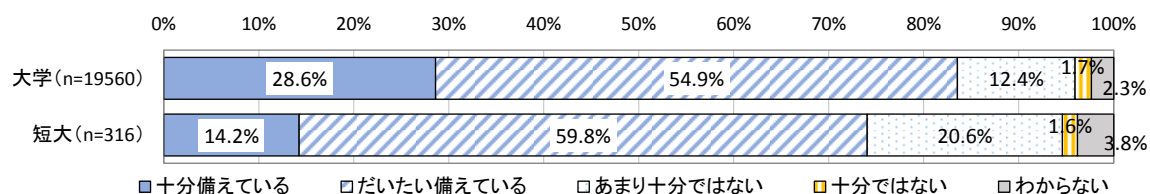
(2) 学士課程における教育能力

図表 7-27 あなたは、以下の能力をどの程度身につけていると思いますか。
(大学 n=19,560、短大 n=316)



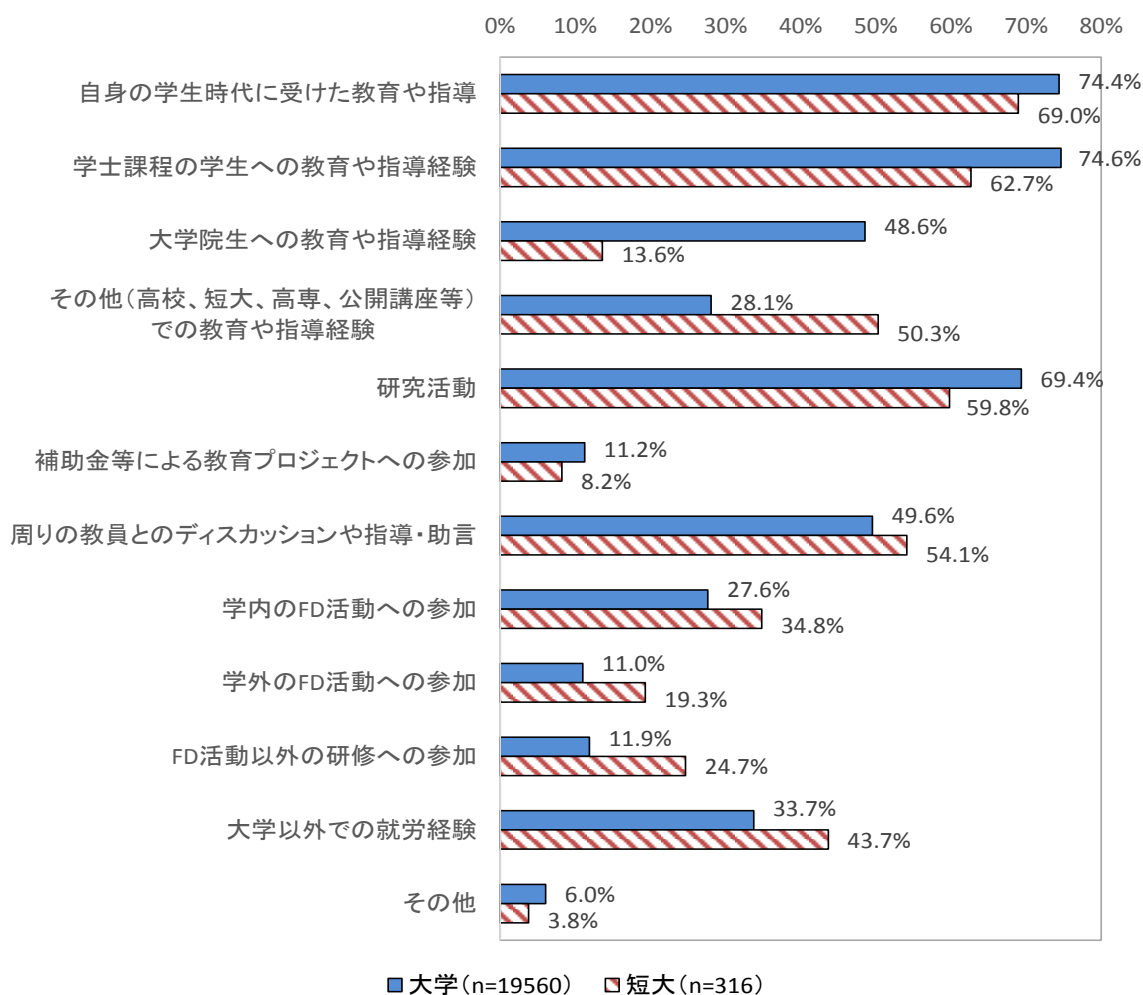
(3) 学士課程教育能力の評価

図表 7-28 あなたは、総合的にみて、あなた自身の大学教員としての学士課程における教育能力を、どのように評価していますか。(大学 n=19,560、短大 n=316)



(4) 教育能力獲得における有効な経験

図表 7-29 あなたが大学教員としての教育能力を、獲得する上で有効だったと思う経験は何ですか。(大学 n=19,560、短大 n=316)

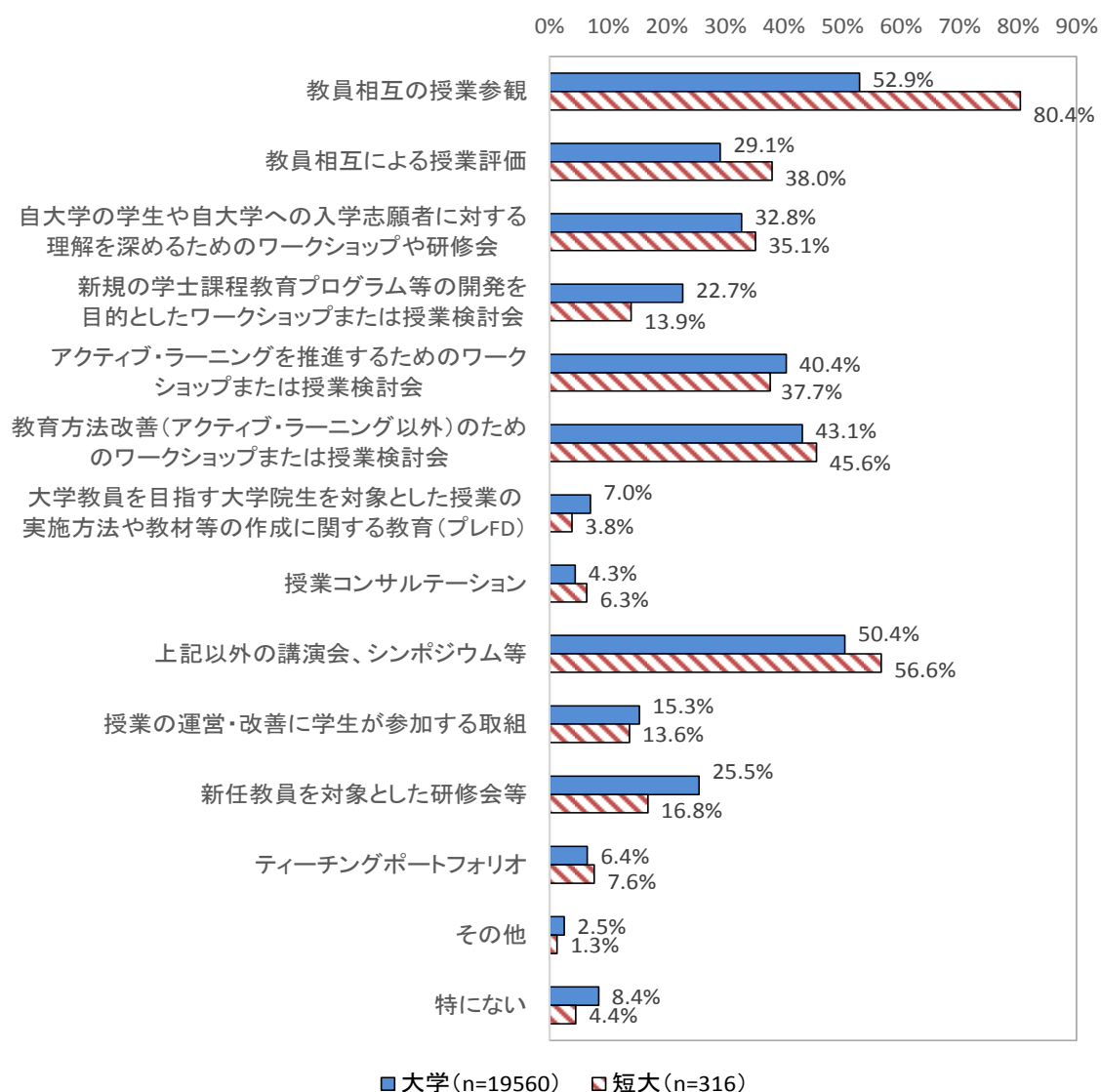


7-2-4 FD 活動

(1)参加した FD 活動と効果

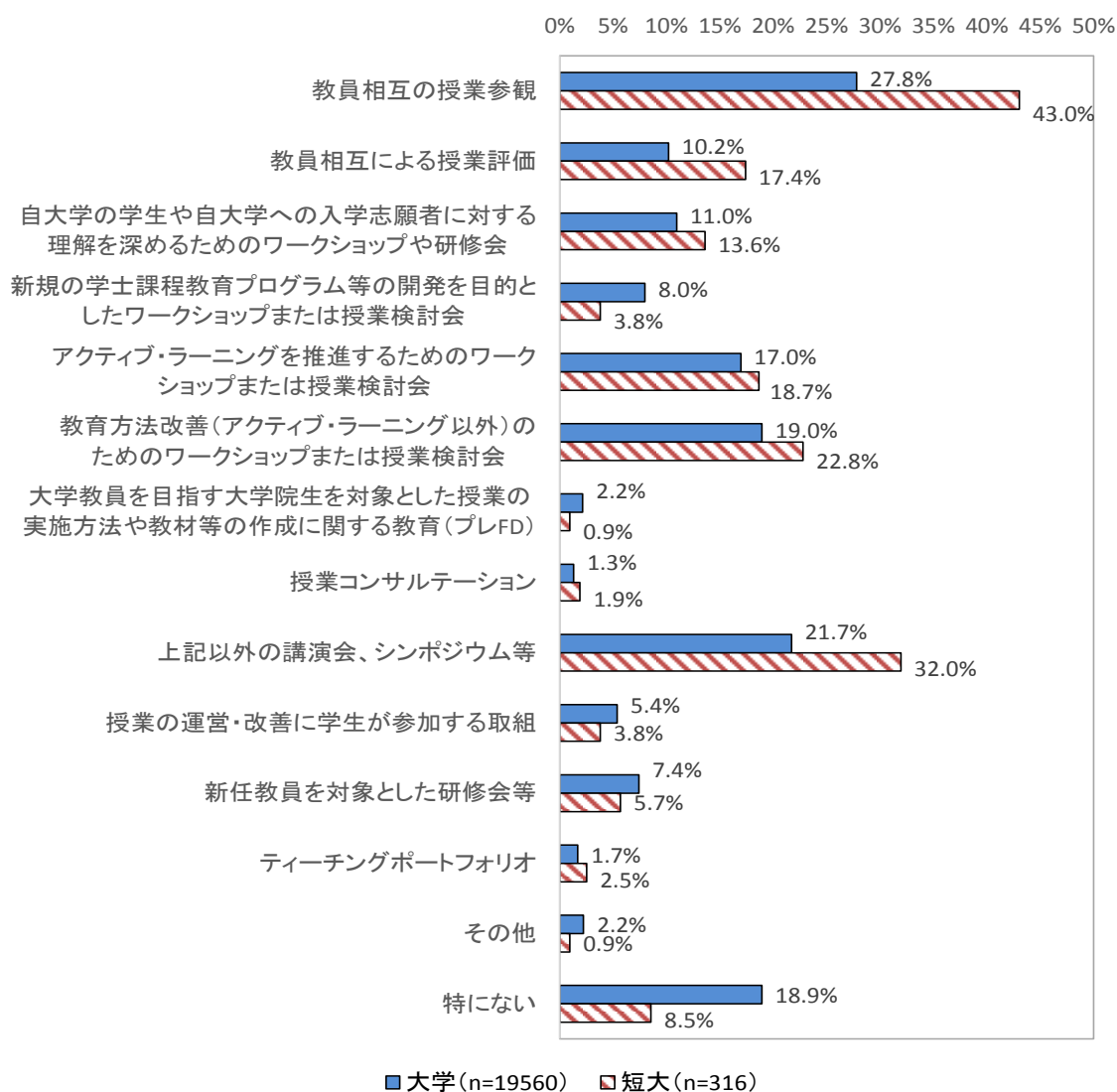
①参加した取組

図表 7-30 教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な活動（FD 活動）のうち、あなたが参加したことがあるものを選んでください。（大学 n=19,560、短大 n=316）



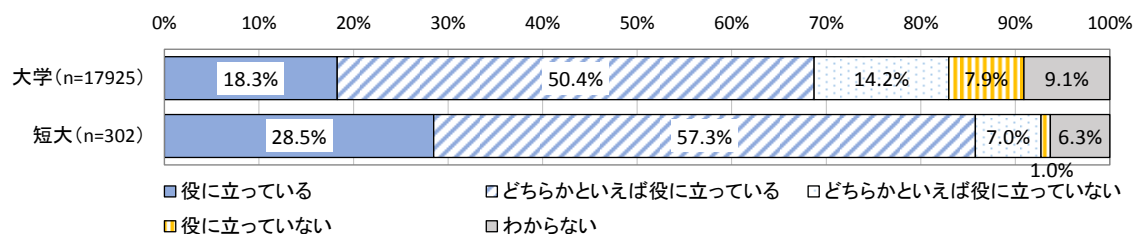
②効果のあった取組

図表 7-31 参加された取組のうち、特に効果があった、役に立ったと思うものを選んでください。(大学 n=19,560、短大 n=316)



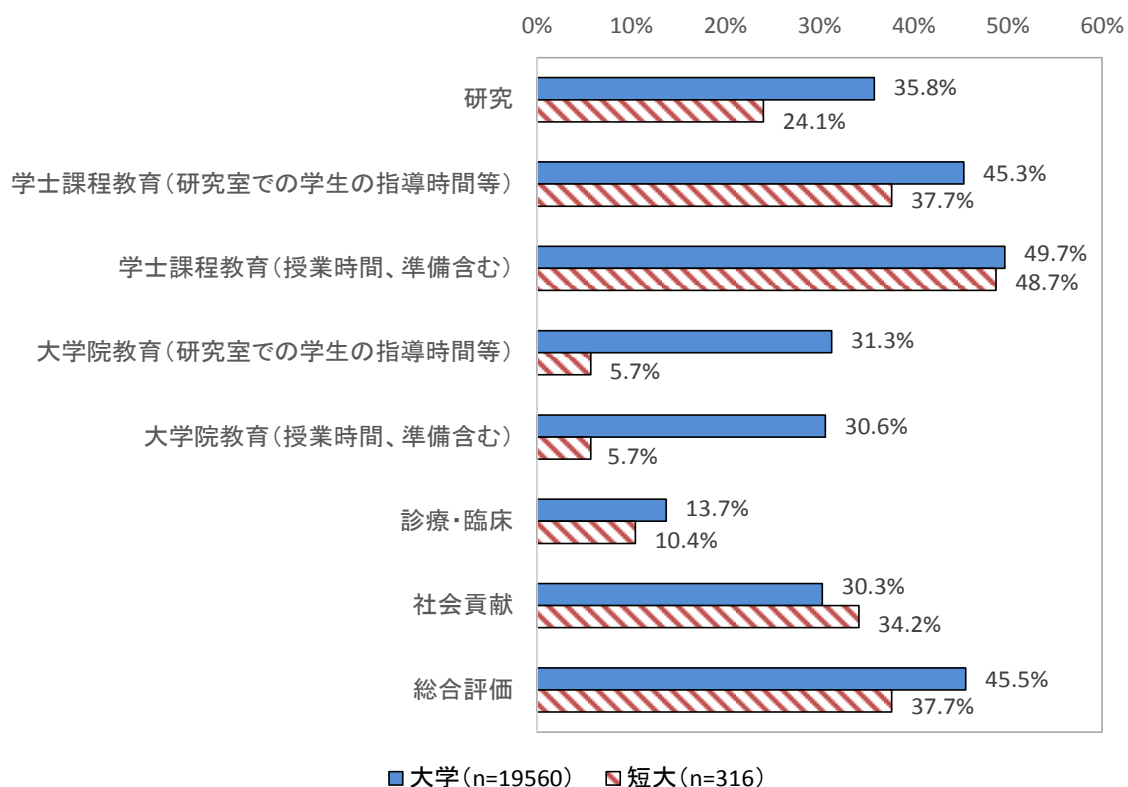
(2)FD 活動参加による教育能力の向上

図表 7-32 FD 活動への参加は、あなた自身の大学教員としての教育能力の向上にたいして、どの程度役にたっていますか。(大学 n=17,925、短大 n=302)



(3)業務の満足度

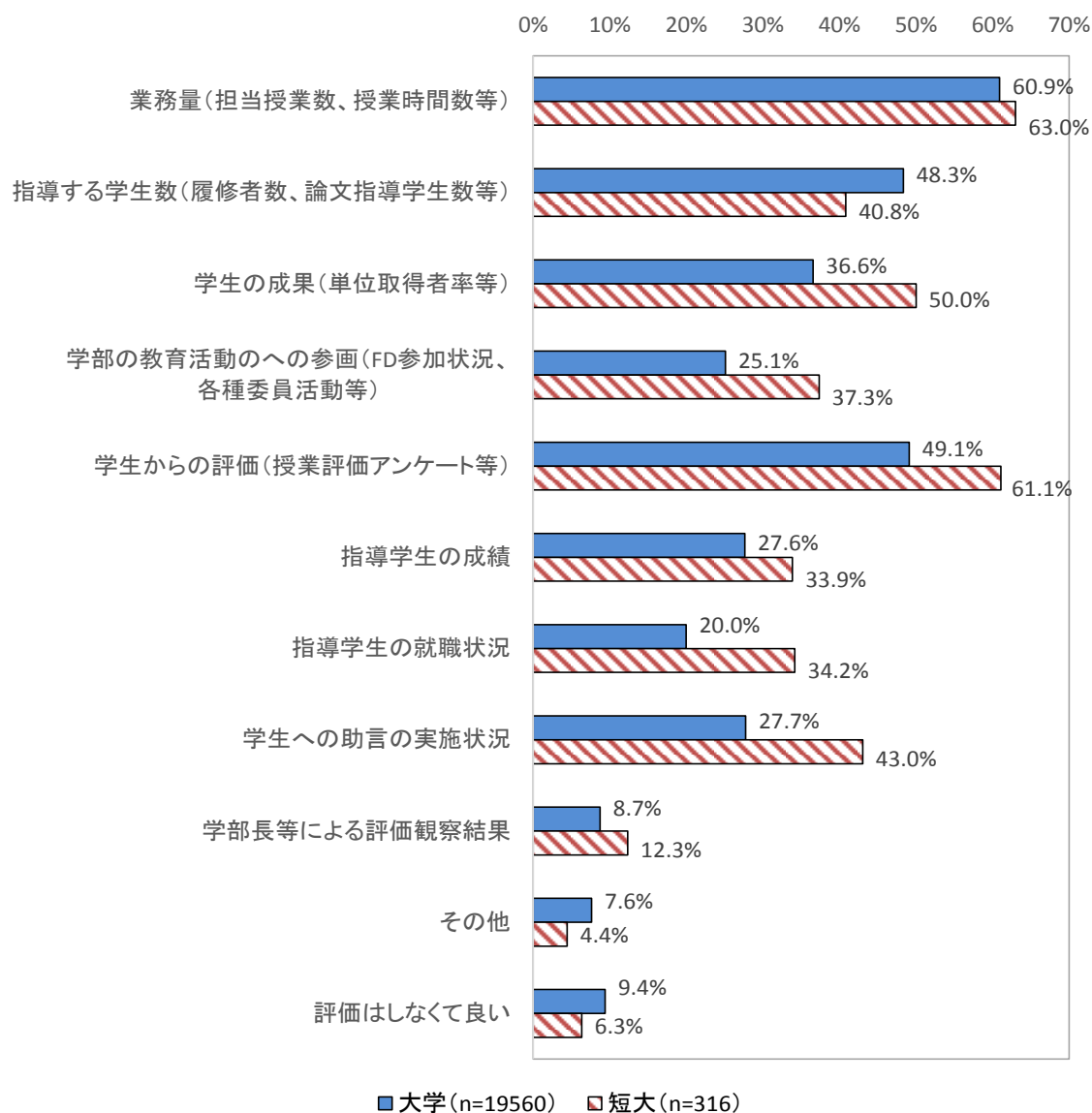
図表 7-33 あなたは、現在の各業務に対して、どの程度の満足感を感じていますか。(大学 n=19,560、短大 n=316) (満足+やや満足の割合)



7-2-5 教育活動に関する評価

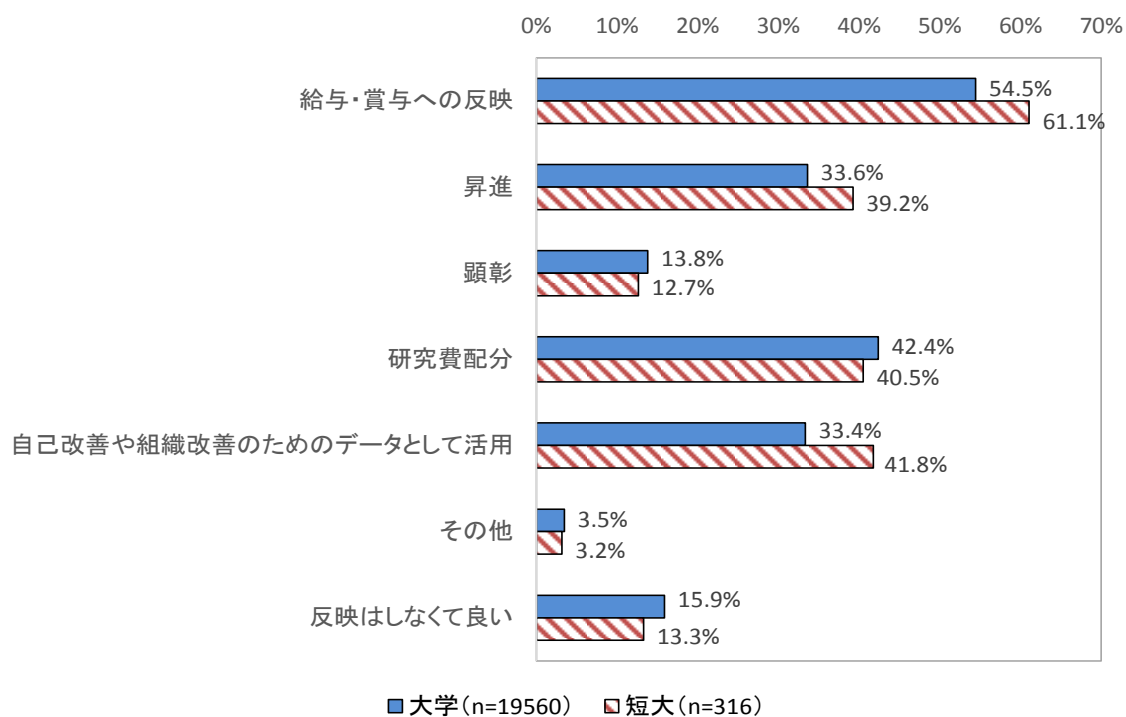
(1) 評価を望む教育活動項目

図表 7-34 あなたは、教育活動に対して、どのような項目で評価されることが望ましいですか。(大学 n=19,560、短大 n=316)



(2)評価の反映を望む学士課程教育の活動項目

図表 7-35 あなたは、学士課程の教育活動の評価に対して、どのような形で反映されることが望ましいですか。(大学 n=19,560、短大 n=316)



7-2-6 教育活動に関する課題

図表 7-36 あなたが、大学で学士課程教育を行う上での課題についてお答えください。(大学 n=19,560、短大 n=316)

